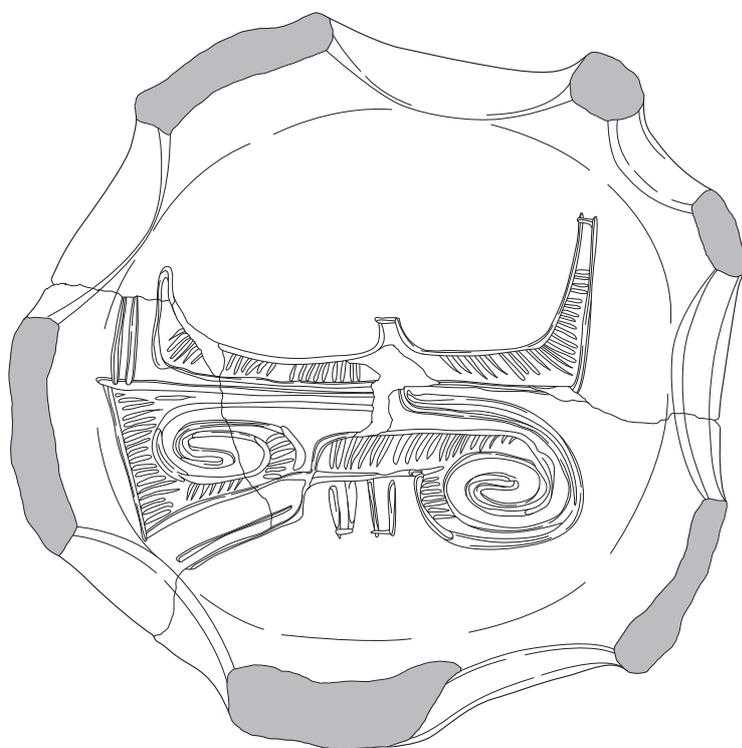


— 茨城県土浦市 —

あかみどういせき にしちく
赤弥堂遺跡 (西地区)

— 県営畑地帯総合整備事業 (担い手支援型) —

— 坂田地区 埋蔵文化財発掘調査報告書 —



2011

土浦市教育委員会
有限会社勾玉工房Mog i

序

土浦市は霞ヶ浦や桜川など、豊富な水資源に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところでありました。そのため、市内には集落跡や貝塚、古墳など数多くの遺跡が存在しています。このような遺跡は、当時の人々の生活や環境を知る手掛かりとなります。また、現代に生きる私たちが、豊かな生活を送ることのできる先人の業績でもあります。

このような貴重な文化財を保護し後世に伝えることは、私たちの大切な任務であり、郷土の発展のために大切なことでもあります。

この度、上坂田地区と下坂田地区において大規模な畑地帯総合整備事業が計画され、今年度は下坂田の赤弥堂遺跡について、記録保存を目的とした発掘調査が行われました。調査の結果は本文に記載されているとおりでありますが、土浦の古代の解明に役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書刊行にあたり、関係者の皆様のご協力とご支援に対し厚く御礼を申し上げます。

平成 23 年 3 月
土浦市教育委員会
教育長 富永善文

例 言

1. 本書は茨城県土浦市下坂田 1173 番地他に所在する赤弥堂遺跡（西地区）の発掘調査報告書である。
2. 調査は土浦市から委託を受けた有限会社勾玉工房 Mogi が実施した。
3. 発掘調査面積は 3,600 m²である。
4. 調査期間は、平成 22 年 10 月 8 日より平成 23 年 1 月 31 日まで実施した。また、出土品の整理作業および報告書の作成は、平成 22 年 11 月 1 日より開始し、平成 23 年 3 月 10 日まで実施した。
5. 発掘調査は現地調査を長谷川秀久・大越直樹（発掘調査員）が担当した。
整理作業は大賀 健・長谷川秀久・大越直樹・大賀さつき・鈴木徹が担当した。
6. 発掘調査の参加者は以下の通りである。（敬称略）
鈴木敏信 小野 豊 佐賀 実 谷中 昌 宮本富夫 露久保三郎 柿崎 昇 箱守よしい 榎戸洋子
金塚 暎 小池一司 森永典昭 小角みや子 鈴木利勝 高野美智子 河野紅仁子 大野幸枝 大木幸子
吉田正子 藤田美代子 仲田 仙 佐藤利男 青木 誠 大山年明 川又誠一 横田忠利 沼田久男 岡田 眷
榎戸 徹 齊藤京子 小玉明子 中嶋かつ 持田 清 米山秀昭 田中正治 郡司 勇 根本 滋 友部政夫
小島廣史 小林卓生 牧田保身 能勢谷久尚 本田仁子 小野瀬健一 山藤直樹
7. 整理調査は有限会社勾玉工房 Mogi において行い、参加者は以下の通りである。
遺物基礎整理作業 谷 旬 田中一穂 石山 啓 須賀澤一憲 川口和之 根本時子 篠原美代子
稲坂なお子 石津弘子 伊藤久美子 前田やす江
遺物実測作業 大賀さつき 上田敦子 阿天坊弥生 石橋明子 饗庭紀子 小川美由紀
デジタル編集 高橋歩美 森優里絵 岩崎美奈子 塩澤佑介 橋邊明子 川口和之
事務・経理 橋邊明子 石橋明子
8. 本報告書に用いた遺構写真は、長谷川秀久・大越直樹が、また整理作業における遺物写真は、大越直樹・石山 啓・鈴木 徹が撮影した。
9. 執筆分担
第 1 章第 1 節 黒澤春彦（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）
第 1 章第 2 節 大越直樹（有限会社勾玉工房 Mogi）
第 2 章第 1 節・2 節 関口 満（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）
第 3～5 章 大賀 健（有限会社勾玉工房 Mogi）
10. 現地での基準点測量は芦田測量に委託した。
11. 本報告書に関わる出土品および記録図面・写真等は、一括して上高津貝塚ふるさと歴史の広場が保管している。
12. 本遺跡の略号は ASSW 赤弥堂遺跡（西地区）とした。遺物の注記もこれに従っている。
13. 本遺跡の発掘調査から本報告書の作成に当たり以下の方々に協力を賜った。ここに記して感謝の意を表すものである。（敬称略）
寺村光晴 川崎純徳 齋藤弘道 瓦吹 堅 上野修一 塚本師也 戸田哲也 角張淳一 藁科哲夫 篠原 正
林田利之 及川謙作 茨城県教育委員会文化課 茨城県県南農林事務所 土浦市産業部耕地課
有限会社カワヒロ産業 佐々木建設株式会社 小桜建設株式会社 株式会社マツイ商会 芦田測量

凡 例

1. 第1図は国土地理院土浦2万5千分の1地図常陸藤沢を用いた。
2. 本書に記してある座標値は世界測地系第IX系を使用している。
3. 堆積土層の観察および遺物の色調については、『新版標準土色帖』2008年版農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修を用いた。
4. 標高は東京湾の平均海拔を示している。
5. 本報告書における実測図は各区別の全体図は600分の1、遺物は1分の1、2分の1、3分の1、4分の1、5分の1の縮尺で掲載した。尚、一部の遺構・遺物に変則的な縮尺を用いた場合には、スケールをもってその倍率を表した。
6. 本遺跡の報告書に掲載した遺物写真は、一部を除き、基本的に実測図の縮尺に合わせて掲載している。
7. 本遺跡の報告書に用いた記号およびスクリーントーンは以下を表す。

遺構	 焼土	 炭化物範囲	 火床面	 硬化面範囲
	 石平面	 石断面	 田グリッド杭	 座標杭
遺物	 黒色処理	 赤彩	 繊維土器	 煤付着
	 須恵器	 陶器	 土偶・台形土器欠損部	
	 琥珀大珠切断面			

8. 遺物の注記に用いた略号は以下の通りである。
遺跡名 赤弥堂（西地区）・・・・ASSW
住居跡・・・・SI 土坑・・・・SK 溝・・・・SD ピット・・・・P 道路状遺構・・・・SF
性格不明遺構・・・・SX
尚、貝層を有する8区SK01は貝塚としての番号は付していない。
9. 図中に示した「K」は攪乱を意味する。
10. 本遺跡において検出された遺構が欠番になった場合、遺構番号の振替は行わず、調査時の番号のままで報告している。
11. 本遺跡出土遺物の修復にはセメダインCおよび樹脂材のアラルダイト5112・5113を用いた。

本文目次

序・例言・凡例		[4区]	
目次		1 住居跡 (SI).....	(101)
第1章 調査に至る経緯と調査の経過		2 土坑 (SK).....	(103)
第1節 調査に至る経緯.....	(1)	3 溝 (SD).....	(103)
第2節 調査の経過.....	(1)	4 遺構外出土遺物.....	(104)
1 発掘調査.....	(1)	[7区]	
2 整理作業.....	(2)	1 住居跡 (SI).....	(104)
第2章 遺跡の位置と環境		2 土坑 (SK).....	(104)
第1節 地理的環境.....	(3)	3 ピット.....	(106)
第2節 歴史的環境.....	(3)	4 遺構外出土遺物.....	(106)
第3章 調査方法と標準堆積土層		第5項 5区.....	(107)
第1節 調査方法.....	(6)	1 住居跡 (SI).....	(107)
第2節 標準堆積土層.....	(6)	2 掘立柱建物跡 (SB).....	(110)
第4章 調査成果		3 土坑 (SK).....	(111)
第1節 遺跡の概要.....	(7)	4 道路状遺構 (SF).....	(115)
第2節 検出された遺構と遺物.....	(7)	5 ピット.....	(117)
第1項 1区.....	(9)	第6項 6区.....	(117)
1 住居跡 (SI).....	(9)	1 溝 (SD).....	(117)
2 土坑 (SK).....	(15)	2 遺構外出土遺物.....	(118)
3 溝 (SD).....	(26)	第7項 8区.....	(119)
4 ピットおよび遺構外出土遺物.....	(28)	1 住居跡 (SI).....	(119)
第2項 2区.....	(30)	2 土坑 (SK).....	(120)
1 住居跡 (SI).....	(30)	3 道路状遺構 (SF).....	(128)
2 土坑 (SK).....	(32)	4 溝 (SD).....	(130)
3 溝 (SD).....	(34)	5 ピット.....	(131)
4 遺構外出土遺物.....	(34)	第5章 まとめ	
第3項 3区.....	(36)	第1節 台形土器と内面に	
1 住居跡 (SI).....	(36)	絵画が描かれた台形土器.....	(133)
2 土坑 (SK).....	(54)	第2節 赤弥堂遺跡出土の	
3 性格不明遺構 (SX).....	(94)	連弧文様式土器.....	(134)
4 ピット.....	(95)	第3節 琥珀大珠.....	(137)
5 溝 (SD).....	(98)	第4節 土偶.....	(138)
6 遺構外出土遺物.....	(99)	第5節 発掘された赤弥堂遺跡の全体像.....	(139)
第4項 4区・7区.....	(101)	第6節 自然科学分析.....	(141)

挿図目次

第1図 遺跡周辺地図.....	(序)	第8図 1区西側標準堆積土層.....	(8)
第2図 周辺の遺跡.....	(4)	第9図 SI01.....	(9)
第3図 標準堆積土層.....	(6)	第10図 SI01 出土遺物.....	(9)
第4図 赤弥堂遺跡全体図.....	(折図1)	第11図 SI02.....	(9)
第5図 赤弥堂遺跡(西地区)全体図.....	(折図2)	第12図 SI02 出土遺物.....	(9)
1区		第13図 SI03.....	(10)
第6図 1区東側全体図.....	(7)	第14図 SI04・08・SK20.....	(10)
第7図 1区西側全体図.....	(8)	第15図 SI04 出土遺物(1).....	(11)

第 16 図	SI04 出土遺物 (2).....	(12)	第 62 図	SK01.....	(32)
第 17 図	SI05.....	(12)	第 63 図	SK01 出土遺物.....	(33)
第 18 図	SI05 出土遺物.....	(12)	第 64 図	SK02.....	(34)
第 19 図	SI06.....	(12)	第 65 図	SD01.....	(34)
第 20 図	SI07.....	(13)	第 66 図	2 区遺構外出土遺物.....	(34)
第 21 図	SI07 出土遺物.....	(13)	3 区		
第 22 図	SI08 出土遺物.....	(14)	第 67 図	3 区全体図.....	(35)
第 23 図	SI09・SK14.....	(14)	第 68 図	3 区標準堆積土層.....	(36)
第 24 図	SI09 出土遺物.....	(15)	第 69 図	SI01.....	(36)
第 25 図	SK01・02.....	(15)	第 70 図	SI01 出土遺物.....	(37)
第 26 図	SK03.....	(15)	第 71 図	SI02.....	(38)
第 27 図	SK03 出土遺物.....	(16)	第 72 図	SI02 出土遺物.....	(39)
第 28 図	SK04.....	(16)	第 73 図	SI03.....	(40)
第 29 図	SK04 出土遺物.....	(16)	第 74 図	SI03 出土遺物 (1).....	(41)
第 30 図	SK05・06.....	(16)	第 75 図	SI03 出土遺物 (2).....	(42)
第 31 図	SK05 出土遺物.....	(17)	第 76 図	SI04.....	(43)
第 32 図	SK06 出土遺物.....	(17)	第 77 図	SI04 出土遺物.....	(44)
第 33 図	SK07・08.....	(17)	第 78 図	SI05・06・07・17.....	(45)
第 34 図	SK09・10・11.....	(18)	第 79 図	SI05 出土遺物.....	(46)
第 35 図	SK09 出土遺物.....	(18)	第 80 図	SI07 出土遺物.....	(47)
第 36 図	SK10 出土遺物.....	(19)	第 81 図	SI10・同出土遺物.....	(48)
第 37 図	SK11 出土遺物.....	(19)	第 82 図	SI12・SK35・38・75・86.....	(48)
第 38 図	SK12.....	(20)	第 83 図	SI12 出土遺物.....	(49)
第 39 図	SK12 出土遺物.....	(20)	第 84 図	SI13・15・SK66・67・68・71・72・73.....	(49)
第 40 図	SK13・15.....	(20)	第 85 図	SI14.....	(50)
第 41 図	SK13 出土遺物.....	(21)	第 86 図	SI14 出土遺物.....	(50)
第 42 図	SK15 出土遺物.....	(21)	第 87 図	SI15 出土遺物.....	(51)
第 43 図	SK16.....	(21)	第 88 図	SI16.....	(51)
第 44 図	SK18.....	(22)	第 89 図	SI16 出土遺物.....	(52)
第 45 図	SK19.....	(22)	第 90 図	SI17 出土遺物.....	(53)
第 46 図	SK20.....	(22)	第 91 図	SK02 出土遺物.....	(54)
第 47 図	SK20 出土遺物.....	(22)	第 92 図	SK03 出土遺物.....	(55)
第 48 図	SK21 出土遺物.....	(23)	第 93 図	SK06 出土遺物.....	(55)
第 49 図	SK22 出土遺物.....	(24)	第 94 図	SK07 出土遺物.....	(55)
第 50 図	SK23.....	(24)	第 95 図	SK11・12.....	(56)
第 51 図	SK25.....	(25)	第 96 図	SK11 出土遺物.....	(56)
第 52 図	SK25 出土遺物 (1).....	(25)	第 97 図	SK12 出土遺物.....	(57)
第 53 図	SK25 出土遺物 (2).....	(26)	第 98 図	SK14.....	(57)
第 54 図	SK26.....	(26)	第 99 図	SK14 出土遺物.....	(57)
第 55 図	SD01.....	(26)	第 100 図	SK17.....	(58)
第 56 図	SK26 出土遺物.....	(27)	第 101 図	SK17 出土遺物.....	(58)
第 57 図	1 区ピットおよび遺構外出土遺物.....	(29)	第 102 図	SK09・18・19.....	(58)
2 区			第 103 図	SK18 出土遺物.....	(58)
第 58 図	2 区全体図.....	(30)	第 104 図	SK19 出土遺物.....	(59)
第 59 図	2 区標準堆積土層.....	(30)	第 105 図	SK21・22.....	(59)
第 60 図	SI01.....	(30)	第 106 図	SK23.....	(60)
第 61 図	SI01 出土遺物.....	(31)	第 107 図	SK24.....	(60)

第 108 図	SK24 出土遺物	(60)	第 155 図	SK66 出土遺物	(84)
第 109 図	SK25・58	(61)	第 156 図	SK68 出土遺物	(86)
第 110 図	SK26	(61)	第 157 図	SI18・SK69・70	(86)
第 111 図	SK26 出土遺物 (1)	(62)	第 158 図	SK69・70 出土遺物	(87)
第 112 図	SK26 出土遺物 (2)	(63)	第 159 図	SK74 出土遺物	(89)
第 113 図	SK30	(64)	第 160 図	SK78	(90)
第 114 図	SK31・同出土遺物	(64)	第 161 図	SK78 出土遺物 (1)	(90)
第 115 図	SK34・76	(65)	第 162 図	SK78 出土遺物 (2)	(91)
第 116 図	SI10・SK34・76 出土遺物 (1)	(66)	第 163 図	SK80	(92)
第 117 図	SI10・SK34・76 出土遺物 (2)	(67)	第 164 図	SK80 出土遺物	(92)
第 118 図	SK35	(67)	第 165 図	SK81	(92)
第 119 図	SK35 出土遺物	(68)	第 166 図	SK82・83	(93)
第 120 図	SK36・37・74・77・79	(68)	第 167 図	SK82 出土遺物	(93)
第 121 図	SK37・79 出土遺物	(69)	第 168 図	SK84	(93)
第 122 図	SK39・41	(69)	第 169 図	SK85・同出土遺物	(93)
第 123 図	SK39 出土遺物	(70)	第 170 図	SK86 出土遺物	(94)
第 124 図	SK40・45	(70)	第 171 図	SK87	(94)
第 125 図	SK40 出土遺物	(70)	第 172 図	SX01	(95)
第 126 図	SK42	(71)	第 173 図	SX01 出土遺物	(96)
第 127 図	SK44	(71)	第 174 図	3 区ピット出土遺物	(97)
第 128 図	SK44 出土遺物	(71)	第 175 図	SD01	(98)
第 129 図	SK45 出土遺物	(72)	第 176 図	SD01 出土遺物	(98)
第 130 図	SK47	(73)	第 177 図	3 区遺構外出土遺物	(100)
第 131 図	SK47 出土遺物	(73)	4 区		
第 132 図	SK48	(73)	第 178 図	4・7 区全体図	(101)
第 133 図	SK48 出土遺物	(74)	第 179 図	4・7 区標準堆積土層	(101)
第 134 図	SK50	(75)	第 180 図	SI01・同出土遺物	(102)
第 135 図	SK50 出土遺物	(75)	第 181 図	SK01	(103)
第 136 図	SK53	(75)	第 182 図	SK02	(103)
第 137 図	SK54	(75)	第 183 図	SD01	(103)
第 138 図	SK55	(76)	第 184 図	SD01 出土遺物	(103)
第 139 図	SK56	(76)	第 185 図	4 区遺構外出土遺物	(104)
第 140 図	SK56 出土遺物	(76)	7 区		
第 141 図	SK57	(76)	第 186 図	SI01	(104)
第 142 図	SK57 出土遺物	(77)	第 187 図	SK01・02	(105)
第 143 図	SK58 出土遺物	(78)	第 188 図	SK03	(105)
第 144 図	SK60	(78)	第 189 図	SK04・05	(105)
第 145 図	SK60 出土遺物	(78)	第 190 図	SK06	(105)
第 146 図	SK61・62	(79)	第 191 図	SK07	(105)
第 147 図	SK61 出土遺物	(79)	第 192 図	7 区ピット出土遺物	(106)
第 148 図	SK63	(80)	第 193 図	7 区遺構外出土遺物	(106)
第 149 図	SK63 出土遺物	(80)	5 区		
第 150 図	SK64	(80)	第 194 図	5 区全体図	(107)
第 151 図	SK64 出土遺物	(80)	第 195 図	5 区標準堆積土層	(107)
第 152 図	SK65	(81)	第 196 図	SI01 炉	(107)
第 153 図	SK65 出土遺物 (1)	(82)	第 197 図	SI01	(108)
第 154 図	SK65 出土遺物 (2)	(83)	第 198 図	SI01 出土遺物	(108)

第 199 図	SI02	(108)	第 231 図	SK02	(121)
第 200 図	SI03	(109)	第 232 図	SK03・07	(122)
第 201 図	SI03 出土遺物	(109)	第 233 図	SK03 出土遺物	(122)
第 202 図	SI04	(110)	第 234 図	SK07 出土遺物	(122)
第 203 図	SB01・同出土遺物	(110)	第 235 図	SK03・07 出土遺物	(122)
第 204 図	SK01・同出土遺物	(111)	第 236 図	SK04	(123)
第 205 図	SK02・同出土遺物	(111)	第 237 図	SK04 出土遺物 (1)	(123)
第 206 図	SK03	(111)	第 238 図	SK04 出土遺物 (2)	(124)
第 207 図	SK04	(112)	第 239 図	SK04 出土遺物 (3)	(125)
第 208 図	SK05	(112)	第 240 図	SK05	(125)
第 209 図	SK06	(112)	第 241 図	SK05 出土遺物	(126)
第 210 図	SK06 出土遺物	(112)	第 242 図	SK06	(126)
第 211 図	SK07・同出土遺物	(113)	第 243 図	SK08	(126)
第 212 図	SK08	(113)	第 244 図	SK09	(126)
第 213 図	SK09	(113)	第 245 図	SK08・09 出土遺物	(127)
第 214 図	SK10	(113)	第 246 図	SK10	(127)
第 215 図	SK11	(113)	第 247 図	SK10 出土遺物	(127)
第 216 図	SK12・13	(114)	第 248 図	SK11	(128)
第 217 図	SK14	(114)	第 249 図	SK11 出土遺物	(128)
第 218 図	SK14 出土遺物	(114)	第 250 図	SF01	(128)
第 219 図	SF01	(115)	第 251 図	SF01 (1区との交差部分)	(129)
第 220 図	SF01 出土遺物	(116)	第 252 図	SF01 出土遺物 (1)	(129)
第 221 図	5区ピット出土遺物	(117)	第 253 図	SF01 出土遺物 (2)	(130)
6区			第 254 図	SD02	(130)
第 222 図	6区全体図	(117)	第 255 図	SD02 出土遺物	(131)
第 223 図	SD01	(117)	第 256 図	8区ピット出土遺物	(131)
第 224 図	6区遺構外出土遺物	(118)	第 257 図	台形土器集成図	(132)
8区			第 258 図	琥珀製大珠切断技法図	(137)
第 225 図	8区全体図	(119)	第 259 図	出土土偶集成図	(138)
第 226 図	8区標準堆積土層	(119)			
第 227 図	SI02	(119)			
第 228 図	SI02 出土遺物	(120)			
第 229 図	SK01	(120)			
第 230 図	SK01 出土遺物	(121)			

表 目 次

第 1 表	周辺の遺跡一覧	(4)	第 11 表	3区SD01 古代遺物観察表	(99)
第 2 表	1区ピット計測表	(28)	第 12 表	3区遺構外古代遺物観察表	(99)
第 3 表	1区遺構外古代遺物観察表	(29)	第 13 表	4区SI01 古代遺物観察表	(102)
第 4 表	2区SI01 古代遺物観察表 (1)	(31)	第 14 表	4区SD01 古代遺物観察表	(103)
第 5 表	2区SI01 古代遺物観察表 (2)	(32)	第 15 表	7区ピット計測表	(106)
第 6 表	3区SI01 古代遺物観察表	(37)	第 16 表	5区SI03・05 古代遺物観察表	(109)
第 7 表	3区SI02 古代遺物観察表	(39)	第 17 表	5区SB01 古代遺物観察表	(110)
第 8 表	3区SI03 古代遺物観察表	(42)	第 18 表	5区SK06 古代遺物観察表	(112)
第 9 表	3区SX01 古代遺物観察表	(96)	第 19 表	5区SF01 古代遺物観察表	(116)
第 10 表	3区ピット計測表	(97)	第 20 表	5区ピット計測表	(117)

第 21 表	6 区遺構外古代遺物観察表	(118)
第 22 表	8 区 SI02 古代遺物観察表	(120)
第 23 表	8 区 SF01 古代遺物観察表	(130)
第 24 表	8 区 SF01 中世遺物観察表	(130)
第 25 表	連弧文様式土器共伴関係一覧表 (1)	(134)

第 26 表	連弧文様式土器共伴関係一覧表 (2)	(135)
第 27 表	連弧文様式土器共伴関係一覧表 (3)	(136)
第 28 表	連弧文様式土器共伴関係一覧表 (4)	(137)
第 29 表	8 区 SK01 出土具組成表	(141)
第 30 表	8 区 SK01 出土具一覧表	(141)

写真図版目次

図版 1 (1 区)

- 1 東側遺構確認 1 (東から)
- 2 東側遺構確認 2 (西から)

図版 2 (1 区)

- 1 東側調査終了状況全景
- 2 中央部調査終了状況全景

図版 3 (1 区)

- 1 標準堆積土層東側
- 2 標準堆積土層西側
- 3 SI01 完掘全景
- 4 同 炉セクション
- 5 同 炉完掘

図版 4 (1 区)

- 1 SI03 完掘全景
- 2 SI04 セクション

図版 5 (1 区)

- 1 同 P01 セクション
- 2 同 P02 セクション
- 3 同 P03 セクション
- 4 同 P04 セクション
- 5 同 完掘全景

図版 6 (1 区)

- 1 SI05 完掘全景
- 2 同 炉セクション
- 3 SI06 炉セクション
- 4 同 炉完掘
- 5 SI07 内重複 SK26 遺物出土状況

図版 7 (1 区)

- 1 SI07 完掘全景
- 2 SI08 完掘全景

図版 8 (1 区)

- 1 SI08 セクション
- 2 同 北側セクション
- 3 同 P 1 セクション
- 4 同 炉セクション
- 5 SI09 完掘全景

図版 9 (1 区)

- 1 SK01 セクション
- 2 同 完掘
- 3 SK02 セクション
- 4 同 完掘

5 SK03 セクション

6 同 完掘

7 SK04 セクション

8 同 完掘

図版 10 (1 区)

1 SK05 完掘

2 SK05・06 完掘

3 SK06 完掘

4 SK07・08 セクション

5 SK07 完掘

6 SK08 完掘

7 SK09 セクション

9 SK09 完掘

図版 11 (1 区)

1 SK10 完掘

2 SK11 遺物出土状況

3 同 近景

4 同 完掘

5 SK12 セクション

6 同 完掘

7 SK13 セクション

8 SK13 完掘

図版 12 (1 区)

1 SK14 セクション

2 同 完掘

3 SK15 完掘

4 SK16 セクション

5 同 完掘

6 SK18 セクション

7 SK19 完掘

8 SK20 ピットセクション

図版 13 (1 区)

1 SK21 セクション

2 同 完掘

3 SK22 セクション

4 同 遺物出土状況

5 SK23 完掘

6 SK24 完掘

7 SK25 セクション

8 同 遺物出土状況

図版 14 (1 区)

- 1 SK25 近景
- 2 同 完掘
- 3 SK26 遺物出土状況
- 4 同 完掘

図版 15 (1 区)

- 1 P01 セクション
- 2 P02 セクション
- 3 P03 セクション
- 4 P04 セクション
- 5 P05 セクション
- 6 P06 セクション
- 7 P07 セクション
- 8 P08 セクション
- 9 P09 セクション
- 10 P10 セクション
- 11 P11 セクション
- 12 P12 セクション

図版 16 (1 区)

- 1 P13 セクション
- 2 P14 セクション
- 3 P15 セクション
- 4 P16・17 セクション
- 5 P19 セクション
- 6 P20A セクション
- 7 P20B セクション
- 8 P20C セクション
- 9 P21A セクション
- 10 P21B セクション
- 11 P22A セクション
- 12 P22B セクション

図版 17 (1 区)

- 1 P23 セクション
- 2 P25 セクション
- 3 P26 セクション
- 4 P28 セクション
- 5 P29 セクション
- 6 P30 セクション
- 7 P32 セクション
- 8 SD01A セクション
- 9 SD01B セクション
- 10 SD01 完掘
- 11 SF01B セクション
- 12 同 C セクション

図版 18 (2 区)

- 1 表土除去状況
- 2 標準堆積土層
- 3 確認状況 1 (北から)
- 4 確認状況 2 (南から)

5 調査終了状況 (南から)

図版 19 (2 区)

- 1 SI01 全景
- 2 同 セクション
- 3 同 遺物出土状況全景
- 4 同 遺物出土状況 1
- 5 同 遺物出土状況 2

図版 20 (2 区)

- 1 SI01 P01 セクション
- 2 同 P02 セクション
- 3 SK01 遺物出土状況
- 4 同 完掘
- 5 SK02 セクション
- 6 同 完掘
- 7 SD01 セクション
- 8 同 完掘

図版 21 (3 区)

- 1 遺構確認状況 (東から)
- 2 標準堆積土層 (北から)
- 3 全景 1 (西から)
- 4 全景 2
- 5 東側端部全景

図版 22 (3 区)

- 1 調査終了状況全景 (東から)
- 2 遺構確認状況 (中央から東)

図版 23 (3 区)

- 1 調査終了状況全景 (西から)
- 2 完掘全景 (中央から東)

図版 24 (3 区)

- 1 SI01 完掘全景
- 2 同 遺物出土状況
- 3 同 炉セクション
- 4 同 完掘
- 5 同 P01 セクション

図版 25 (3 区)

- 1 SI02 完掘全景
- 2 同 東セクション
- 3 同 南北セクション
- 4 同 遺物出土状況
- 5 同 炉完掘

図版 26 (3 区)

- 1 SI02 遺物出土状況近景 1
- 2 同 遺物出土状況近景 2
- 3 同 遺物出土状況近景 3
- 4 同 遺物出土状況近景 4
- 5 SI03 完掘全景

図版 27 (3 区)

- 1 SI03 炉セクション (南から)
- 2 同 P05 セクション

- 3 SI04 全景
- 4 同 遺物出土状況近景
- 5 同 セクション

図版 28 (3 区)

- 1 SI07 完掘全景 (西から)
- 2 同 セクション
- 3 同 遺物出土状況近景
- 4 同 炉 (西から)
- 5 同 炉 (南から)

図版 29 (3 区)

- 1 SI05・06・17 完掘全景
- 2 SI10 完掘全景

図版 30 (3 区)

- 1 SI10 セクション
- 2 同 完掘
- 3 SI12 完掘全景
- 4 同 炉 (北から)
- 5 SI13・15 セクション

図版 31 (3 区)

- 1 SI13 完掘全景
- 2 SI14 完掘全景

図版 32 (3 区)

- 1 SI16 完掘全景
- 2 SI14・15 セクション
- 3 SI17 炉 (東から)
- 4 同 遺物出土状況 1 (西から)
- 5 同 遺物出土状況 2 (北から)

図版 33 (3 区)

- 1 SX01 完掘
- 2 同 セクション (北から)
- 3 同 セクション (西から)
- 4 SK01 セクション (北から)
- 5 SK02 セクション (北から)
- 6 SK03 完掘 (南から)
- 7 SK05 セクション完掘
- 8 SK05・57 完掘

図版 34 (3 区)

- 1 SK06 遺物出土状況
- 2 同 遺物出土状況近景
- 3 SK07 セクション (南から)
- 4 同 完掘 (南から)
- 5 SK08 完掘 (南から)
- 6 SK10 完掘 (南から)
- 7 SK11 セクション
- 8 同 完掘 (南から)

図版 35 (3 区)

- 1 SK12 完掘 (南から)
- 2 SK14 完掘 (南から)
- 3 同 遺物出土状況 (南から)

- 4 SK18・19 完掘 (南から)
- 5 SK18・79 完掘 (西から)
- 6 SK19 セクション (南から)
- 7 同 完掘 (南から)
- 8 SK21・22 完掘 (西から)

図版 36 (3 区)

- 1 SK21 完掘 (南から)
- 2 SK23 セクション (東から)
- 3 SK24 完掘 (北から)
- 4 SK25 完掘 (東から)
- 5 SK26 セクション (北から)
- 6 同 完掘 (南から)
- 7 SK30 セクション (北から)
- 8 SK31 完掘 (東から)

図版 37 (3 区)

- 1 SK34 完掘 (北から)
- 2 SK36 完掘 (南から)
- 3 SK37・79 完掘 (南から)
- 4 SK38 セクション・完掘 (北から)
- 5 SK39 完掘 (北から)
- 6 SK40・45 完掘 (北から)
- 7 SK40 遺物出土状況 (北から)
- 8 同 遺物出土状況近景 (北から)

図版 38 (3 区)

- 1 SK41 完掘 (北から)
- 2 SK42 完掘 (西から)
- 3 SK44 セクション (南から)
- 4 同 完掘 (南から)
- 5 SK47 完掘 (北から)
- 6 SK48 セクション (西から)
- 7 同 遺物出土状況 (東から)
- 8 同 完掘 (西から)

図版 39 (3 区)

- 1 SK50 セクション (北から)
- 2 同 完掘 (北から)
- 3 SK51 セクション (南から)
- 4 同 完掘 (西から)
- 5 SK53 セクション (北から)
- 6 SK54 セクション (南から)
- 7 同 完掘 (北から)
- 8 SK55 セクション (北から)

図版 40 (3 区)

- 1 SK55 完掘 (南から)
- 2 SK57 完掘 (南から)
- 3 SK58 完掘 (西から)
- 4 同 完掘 (南から)
- 5 SK60 セクション (北から)
- 6 同 完掘 (東から)
- 7 SK61 セクション (北から)

8 同 完掘 (西から)

図版 41 (3 区)

- 1 SK62 セクション (西から)
- 2 同 完掘 (南から)
- 3 SK63 セクション (南から)
- 4 同 完掘 (東から)
- 5 SK64 セクション (南から)
- 6 SK65 完掘 (南から)
- 7 SK66 遺物出土状況 (東から)
- 8 同 完掘 (南から)

図版 42 (3 区)

- 1 SK67 セクション (北から)
- 2 同 完掘 (西から)
- 3 SK68 遺物出土状況 (北から)
- 4 同 完掘 (西から)
- 5 同 遺物近景 1 (北から)
- 6 同 遺物近景 2 (北から)
- 7 SK69 完掘 (北から)
- 8 SK70 完掘 (北から)

図版 43 (3 区)

- 1 SK71 完掘 (西から)
- 2 SK73 セクション・完掘 (北から)
- 3 SK74 完掘 (西から)
- 4 SK75 完掘 (北から)
- 5 SK77 完掘 (西から)
- 6 SK78 セクション (北から)
- 7 同 遺物出土状況 (北から)
- 8 同 遺物出土状況近景 (北から)

図版 44 (3 区)

- 1 SK78 完掘 (南から)
- 2 SK80・81 完掘 (西から)
- 3 SK81 遺物出土状況 (北から)
- 4 SK84 完掘 (西から)
- 5 SK85 完掘 (東から)
- 6 SK87 完掘 (東から)
- 7 SK76・SI10 セクション・完掘 (南から)
- 8 SD01A セクション (西から)

図版 45 (3 区)

- 1 SD01B セクション (東から)
- 2 同 完掘 (北から)
- 3 A4・B4 グリッド柱穴群 1 (東から)
- 4 同 グリッド柱穴群 2 (東から)
- 5 P01K 完掘 (南から)
- 6 P13 遺物出土状況 (北から)
- 7 表土掘削状況 1
- 8 表土掘削状況 2

図版 46 (4 区)

- 1 確認全景 1 (西から)
- 2 確認全景 2 (東から)

3 標準堆積土層

4 SI01 セクション (北から)

5 同 完掘全景 (西から)

図版 47 (4 区)

- 1 SI01 セクション (西から)
- 2 同 炉セクション (南から)
- 3 同 完掘 (西から)
- 4 SK01 完掘
- 5 SK02 セクション・完掘 (北から)
- 6 SD01 セクション 1 (東から)
- 7 同 セクション 2 (東から)
- 8 同 セクション 3 (西から)

図版 48 (4 区)

- 1 調査終了状況全景 1 (西から)
- 2 調査終了状況全景 2 (東から)

図版 49 (5 区)

- 1 遺構確認状況 1 (東から)
- 2 遺構確認状況 2 (西から)

図版 50 (5 区)

- 1 SI01 完掘全景 (北から)
- 2 同 炉
- 3 同 炉完掘
- 4 SI03 セクション (東から)
- 5 同 確認状況 (東から)

図版 51 (5 区)

- 1 SI02 完掘全景 (東から)
- 2 SI03 完掘全景 (東から)

図版 52 (5 区)

- 1 SI03・05 遺物出土状況 (東から)
- 2 SI04 セクション (東から)
- 3 同 完掘全景
- 4 SK03 (井戸) 獣骨出土状況 (西から)
- 5 同 完掘 (東から)

図版 53 (5 区)

- 1 SK03 下層セクション (東から)
- 2 SK04 セクション (西から)
- 3 同 遺物出土状況
- 4 SK05 セクション (東から)
- 5 SK06 セクション (東から)
- 6 SK08 セクション (東から)
- 7 SK09 セクション (西から)
- 8 SK10 セクション (西から)

図版 54 (5 区)

- 1 SF01 硬化面確認状況 (西から)
- 2 同 セクション 1 (東から)
- 3 同 セクション 2 (東から)
- 4 同 セクション 3 (北から)
- 5 同 遺物出土状況

図版 55 (5 区)

- 1 SF01 硬化面確認状況 (東から)
- 2 同 完掘状況 (西から)

図版 56 (5 区)

- 1 SF01 掘り方完掘状況 (西から)
- 2 同 セクション

図版 57 (5 区)

- 1 P01 完掘
- 2 P02 完掘
- 3 P03 完掘
- 4 P05 完掘
- 5 P06 セクション (東から)
- 6 P07・08 完掘
- 7 P09 完掘
- 8 P10 完掘
- 9 P11・12 完掘
- 10 P13 完掘

図版 58 (5 区)

- 1 P14 完掘
- 2 P15 完掘
- 3 P16 完掘
- 4 P17 完掘
- 5 P18 完掘
- 6 P19 完掘
- 7 P20 完掘
- 8 P21 完掘
- 9 P22 完掘
- 10 P23 完掘
- 11 P24 完掘
- 12 標準堆積土層

図版 59 (5 区)

- 1 完掘全景 1 (東から)
- 2 同 完掘全景 2 (西から)

図版 60 (6 区)

- 1 確認状況全景 (東から)
- 2 標準堆積土層

図版 61 (6 区)

- 1 調査終了状況全景 (東から)
- 2 SD01 完掘 (東から)
- 3 同 セクション 1 (北から)
- 4 同 セクション 2 (南から)
- 5 表土掘削状況 (西から)

図版 62 (7 区)

- 1 確認状況全景 1 (西から)
- 2 確認状況全景 2 (東から)

図版 63 (7 区)

- 1 確認状況全景 3 (北から)
- 2 確認状況全景 4 (南から)
- 3 SI01 完掘全景 (西から)

- 4 同 セクション 1 (東から)

- 5 同 セクション 2 (北から)

図版 64 (7 区)

- 1 SK01 完掘 (南から)
- 2 同 セクション
- 3 SK02 完掘 (南から)
- 4 SK03 完掘 (南から)
- 5 P04 完掘 (東から)
- 6 P05 完掘 (東から)
- 7 P24 完掘 (北から)
- 8 P27・28 完掘 (東から)
- 9 P29 完掘 (東から)
- 10 P30 完掘 (東から)

図版 65 (7 区)

- 1 P35・36 完掘 (東から)
- 2 P37B 完掘 (東から)
- 3 P37 完掘 (東から)
- 4 P38 完掘 (南から)
- 5 P39 完掘 (南から)
- 6 P40 完掘 (南から)
- 7 P40B 完掘 (南から)
- 8 P41 完掘 (北から)
- 9 調査状況

図版 66 (8 区)

- 1 確認状況全景 1 (北から)
- 2 確認状況全景 2 (南から)

図版 67 (8 区)

- 1 完掘状況十字部分 1 (西から)
- 2 完掘状況十字部分 2 (南から)
- 3 完掘状況十字部分 3 (北から)
- 4 完掘状況十字部分 4 (南から)
- 5 標準堆積土層

図版 68 (8 区)

- 1 SI02 完掘全景 (南から)
- 2 同 セクション (東から)
- 3 同 炉
- 4 SK01 確認状況 (西から)
- 5 同 遺物出土状況 (南から)

図版 69 (8 区)

- 1 SK01 完掘 (西から)
- 2 SK02 セクション (北から)
- 3 同 完掘 (西から)
- 4 SK03 セクション (南から)
- 5 SK03・07 完掘
- 6 SK04 セクション (南から)
- 7 同 遺物出土状況近景
- 8 同 完掘

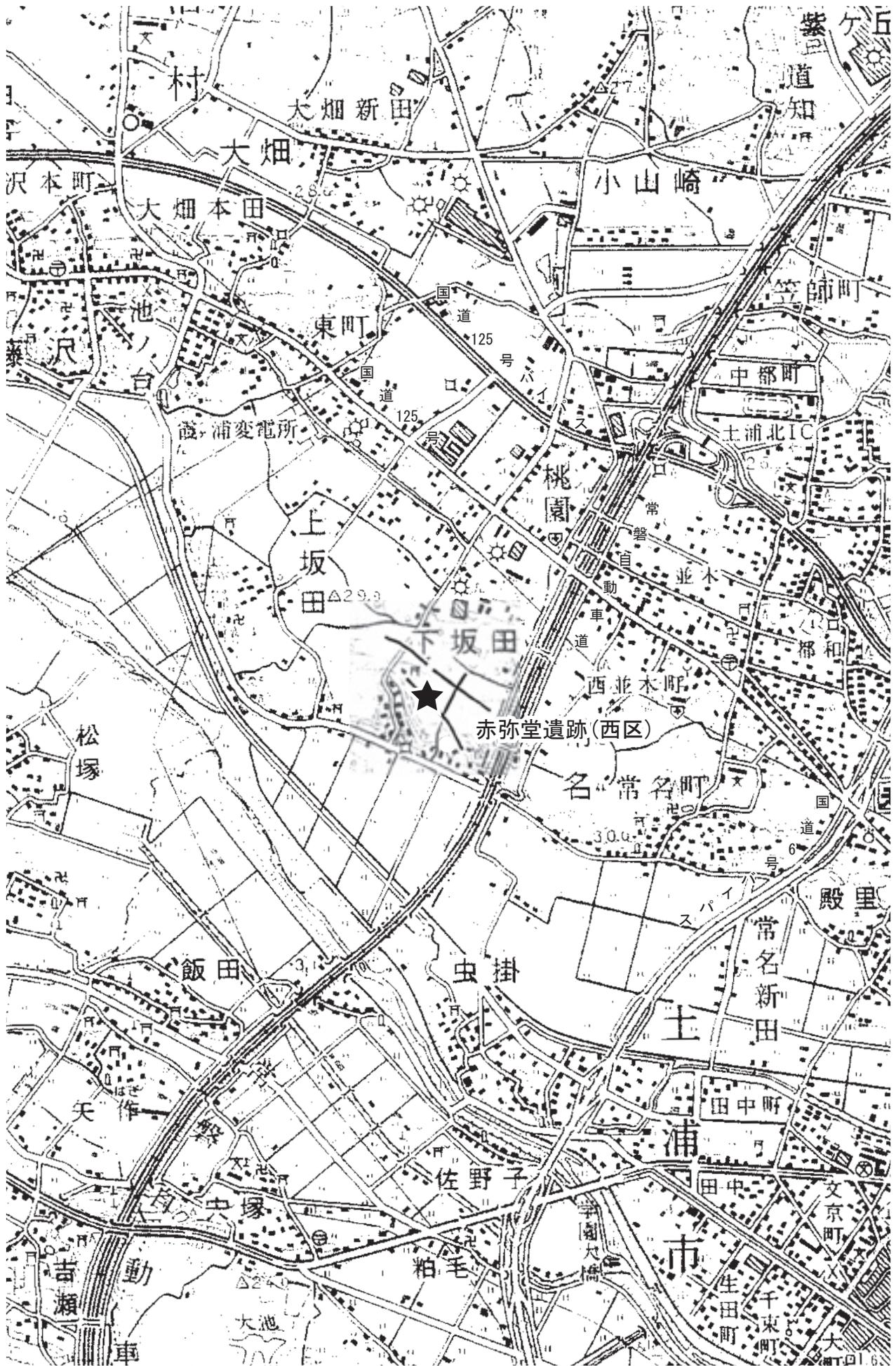
図版 70 (8 区)

- 1 SK05 セクション (南から)

2 同 完掘 (南から)	SK20 出土遺物
3 SK06・P06 セクション (北から)	SK21 出土遺物
4 同 完掘 (南から)	図版 77 (1 区)
5 SK07 完掘 (東から)	SK22 出土遺物
6 SK08 セクション (東から)	SK25 出土遺物
7 同 完掘 (東から)	SK26 出土遺物 (1)
8 SK09 セクション (西から)	図版 78 (1 区)
図版 71 (8 区)	SK26 出土遺物 (2)
1 SK09 完掘 (東から)	1 区ピットおよび遺構外出土遺物
2 SK10 遺物出土状況 (東から)	図版 79 (2 区)
3 同 全景	SI01 出土遺物
4 SK11 完掘 (西から)	SK01 出土遺物 (1)
5 P01 完掘 (東から)	図版 80 (2・3 区)
6 P02 完掘 (東から)	SK01 出土遺物 (2)
7 P03 完掘 (東から)	2 区遺構外出土遺物
8 P08・09 完掘 (北から)	SI01 出土遺物
9 P11 完掘 (東から)	図版 81 (3 区)
10 P12 完掘 (東から)	SI02 出土遺物
図版 72 (8 区)	SI03 出土遺物 (1)
1 P13 完掘 (西から)	図版 82 (3 区)
2 P14 完掘 (南から)	SI03 出土遺物 (2)
3 SD02 セクション 1 (西から)	SI04 出土遺物
4 同 セクション 2 (東から)	SI05 出土遺物
5 同 完掘全景 (南から)	図版 83 (3 区)
図版 73 (8 区)	SI07 出土遺物
1 SF01 完掘全景 (東から)	SI10 出土遺物
2 同 セクション 1 (南から)	SI12 出土遺物
3 同 セクション 2 (北から)	SI14 出土遺物
4 同 硬化面 (南から)	SI15 出土遺物
5 同 完掘 (南から)	図版 84 (3 区)
図版 74 (1 区)	SI16 出土遺物
SI01 出土遺物	SI17 出土遺物
SI02 出土遺物	図版 85 (3 区)
SI04 出土遺物	SK02 出土遺物
SI05 出土遺物	SK03 出土遺物
SI07 出土遺物	SK06 出土遺物
図版 75 (1 区)	SK07 出土遺物
SI08 出土遺物	SK11 出土遺物
SK03 出土遺物	SK12 出土遺物
SK04 出土遺物	SK14 出土遺物
SK05 出土遺物	図版 86 (3 区)
SK06 出土遺物	SK17 出土遺物
SK09 出土遺物	SK18 出土遺物
SK10 出土遺物	SK19 出土遺物
SK11 出土遺物	SK24 出土遺物
図版 76 (1 区)	SK26 出土遺物 (1)
SK12 出土遺物	図版 87 (3 区)
SK13 出土遺物	SK26 出土遺物 (2)
SK15 出土遺物	SK31 出土遺物

SK34・76 出土遺物 (1)
図版 88 (3 区)
SK34・76 出土遺物 (2)
図版 89 (3 区)
SK34・76 出土遺物 (3)
SK35 出土遺物
SK37・79 出土遺物
SK39 出土遺物
図版 90 (3 区)
SK40 出土遺物
SK44 出土遺物
SK45 出土遺物
SK47 出土遺物
SK48 出土遺物 (1)
図版 91 (3 区)
SK48 出土遺物 (2)
SK50 出土遺物
SK56 出土遺物
SK57 出土遺物
図版 92 (3 区)
SK58 出土遺物
SK60 出土遺物
SK61 出土遺物
SK63 出土遺物
SK64 出土遺物
SK65 出土遺物 (1)
図版 93 (3 区)
SK65 出土遺物 (2)
図版 94 (3 区)
SK66 出土遺物
図版 95 (3 区)
SK68 出土遺物
SK69・70 出土遺物 (1)
図版 96 (3 区)
SK69・70 出土遺物 (2)
SK74 出土遺物
SK76 出土遺物
図版 97 (3 区)
SK78 出土遺物
図版 98 (3 区)
SK80 出土遺物
SK82 出土遺物
SK85 出土遺物
SK86 出土遺物
SX01 出土遺物 (1)
図版 99 (3 区)
SX01 出土遺物 (2)
3 区ピット出土遺物
SD01 出土遺物

3 区遺構外出土遺物 (1)
図版 100 (3 区・4 区)
3 区遺構外出土遺物 (2)
SI01 出土遺物
SD01 出土遺物
4 区遺構外出土遺物
図版 101 (5 区)
SI01 出土遺物
SI03 出土遺物
SK01 出土遺物
SK02 出土遺物
SK06 出土遺物
SK07 出土遺物
SK14 出土遺物
SB01 出土遺物
5 区ピット出土遺物
SF01 出土遺物
図版 102 (6・7・8 区)
SK01 出土遺物
SK03 出土遺物
7 区ピット出土遺物
7 区遺構外出土遺物
SI02 出土遺物
SK01 出土遺物
図版 103 (8 区)
SK03 出土遺物
SK04 出土遺物 (1)
図版 104 (8 区)
SK04 出土遺物 (2)
SK05 出土遺物
SK07 出土遺物
SK07・03 出土遺物
図版 105 (8 区)
SK08・09 出土遺物
SK10 出土遺物
SK11 出土遺物
8 区ピット出土遺物
SD02 出土遺物
SF01 出土遺物
8 区遺構外出土遺物
図版 106 (8 区)
SK01 出土貝



第1図 遺跡周辺地図 (S=12500分の1)

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

1995（平成7）年2月、新治村（当時）教育長宛に茨城県土浦土地改良事務所（現在の茨城県県南農林事務所）から、坂田地区において県営畑地帯総合土地改良事業を計画しており、その予定地内の埋蔵文化財の有無について照会が提出された。現地踏査を行ったところ、包蔵地、貝塚、古墳群の存在が確認され、試掘確認調査が必要である旨を回答した。2002（平成14）年8月、茨城県土浦土地改良事務所から、埋蔵文化財の有無と遺跡が存在した場合の取扱についての照会が提出された。それを受け、同年11月に赤弥堂遺跡の北側について試掘・確認調査を行なった。結果、埋蔵文化財は確認されなかった。

2006（平成18）年、土浦市との合併後に計画が具体化し、6月に現地踏査、2007（平成19）年2月に赤弥堂遺跡の東側について、遺跡の範囲や密度、性格を把握するための確認調査を行った。翌2008（平成20）年3月には、赤弥堂遺跡の西側から事業区域西端の坂田峯の台古墳群にかけて試掘確認調査を行った。

試掘・確認調査の結果をもとに、茨城土浦土地改良事務所、土浦市産業部耕地課と協議を行い、道路となる箇所について、記録保存のための発掘調査を行うことで合意した。

2008（平成20）年3月25日、茨城県知事と土浦市長とで覚書を締結し、同年7月、茨城県知事と土浦市長で協定書を締結した。

文化財保護法関連では、2008（平成20）年6月17日付けで茨城県土浦土地改良事務所長より遺跡の発掘届（文化財保護法第94条）が市教育委員会に提出され、6月27日付けで茨城県教育長宛に進達した。発掘調査は有限会社勾玉工房 Mogi が実施することとなり、埋蔵文化財発掘調査の届出（文保法第92条）を、2009（平成21）年9月8日付けで茨城県教教育長宛に進達した。

第2節 調査の経緯

1 発掘調査

赤弥堂遺跡西地区は、農免道路建設予定地が対象地となっているため、狭長となり、さらに枝分かれした形状となる。調査の工程上、便宜的に1～8区の8区に分割設定し、1区東側から順次調査を進めることにした。

平成22年9月29日 器材搬入、テント・トイレの設営を行う。

10月5日 1区の表土掘削を開始。縄文時代・古墳時代の遺構を確認。

10月8日 調査開始。

10月19日 2・3区調査開始。表土掘削を行い、2区は古墳時代の竪穴住居跡、3区は縄文時代を主体とした遺構を検出し掘り下げを行う。

10月30日 1区調査終了。

10月31日 4区調査開始。古墳時代の竪穴住居跡と溝を主体とした遺構を検出し掘り下げを行う。

11月6日 2区調査終了。

11月10日 4区調査終了。

12月4日 6区調査開始。溝を検出する。

12月8日 5区調査開始。古墳時代の竪穴住居跡、中世の道路状遺構を主体とした遺構を検出し掘り下げを行う。3・6区調査終了。

12月22日 7区調査開始。表土排土を行い、土坑・ピットを主体とする遺構を検出し掘り下げを行う。

12月28日 5区調査終了。

- 平成23年 1月 7日 8区調査開始。表土排土を行い、土坑・ピットを主体とする遺構を検出し掘り下げを行う。
- 1月 22日 7・8区調査終了。
- 1月 31日 発掘器材・施設を撤収し、現地におけるすべての作業を終了する。

2 整理作業

- 平成22年11月 1日 水洗い作業を開始する。平行して図面の整理、写真の整理を開始する。
- 11月 12日 水洗いが終了した遺物より、注記作業に取りかかる。
- 貝の洗浄を開始し、貝の洗浄が終了した分より任意サンプルを抽出し遺構別貝の計測作業にとりかかる。
- 12月 1日 出土遺物の分類作業を開始する。遺物の選別と平行し、台帳を作成する。
- 12月 13日 遺物接合・実測・採拓を開始する。遺物分類に平行して、遺物原稿の執筆を開始する。
- 平成23年 1月 4日 遺構図面修正を開始する。平行して遺物のデジタルトレースを開始する。
- 2月 22日 報告書の編集を完了し、入稿する。
- 2月 26日 初稿原稿の校正を実施する。
- 3月 1日 2稿原稿校正を行う。
- 3月 10日 報告書刊行。教育委員会に納品する。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境（第1図）

赤弥堂遺跡は、土浦市下坂田1,173外に所在する。これらの遺跡の所在する土浦市は茨城県南地区のほぼ中央に位置し、北部には筑波山塊から南東に伸びる新治台地、中央部は古鬼怒川により形成された桜川低地（現在の桜川流域）、東部には霞ヶ浦の土浦入り、南部は筑波稲敷台地から成り立っている。周辺市町村としては市域の北部は石岡市と接し、北部から東部にかけてかすみがうら市と接する。西部はつくば市、南部は牛久市や稲敷郡阿見町と接している。

今回調査が実施された赤弥堂遺跡は、桜川北岸の標高26～29mの新治台地上の縁辺に位置している。これらの遺跡がある坂田地区は、およそ常磐自動車の西側で国道125号の南側に広がる地域であり、市内でも有数な畑作地帯で、特に梨の栽培や花卉栽培が盛んに行われている。細かく見れば坂田地区の東側が下坂田、西側が上坂田となる。下坂田の集落は台地下に集まり、上坂田の集落はおよそ台地上にまとまっている。

第2節 歴史的環境

以下は、赤弥堂遺跡の周辺の遺跡で、試掘確認調査を含め調査された遺跡を中心に取り上げ、時代順にその概要を述べてみたい。

旧石器時代 この時代の遺構が明確な遺跡は、山川古墳群（18）の第2次調査や神明遺跡（19）の第4次調査を除いて今のところない。特に前者では層位の異なる石器集中地点を3ヶ所確認した。これらの内、最も下層の石器集中地点からは台形様石器や楔形石器が出土し、周囲からは炉跡も確認された。同炉跡出土炭化物の年代測定を実施したところ、今から約3万2千年前のものであると測定された。市内でも最も古い石器集中地点の一例といえ、炉跡の確認と関連して興味深い事例といえる。

縄文時代 この時代の遺跡としては、赤弥堂遺跡（1）、馬場先貝塚（3）、中台遺跡・中台貝塚（5）、下坂田塙台遺跡（9）、上坂田寺裏貝塚（11）、上坂田貝塚（14）、神明遺跡（19）がある。中台遺跡・中台貝塚や上坂田貝塚は、筑波大学により踏査や確認調査等が実施された。前者では地点貝塚が環状に巡る様子が指摘され、ヤマトシジミを主体とする後期（加曾利B式期）の貝層が確認された。後者ではハイガイを主体とする前期（関山式期）の住居跡内貝層が調査された。神明遺跡では数次にわたる調査で、中期（加曾利E式期）の集落跡の存在が明らかになっている。同遺跡では中期（加曾利E式期）の土坑からサルボウやハマグリを主体とする地点貝塚が確認された。馬場先貝塚、上坂田寺裏貝塚についても、ハイガイを主体とする前期（関山式期）の地点貝塚とされ、坂田地区の台地上に前期の地点貝塚が広く点在する様子が理解できる。このほか、坂田地区における集落遺跡の展開状況について、本事業に伴う平成18・19年度の試掘確認調査や平成20年度の赤弥堂遺跡東・中央地区の発掘調査によりその輪郭が明らかにされつつある。それは、前期の地点貝塚の点在以外に、中期の集落跡が濃密に広く展開することが指摘できる。また、中台遺跡・中台貝塚では中期から後・晩期に及ぶ地点貝塚を伴う集落跡が広く展開するといえる。

弥生時代 この時代の遺跡としては、山川古墳群（18）の第3次調査で住居跡2軒調査されている。本事業の試掘確認調査の結果では、赤弥堂遺跡（1）の西側や下坂田塙台遺跡（9）で僅かながら弥生土器片が採集されているのみである。

古墳時代 この時代の遺跡は多く、特に古墳や古墳群の存在が特徴的であり、現状でも台地の縁辺に墳丘の残る古墳が比較的残り、古墳群を形成している。坂田地区には、石橋古墳（2）、釈迦久保古墳群（4）、坂田台山古墳群（6）、武者塚古墳群（7）、坂田塙台古墳群（9）、坂田立野古墳群（12）、塚原古墳群（13）があり、常名地区には常名天神山古墳（17）、過去に湮滅した瓢箪塚古墳（16）、山川古墳群（18）、北西原古墳群（20）が存在する。石橋古墳

に近接する今回の赤弥堂遺跡東地区の調査でも墳丘の削平された古墳が検出され、本来は古墳群として存在するものといえる。坂田台山古墳群は3基の古墳からなり、第1号墳は昭和39年に國學院大學と土浦第二高等学校により発掘調査が実施された。武者塚古墳群は2基の古墳からなり、この内の武者塚古墳は昭和58年に筑波大学によって発掘調査が実施され、特異な形態の石室を持つ終末期の古墳であることが判明した。出土品には銀製帯状金具や飾太刀、そしてみづらも発見され、現在県指定考古資料となっている。坂田塙台古墳群は合計13基の古墳で構成され、第2号墳は通称「武具八幡古墳」とも呼ばれ、安政元年に武具類が出土し、その遺物と状況を記した古文書が現在も地元に残されている。第11号墳は本古墳群内最大のもので、全長およそ30mを測る前方後円墳であり、平成20年に筑波大学によって測量調査がなされた。このほかにも、本事業に伴う試掘確認調査で墳丘が削平された古墳が多数確認されている。常名地区の常名天神山古墳は全長90mの前方後円墳で、5世紀前後の古墳と想定され、現在市指定史跡となる。その北側に広がる山川古墳群では3次にわたる調査で、33基もの古墳が確認され、前期から終末期の古墳が検出された。その中でも20基を越す大小様々な前期の方墳群の存在は特筆される。そして、同一台地上のより北側には北西原古墳群が存在し、終末期の方墳4基で構成される。

この時代の集落跡としては、赤弥堂遺跡(1)、中台遺跡(5)、神明遺跡(19)、北西原遺跡(20)、西谷津遺跡(21)、弁才天遺跡(22)で確認されている。特に北西原遺跡を中心にその周辺の神明遺跡では数次にわたる調査で、100軒以上もの前期の竪穴住居跡が検出された。西谷津遺跡や弁才天遺跡でも同時代の集落跡が検出され、前期や後期の竪穴住居跡が目立って確認されている。

奈良・平安時代 この時代の遺跡としては、赤弥堂遺跡(1)、下坂田塙台遺跡(9)、西谷津遺跡(21)、弁才天遺跡(22)で集落跡が確認されている。弁才天遺跡は8世紀前半から9世紀後半までの竪穴住居跡60軒以上で構成される集落跡であることが確認され、掘立柱建物跡もまとまって検出された。出土遺物としては、銅製品として皇朝十二銭の一つである和同開珎、杏葉、帯飾りなどがあり、鉄製品としては匙や鋤先などが見られる。緑釉陶器や灰釉陶器も出土し、「億万」などと書かれた墨書土器も出土している。

中世 この時代の遺跡としては、赤弥堂遺跡(1)、中台遺跡(5)、峯台館跡(10)、藤沢城跡(15)、山川古墳群(18)、神明遺跡(19)がある。赤弥堂遺跡や中台遺跡の試掘確認調査では性格不明の溝跡や大形の掘り込みが確認され、内耳土器などが出土している。峯台館跡は台地縁辺部を区切るように土塁が明瞭に巡り、その中に存在する坂田塙台古墳群第11号墳も土塁の一部として利用されている様子が窺える。坂田地区の台地北西端と谷を挟んだ対岸には藤沢城跡がある。その範囲は明瞭ではないが、現在の藤沢集落の多くを含むものと思われ、その中には一部土塁や堀跡が残る。常名地区では山川古墳群の第2・3次調査や神明遺跡の第1・3・4次調査の成果で、東西長125mで南北長103mの方形の溝で囲まれた方形館跡と考えられる遺構が確認されている。方形の区画溝内には掘立柱建物跡、柱穴群、井戸跡、竪穴状遺構などが検出され、遺物は少ないものの鎌倉時代の土師質土器小皿や竜泉窯系青磁の画花文碗や常滑産陶器片、銭貨が出土している。

【参考文献】

- 増田精一 編 1981『筑波古代地域史の研究—昭和54～56年度文部省特定研究費による調査研究概要—』筑波大学
 新治村教育委員会 1986『図説 新治村史』
 新治村教育委員会 1986『武者塚古墳』
 前田 潮 編 1991『「古霞ヶ浦湾」沿岸貝塚の研究—昭和63年度～平成2年度文部省特定研究費による調査研究概要—』筑波大学
 土浦市教育委員会 1998『神明遺跡(第1次・第2次調査)—土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集—』
 茨城県教育委員会 2001『茨城県遺跡地図』
 土浦市教育委員会 2002『常名台遺跡群確認調査 神明遺跡(第5次調査)—土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第6集—』
 土浦市教育委員会 2003『山川古墳群確認調査 西谷津遺跡 北西原遺跡(第6次調査) 神明遺跡(第4次調査)—土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第7集—』
 土浦市教育委員会 2004『山川古墳群(第2次調査)—土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第8集—』
 土浦市教育委員会 2007『山川古墳群(第3次調査)—土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第10集—』
 土浦市教育委員会 2006『弁才天遺跡 北西原遺跡(第5次調査)—土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第4集—』
 大賀 健ほか 2009『赤弥堂遺跡(東地区)』土浦市教育委員会・有限会社勾玉工房Mog i
 大賀 健ほか 2010『赤弥堂遺跡(中央地区)』土浦市教育委員会・有限会社勾玉工房Mog i

第3章 調査の方法と標準堆積土層

第1節 調査の方法

本遺跡は赤弥堂遺跡の西側部分に当たるために、赤弥堂遺跡（西地区）と呼称した。平成20年より赤弥堂（東地区）・赤弥堂（中央地区）の発掘調査が行われ、その報告書は平成22年3月に刊行が完了している。平成21年度の発掘調査は平成21年度の調査とは年度が替わり、新規事業として実施したものである。しかしながら、遺跡は21年度まで実施した遺跡の継続であり、同一遺跡として判断される。

西地区の調査は農道の路線に沿った範囲の調査であるために、幅4m～6mで、長さの総延長は580mとなる。調査区は概ねH字形に広がるもので工事の進捗に合わせて調査を進めた。従って、調査区の呼称は第4・5図のように規則性のあるものとはなっていない。

グリッドの設定は、調査区毎に中央部分に基準杭を幅5mのピッチで設定し、後に第IX系世界測地の座標で取り込んだ。従って、調査区全体1区～8区ではグリッドの呼称は統一されていない。区毎にグリッドを設定している。

1区は東西に分けている。中央部分に杉の森が挟まる形で二分され、西側調査区は東西方向に伸びるものでやや西端でS字に湾曲する。全長は110.571mを計る。1区東側はスギ林を挟んで東側60.7m、北西から南東方向にほぼ直線状になる。2区は1区東側の東端部で直角に北方向に折れる北東方向から南西方向にほぼ直線で33.65mの範囲である。3区は1区とほぼ平行する南側の調査区で北西から南東にかけて121.76mの範囲で、T字の交叉部分から東側は5区になる。北西から南東に伸びるもので、北西端部付近で「く」の字に折れる。全長は87.97mを計る。また同じくこの交差部分から北側が8区になる。H字の中軸部分で北北東から南南西に向かいほぼ直線で、全長は68.43mを計る。4区と7区は北西から南東に連続する直線の区間である。2つの境目に電柱が存在し、工事の関係から2つの区に分割した。4区は47.2mの直線区間。7区は49.31mの同じく直線の区間である。6区は1区西側の北側150mに位置し、全幅7.5m、長さ約12mである。

総延長は凡そ592mを計る。

調査区域は世界座標IX系のX=11600、Y=30700～X=12000、Y=31000の範囲に収まる。

掘り下げは重機（バックホー）により表土除去を行い、鋤簾にて遺構確認作業を行った。遺構の確認面はソフトローム層の上面で標準堆積土層については、各調査区において記録をとっている。

写真による記録は35mmの白黒およびカラーズライドによって実施し、補足的にデジタルカメラ700万画素を使用し随時実施した。地区別に脚立で撮影を行った。航空撮影は調査区の進捗に合わせた日程が組めず実施していない。

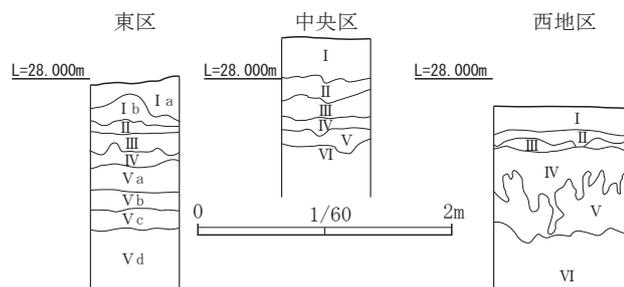
第2節 標準堆積土層

本遺跡の標準堆積土層の観察は各地区でテストピットを設け実施している。本報告書はこの赤弥堂遺跡の最終報告書として作成したもので、21・22年度に実施した赤弥堂東地区、中央地区、22年度に実施した西地区を全体を図示して対比する。全体の地形はほぼ平坦であるが西側に向かいやや標高が高くなっている。

基本的な層序は全域にわたりほぼ同様で、表土層の下に旧耕作土層が確認され、その直下に第III層ローム漸移層が確認されこの土層が遺構確認面となっている。

第IV層のソフトロームまでの厚さはおよそ20cmを測る。以下V層ハードローム層は締まりの状況および色調からV・VIの2層に分層される。

古墳時代・中世の確認面はII層上面であるが、縄文時代の確認面はIII層中層～下層である。



第3図 標準堆積土層

第4章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

検出された遺構は赤弥堂遺跡の西端部に位置するもので、東地区・中央地区とは様相が異なる部分と、同様の部分の双方が見られた。

縄文時代では、前期の遺構で明確な遺構は検出されていない。東・中央地区で見られたハイガイを主体とする前期前～中葉の貝塚も検出されていない。一方で、西地区8区SK01および中央地区4区SK07検出の中期に伴うサルボウを主体とする貝塚が僅かに1基ずつ検出されており、いずれも中期中葉の遺構であることに齟齬はない。

今回の遺跡調査における結果は縄文時代中期の集落および遺物、古墳時代中期後葉の集落、中世の道路状遺構が中心となっている。

縄文時代中期では、中央地区から東地区にかけて阿玉台式末葉～加曾利E式の古い段階に中心があったが、今回の調査ではこれらと共に加曾利EⅢ式期の集落が多く確認されている。このことは西に行くにつれ、阿玉台式土器が薄くなり、加曾利EⅢ式土器の増加が指摘できる。さらに、この加曾利EⅢ式に伴って連弧文様式の土器の出土は特筆される。

特殊な遺物としては阿玉台式期の土偶2点、加曾利E式期の琥珀大珠1点、台形土器等があげられる。

古墳時代では、住居跡は部分的調査のみで全体を捉えた住居はなかったが、概ね5世紀中葉～後葉カマド導入前の集落である。一部東海以西の古式な須恵器の出土も見られる。

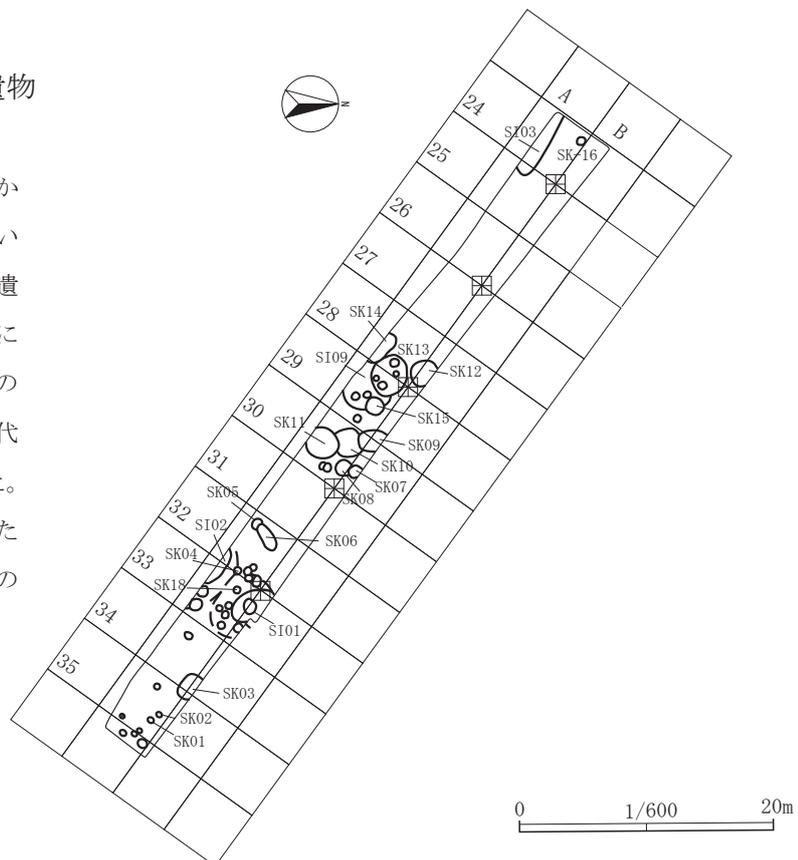
奈良・平安時代の遺物は少量出土しているものの、遺構は検出されていない。

中世はSF01とした1条の道である。5・8・1区東側で検出されている。遺物では、中世土器・古瀬戸・青磁碗等が出土しており、近隣に中世の遺構が存在する可能性が高い。

第2節 検出された遺構と遺物

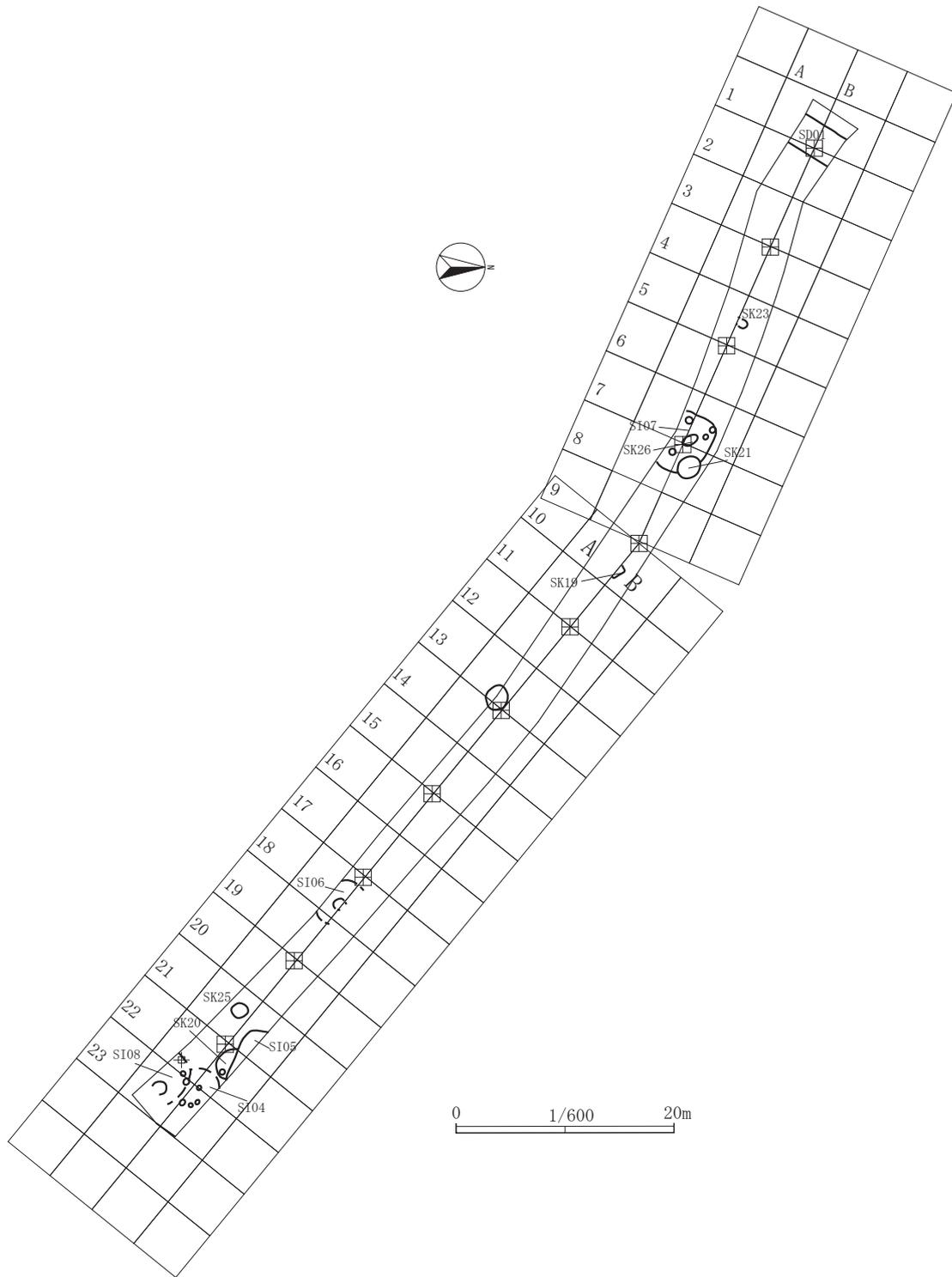
地区別に検出された遺構を遺物から判断すると以下の通りになる。いずれの遺構も重複が激しく、出土遺物が混在する傾向がある。明らかに縄文中期の完形品を出土する遺構の上層に土師器の混入が見られ、時代を特定するには困難な状況であった。

遺構・遺物は遺跡の性格を表すために出来る限り掲載を試みた。その総点数はおよそ800点を数える。

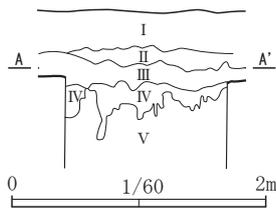


第6図 1区東側全体図

中



第7図 1区西側全体図



- I層 10YR3/3 暗褐色土 ロームブロックφ1～5mm 多量。しまりあり。耕作土。
- II層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～15mm 多量。しまりあり。旧耕作土カ
- III層 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 ロームブロックφ1～3mm 極多量。しまりあり。ソフトローム漸位層。
- IV層 10YR 4/4 褐色土 ロームブロックφ1～10mm 極多量。しまりあり。ソフトローム。
- V層 10YR 4/4 褐色土 しまり強い。ハードローム。

第8図 1区西側標準堆積土層

第 1 項 1 区

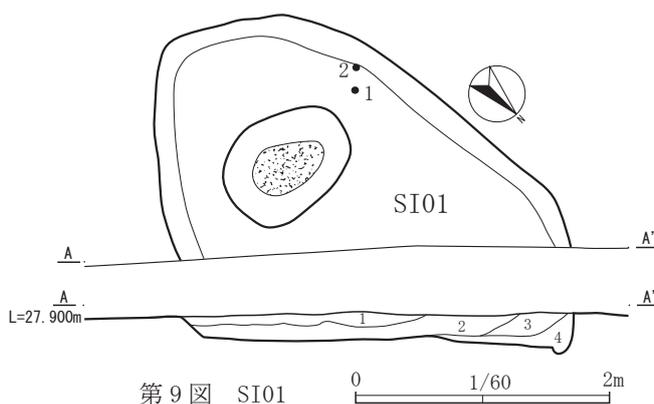
1 住居跡 (SI)

SI01 (第 9 図、図版 3・74)

本遺構は A・B-32・33 グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸不明、短軸 2.02 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 19 cm、覆土は自然堆積で 4 層に分層される。柱穴は検出されていない。炉は住居の南側に位置し浅い皿状の地床炉である。長軸 93 cm、短軸 69 cm を計る。遺物は主に炉の西側から出土が見られたが数量的には少ない。

遺物は 3 点掲載した。01 は深鉢口縁部内湾するも

ので口唇端部は平坦で中央がややくぼむ。無文で、外面に僅かな沈線状の段を有する。02・03 は同一個体と考えられる。胴部の破片で地文に RL の縄文を全面に施文した後、磨消懸垂文、蛇行沈線が施文される。加曾利 E I ~ II 式である。



第 9 図 SI01

SI01

- 1 層 10YR 2/1 黒色土 ロームブロックφ 2~10mm 多量。
 2 層 10YR 1.7/1 黒色土 ロームブロックφ 2~10mm 多量、焼土ブロックφ 2~10mm 少量。
 3 層 5YR 3/3 暗赤褐色土 ロームブロックφ 2~10mm 少量、焼土ブロックφ 2~10mm 極多量。
 4 層 0YR 2/1 黒色土 ロームブロックφ 2~10mm 極多量、焼土ブロックφ 2~10mm 少量。



1-SI01-01



1-SI01-02



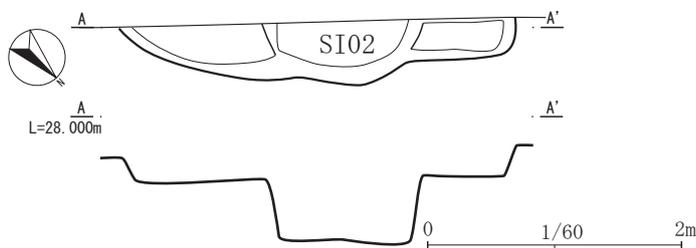
1-SI01-03

0 1/3 10cm

第 10 図 SI01 出土遺物



1-SI02-01



第 11 図 SI02

SI02 (第 11・12 図、図版 74)

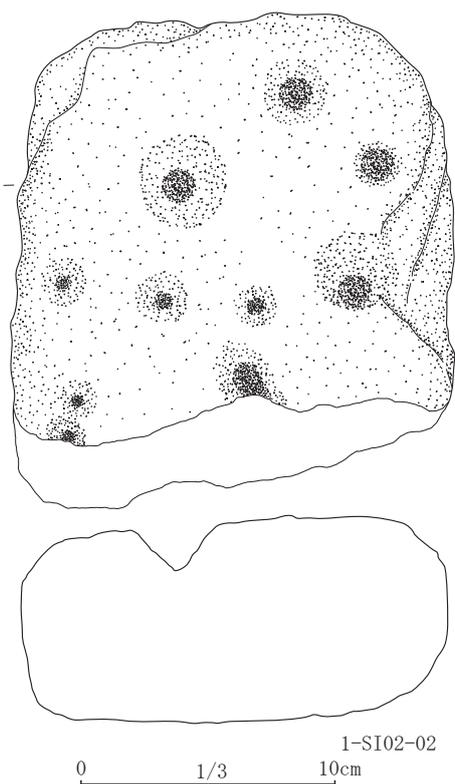
本遺構は A-32・33 グリッドにおいて検出された。円形土坑の重複の可能性はある。

遺物は 2 点掲載した。01 は深鉢胴部の細片である。縦方向に RL の縄文が回転施文された後、磨消懸垂文が施される。加曾利 E II 式の遺物であろう。02 は砂岩製の多孔石である。長方形の厚みのある板状の石で、上面に大小 10 箇所の逆円錐状の孔が穿たれている。

SI03 (第 13 図、図版 4・74)

本遺構は 1 区東側 A-24・25 グリッドにおいて検出された。大半が調査区域外となるために明瞭ではないが、方形を呈するものと判断される。壁際には周溝が全周する。柱穴は確認されていない。

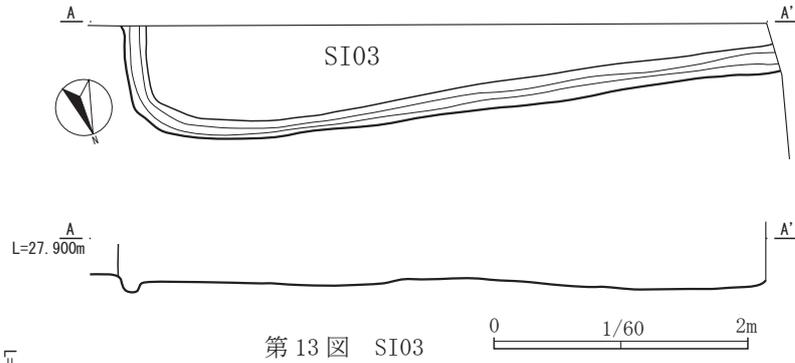
遺物の出土もなく、古墳時代以降の住居跡であろう。



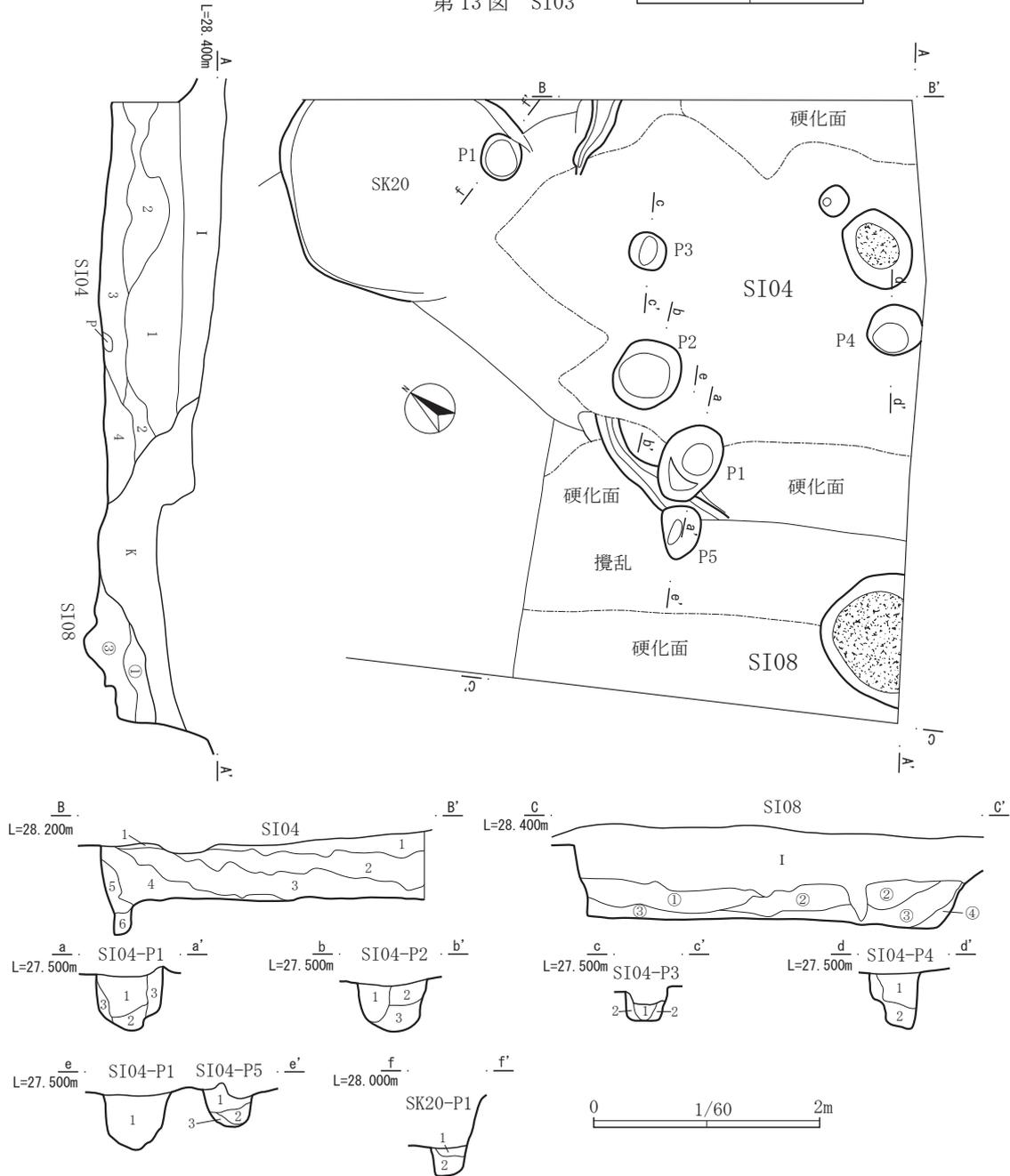
1-SI02-02

0 1/3 10cm

第 12 図 SI02 出土遺物



第13図 SI03



SI04

- 1層 10YR 2/2 黒褐色土 ロームブロックφ1~2mm 中量、暗褐色土ブロックφ10~50mm 微量。
- 2層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~3mm 多量、炭化物ブロックφ1~3mm 極微量。
- 3層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~2mm 多量、焼土ブロックφ1~2mm 極微量、炭化物ブロックφ1~3mm 極微量。しまりあり。
- 4層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~3mm 極多量、焼土ブロックφ1~2mm 微量。炭化物ブロックφ1~2mm 極微量。
- 5層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~3mm 多量。
- 6層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~5mm 多量。しまりあり。

SI08

- ①層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~5mm 中量、焼土ブロックφ1~2mm 極微量。
- ②層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~3mm 多量。しまりあり。
- ③層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~5mm 極多量。しまりあり。
- ④層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~30mm 極多量。しまりあり。

第14図 SI04・08・SK20

SI04(第14～16図、図版4・5・74)

本遺構はA・B-22・23グリッドにおいて検出された。平面形状は不明。規模不明。確認面下の掘り込みの深さは52.6cm、覆土は自然堆積で6層に分層される。柱穴は5本検出され、この内4本が円形に配列され、支柱穴となる。炉は住居の中央付近に位置し浅い皿状の地床炉である。長軸72cm、短軸56cmを計る。床面は炉を中心に全面に硬化が見られる。

遺物は主に炉の周辺から出土が見られ、数量的にまとまった資料が得られている。

01・02は深鉢口縁の破片である。隆帯による円形の枠状区画を設け内部には単節RLの縄文が施文される。渦巻は退化している。03・04は01・02の胴部下半から底部付近の破片である。磨消懸垂文が施文される。地文はLRの縄文を縦方向に施文している。

05・06は連弧文を描く一群である。2本1単位とするやや太い平行沈線によって頸部に区画の線を巡らせた後、胴部上半に弧状の文様が描かれる。所謂連弧文様式の土器である。

07～09は同一と判断される深鉢の口縁部から胴部上半部の破片である。07では口縁部は丸棒状になっている直下に太い沈線による区画部を設け、内部に2列の円形押捺文が充填される。08・09では胴部の施文が観察され、地文には縦方向の条線が密に施文される。また、沈線による磨消懸垂文が施文される。

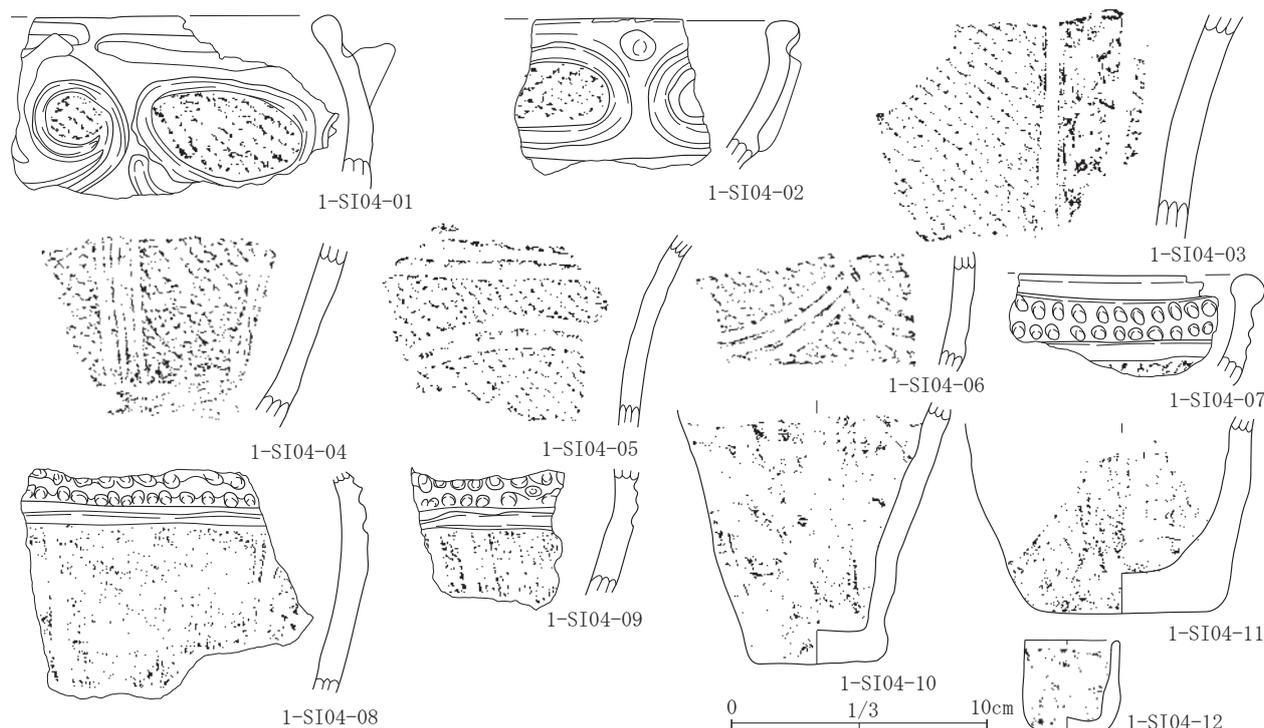
10・11・12はミニチュア土器である。深鉢形の土器で10・11では胴上半から口縁部にかけて欠損する。11は僅かながら懸垂文が観察され、小形の深鉢の可能性もある。12ではやや丸みを帯びた手握ね風の作りである。10・12は無文である。

13・14は土器片錘である。13には縦方向の撚糸文が施文され、加曾利E I式段階の深鉢胴部破片を用いている。重量は18.8g、14は沈線による文様が描かれる。重量は18.8g。

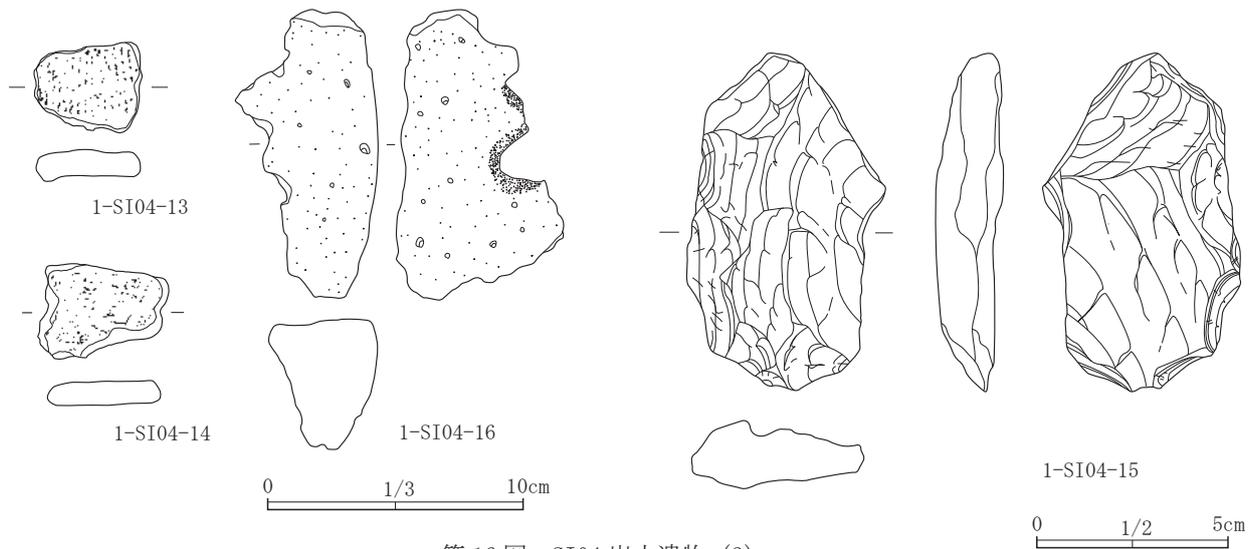
15は二次加工剥片である。端部に使用痕などの微細剥離は観察されず、槍状に形状を整えている。

16は多孔質安山岩製の石皿の破片であろう。上面には平坦面が観察され、側面は丸みを帯びる。裏面には孔が2箇所を確認される。石皿側面部の破損資料と想定される。

01～06の遺物から判断して本遺構の時期は加曾利E II～III式に比定されるもので、連弧文の沈線が多段化しないこと、地文に撚糸を有する土器片錘などから判断しても加曾利E II式に近い加曾利E III式と判断される。また、07～09の円形押捺文が施文される土器群もこの連弧文様式の遺物の範疇で捉えられるものであろう。一見すると交互刺突文が崩れた文様にも観察されるものであるが、加曾利E III式段階に平行するものとされる資料である。



第15図 SI04出土遺物(1)



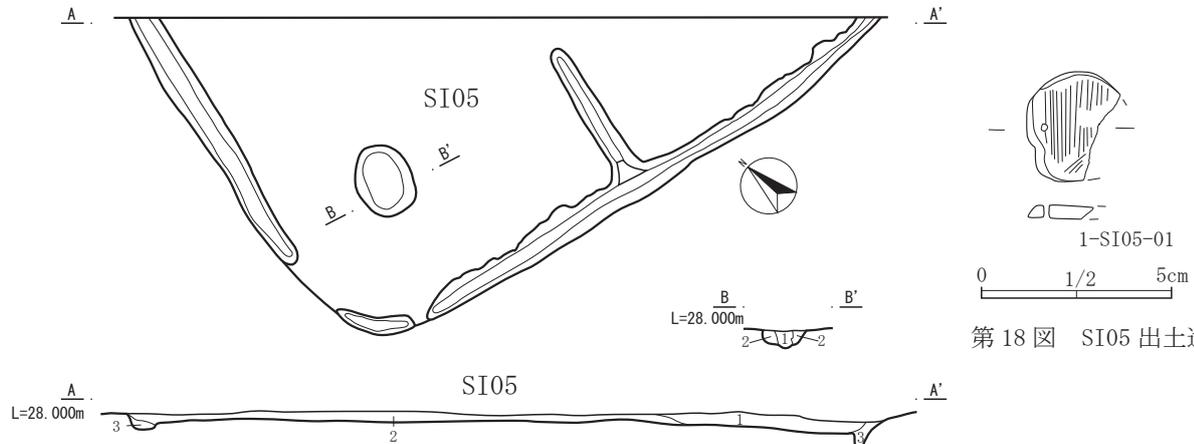
第16図 SI04出土遺物(2)

SI05(第17・18図、図版6・74)

B-21・22グリッドにおいて検出された。方形を呈するものであろう。南西側コーナー部分を確認したに過ぎない。したがって規模は不明。床面は平坦で硬化面が広がる。柱穴および炉は検出されていない。南壁側に間仕切り溝が1本確認されている。また、南西コーナー寄りには楕円形の掘り込みが確認されており、貯蔵穴の可能性もある。壁溝は全周するものであろう。

出土遺物もほとんど出土しておらず、掲載遺物は滑石製有孔円板1点のみである。

01は滑石製模造品の有孔円板である。右側は孔を含め欠損している。全体に研磨は粗雑。住居跡からの出土遺物は本資料のみで、他は形状を明確にできる遺物の出土は無かった。土師器の碎片のみである。本資料並びに住居跡の形状から、5世紀中葉以降6世紀前半頃の住居と想定される。



第18図 SI05出土遺物

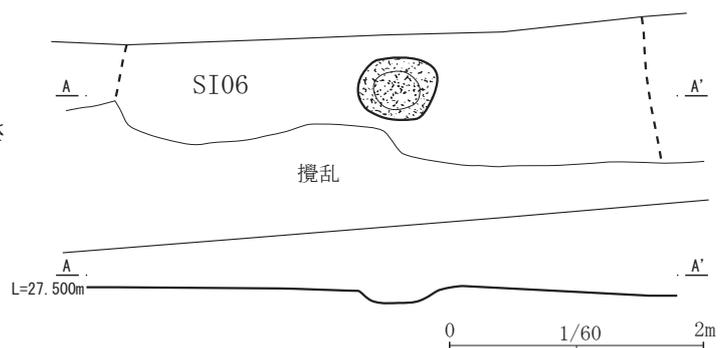
SI05
1層 10YR 4/6 褐色土 ロームブロックφ1~3mm 多量。しまりあり。
2層 10YR 4/6 褐色土 ロームブロックφ1~10mm 極多量。しまりあり。

第17図 SI05

SI06(第19図、図版6)

本遺構はA・B-18・19グリッドにおいて検出された。炉は中央に検出されている。

遺物は検出されていない。

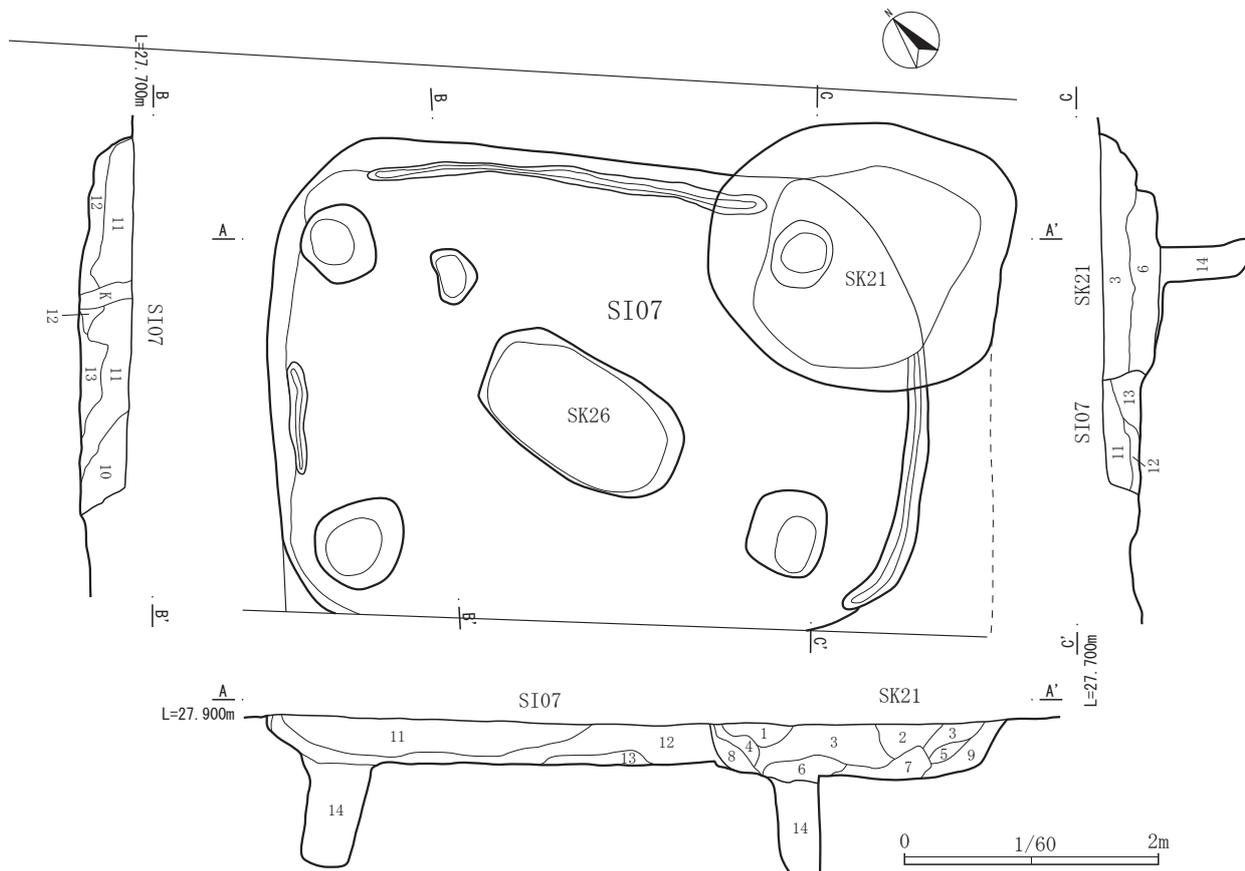


第19図 SI06

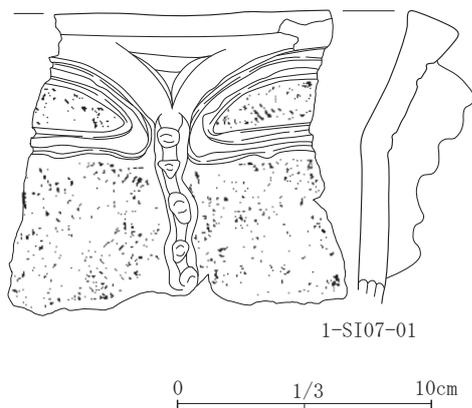
SI07(第20・21図、図版6・7・74)

本遺構はA・B-7・8グリッドにおいて検出された。平面形状は隅丸方形を呈し、長軸5.23m、短軸3.68mを計る。確認面下の掘り込みの深さは33.8cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。第1層～9層はSK21の覆土であり、本遺構を切っている。柱穴は5本検出され、この内4本が対角線上に配列され、支柱穴となる。

遺物は全体に散漫な出土である。01は深鉢形土器の口縁部破片である。窓枠状の隆帯によって区画された内部に平行沈線が沿う。枠状区画の交点はX字状となり、刻みを有する棒状の隆帯が垂下する。地文には条線による波状の文様が縦方向に密に施文される。眼鏡状区画の中も同様な条線が観察され、条線施文後に隆帯の貼り付けが行われている。阿玉台Ⅲ～Ⅳ式段階と判断される。



第20図 SI07



第21図 SI07出土遺物

SK21

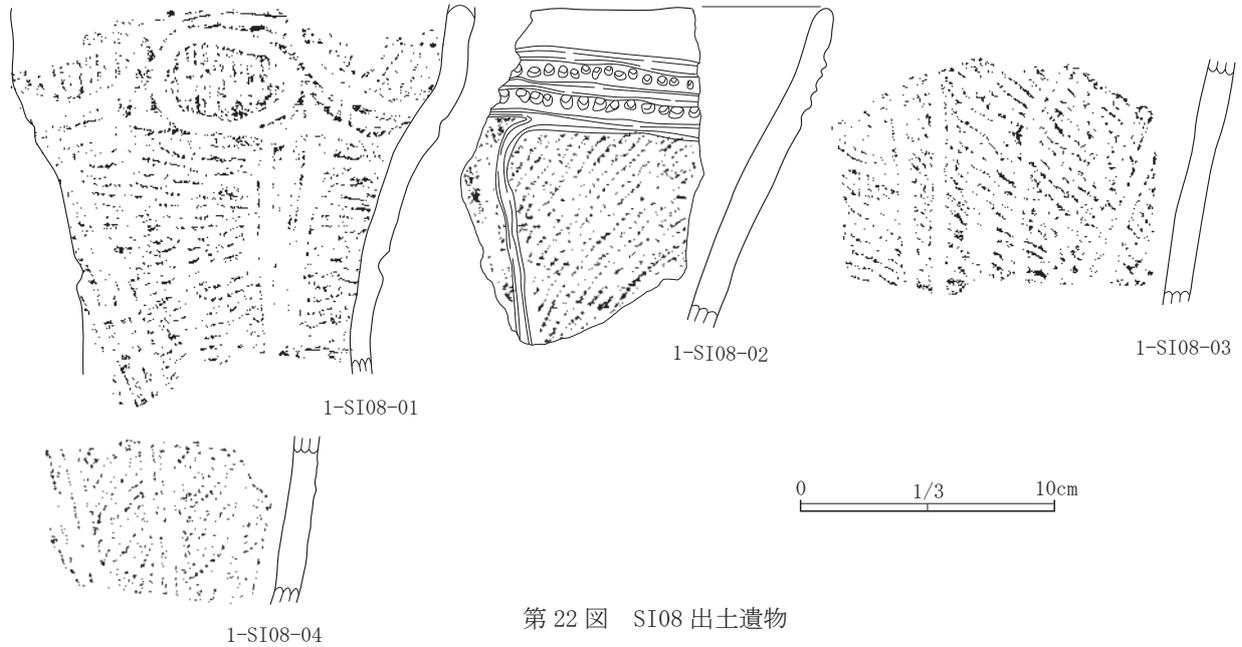
- | | |
|-------------------|--|
| 1層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロックφ1～2mm 中量。 |
| 2層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロックφ1～20mm 多量。 |
| 3層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロックφ1～5mm 多量。炭化物ブロックφ3～5mm 極微量。 |
| 4層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロックφ1～10mm 極多量。 |
| 5層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロックφ1～50mm 多量。 |
| 6層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロックφ1～5mm 多量。 |
| 7層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロックφ1～40mm 極多量。しまりあり。 |
| 8層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロックφ1～10mm 多量。しまりあり。 |
| 9層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロックφ1～3mm 極多量。 |
| SI07 | |
| 10層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロックφ1～10mm 多量。しまりあり。 |
| 11層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロックφ1～15mm 多量、炭化物ブロックφ1～3mm 極微量。 |
| 12層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロックφ1～3mm 中量、炭化物ブロックφ1～2mm 微量。しまりあり。 |
| 13層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロックφ1～5mm 極多量、炭化物ブロックφ2～3mm 極微量。 |
| 14層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロックφ1～5mm 極多量、炭化物ブロックφ2～3mm 極微量。 |

SI08(第14・22図、図版7・8・75)

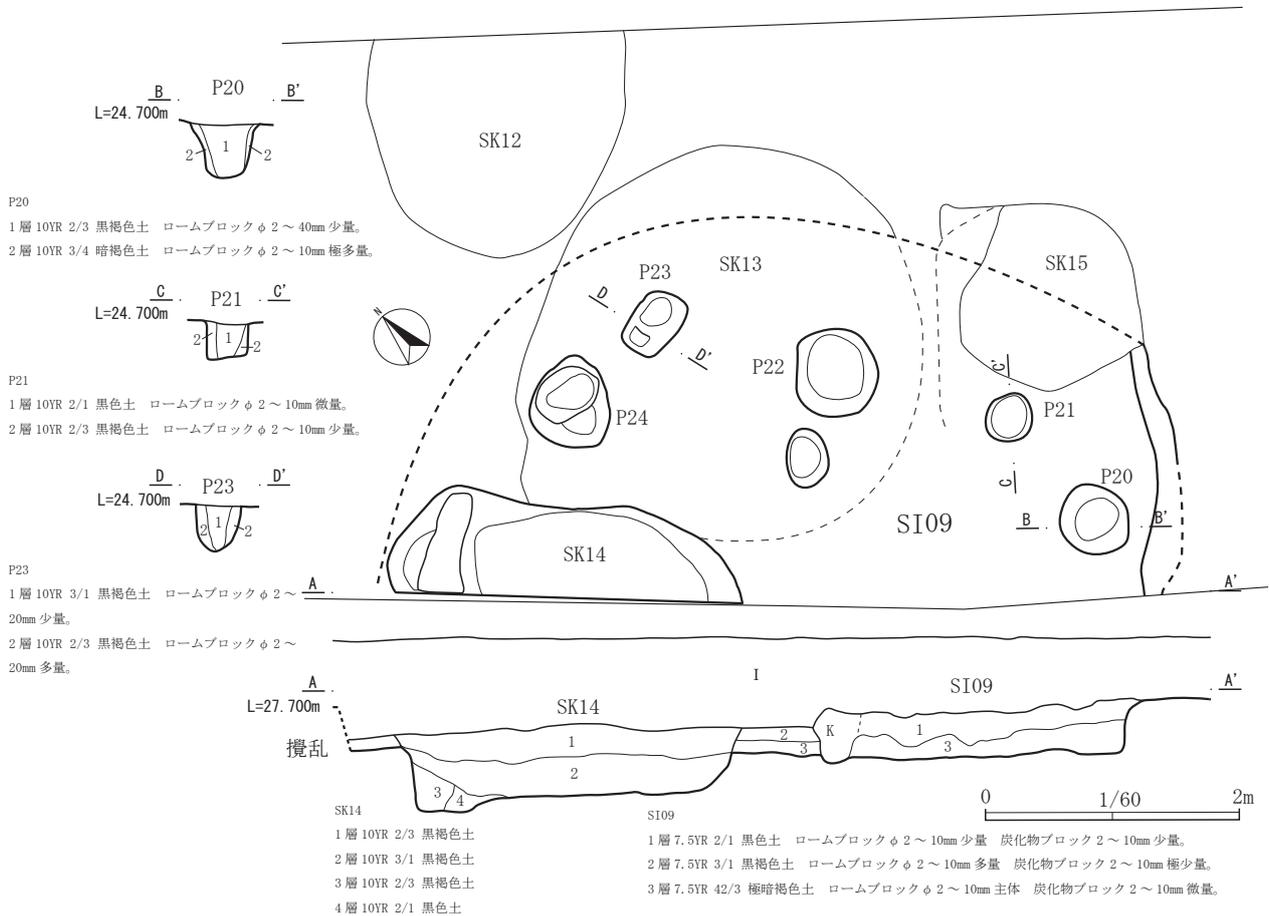
本遺構はA-22・23グリッドにおいて検出された。平面形状は不明である。SI04と重複している。確認面下の掘り込みの深さは30.9cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。柱穴は検出されていない。炉は住居の南東調査区壁際に位置し、浅い皿状の地床炉である。南東壁際に1.26mを計る。床面は部分的に硬化が見られる。

遺物は若干量出土している。01 は深鉢形土器上半部の資料である。低い隆帯によって円形の区画帯を設け内部に太い沈線が沿う。区画内には縦方向の条線が充填される。胴部は単節 LR の縄文が斜方向 45° に回転施文され、横方向の縄文が観察される。また太い沈線 3 条が垂下する。加曽利 E III 式である。02 は深鉢口縁部の破片である。口縁直下には沈線と円形押捺文が交互に配される。胴部には単節 RL の縄文が縦方向に施文され、幅広の磨消懸垂文が垂下する。連弧文様式の土器と判断される。03・04 は深鉢胴部下半の破片である。不揃いの単節 RL の縄文が縦方に施文され、幅の狭い磨消懸垂文が垂下する。

遺物から加曽利 E III 式期の遺構と判断される。



第 22 図 SI08 出土遺物



第 23 図 SI09・SK14

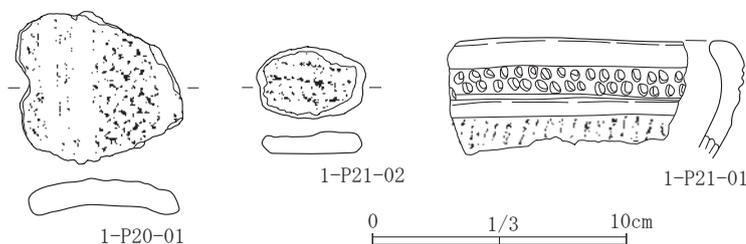
SI09 (第 23・24 図、図版 8・78)

本遺構は A-28・29 グリッドにおいて検出された。平面形状は円形を呈するものと判断される。遺構は、覆土がほとんど削平されており、柱穴 P20～P24 がほぼ円形に配列されることより、住居跡と判断した。長軸 5.94 m 前後と推測される。確認面下の掘り込みの深さは 37 cm、覆土は自然堆積で 3 層に分層される。柱穴は 6 本検出され、この内 5 本が円形に配列され、支柱穴となる。SK14 と重複関係にあり、土坑が本住居跡を切っている。

遺物は、P20 および P21 から僅かながら出土している。

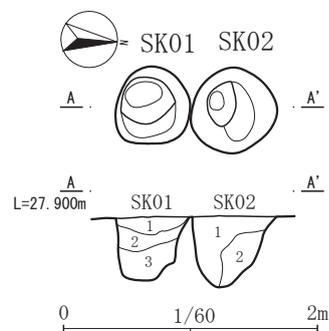
P20-01・P21-02 は土器片錘である。いずれも加曾利 E III 式深鉢の胴部破片を用いている。

P21-01 は深鉢口縁部の破片である。口縁部に円形の刺突列を有し、胴部には縦方向の撚糸文が施文される。所謂連弧文様式土器である。したがって本住居跡は加曾利 E III 式の遺構と判断される。



第 24 図 SI09 出土遺物

2 土坑 (SK)



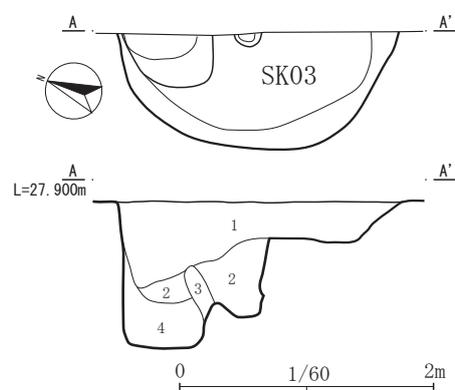
SK01

1層 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロック中量。
2層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロック多量。
3層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ2～10mm 極多量。

SK02

1層 10YR 2/1 黒色土 ロームブロックφ2～10mm 少量。しまり・粘性あり。
2層 10YR 4/4 褐色土 ロームブロックφ2～30mm 極多量。しまり・粘性あり。

第 25 図 SK01・02



SK03

1層 10YR 2/1 黒色土 ロームブロックφ2～30mm 少量。しまり・粘性あり。
2層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ2～30mm 多量。しまり・粘性あり。
3層 10YR 4/4 褐色土 ロームブロック。
4層 10YR 2/1 黒色土 ロームブロックφ2～10mm 極微量。しまり・粘性あり。

第 26 図 SK03

SK01 (第 25 図、図版 9)

本土坑は A-35 グリッドにおいて検出されている。平面形は円形を呈するが、断面の形状は階段状を呈す。長軸 62.3 cm、短軸 58 cm、確認面からの深さは 49 cm を測る。覆土は自然堆積を示し 3 層に分層される。

遺物は検出されていない。

SK02 (第 25 図、図版 9)

本土坑は A-35 グリッドにおいて検出されている。平面形は円形を呈するが、断面の形状は U 字状を呈す。長軸 68 cm、短軸 64 cm、確認面からの深さは 58 cm を測る。覆土は自然堆積を示し、2 層に分層される。柱穴状を呈する土坑である。

遺物は検出されていない。

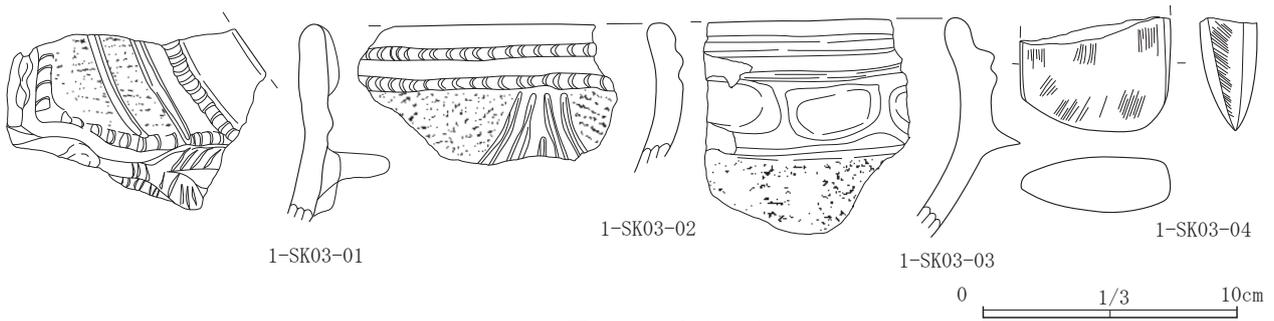
SK03 (第 26・27 図、図版 9・75)

本土坑は A・B-34・35 グリッドにおいて検出されている。平面形は円形を呈するものであろうが、東側は調査区外のため不明。断面の形状は北壁寄りおよび中央部にピットが存在し、掘り方は階段状になっている。東側壁際での長さは 2.34 m を測る。

遺物は少量ながら出土している。01 は大波状把手部分の破片である。三角形に尖る把手部分には隆帯が中心部分から垂下し、隆帯上には刻みを有する。三角形の区画内には角押列が沿い、内部には波条線が充填された後に、沈線が 2 条ひかかれている。阿玉台 III 式と判断される。02 は口縁部の破片である。平縁で口縁に平行して 2 列の角押文が描かれる。またその下位には単節縄文 LR が施文され、弧状の沈線が曲線を描くように描かれる。連弧文様式の加曾利 E II～III 式段階の資料と判断される。03 は口縁部の破片である。断面の三角形の低い隆帯によって窓枠状の区画帯が設けられる。胴部には単節 RL の縄文が施文される。加曾利 E II 式カ。04 は磨製石斧の刃部破片である。基部側は折損する。

断面形は側面がやや平坦になり、定角式を呈する。材質は緑色岩類である。

これらの遺物から判断して本遺構は加曾利 E II～III 式と想定される。

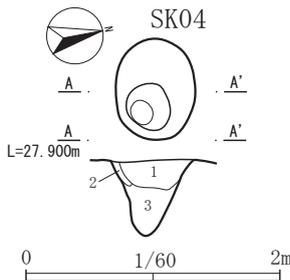


第 27 図 SK03 出土遺物

SK04 (第 28・29 図、図版 9・75)

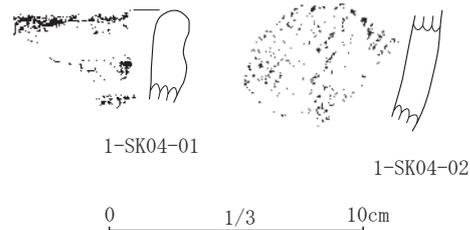
本土坑は A-32・33 グリッドにおいて検出されている。平面形はやや不正な円形を呈するが、断面の形状は U 字を呈す。長軸 81 cm、短軸 63 cm、確認面からの深さは 59.3 cm を測る。覆土は 3 層に分層され自然堆積を示している。遺物は覆土中から少量ながら出土している。

01 は丸棒状の口縁部の破片で口縁直下に緩やかな隆帯が巡る。無文である。加曾利 E III 式段階の口縁部破片であろう。02 は胴部の破片である。下半部の破片であろう。単節 RL の縄文が縦方向に回転施文される。やや蛇行する沈線が懸垂する。磨消懸垂文の末端部であろう。加曾利 E II～III 式。



第 28 図 SK04

SK04
 1層 10VR 2/1 黒色土 ロームブロック φ2
 ～10mm 微量。しまりあり。
 2層 10VR 3/1 黒褐色土 ロームブロック
 φ2～20mm 多量。しまりあり。
 3層 10VR 2/1 黒色土 ロームブロック微
 量。しまりあり。

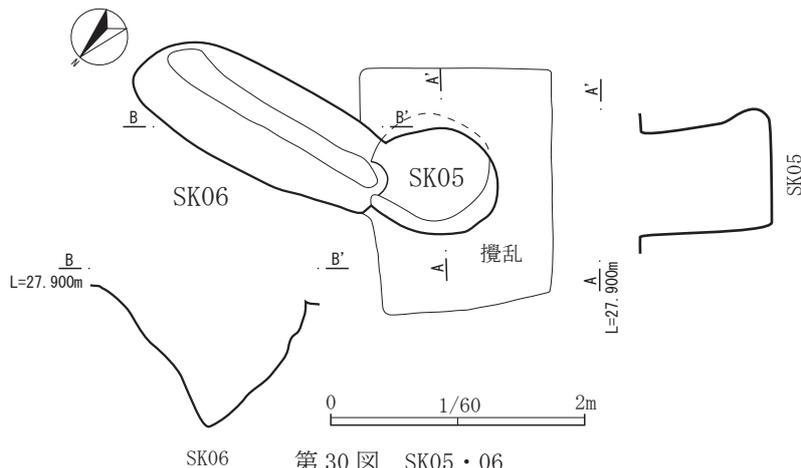


第 29 図 SK04 出土遺物

SK05 (第 30・31 図、図版 10・75)

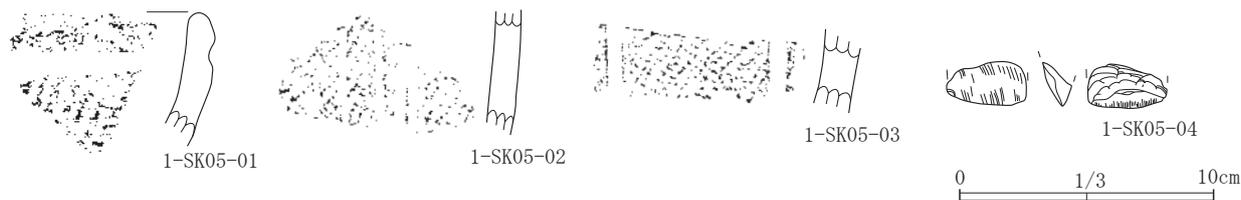
本土坑は A-32 グリッドにおいて検出されている。平面形はやや不正な円形を呈する。断面の形状は鍋底状を呈するが南西側は僅かに袋状となっている。長軸 1.05 m、短軸 0.92 m を測る。覆土は自然堆積を示している。

遺物は覆土中からまとまって出土している。01 は内湾する口縁部の破片である。口唇部直下には平行する太い沈線が巡り以下は単節 LR の縄文が施文される。加曾利 E III 式。02・03 は胴部の破片である。02 ではやや幅の狭い磨消懸垂文が施文される。地文は単節 LR。沈線は細く 3 本引かれて内 2 本の内部を磨消している。加曾利 E III 式



第 30 図 SK05・06

と判断される。03 は太い沈線による磨消懸垂文が施文され地文は単節 LR。磨消の幅は不明だが、01 に比べ懸垂文の沈線が太く鮮明であることからやや古くなる可能性がある。04 は磨製石斧の刃部の破片である。刃部再生の為に意識的に打ち欠かれた可能性がある。材質は緑色岩類である。



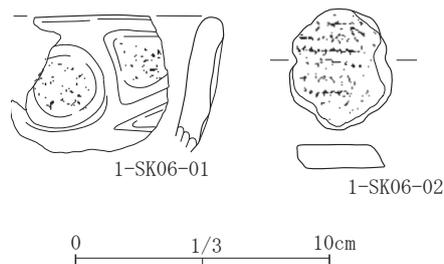
第 31 図 SK05 出土遺物

SK06 (第 30・32 図、図版 10・75)

本土坑は A-32 グリッドにおいて検出されている。SK05 と重複関係にあるが、新旧関係は不明。出土遺物から見ても時間差はない。

平面形は長楕円形、断面の形状は V 字状を呈する。所謂落とし穴の形状であるが、掘り込みも浅く、底部の形状も通有の落とし穴とは異なる。長軸 2.09 m、短軸 0.87 m、確認面からの深さは 117 cm を測る。

遺物は覆土中から僅かに出土している。01 は深鉢口縁部の破片である。太い隆帯によって円形や三角形の区画を設け内部に単節 RL の縄文を充填させている。加曾利 E III 式。02 は土器片錘である。磨消懸垂文の胴部破片を用いるもので、重量は 10.5g。



第 32 図 SK06 出土遺物

SK07 (第 33 図、図版 10)

本土坑は B-30 グリッドにおいて検出されている。平面形は円形を呈するものであろう。北側が調査区域外になる。また、南側で SK08 と重複するが、本遺構のほうが新しい。断面の形状は鍋底状を呈す。壁際の長さは 99.4 cm、確認面からの深さは 39 cm を測る。

遺物は検出されていない。

SK08 (第 33 図、図版 10)

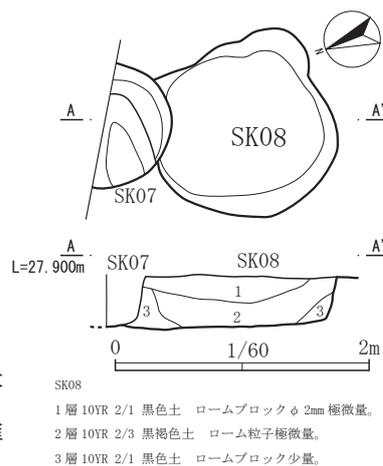
本土坑は A-30 グリッドにおいて検出されている。平面形はやや不正な円形を呈するが、断面の形状は鍋底状を呈す。長軸 1.52 m、短軸 1.36 m、確認面からの深さは 39 cm を測り、重複する SK07 と同じである。覆土は自然堆積を示し 3 層に分層される。SK07 によって北側を切られており、本遺構の方が古い。

遺物は検出されていない。

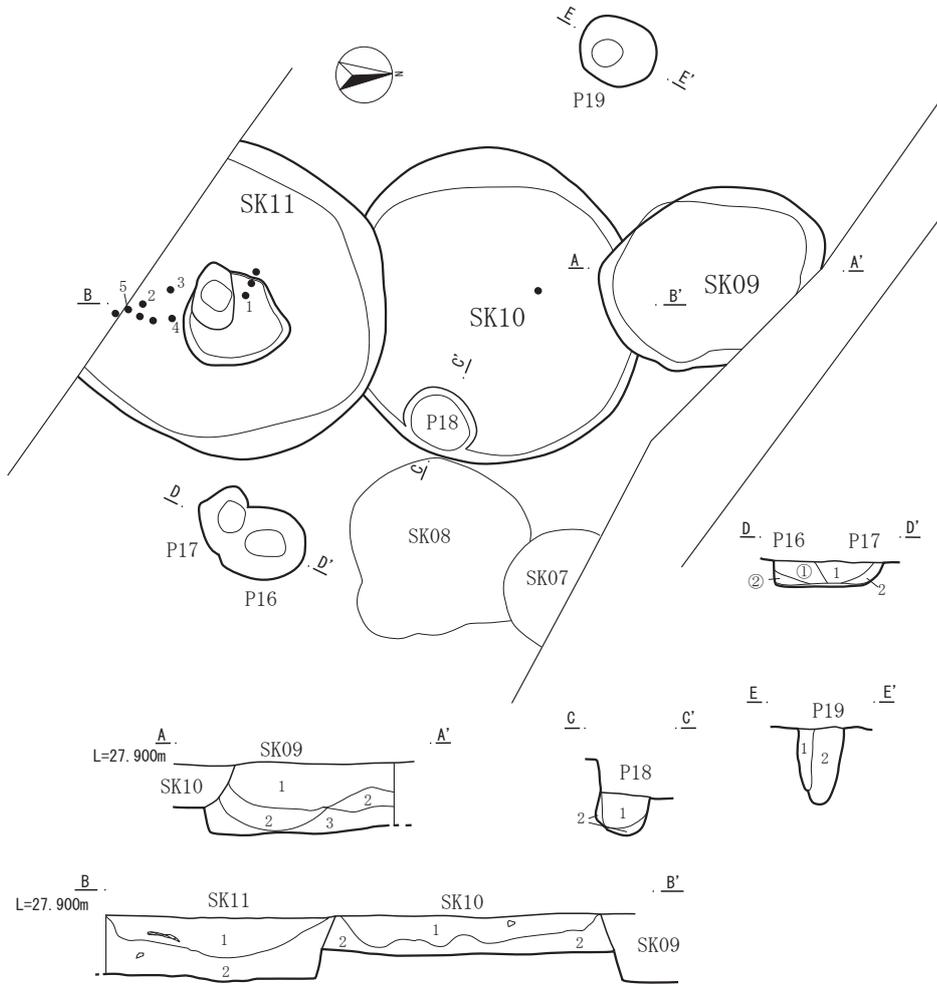
SK09 (第 34・35 図、図版 10・75)

土坑は A・B-29・30 グリッドにおいて検出されている。平面形はやや不正な楕円形を呈するが、断面の形状は鍋底状を呈す。長軸 1.82 m、短軸 1.26 m、確認面からの深さは 55 cm を測る。覆土は 3 層に分層され、自然堆積を示している。

遺物は 4 点掲載しているがいずれも土器片錘である。01・02 は磨消懸垂文の胴部破片、03・04 は無文部の破片を用いている。重量は 01 が 18.1g、02 が 8.8g、03 が 13.9g、04 が 6.2g を計る。加曾利 E III 式の破片を用いているようである。



第 33 図 SK07・08



SK09

- 1層 10YR 2/1 黒色土 ロームブロックφ2～20mm少量、炭化物粒子極微量。しまり・粘性あり。
- 2層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ2～30mm極多量。
- 3層 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロック中量。

SK10

- 1層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ2～10mm少量、焼土ブロックφ2～20mm極微量、炭化物ブロックφ2～10mm極微量。しまり・粘性あり。
- 2層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ2～20mm中量、焼土ブロック2mm極微量。しまり・粘性あり。

SK11

- 1層 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロックφ2～10mm少量、焼土ブロック微量、炭化物ブロック微量。しまり・粘性あり。
- 2層 10YR 2/3 極暗褐色土 ロームブロック中量、焼土ブロック極微量、炭化物ブロック極微量。しまり・粘性あり。

第34図 SK09・10・11

0 1/60 2m

P16

- ①層 10YR 2/1 黒色土 ロームブロック中量。
- ②層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロック少量。

P17

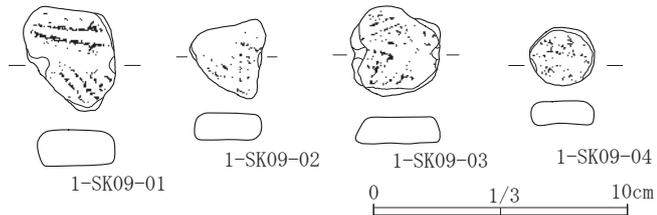
- 1層 10YR 2/1 黒色土 ロームブロックφ2mm極微量。
- 2層 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロックφ2～10mm中量。

P18

- 1層 7.5YR 2/1 黒色土 ロームブロックφ2mm微量。
- 2層 7.5YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ2～10mm中量。

P19

- 1層 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロックφ2～10mm微量。焼土ブロックφ2～5mm極微量。
- 2層 10YR 2/3 極暗褐色土 ロームブロックφ2～10mm少量。



第35図 SK09 出土遺物

SK10(第34・36図、図版11・75)

本土坑はA-30グリッドにおいて検出されている。平面形は円形を呈し、断面の形状は鍋底状を呈す。床面は平坦で、底部はほぼ円形を呈する。SK09・11によって切られる。東西軸は2.48m、確認面からの深さは29cmを測る。覆土は2層に分層され自然堆積である。

土坑内には少量の縄文土器が出土している。

01は眼鏡状の把手部分の破片である。隆帯上には単節RLの縄文が施文される。隆帯により区画される楕円形区画の内部には平行短沈線が描かれるようである。阿玉台IV式土器である。02は断面三角形の隆帯による逆U字形の文様の交点付近の破片である。隆帯に沿って角押文が1列配される。他は無文である。阿玉台I b式である。03は屈曲する口縁部の細片である。口縁部にまで単節縄文が施文され口唇直下には隆帯により区画帯が設けられる。

阿玉台IV式段階と判断される。04 は内湾してキャリパー形になる深鉢の口縁部破片である。貼り付けによる隆線により枠状の区画が設けられている。枠内には単節 LR の縄文が施文される。加曾利 E I 式新段階であろう。

これらの遺物から判断して本遺構の所属時期は阿玉台末から加曾利 E 式初頭段階の時期が想定される。



第 36 図 SK10 出土遺物

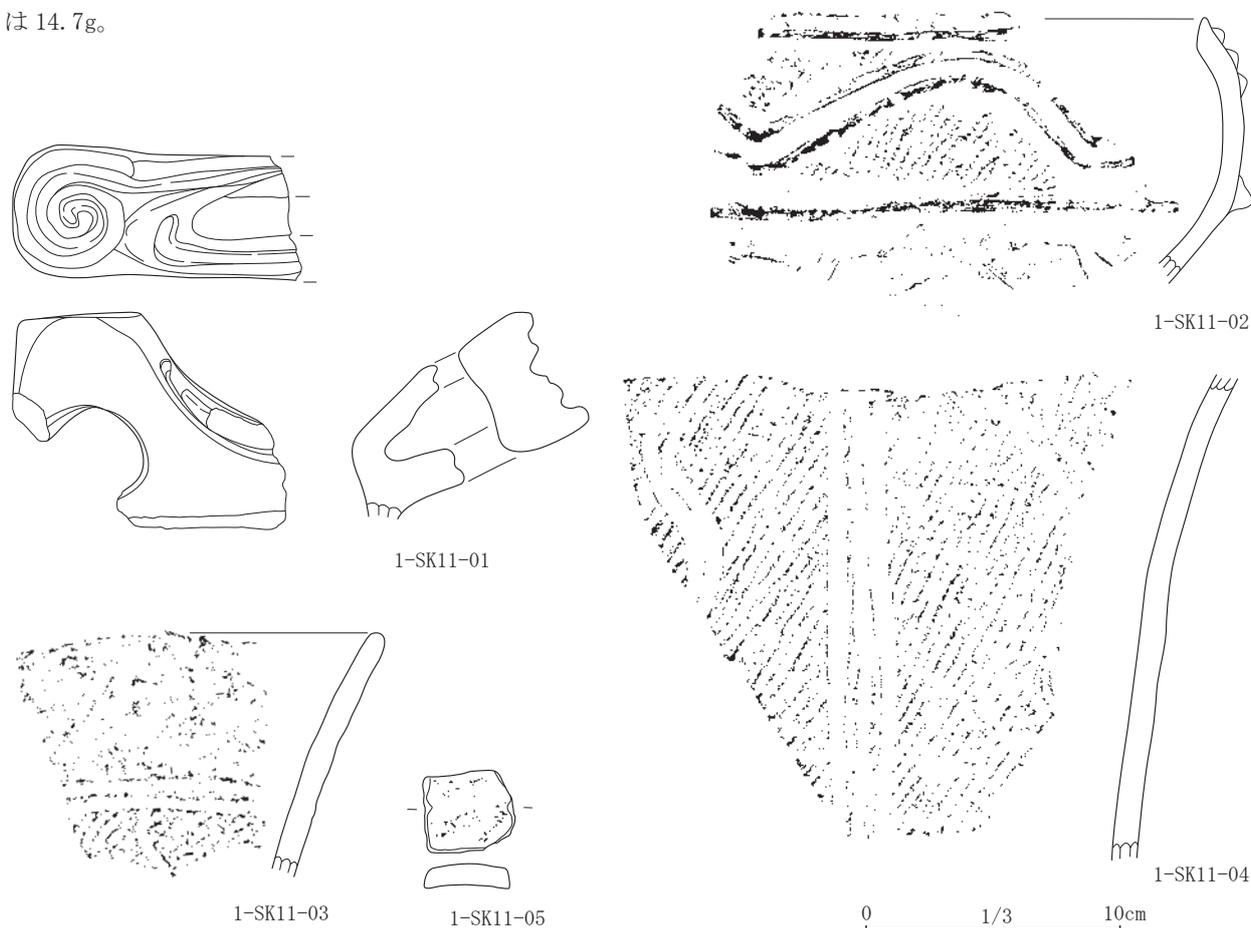
SK11 (第 34・37 図、図版 11・75)

本土坑は A-30 グリッドにおいて検出されている。平面形はやや不正な円形を呈するが、断面の形状は鍋底状を呈する。床面は平坦で、底部は楕円形を呈する。短軸は 2.32 m、確認面下の深さは 52 cm を測る。SK10 を切っている。

覆土は 2 層に分層され、自然堆積である。

遺物は土坑の中央部床面を中心に集中して出土している。01 は把手部分の破片である。上端が平坦になり渦巻が描かれる。側面には孔が穿たれ盲孔が横方向に貫通する。加曾利 E I 式段階であろう。02 は大きく内湾するキャリパー形土器の口縁部資料である。口縁部文様帯には隆線の貼り付けによる横帯の区画を設け内部に二重隆線による波状文様が描かれる。地文は単節 LR の縄文。頸部は無文帯となる。加曾利 E I 式古段階と判断される。03 は直線的に開く口縁部の破片である。バケツ状の器形であろう。口縁部は幅広の無文帯となり胴部との境に沈線が 2 条巡る。胴部には蛇行沈線が垂下する。地文は単節 LR カ。04 は胴部下半の資料である。単節 RL の縄文を縦方向に施文した後、3 本の沈線による懸垂文および 2 本を 1 単位とする沈線による蛇行懸垂文が垂下する。加曾利 I 式であろう。

遺物から判断して本遺構は加曾利 E I 式の所産と判断される。05 は胴部破片を利用する土器片錘である。重量は 14.7g。



第 37 図 SK11 出土遺物

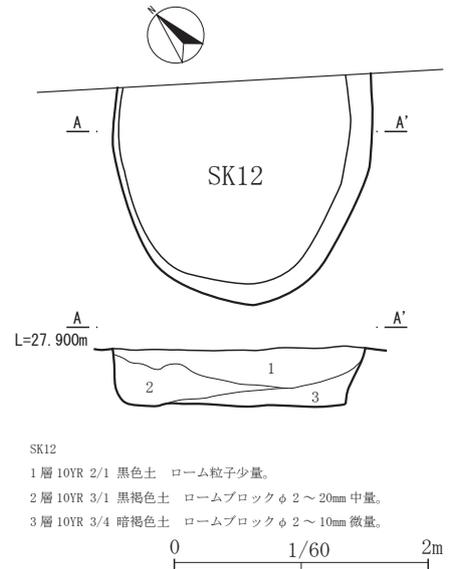
SK12 (第 38・39 図、図版 11・76)

本土坑は A・B-28 グリッドにおいて検出されている。平面形は楕円形を呈するものと思われるが、北東側が調査区域外になり不明である。断面の形状は鍋底状を呈す。横軸で 2.05 m、確認面からの深さは 44 cm を測る。覆土は 3 層に分層され自然堆積を示している。

遺物は比較的まとまった資料が得られている。01 は内湾気味に立つ口縁部の破片である。口縁直下に太い沈線により円形の区画が設けられ内部に無節 R の縄文が充填される加曽利 E III 式。

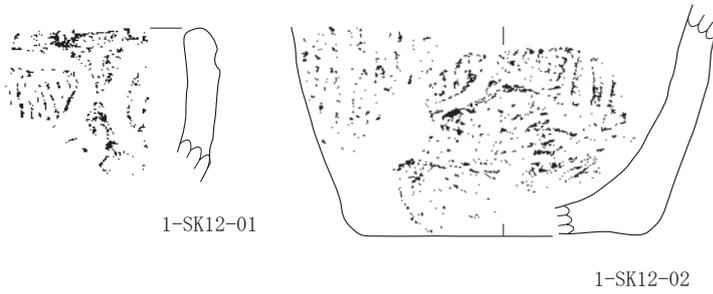
02 は胴部下半より底部に掛かる破片である。下端部分では無文となっているが、下端付近にまで単節 LR の縄文が施文された後、縦方向の太い磨消懸垂文が施文されている。加曽利 E III 式カ。

03 は口縁部直下の内湾する深鉢の破片である。貼り付けの隆帯により渦巻文が描かれる。加曽利 E III 式カ。

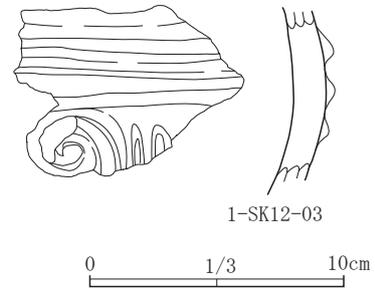


SK12
1層 10YR 2/1 黒色土 ローム粒子少量。
2層 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロックφ2~20mm 中量。
3層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ2~10mm 微量。

第 38 図 SK12

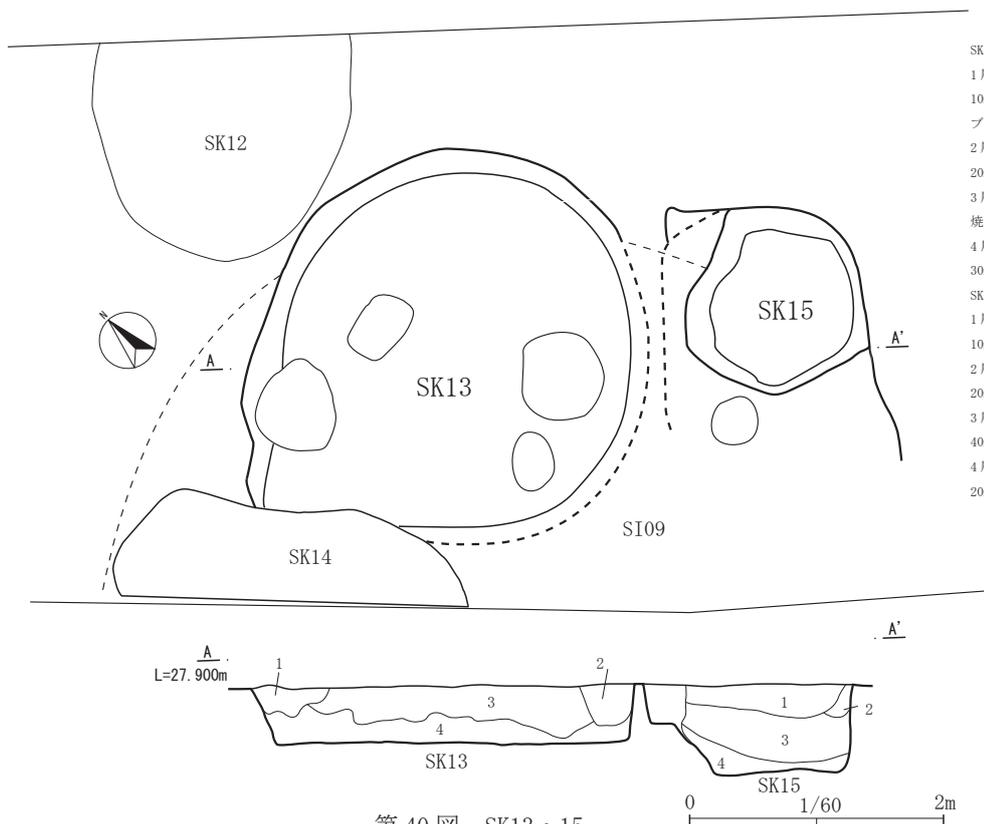


第 39 図 SK12 出土遺物



SK13 (第 40・41 図、図版 11・76)

本土坑は A - 28・29 グリッドにおいて検出されている。平面形はやや不正な円形を呈するが、断面の形状は鍋底状を呈す。長軸 3.6 m、短軸 3.14 m、確認面からの深さは 47 cm を測る。覆土は 4 層に分層され、自然堆積を示し

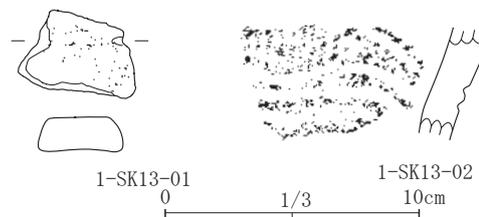


SK13
1層 10YR 1.7/1 黒色土 ロームブロックφ2~10mm 微量、焼土ブロックφ2~10少量、炭化物ブロックφ2~10mm少量、粘性なし。
2層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ2~20mm少量、焼土ブロック極微量。しまりなし。
3層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロック中量、焼土ブロック極微量。しまりなし。
4層 10YR 4/4 褐色土 ロームブロックφ2~30mm極多量。しまりなし。
SK15
1層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ2~10mm極微量、焼土ブロック極微量。
2層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ2~20mm多量。
3層 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロックφ2~40mm中量、焼土ブロック極微量。
4層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ2~20mm少量。

第 40 図 SK13・15

ている。

01 は粗雑な作りの土器片錘である。重量は 19.6g を計る。阿玉台式土器の破片を用いている。02 は口縁部直下より頸部のキャリパー形土器の破片であろう。二重隆線により区画が施され、地文には縦方向の撚糸文が施文される。加曾利 E I 式古段階カ。



第 41 図 SK13 出土遺物

SK14 (SK24) (第 23 図、図版 12)

本土坑は A-28 グリッドにおいて検出されている。SI09 および SK13 と重複関係にあり、住居よりも新しい。平面形は南西側が調査区域外となり不明、断面の形状は鍋底状を呈す。壁際の最大幅は 2.59 m、確認面からの深さは 52 cm を測る。覆土は 4 層に分層され自然堆積を示している。尚、SK24 と同一遺構であるため SK24 は欠番とした。遺物は少量検出されているが掲載資料はない。

SK15 (第 40・42 図、図版 12・76)

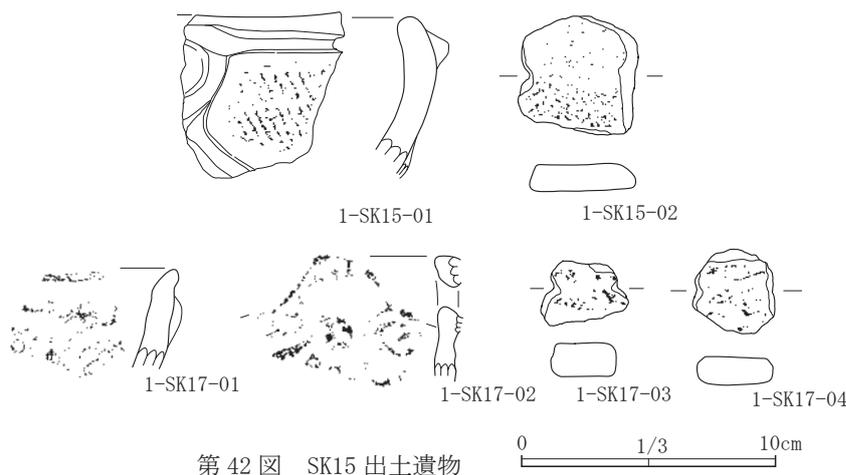
土坑は A-29 グリッドにおいて検出されている。SI09 と重複関係にあり、本遺構が新しい。平面形はやや不正な円形を呈するが、断面の形状は鍋底状を呈す。長軸 2.37 m、短軸 2.14 m、確認面からの深さは 44 cm を測る。覆土は 4 層に分層され自然堆積を示している。

尚、調査段階でのナンバーリングミスか、SK17 と重複した可能性があるため、双方の遺物をまとめて掲載した。

遺物は少量で、01 は口縁部の破片である。隆帯により円形および長方形の区画を設け内部に単節 RL の縄文を施文している加曾利 E III 式。02 は土器片錘である。磨消懸垂文の胴部片を用いている。施文される縄文は LRL の複節の可能性もある。加曾利 E III 式であろう。重量は 29.9g を計る。

SK17-01 はやや直線的に開く口縁部の破片である。隆帯による区画帯が設けられ内部には単節縄文が施文される。加曾利 E II～III 式カ。02 は波状口縁の波頂部の資料である。頂部から橋状の小把手が付されていたものであろうが、剥落して欠損している。把手の裏側には盲孔が施され、これを挟み込むように沈線による渦巻文様が描かれる。薄手の土器で胎土も他の土器とは異なり精緻である。大木 8 b 式カ。

03・04 は土器片錘である。無文の胴部破片を用いている小形で粗雑な作りである。03 の重量は 10.6g、04 の重量は 11.5g を計る。



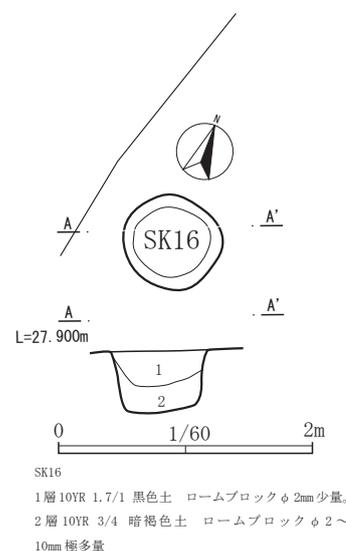
第 42 図 SK15 出土遺物

SK16 (第 43 図、図版 12)

本土坑は A-24 グリッドにおいて検出されている。平面形は円形を呈し、断面の形状は鍋底状を呈す。長軸 55 cm、短軸 49 cm、確認面からの深さは 32 cm を測る。覆土は 2 層に分層され自然堆積を示している。

遺物は検出されていない。

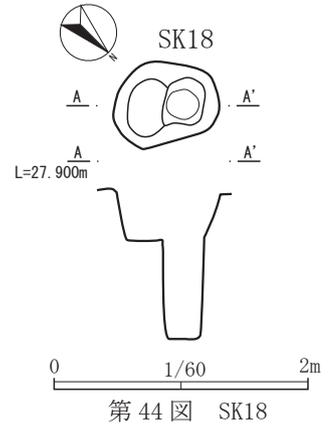
SK17 欠番である。



第 43 図 SK16

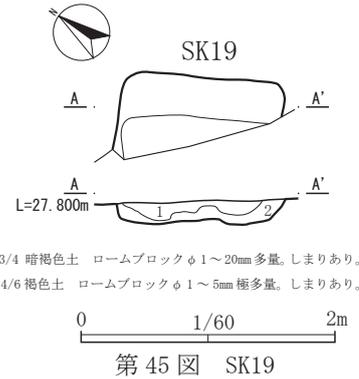
SK18 (第 44 図、図版 12)

本土坑は A-33 グリッドにおいて検出されている。平面形はやや不正な円形を呈するが、断面の形状は 2 段の掘込みとなっており 2 基のピットの重複の可能性もある。長軸 85.9 cm、短軸 65.2 cm、確認面からの深さは南側で 44 cm、北側で 118cm を測る。遺物は少量検出されているが掲載資料はない。



SK19 (第 45 図、図版 12)

本土坑は B-10 グリッドにおいて検出されている。平面形は方形を呈し、断面の形状はやや凹凸のある皿状を呈す。長軸 1.28 m、短軸は不明、確認面からの深さは 19cm を測る。遺物は少量検出されているが掲載資料はない。

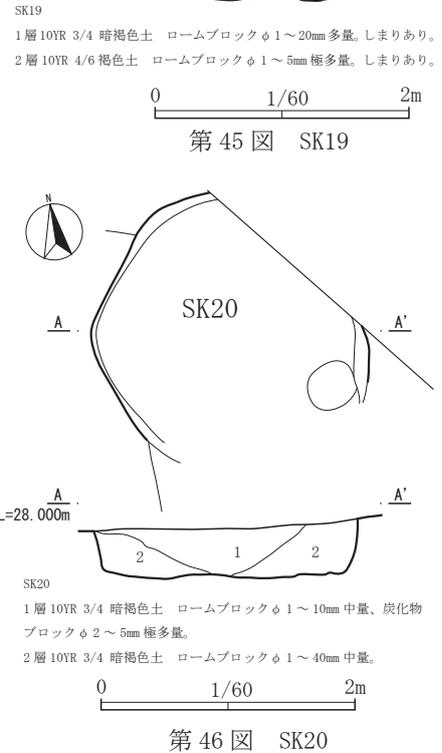


SK20 (第 46・47 図、図版 12・76)

本土坑は B-22 グリッドにおいて検出されている。平面形はやや不正な円形を呈するが、断面の形状は鍋底状を呈す。長軸不明、短軸 2.18 m、確認面からの深さは 40 cm を測る。覆土は 2 層に分層され、自然堆積を示す。

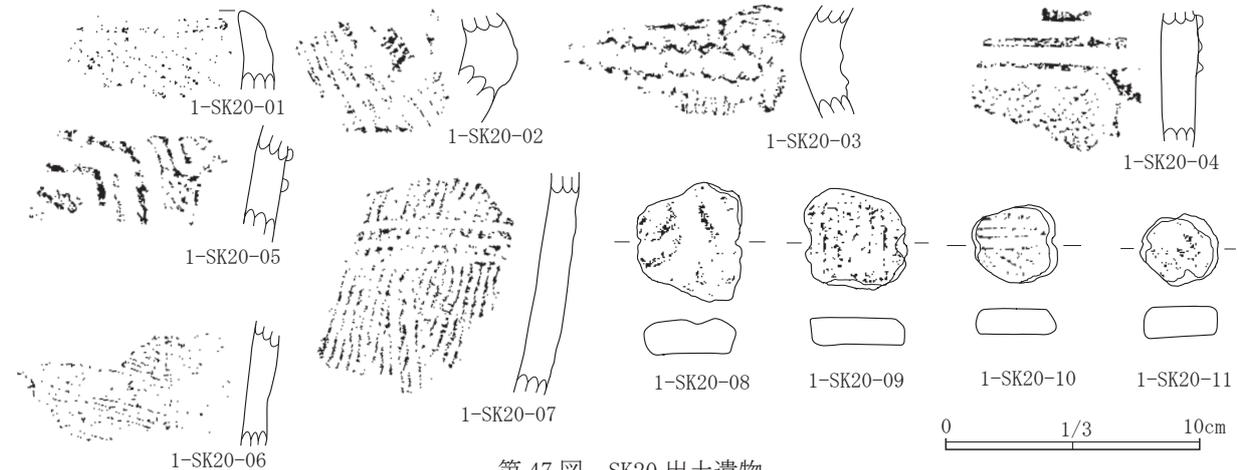
遺物は覆土中からまとまって出土している。

01 は内屈する口縁部の破片である。口唇直下に無文部を有した後、胴部にかけて単節 RL の縄文が施文される。加曽利 E III 式カ。02 は太い沈線が斜方向に施文される屈曲部の破片である。03 は屈曲部分に連続刺突を施すもので、胴下半には撚糸文が施文されている。加曽利 E III 式平行の連弧文様式土器の可能性ある。04・05 は同一個体であろう。深鉢口縁部文様帯部分の破片である。太い隆帯およびそれに沿った沈線によって区画が行われ、内部に RL の単節縄文が縦方向に施文される。06 は平行沈線による肋骨文様が描かれる。地文は無い。胎土中に繊維の混入は見られず、前期浮島 I 式の可能性がある。形式不明。07 は胴部の破片である。0 段多条の RL がやや 45° 方向に施文され縦方向の節となる。沈線 3 本が横位に描かれ 2 本の沈線が垂下する。連弧文様式の土器の可能性ある。加曽利 E III 式カ。08 ~ 11 は土器片錘である。08 では口縁部の渦巻部分の破片、09 では縄文施文の胴部、10 では磨消懸垂文部分の胴部片、11 では無文部分の破片が用いられている。全体に周縁の整形は丁寧に行われている。重量は 08 が 25.4g、09 は 20.8g、10 は 10.9g、11 は 9.7g を計る。



SK19
1層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~20mm 多量。しまりあり。
2層 10YR 4/6 褐色土 ロームブロックφ1~5mm 極多量。しまりあり。

SK20
1層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~10mm 中量、炭化物ブロックφ2~5mm 極多量。
2層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~40mm 中量。

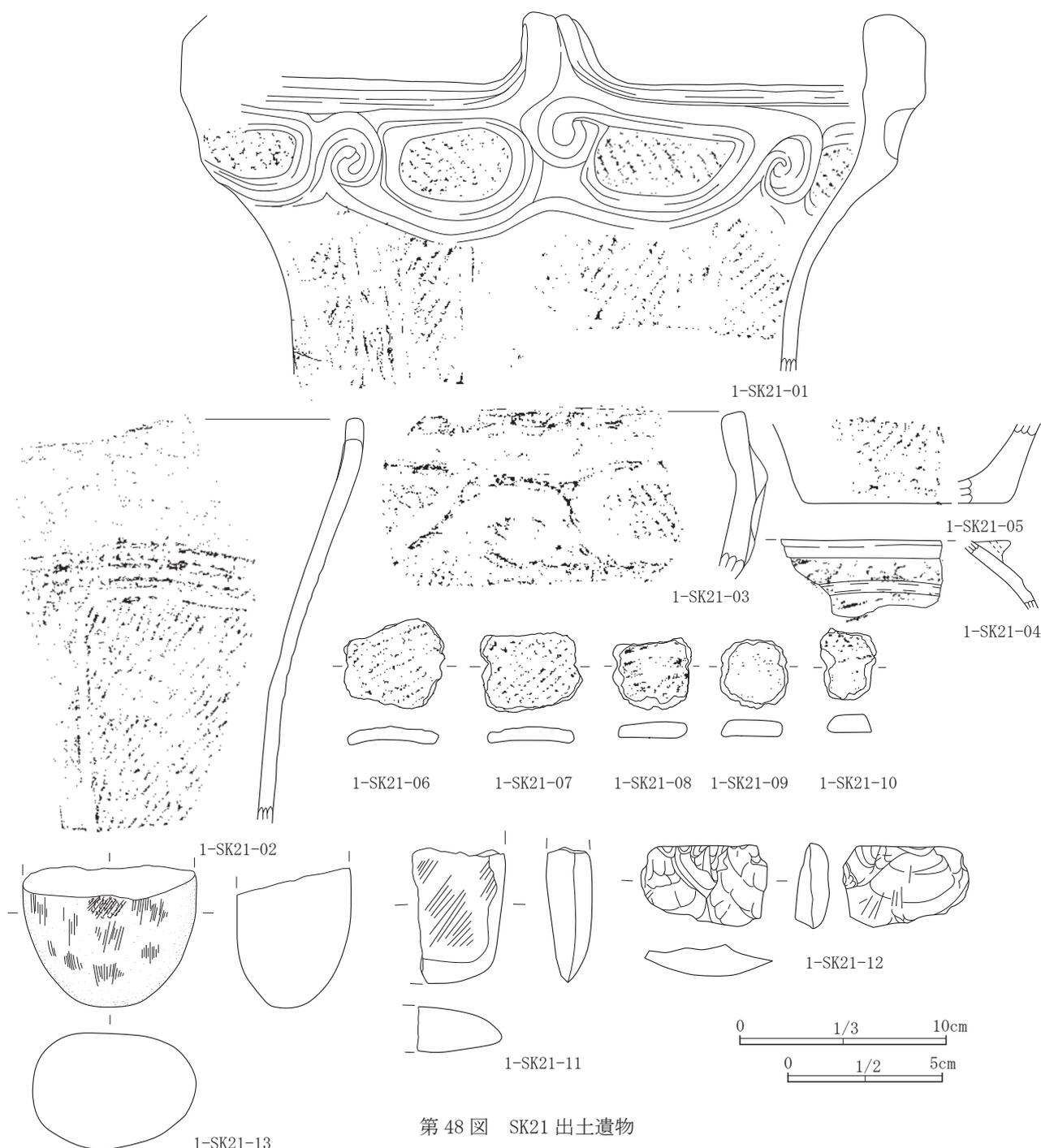


SK21 (第 20・48 図、図版 13・76)

本土坑は B-8 グリッドにおいて検出されている。SI07 と重複関係にあり、本土坑が SI07 を切っている。平面形はやや不正な円形を、底部は隅丸多角形を呈す。断面の形状は鍋底状。長軸 2.34 m、短軸 2.12 m、確認面からの深さは 47 cm を測る。覆土は 2 層に分けられ自然堆積を示している。

遺物は比較的まとまって出土している。

01 は深鉢形土器の上半部資料である。胴部下半～底部にかけては欠損する。4 単位の突起が付され口縁部文様帯は太い隆帯とそれに沿う沈線により楕円形区画を設ける。渦巻は退化している。胴部および楕円形区画内には単節 RL の単節縄文が充填される。胴部には沈線によるやや幅の狭い磨消懸垂文が垂下する。加曾利 E III 式古段階。02 は波状を呈する深鉢でバケツ形を呈するものである。口唇直下に幅広の無文帯を有する。胴部との境部分には円形押捺文が 2 列施文され以下は沈線が方形の区画を作り磨消懸垂文を構成する。地文は単節 LR の縄文。所謂連弧文様式の土器で、加曾利 E III 式平行と判断される。03 はやや内傾する口縁部の破片である。口縁部直下はやや幅広の無文帯となり、以下隆帯により渦巻が描かれ、渦巻から連結する横帯の区画が設けられる。区画内には単節 RL



第 48 図 SK21 出土遺物

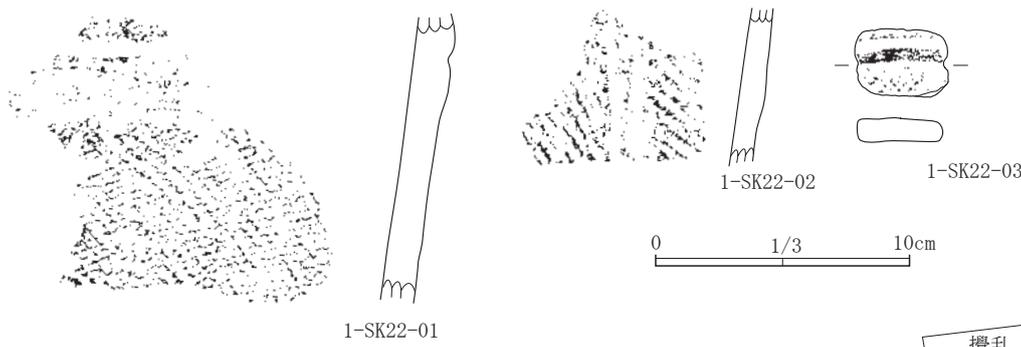
の縄文が施文される。加曽利 E III 式古段階。04 は内傾する薄手の胴部破片。上端部には鏝状の凸帯が巡る。胴部地文は無文で弧状の沈線が描かれる。鏝部分に孔は確認できないが有孔鏝付土器と判断した。赤彩は認められない。曾利式の影響下の遺物と判断される。05 は底部の資料である。下端付近まで単節 LR の縄文を地文に、磨消懸垂文が施文される。他の資料から想定して加曽利 E III 式段階と判断される。06 ~ 10 は土器片錘である。06・07 では縄文施文の胴部、08 では平行沈線、09 では擦痕、10 では磨消懸垂文の破片がそれぞれ用いられる。重量は 06 が 19.3g、07 は 18.6g、08 は 14.2g、09 は 11.0g、10 は 11.6g を計る。

11 は磨製石斧の刃部片である。やや扁平な作りで断面形は楕円形となる。研磨は全体に粗い。素材は緑色岩類である。12 はチャートの剥片である。横長の剥片で二次的な加工は観察されない。13 は磨石・凹石である。全面に粗く擦痕が観察され、中心付近から折損している。中央部折損部分付近に僅かな凹が観察される。素材は凝灰岩である。

SK22 (第 49 図、図版 13・77)

本土坑は調査段階で重複した番号を付した可能性があり、平面図、断面図ともに不明。遺物のみが取り上げられている。

01 は深鉢胴上半、頸部に掛かる破片である。頸部は無文で、沈線が 1 条巡る。胴部は単節 RL の縄文が密に施文される。加曽利 E II 式カ。02 は胴部中位から下半の破片。やや幅の狭い磨消懸垂文が施文される。地文は単節 LR を縦方向に施文している。加曽利 E II 式カ。03 は土器片錘である。口縁部直下の隆帯部分を用いている。重量は 11.3g。

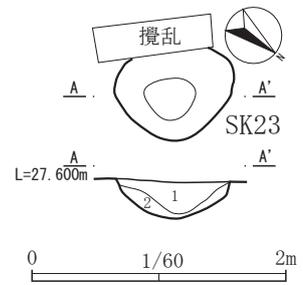


第 49 図 SK22 出土遺物

SK23 (第 50 図、図版 13)

本土坑は B-5 グリッドにおいて検出されている。平面形はやや不正な円形を呈するが、断面の形状は浅いすり鉢状を呈す。長軸 97.5 cm、短軸不明、確認面からの深さは 27 cm を測る。覆土は 2 層に分層され自然堆積を示している。

遺物は少量検出されているが掲載資料はない。



SK23
1層 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~3mm 極多量。
2層 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~10mm 多量。

SK24 本土坑は SK14 と同一土坑として処理した。したがって欠番である。

SK25 (第 51 ~ 53 図、図版 13・14・77)

第 50 図 SK23

本土坑は A-21 グリッドにおいて検出されている。平面形はやや不正な円形を呈するが、断面の形状は僅かながら袋状を呈す。上端部の長軸は 2.32 m、短軸 1.94 m、確認面からの深さは 60 cm を測る。覆土は自然堆積で 4 層に分層される。

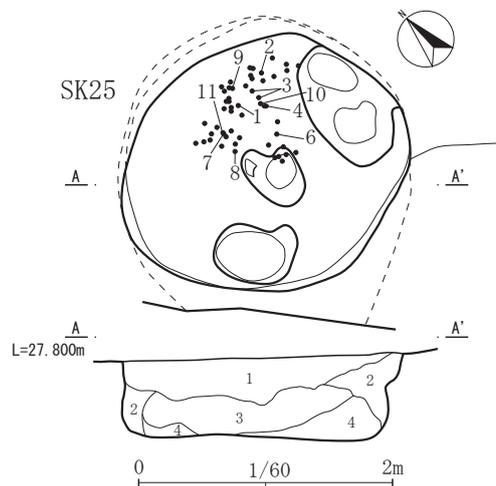
遺物は比較的まとまった出土が見られた。

01 は内湾する口縁の深鉢形土器上半部の資料である。渦巻を起点に方形、楕円形の区画を低い隆帯で描く。区画の内部および胴部には単節 RL の縄文が施文されている。胴部には 3 条 1 単位の沈線による懸垂文が垂下する。加曽利 E III 式古段階。02 は 01 同様の遺物でやや小ぶりになる。胴部の懸垂文は 2 条の沈線によるもので方形の区画を形成している。加曽利 E III 式古段階である。03 は口縁直下で緩やかに内湾する深鉢口縁～胴部上半の破片である。口縁部直下には沈線と交互刺突文が横走り、胴部には単節 RL の縄文が施文される。胴部上半には 4 条の沈線による連弧文が描かれる。連弧文よりも下位の胴部は無文となる。加曽利 E III 式古段階平行の連弧文様式の土器

である。04は口縁直下で緩やかに内湾する深鉢口縁～胴部上半の破片である。地文には粗い単節LRが施文される。05は03同様の連弧文様式土器であるが、口縁部の刺突列は巡らない。胴部の弧線下位にまで複節の可能性のある縄文が全体に施文される。下端の胴部屈曲部分に沈線が巡る。沈線部分からの破損で本数は不明。

06は有孔鏝付土器の口縁～鏝部分の資料である。破片であるために孔の数は確認することは出来ないが、間隔は広い可能性が高い。加曽利EⅢ式平行で曾利式の影響を感じさせる。

07～12は土器片錘である。重量は07は43.6g、08は34.7g、09は33.2g、10は20.9g、11は22.4g、12は19.8gを計る。



第51図 SK25

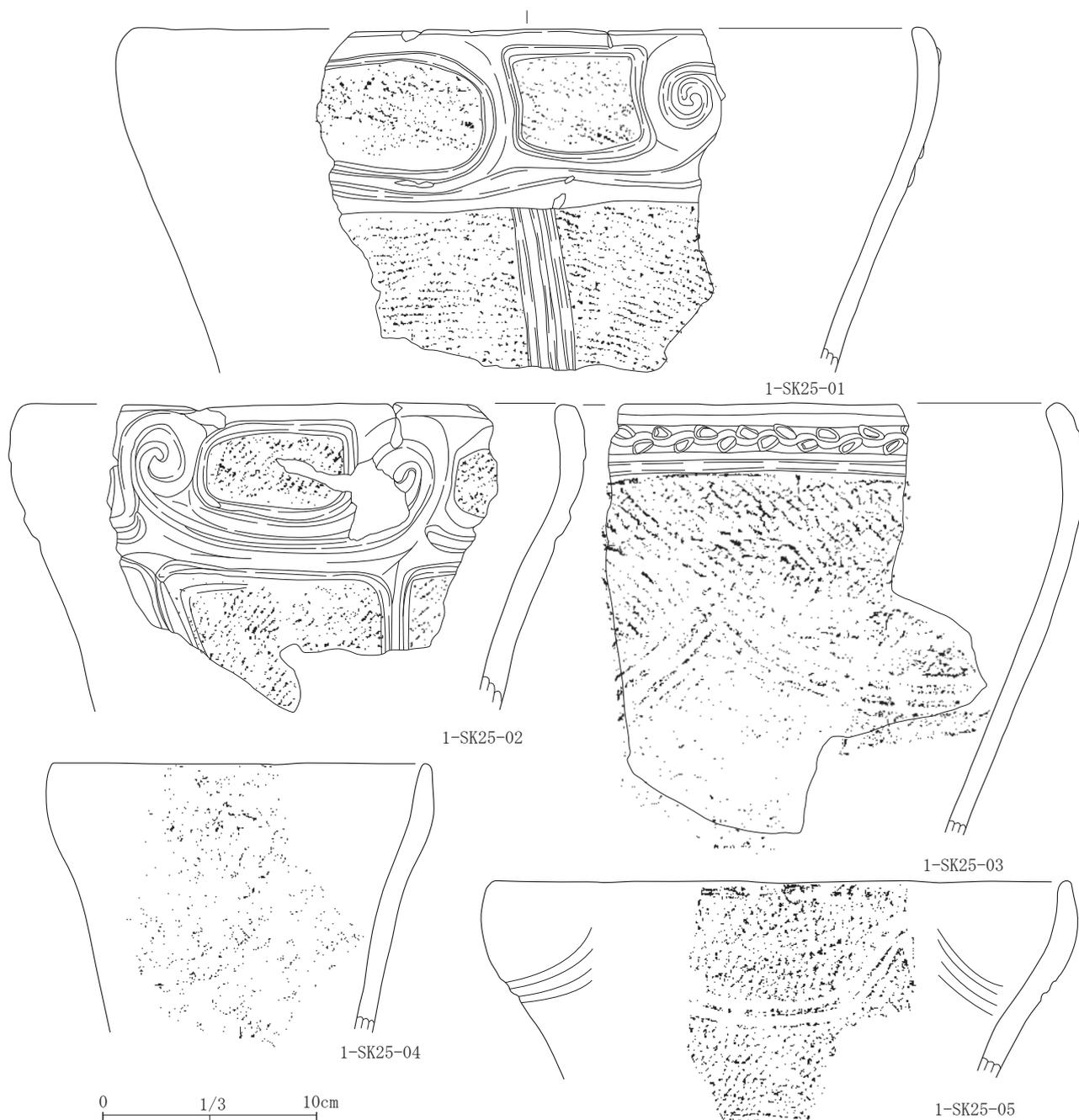
SK25

1層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ2～5mm 極微量、焼土ブロック極微量。しまり・粘性あり。

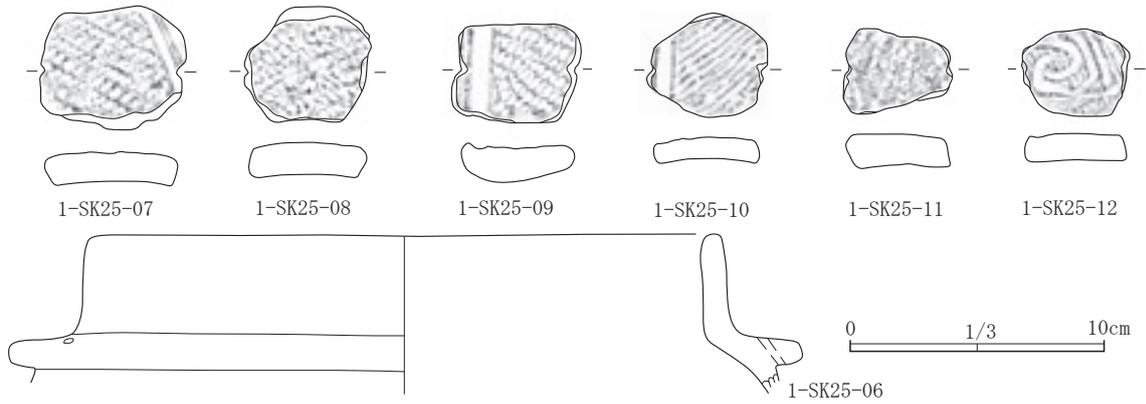
2層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ2～5mm 少量、焼土ブロック微量。

3層 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロックφ2～20mm 少量。しまりあり。

4層 10YR 2/1 黒色土 ロームブロックφ2～10mm 微量。しまり・粘性あり。



第52図 SK25出土遺物(1)



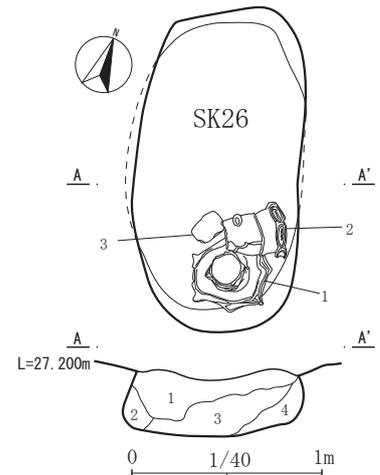
第53図 SK25 出土遺物 (2)

SK26 (第54・56図、図版14・78・79)

本土坑はA・B-7・8 グリッドにおいて検出されている。平面形は南北に長い隅丸方形を呈するが、断面の形状は袋状を呈する土坑である。SI07と重複するが遺物の組成から判断して本遺構のほうが新しいものと判断される。長軸2.58m、短軸1.37mを計る。確認面下の掘り込みの深さは49cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。

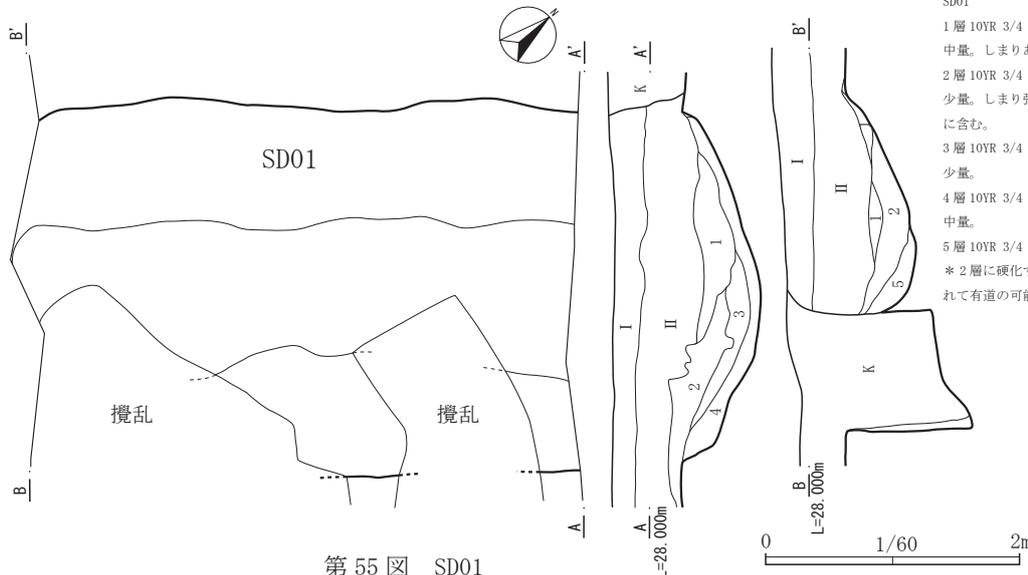
遺物は土坑南側底部付近より3個体まとまって出土している。

01は4単位の大波状を呈する深鉢である。底部は欠損している。突起部は口縁部文様帯から連携する隆帯状の区画で三角形を構成し、頂部直下に円形の隆帯が貼り付けられる。隆帯上には単節RLの縄文が施文される。三角形の窓枠状区画の内部はRLの縄文が充填される。頸部は無文。胴下半との境部分には爪状の刺突列が隆帯に沿って施文され、隆帯は蛇行して垂下する。隆帯上には単節RLの縄文が施文される。また胴部下半も全体に同じ縄文が縦方向の回転を意識して施文される。阿玉台IV式である。02は深鉢形土器の資料である。胴部は口縁部に向かいほぼ直線的に僅かながら開いて立つ。口縁部は平縁で、窓枠状の楕円形区画が隆帯によって設けられる。交差部分はX字状に連結され、連結部は橋状の把手となる。楕円の区画は破損の為明確ではないが5単位と想定される。頸部はRLの縄文が縦方向を意識して全面に施文される。胴部と頸部の境には隆帯が1条巡り、この隆帯から垂下する隆帯の端部は横S字状になる。隆帯上には単節RLの縄文が施文される。また、胴部も同様のRL縄文が全面に施文される。広義の中峠式としてとらえられる。03は浅鉢である。大形の浅鉢で無文。平縁である。口縁部には屈曲が見られ内外に段を有す。阿玉台IV式と判断される。



第54図 SK26

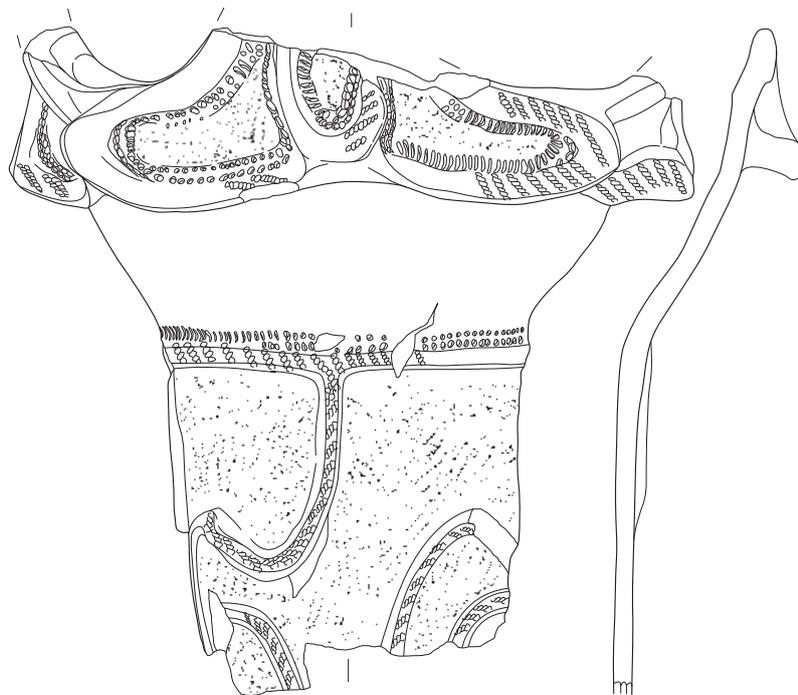
3 溝(SD)



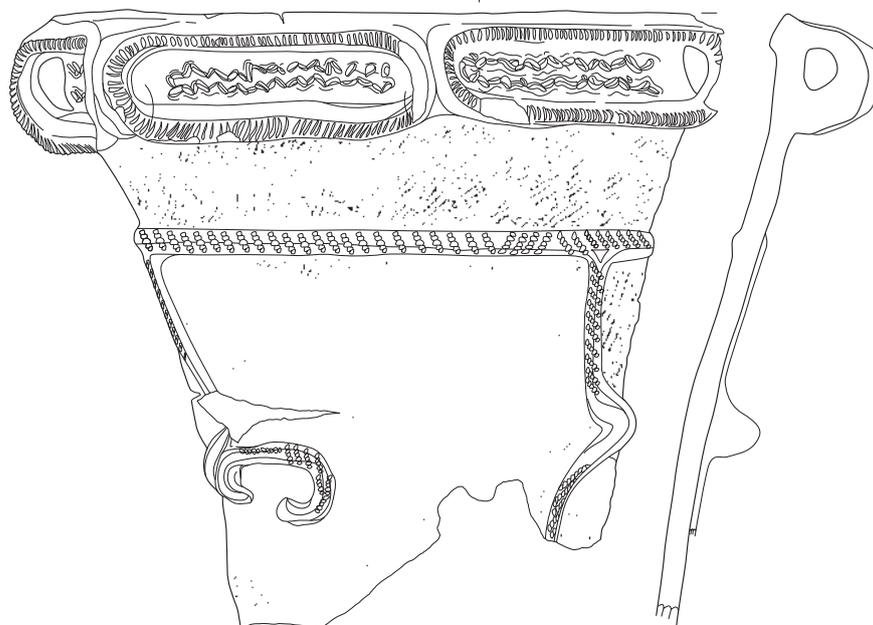
第55図 SD01

SD01

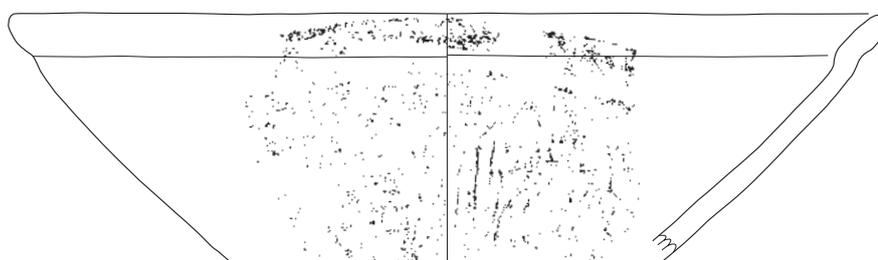
- 1層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~3mm 中量。しまりあり。
 - 2層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~2mm 少量。しまり強。φ3~5cmの黒褐色土層をラミナ状に含む。
 - 3層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~10mm 少量。
 - 4層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~5mm 中量。
 - 5層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~40mm
- * 2層に硬化する黒褐色土層のラミナ状堆積が確認されて有道の可能性もある。



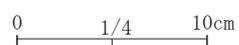
1-SK26-01



1-SK26-02



1-SK26-03



第56图 SK26 出土遺物

SD01 (第 55 図、図版 17)

調査区西端部、A・B-1・2 グリッドに位置する。東側部のほとんどが攪乱に破壊されており、東側壁面及び上端については一部遺存するのみである。主軸方向はN-32° -E となり、ほぼ南西から北東に走向する。規模は遺存部分で上端幅約 2.9 m、下端幅約 1.2 m、確認面からの深さは最大で 56cm を測る。断面形は概ね U 字状である。覆土は暗褐色土が主体であり、レンズ状堆積を呈し 5 層に分層された。底面はほぼ平坦である。第 2 層中に硬化する黒褐色土と暗褐色土が互層を成すラミナ状堆積が厚く確認されており、第 5 層堆積後に道として使用されていた可能性もある。

遺物は出土していない。

4 ピットおよび遺構外出土遺物 (第 57 図、第 2・3 表、図版 15～17・78)

本地区からは 26 基のピットが検出されている。これらのピットは掘り込みが深く住居跡の柱穴と判断されるものも多く、1 区全体に削平が進んでいることが伺える。P20～P24 は円形に配置されることから住居跡 (SI09) と判断した。

ピットは遺構の集中する地域に偏在する傾向があり、遺構とは離れて存在する一群では 1 区東側調査区の A-35 グリッド付近に集中する一群がある。

遺物が出土したピットの計測値および位置についてのみ、以下の第 2 表にまとめた。

第 2 表 1 区ピット計測表

遺構名	検出グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	出土遺物
P12	A-33	70	—	90	01
P31	B-24・25	52	50	20	01

遺構確認時にいずれの遺構に伴うものか判断出来なかった遺物並びに、ピット状の遺構から出土した遺物も遺構外出土遺物として取り扱った。

1-P12-01 は土器片錘である。阿玉台式土器の胴部破片を用いている。重量は 45.9g を計る。1-P31-01 は隆帯による口縁部文様帯が構成されるもので円形の区画を設ける。区画内には単節 RL の縄文が充填される。加曽利 E III 式古段階。

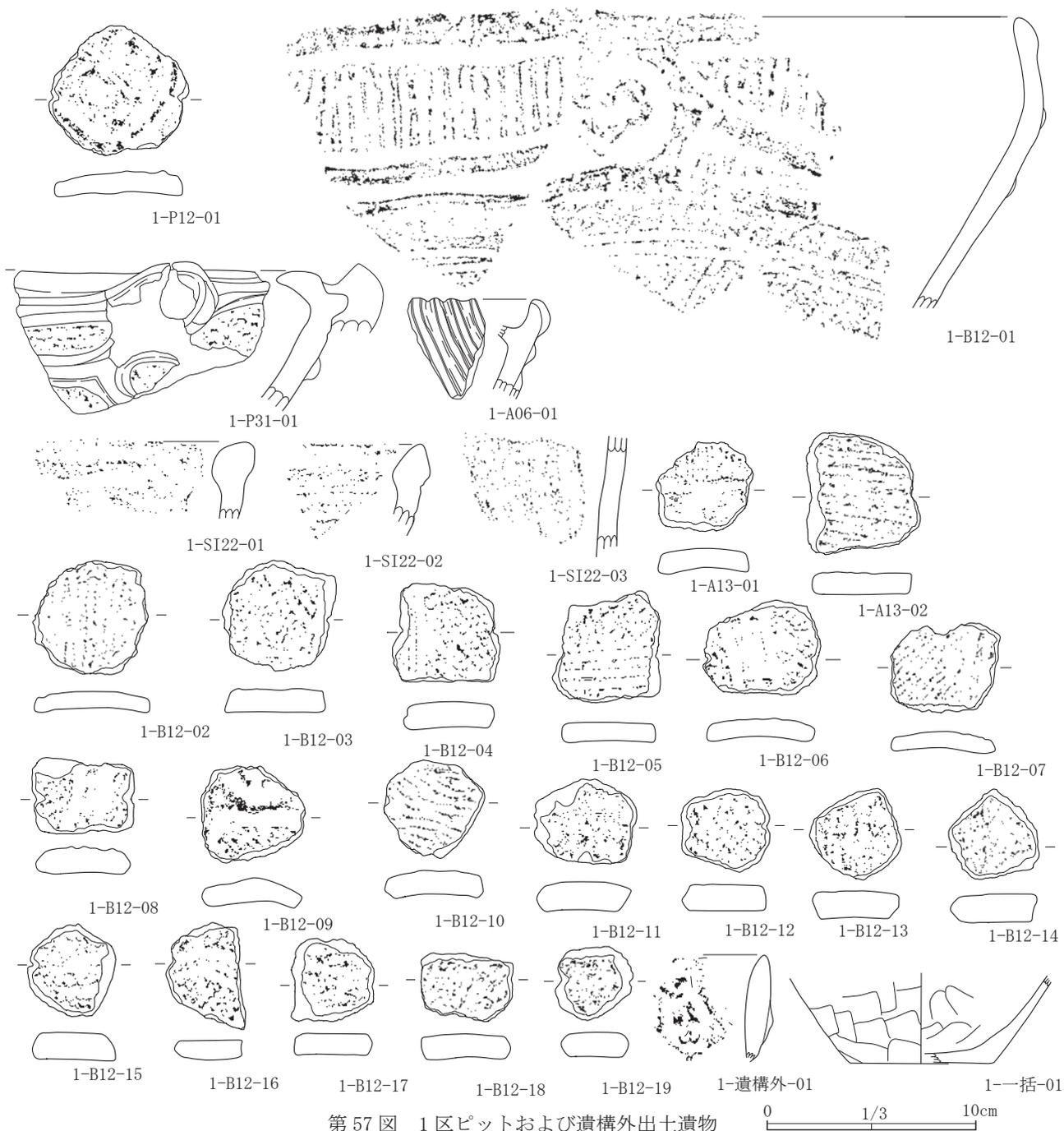
1-A06-01 は深鉢口縁部の細片である。口辺に対して斜方向に太い隆帯状の貼り付けを行い、内面には段状の隆帯が巡っている。所謂焼町類形の土器の可能性のある資料で、本遺跡で初めて確認された資料である。

1-B12-01 は隆帯による口縁部文様帯が構成されるもので円形の区画を設ける。区画内には縦方向の沈線が充填される。加曽利 E III 式古段階。

SI22-01 は口縁部の破片である。折り返して短く「く」の字に開く。地文はない。02 も同様であるが、口縁直下には縄文施文の後、横位の沈線が描かれる。03 は櫛歯状の工具による条線が垂下する。阿玉台 IV 式であろう。SI22 出土遺物は取り上げ遺物の中でラベルに誤記されたものと判断される。遺構として SI22 は 1 区に存在していない。また、SK22 の可能性は時期が異なるために、本遺構の遺物は遺構外遺物として取り扱った。

1-A13-01～1-B12-19 は土器片錘である。いずれも口縁下半から胴部の破片を用いるもので、加曽利 E II～III 式段階の遺物を使用するものが多い。重量は 1-A13-01 は 30.2g、1-A13-02 は 46.3g、1-B12-02 は 33.7g、1-B12-03 は 42.5g、1-B12-04 は 39.8g、1-B12-05 は 39.9g、1-B12-06 は 31.9g、1-B12-07 は 28.4g、1-B12-08 は 31.4g、1-B12-09 は 34.7g、1-B12-10 は 29.7g、1-B12-11 は 38.2g、1-B12-12 は 26.0g、1-B12-13 は 27.8g、1-B12-14 は 27.1g、1-B12-15 は 25.4g、1-B12-16 は 20.2g、1-B12-17 は 21.7g、1-B12-18 は 20.7g、1-B12-19 は 15.7g を計る。1-遺構外-01 は安行 I 式の口縁部破片である。本遺跡において検出された後期後半の唯一の資料である。

1-一括-01 は土師器甕の胴部下半の資料である。ヘラケズリにより全体が整形され、胴部がやや大きく張ることから、古墳時代中期から後期の資料と判断される。



第 57 図 1 区ピットおよび遺構外出土遺物

第 3 表 1 区遺構外古代遺物観察表

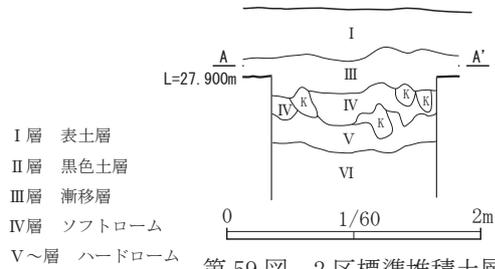
遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
1	ASSW-1区-イッカツ	土師器	甕	—	(6.7)	<4.4>	54.9	底部は僅かに上底気味の平底で、胴部下端は直線的に開く。	外面底部は一方のヘラケズリ、胴部下端はヘラケズリ。内面はナデ。	良好	内外面 7.5YR7/6 橙	スコリアや目立つ、黒色粒子・雲母・白色粒子微量。	胴部下端～底部 1/4	

第2項 2区

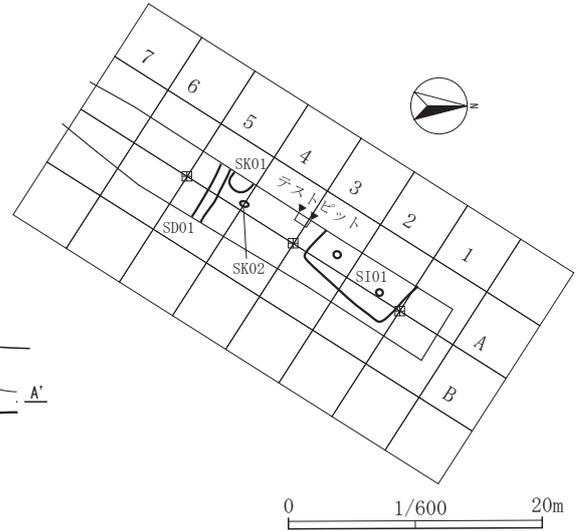
本区は1区東端部から北方向に延びる調査区である。グリッドではA・B-1～7までおよそ33mの範囲である。

検出された遺構は住居跡1軒と土坑1基、溝1条であり、他の区に比べて遺構の密度は低い。

遺構の確認面は第IV層上面である。



第59図 2区標準堆積土層



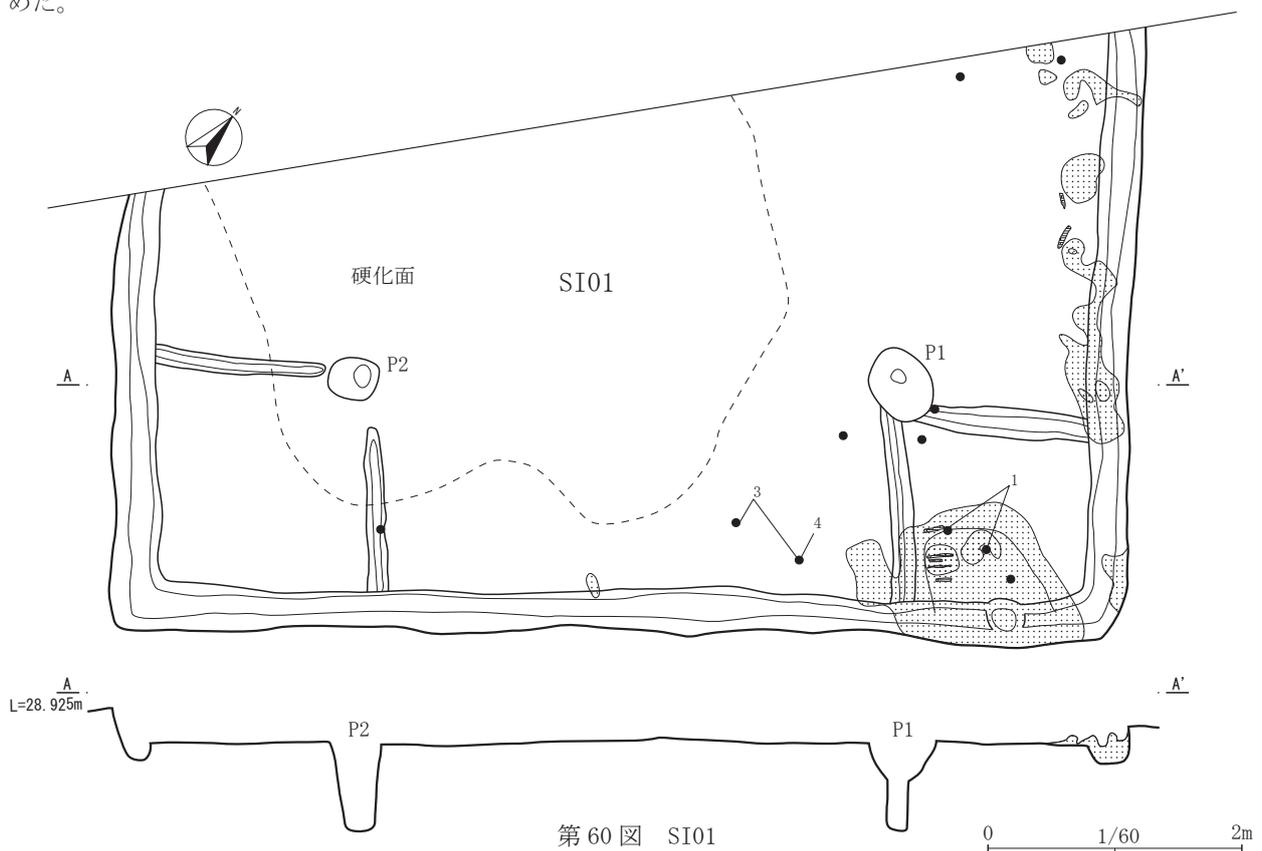
第58図 2区全体図

1 住居跡 (SI)

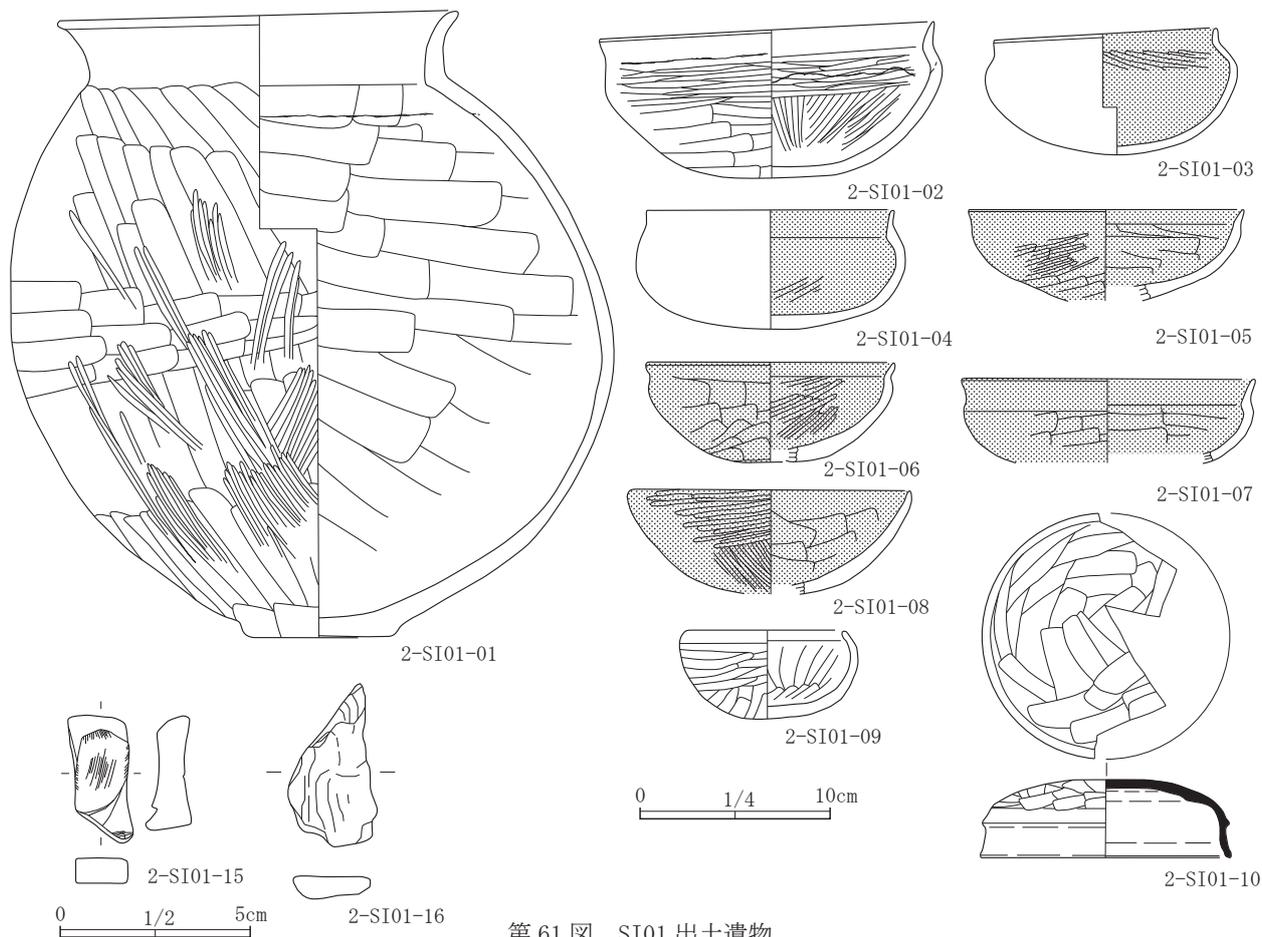
SI01 (第60・61図、第4・5表、図版19・20・79)

本区で検出された住居は本跡のみである。A・B-2・3グリッドにおいて検出された。方形を呈するものであろう。西側は凡そ2/3が調査区域外となっており、カマド・炉ともに確認されていない。柱穴は対角線上に配されるものであろうかコーナー寄りに2本が検出されている。南北方向の長さは8.29mを計る。確認面下の深さは29cm、自然堆積を示している。北東壁際には焼土の堆積が見られ、本住居が火災にあったものと思われる。周溝が全周している。柱穴P1およびP2を起点に壁より間仕切りの溝が4本検出されている。床面は中央からやや西側にかけて硬化面が広がる。

出土の遺物は甕1点、土師器坏8点、須恵器蓋1点、凝灰岩製の砥石1点、滑石の破片である。滑石に加工痕は見られない。出土遺物の特徴から本遺構は5世紀中葉から後半と判断される。遺物の詳細については観察表にまとめた。



第60図 SI01



第61図 SI01 出土遺物

第4表 2区SI01 古代遺物観察表 (1)

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
1	ASSW-2区-SI-1・ASSW-2区-SI-1-7・ASSW-2区-SI-1-15	土師器	甕	20.8	7.0	32.1	2520.0	胴部は球形を呈し、底部はやや円盤状に突出する。口縁は頸部で「く」の字に屈曲した後直立し緩やかに外反する。	口縁内外面共に横ナデ。外面胴部はナデ後部分的なミガキ、底部は多方向のヘラケズリ。内面はナデ。	良好二次焼成 判	内面10YR4/3にぶい黄褐 外面10YR7/4にぶい黄橙	白色粒子・黒色粒子・雲母少量、スコリア微量。	胴部1/2欠損	No.7, 15含む
2	ASSW-2区-SI-1	土師器	坏	17.4	丸底	7.7	391.9	大振りである。体部は緩やかに内湾し内側に弱い稜を有した後口縁は短く外反する。碗形を呈する。	口縁内外面共に横ナデ。体部外面はナデ後ミガキ、内面はミガキ。	良好二次焼成 判	内面10YR6/4にぶい黄橙 外面10YR3/4暗褐	黒色粒子・雲母やや多い、白色粒子少量。	体部1/3欠損	
3	ASSW-2区-SI-1・ASSW-2区-SI-1-2・ASSW-2区-SI-1-3	土師器	坏	11.6	丸底	6.3	187.7	体部は緩やかに内湾した後窄まり、口縁は短く直立する。碗形を呈する。	口縁内外面共に横ナデ、体部は剥落しているもの内面上位にミガキが観察される。	良好二次焼成 判	内面10YR5/4にぶい黄褐 外面2.5YR5/4黄褐	雲母多い、白色粒子・小～中礫やや多い。	体部1/3欠損	内面赤彩No.2, 3含む
4	ASSW-2区-SI-1-3	土師器	坏	12.9	丸底	6.1	134.3	体部は緩やかに内湾した後窄まり、口縁は短く外傾する。碗形を呈する。	内外面共に器面剥落。	良好二次焼成 判	内面5YR5/6明赤褐 外面2.5YR4/3オリーブ褐	雲母多い、小～中礫・白色粒子やや多い。	底部～体部1/4	内面赤彩No.3
5	ASSW-2区-SI-1	土師器	坏	(14.3)	—	<4.9>	61.4	体部は緩やかに内湾し開き、口辺内側は緩やかに内湾し開き、口辺内側に弱い稜を有した後、口縁で短く外傾する。傾する。	口縁内外面共に横ナデ、体部はミガキ、下端でヘラケズリ。内面はナデ。	良好二次焼成 判	内外面2.5YR5/6明赤褐	雲母多い、白色粒子やや多い。	体部1/3	内外面共赤彩
6	ASSW-2区-SI-1	土師器	坏	13.0	—	5.3	89.0	体部は緩やかに内湾し開き、口辺内側に稜を有した後、口縁で短く外傾する。	口縁内外面共に横ナデ、体部外面はヘラケズリ、内面はミガキ。	良好	内外面2.5YR5/6明赤褐	雲母・白色粒子・黒色粒子少量。	口縁～体部下半1/4	内外面共赤彩
7	ASSW-2区-SI-1	土師器	坏	15.2	—	<4.5>	60.4	体部は緩やかに内湾し開き、口辺内側に稜を有した後、口縁で外反する。	口縁内外面共に横ナデ、体部内外面共にナデ。	良好	内外面2.5YR5/8明赤褐	雲母・白色粒子少量。	口縁～体部下半1/4	内外面共赤彩

第5表 2区SI01 古代遺物観察表(2)

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
8	ASSW-2区-SI-1-X	土師器	坏	(14.6)	—	<5.5>	80.0	底部は丸底か。体部は緩やかに内湾して開き、口縁で僅かに立つ。	口縁内外面共に横ナデ、体部外面はミガキ、内面はナデ。	良好 二次 焼成 7リ	内面5YR6/6 橙 外面5YR5/4 にぶい赤褐	雲母多い、小～中礫・白色粒子・黒色粒子少量。	体部 1/4	内外面共 赤彩
9	ASSW-2区-SI-1-X	土師器	坏	8.2	丸底	4.7	113.3	小形である。体部は内湾し口縁でさらに内傾する。碗形を呈する。	口縁内外面共に横ナデ、体部外面はヘラケズリ後ミガキ、内面はナデ。	良好	内外面10YR7/4 にぶい黄橙	白色粒子・雲母やや多い、黒色粒子少量、スコリア微量。	口縁部 1/4 欠損	
10	ASSW-2区-SI-1	須恵器	蓋	13.0	—	4.1	97.3	天井は比較的低く平坦である。中位に有する稜は短く鋭い。口縁は「ハ」の字に外反し、端部は平面を成している。器高の1/2を稜以下が占める。	ロクロ整形。天井外面は丁寧な不整方向のヘラナデが観察される。	良好 堅緻	内面10YR6/1 灰 外面7.5YR5/1 灰	白色粒子少量、小～中礫・鉄分の噴出し微量。	2/3	東海系
15	ASSW-2区-SI-1	石製品	砥石	縦6.7	横3.5	厚さ1.4	56.8	凝灰岩。上下面及び両側面・下面に使用痕が観察される。						
16	ASSW-2区-SI-1	石製品	滑石模造品	縦4.3	横2.75	厚さ0.7	7.4	荒割り段階。研磨は行われていない。						滑石

2 土坑 (SK)

SK01 (第62・63図、図版20・79・80)

平面形状は楕円形を呈し西側半分が調査区域の外になっている。上端は短軸側で87cmを計り、やや大振りの土坑である。底部の最大径は2.27mを計る。確認面下の掘り込みの深さは93cm、覆土は自然堆積を示している。上層が削平されているが形状より袋状土坑である。

遺物は覆土中および底部付近より大量に出土している。

01はキャリパー形の深鉢胴上半から口縁にかけての資料である。口縁は短く屈曲して立つ。三角形に張りだす突起部を有する。突起部には渦巻が描かれる。隆線によって区画された口縁部文様帯には、無節Rの縄文を施文した後に、二重隆線により渦巻が大きく描かれる。頸部には隆線が1条巡り隆線の直下には僅かに無文部が広がる。以下は単節LRの縄文が施文されている。加曾利E I式新段階。

02は01同様キャリパー形の深鉢胴上半から口縁にかけての資料である。口縁は短く屈曲して立つ。口縁部文様帯には隆線により渦巻が貼り付けられる。頸部との境には二重隆帯が巡り胴部はRLの単節縄文が施文された後3条の沈線と蛇行する1条の沈線による懸垂文が垂下する。

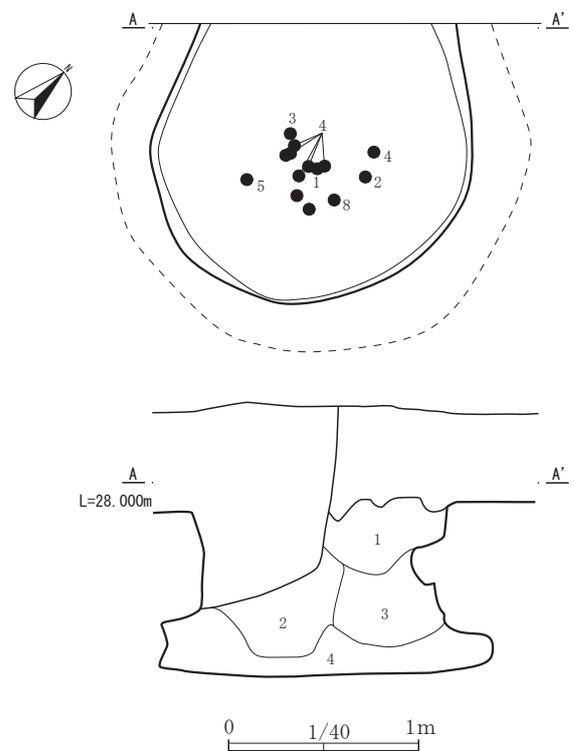
03は深鉢胴部下半から底部の資料である。02と同様に縄文地に懸垂文が垂下するが、地文が0段多条のLRで別個体である。加曾利E I式新段階であろう。

04は胴部から底部にかけての資料である。口頸部は欠損する。全体に無節のRの縄文が施文されるが懸垂文は描かれない。加曾利E I式の範疇でとらえている。

05は壺形の口縁部破片である。口縁～頸部にかけて無文で口縁部は大きく外反して開く。頸部下半に隆带状の貼り付けによる文様が見られるが詳細は不明。勝坂式の影響を受けるものか。

06は浅鉢の口縁部の破片である。内面に段を有するもので大波状の口縁となる。波頂部には渦巻が双方から対称形に描かれ文様部を構成している。加曾利E I式または阿玉台式終末段階と判断した。

07は三角形に尖る突起部分の資料である。加曾利E I式の範疇であろう。



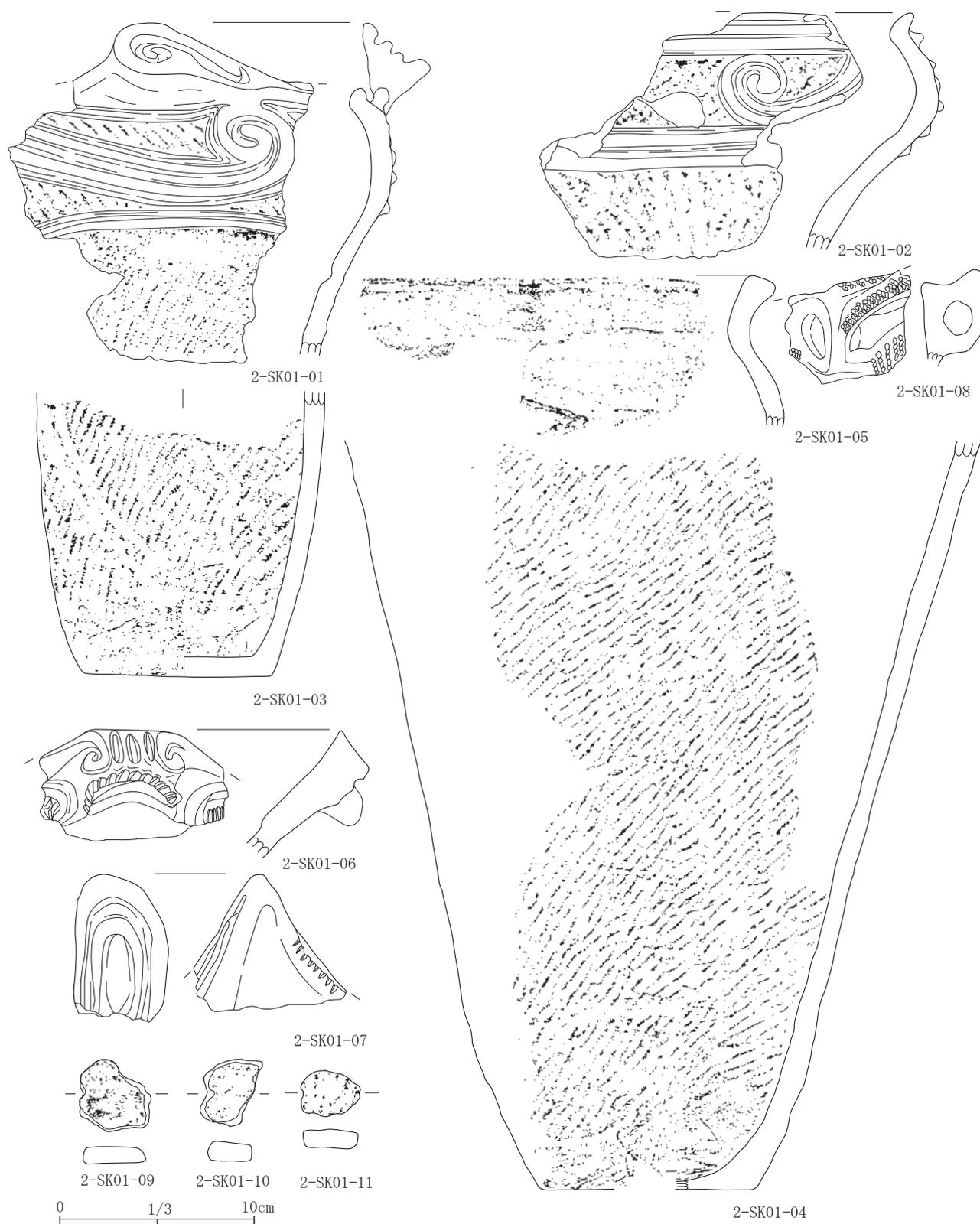
SK01

現地での土層説明は行っていない。

第62図 SK01

08は口縁部の眼鏡状の把手部分の破片である。隆帯により構成されるものであるが隆帯上には単節RLの縄文が施文される。阿玉台IV式または広義の中峠式の可能性がある。

09～11は土器片錘である。いずれも胴部片を用いている。重量は09が14.5g、10が12.6g、11は9.0gを計る。

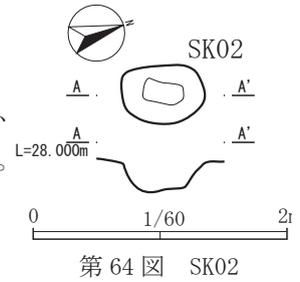


第63図 SK01 出土遺物

SK02 (第64図、図版20)

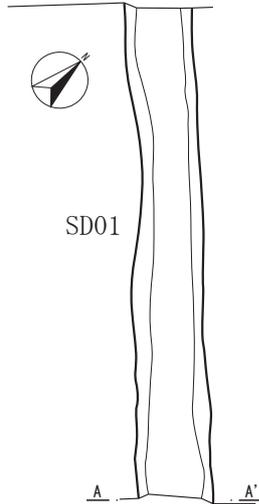
本遺構はA・4・5グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸66cm、短軸48cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは22cmを計る。断面形状は逆台形を呈する。

本遺構からは遺物は出土していない。



第64図 SK02

3 溝 (SD)



SD01 (第65図、図版20)

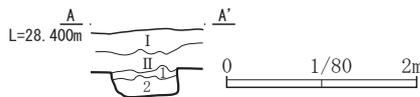
本遺構はA・B-5グリッドにおいて調査区を東西に横断する状態で検出された。切り合う遺構はなく、調査を行った長さは5.16m、幅は最大で80cmを計る。断面は浅い箱型を呈し、確認面下の深さは30cmを計る。覆土は2層に分層され、人為堆積の様相を呈する。

遺構外出土遺物に示す縄文土器 (SD001-01) は検出されているが本遺構に伴うものではない。

SD01

1層 7.5YR1.7/1 黒色土 粘性強 しまり中 ロームブロックφ2~10mm・ローム粒子中、炭化物 φ2~10mm・炭化粒子少

2層 7.5YR2/3 極暗褐色土 粘性強 しまり強 ロームブロックφ2~10mm・ローム粒子多量。



第65図 SD01

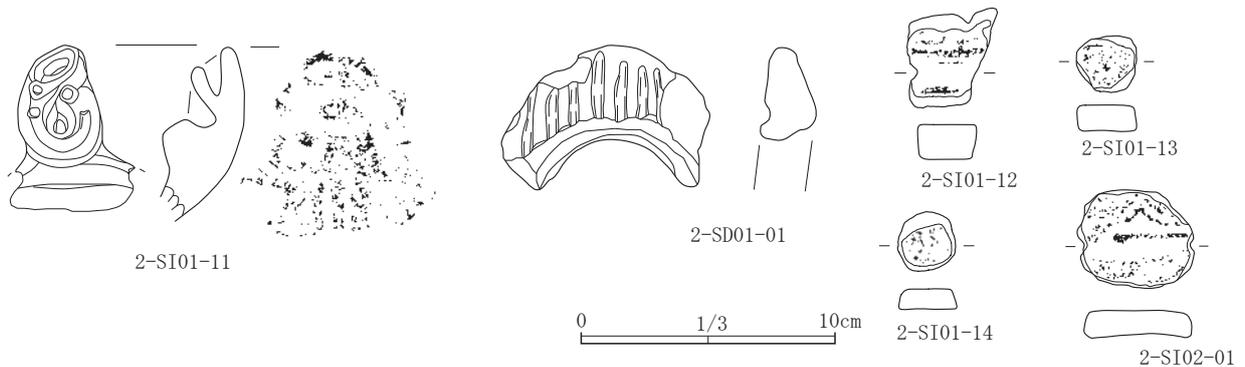
4 遺構外出土遺物 (第66図、図版80)

明確な共伴関係が捉えられなかった遺物並びに、極端に遺構との時期差がある遺物について、遺構外出土遺物とした。

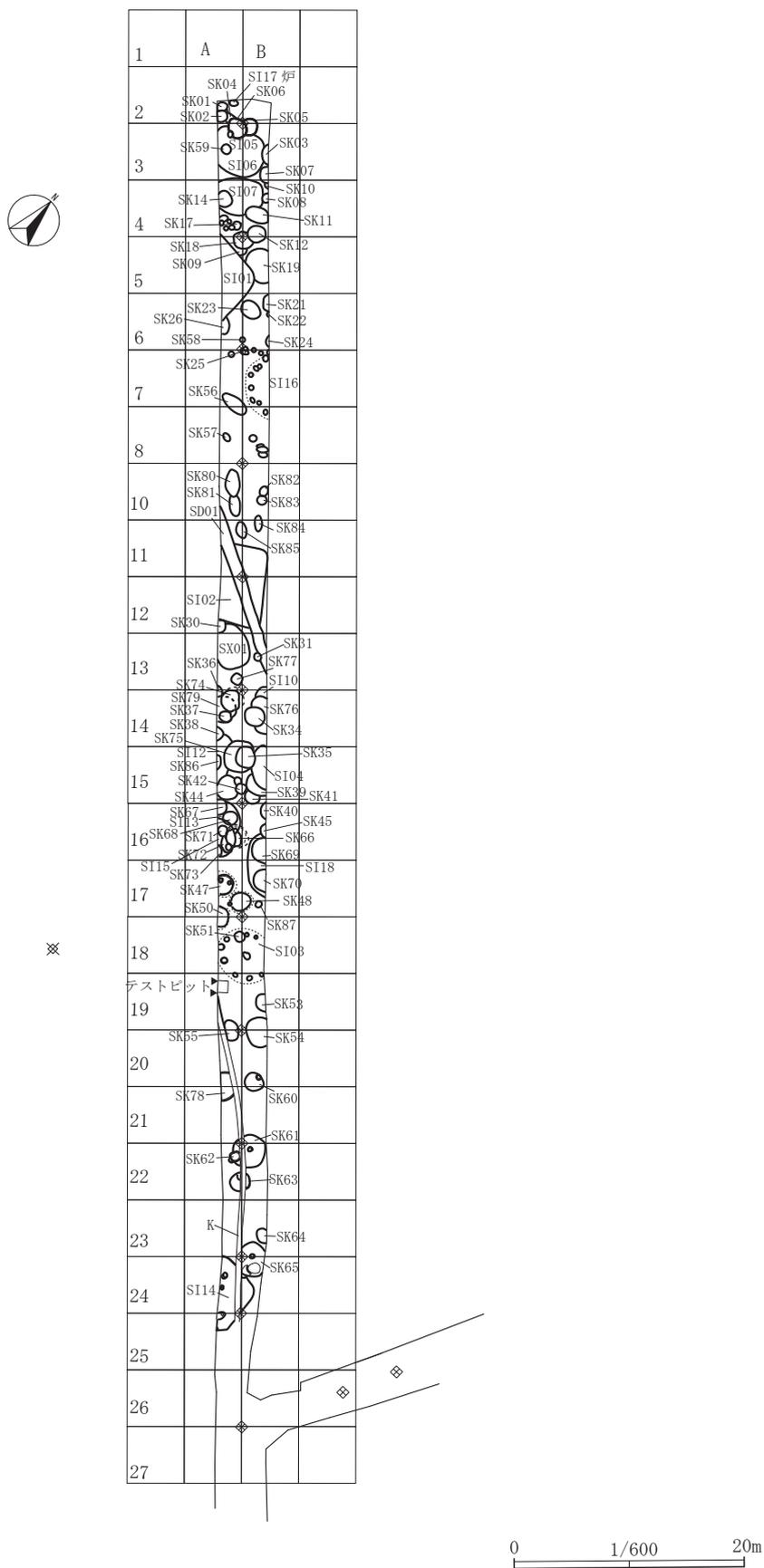
2-SI01-11 は堀之内2新式の突起部分の破片である。勾玉状の曲線と刺突により文様が構成される。外面には沈線による文様が描かれる。

2-SD01-01 は環状を呈する把手部分の破片である。把手外面には縦方向の刻み目が施される。

2-SI01-12 ~ 14、2-SI02-01 は土器片錘である。重量は2-SI01-12は23.6g、13は6.3g、14は4.9g、2-SI02-01は22.3gを計る。



第66図 2区遺構外出土遺物



第 67 図 3 区全体図

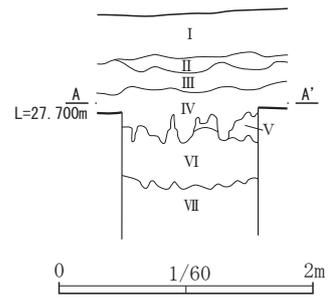
第3項 3区

本区は1区の南側に位置し、北西から南東にかけてA・B-1～27グリッド、およそ85mの調査区である。南端部で5区および8区と連結している。

尚、調査区の呼称は工事着工順に命名したため番号が飛んでいる。

本遺跡中最も遺構が密集する地域である。幅およそ6mの調査範囲の中に、複雑に多くの遺構が重複しており調査は難航を極めた。

遺構の確認面は2区とほぼ同様であるため、標準堆積土層についてはA-19グリッドにおいて設けたテストピットにて行った。



第68図 3区標準堆積土層

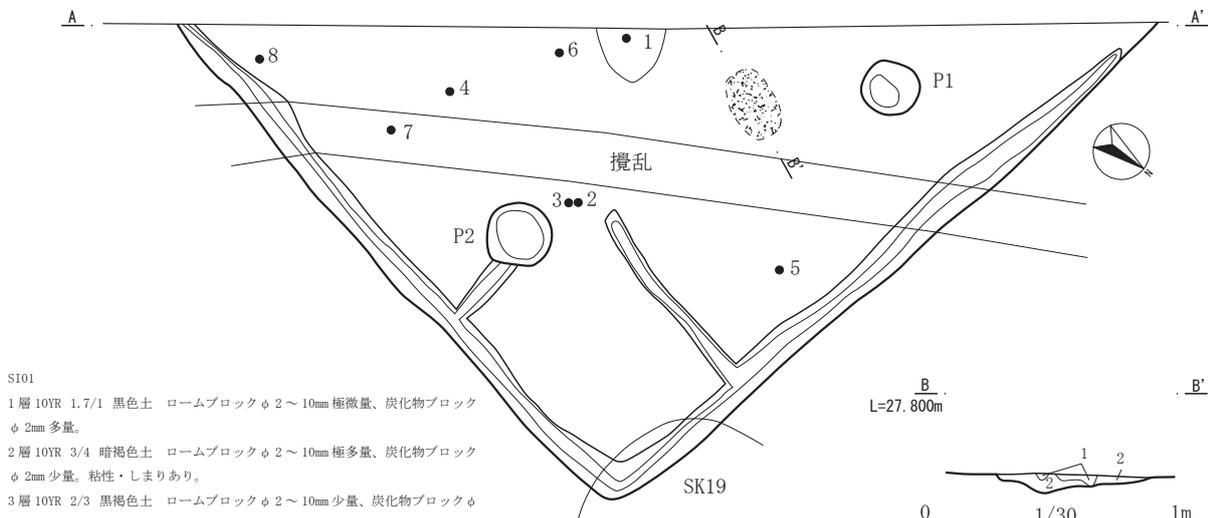
I層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～10mm 多量。耕作土。	IV層 10YR 4/6 褐色土 ロームブロックφ1～10mm 多量。ソフトローム層。立川ローム層。
II層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ1～5mm 多量。	V層 10YR 4/6 褐色土 ロームブロックφ1～3mm 多量。しまり強。ハードローム層。立川ローム層。
III層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～30mm 多量。暗褐色土ブロックφ30～40mm 多量。ソフトローム斬移層。	VI層 10YR 4/4 褐色土 ロームブロックφ1～10mm 多量。しまり強。立川ローム層。
	VII層 10YR 4/4 褐色土 ロームブロックφ1～10mm 多量。黄褐色土ブロックφ1～2mm 極微量。しまり強。立川ローム層。

1 住居跡 (SI)

SI01 (第69・70図、第6表、図版24・80)

本遺構はA・B-5・6グリッドにおいて検出された。南側が調査区域外になるが平面形状は方形を呈するものであろう。長軸、短軸ともに不明である。確認面下の掘り込みの深さは58cm、覆土は自然堆積で5層に分層される。柱穴は2本検出され、本来対角線上に4本配されているものであろう。P1の南東側に楕円形の焼土が分布する部分が見られ、炉である。長軸58cm、短軸36cmを計る。床面は全面に硬化が見られる。全体に壁溝が巡るもので、P2を起点に2本の間仕切り溝が延びる。

本遺構は古墳時代中期の遺構である。遺物は土師器甕1点、埴1点、坏5点、高坏1点について提示した。詳細は観察表にまとめた。埴形土器の頸部が細くすぼまり、坏には小形の平底の底部を有している。5世紀中葉の遺構と想定される。



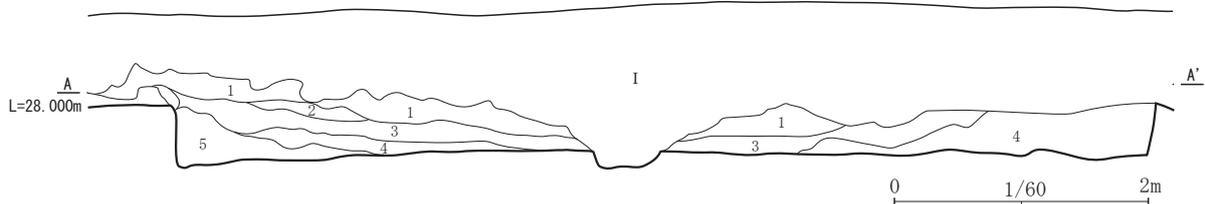
SI01

1層 10YR 1.7/1 黒色土 ロームブロックφ2～10mm 極微量、炭化物ブロックφ2mm 多量。
2層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ2～10mm 極多量、炭化物ブロックφ2mm 少量。粘性・しまりあり。
3層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ2～10mm 少量、炭化物ブロックφ2mm 多量。しまりあり。
4層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ2～10mm 極多量、炭化物ブロックφ2mm 少量。しまり強。
5層 10YR 2/1 黒色土 ロームブロックφ2～10mm 中量、炭化物ブロックφ2mm 極多量。粘性あり。

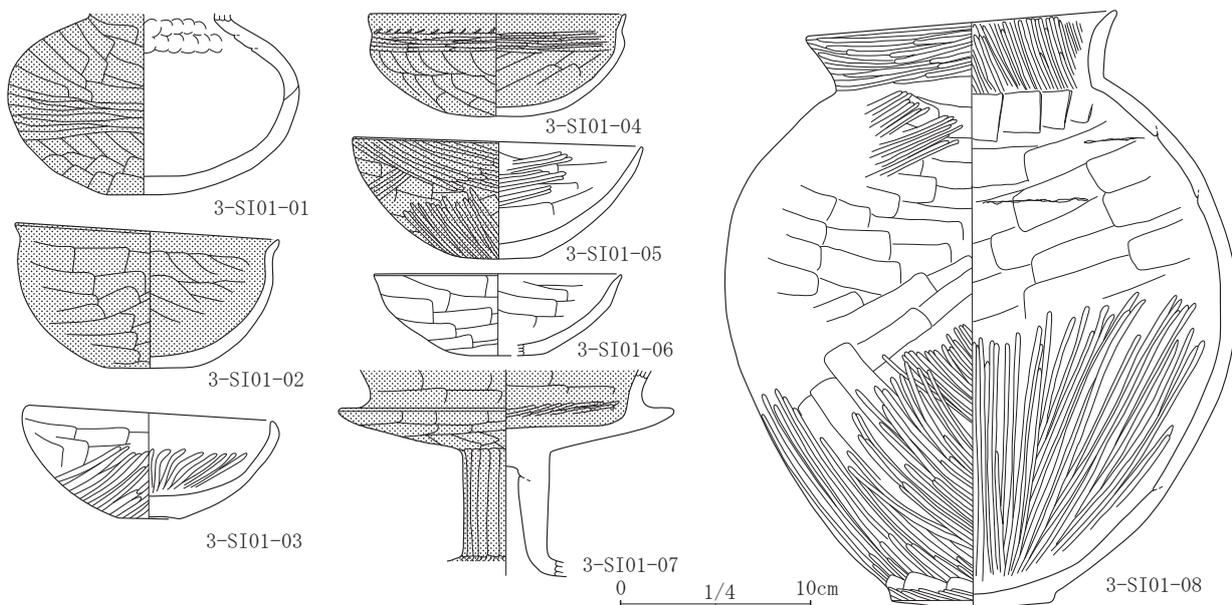
SI01 炉

1層 10YR 2/1 黒色土 ロームブロックφ2～5mm 多量、焼土粒子φ2～5mm 少量、炭化物ブロックφ2～5mm 多量。
2層 10YR 2/1 黒色土 ロームブロックφ2～5mm 少量、焼土粒子φ2～5mm 多量、炭化物ブロックφ2～5mm 少量。しまりあり、粘性なし。

SI01



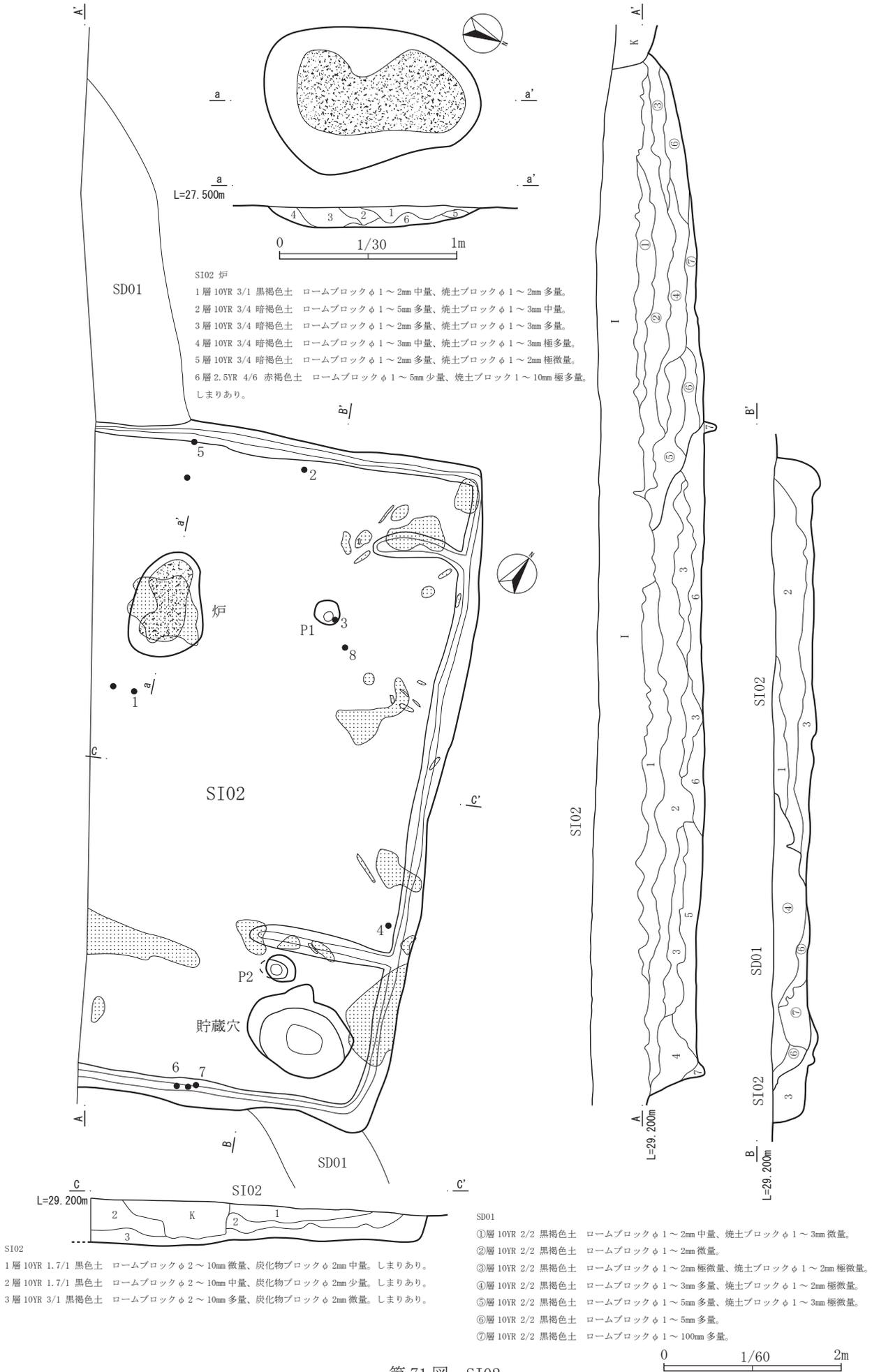
第69図 SI01



第70図 SI01 出土遺物

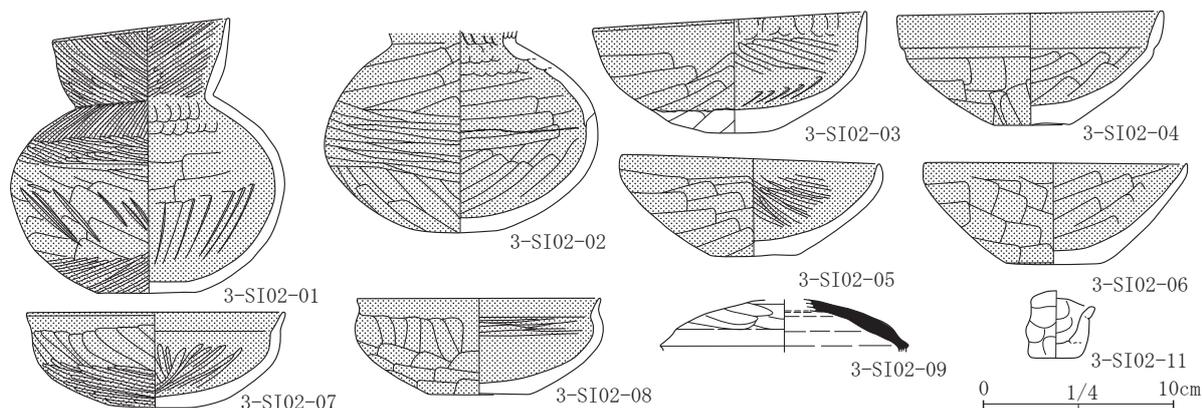
第6表 3区SI01 古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
1	ASSW-3区-SI-1-7	土師器	埴	—	4.0	<9.6>	611.0	底部は平底で小形。胴部は潰れた球形を呈する。	中位に貼付けが行われている事より、外面胴部ヘラナデ後中位に横方向のミガキが観察される。底部はナデ。内面は剥落しているものの頸部直下に指頭圧痕が確認出来る。	良好	内面10YR6/3にぶい黄橙 外面2.5YR5/6明赤褐	白色粒子・雲母やや多い、黒色粒子少量。	胴部	
2	ASSW-3区-SI-1-1	土師器	坏	13.7	5.2	7.2	331.7	底部は平底。胴部は内湾して立ち口縁は短く外傾する。埴形を呈し深さがある。	口縁は内外面共に横ナデ、外面体部ヘラナデ、内面はナデ。	良好 二次焼成 7)	内外面2.5YR6/6橙	長石・石英等小礫多い。雲母少量。	ほぼ完形	内外面赤彩
3	ASSW-3区-SI-1-2	土師器	坏	12.7	3.3	5.7	241.9	底部は小形でやや上げ底気味の平底。体部は緩やかに内湾して開き口縁は短く内傾する。鉢形を呈し、器壁は厚い。	口縁は内外面共に横ナデ。外面体部はヘラナデ後ミガキ、底部はナデ。内面放射状暗文有り。	良好	内外面5YR5/8明赤褐	白色粒子・雲母やや多い、黒色粒子・スコリア・白色針状物質微量。	1/2	
4	ASSW-3区-SI-1-5	土師器	坏	13.3	丸底	5.4	204.9	底部は丸底。体部は緩やかに内湾し内側に弱い稜を有した後短く外傾する。	口縁は内外面共に横ナデ。体部外面はヘラナデ、上位にミガキが狭く廻り、口縁直下には爪形状の圧痕が巡る。内面はナデ、稜直下にミガキが狭く廻る。	良好	内外面2.5YR5/6明赤褐	長石・石英やや多い。雲母少量。	口縁1/4欠損	内外面赤彩
5	ASSW-3区-SI-1-6	土師器	坏	15.1	3.6	6.2	261.8	底部は小形でやや上げ底気味の平底。体部は緩やかに内湾して開く。鉢形を呈する。	内外面共にヘラナデ後ミガキ。	良好 二次焼成 7)	内面10YR5/4にぶい黄褐 外面10YR6/4にぶい黄橙	長石・石英・雲母やや多い。小礫・スコリア微量。	体部1/4欠損	外面赤彩
6	ASSW-3区-SI-1-9	土師器	坏	(12.9)	(4.5)	4.3	55.6	底部は丸底気味の平底。体部は緩やかに内湾して開き、口縁で更に短く外反する。	口縁は内外面共に横ナデ。体部外面はヘラケズリ、内面はナデ。	良好	内面10YR7/4にぶい黄橙 外面10YR6/4にぶい黄橙	長石・石英等小礫やや多い。雲母少量。	体部1/4	
7	ASSW-3区-SI-1-3	土師器	裝飾高坏	—	—	<10.8>	446.2	脚柱はほぼ円柱状に立つ。鏝状突起は大きく張出している。上埴見込みは平坦である。	上埴外面はナデ、脚柱はミガキ。上埴内面はナデ、見込みはミガキ。脚柱内面はナデ整形。	良好	脚内面7.5YR6/6橙 外面2.5YR5/6明赤褐	雲母多い、長石・石英等小～中礫やや多い。	上埴口縁・裾部欠損	北陸系外面・上腕内面赤彩
8	ASSW-3区-SI-1-4	土師器	甕	16.1	8.4	30.1	2384.5	底部はやや丸みを帯び円盤状に突出している。胴部はほぼ球形を呈する。口縁は「く」の字に屈曲した後直立気味に外反する。	口縁は内外面共にミガキ、胴部外面はナデ後部分的なミガキ、底部はヘラケズリ後ミガキ。内面はナデ、下半はミガキ。	良好	内面5YR5/6明赤褐 外面7.5YR6/6橙	白色粒子多い、小～中礫やや多い、雲母・白色針状物質少量。	胴部一部欠損	



SI02 (第71・72図、第7表、図版25・26・81)

本遺構はA・B-11・12グリッドにおいて検出された。SD01によって上層を切られている。北西側が調査区域外となるが、平面形状は方形を呈するものと思われる。南北軸は7.55mを計り、東西軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは38.8cm、覆土は自然堆積で7層に分層される。この内、1～4層はSD01の覆土の可能性がある。柱穴は2本検出され、本来対角線状に4本が配されるものと思われる。住居跡の東壁側を中心に焼土の分布が見られ、住居跡は火災にあったものと想定される。炉は住居中央やや北側に位置し浅い皿状の地床炉である。長軸1.24m、短軸85.8cmを計る。壁際には壁溝が全周し、東壁より2本の間仕切り溝が延びている。床面は炉を中心に全面に硬化が見られる。住居の南東コーナー部分に貯蔵穴が1基検出されている。長軸1.19m、短軸85cm、床面からの



第72図 SI02 出土遺物

第7表 3区SI02 古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
1	ASSW-3区-SI-2-2	土師器	埴	9.2	5.5	13.5	612.2	底部は平底。胴部は潰れた球形を呈する。口縁は頸部で「く」の字に屈曲し僅かに内湾気味に立ち上がる。口縁は比較的浅い。胴部中位を砥石として転用。	口縁は内外面共にミガキ、底部はナデ、胴部外面はヘラナデの後上下位ミガキが行われている。胴部内面はヘラナデ、頸部直下に指頭圧痕有り。	良好	白色粒子・黒色粒子やや多い、雲母・白色針状物質少量。	内外面2.5YR5/6明赤褐	口縁1/4欠損	胴部転用砥石内外面赤彩
2	ASSW-3区-SI-2-5	土師器	埴	—	4.0	<10.5>	517.2	底部は平底。胴部は潰れた球形を呈する。	中位に貼付けが行われている事より、外面胴部ヘラナデ後中位に横方向のミガキが観察される。底部はナデ。内面はナデ、頸部直下に指頭圧痕が確認出来る。	良好 二次焼成 判	長石・石英・雲母やや多い	内外面2.5YR6/6橙	胴部	内外面赤彩
3	ASSW-3区-SI-2-6	土師器	坏	14.3	3.9	5.9	228.7	底部は丸底気味の平底。体部は内湾し、口縁に弱い稜を有した後短く外反擦る。塊形を呈する。	外面口縁は横ナデ、体部～底部はヘラケズリ。内面口縁は指頭による圧痕有り、体部はヘラナデ及びナデ整形。	良好	黒色粒子・雲母少量、白色針状物質微量。	内面2/5YR45/4明赤褐 外面5YR4/4橙	2/3	内外面赤彩 (外面体部下端端を除く)
4	ASSW-3区-SI-2-8	土師器	坏	13.8	4.1	5.7	279.8	底部は僅かに上底気味の平底。体部は緩やかに内湾して開き口縁に至る。外面口縁直下に弱い凹線が廻る。鉢形を呈する。	口縁は内外面共横ナデ。外面体部～底部はナデ、内面はミガキ。	良好	白色粒子・雲母少量/白色針状物質微量。	内外面2.5YR5/6明赤褐	口縁一部欠損	内外面赤彩
5	ASSW-3区-SI-2-4	土師器	坏	13.5	4.3	5.0	208.1	底部は平底で小形。体部は緩やかに内湾して開き口縁は短く立つ。鉢形を呈する。	口縁は内外面共横ナデ。外面体部～底部はヘラケズリ、内面はナデ。	良好	雲母やや多い、小～中礫・スコリア微量。	内外面2.5YR5/4にぶい赤褐	3/4	内外面赤彩
6	ASSW-3区-SI-2-10	土師器	坏	13.7	5.2	5.3	240.0	底部は丸底気味の平底。体部は内湾して開き口唇で短く内傾する。	口縁は内外面共横ナデ。外面体部～底部はナデ及び内面はナデ。	良好 二次焼成 判	雲母多い、白色粒子少量、スコリア、小礫微量。	内面2/5YR4/4にぶい赤褐 外面5YR4/4橙	底部1/2	内外面赤彩
7	ASSW-3区-SI-2-11	土師器	坏	13.4	4.7	4.9	239.3	底部は丸底気味の平底。体部は内湾し、口縁に弱い稜を有した後外反する。	口縁は内外面共横ナデ。外面体部～底部はナデ及び内面はナデ。	良好 二次焼成 判	黒色粒子やや多い、白色粒子・雲母少量、白色針状物質微量。	内面5YR4/4にぶい黄褐 外面7.5YR5/6明褐	口縁一部欠損	内外面赤彩
8	ASSW-3区-SI-2-7	土師器	坏	(12.6)	5.3	5	120.7	底部は丸底気味の平底。体部は内湾し、口縁に弱い稜を有した後短く外反擦る。	口縁は内外面共横ナデ。外面体部～底部はナデ、内面は剥落しているものの、上位にはミガキが観察される。	良好 二次焼成 判	雲母多い、白色粒子・黒色粒子少量。	内外面2.5YR5/6明赤褐	口縁一部欠損	内外面赤彩
9	ASSW-3区-SI-2	須恵器	蓋	—	—	<2.8>	22.7	天井～体部は緩やかに内湾する。稜は鋭さに欠ける。	ロクコ整形。天井外面は不整方向の手持ちヘラケズリ。	良好	白色粒子微量。	内面10YR5/4にぶい黄褐 外面10YR6/4にぶい黄橙	1/8	東海系
11	ASSW-3区-SI-2	土製品	手づくね	2.2	4.4	3.5	33.1	筒状を呈するもので、片側がカタロ状になっている。	手・指による整形。	良好	白色粒子区少量。	内面10YR5/4にぶい黄褐 外面10YR5/4黄褐	ほぼ完形	

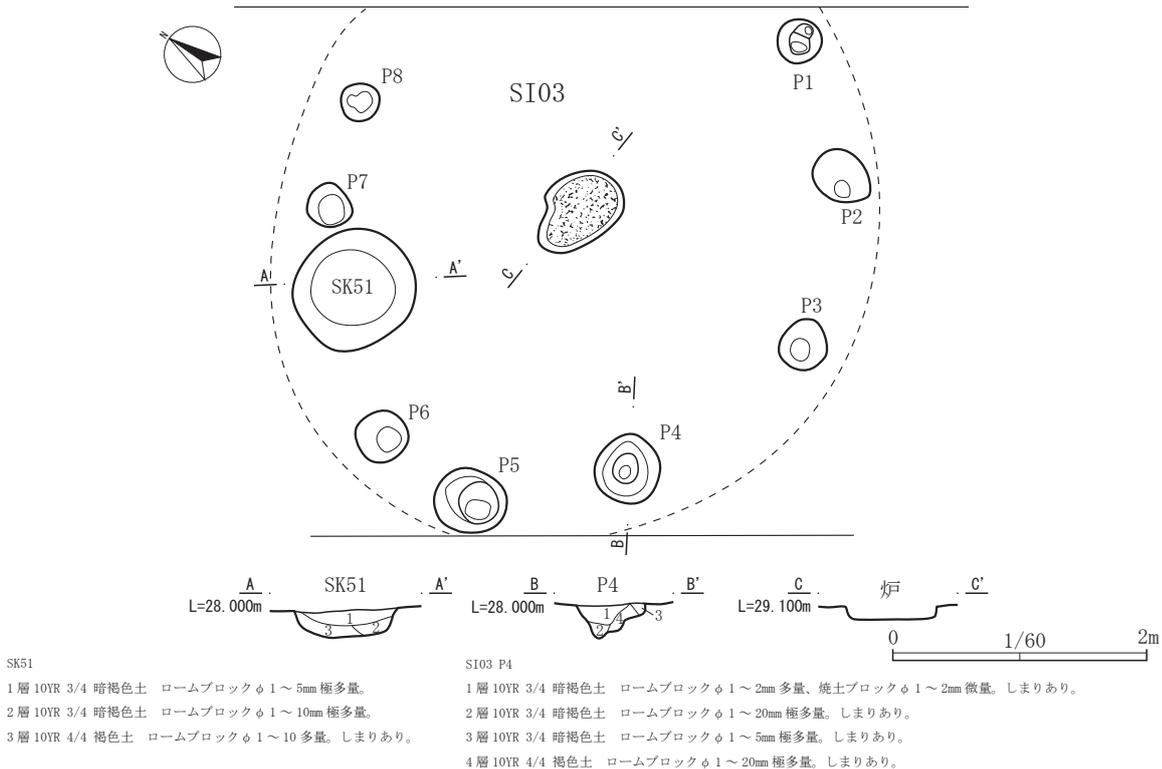
深さは70cmを計る。

遺物は炉および貯蔵穴周辺から出土している。本遺構出土遺物として掲載した遺物は埴2点、坏6点、須恵器蓋1点、手捏土器1点である。遺物の詳細な観察は第7表にまとめた。遺物は、SI01の構成とほぼ同様な器形で、09の須恵器坏蓋の出土から5世紀中葉の遺構と判断される。

SI03 (第73～75図、第8表、図版26・27・81・82)

本遺構はA・B-18・19グリッドにおいて、P1～P8まで円形に配される柱穴群として検出された。平面形状は円形を呈するものと思われる。長軸、短軸ともに不明である。確認面がほぼ床面である。炉は住居のほぼ中央に位置し浅い皿状の地床炉である。長軸76cm、短軸53cmを計る。

本遺構出土遺物は50点を掲載した。

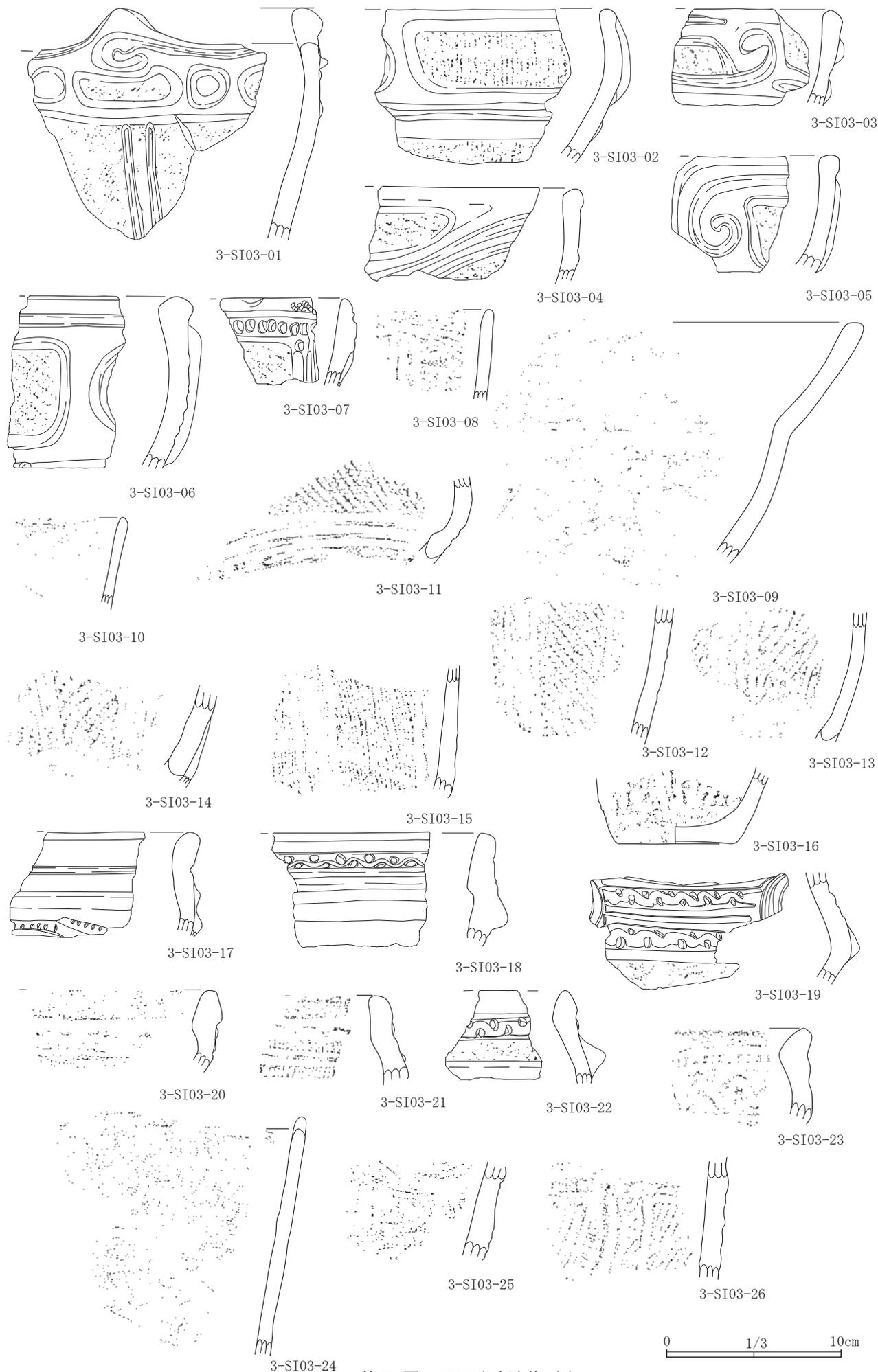


第73図 SI03

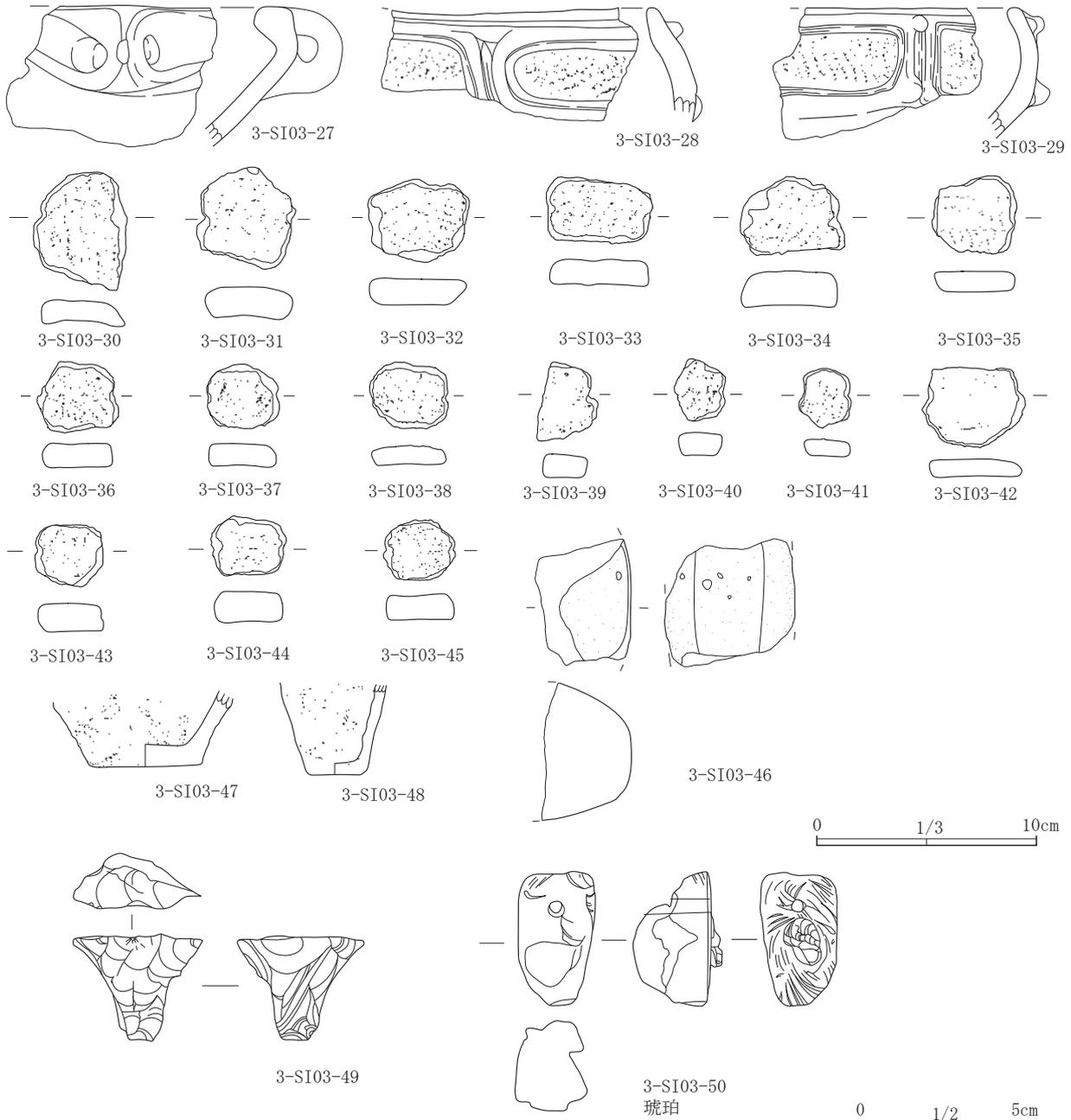
土器・土製品

01～10は深鉢口縁部の資料である。01は波状口縁を呈し、円形および楕円形の区画が口縁部文様帯に隆帯により描かれる。また2本の懸垂文が垂下する。02は長方形の窓枠状の区画の中に条線を充填させる。胴部との境部には太い隆帯が巡り胴部にも条線が施文される。連弧文様式の土器である。03は渦巻が退化した隆帯により区画が設けられ、内部に太い短沈線が縦方向に施文される。04は二重隆線による区画の内部にRLの単節縄文が充填される。05は渦巻を有する口縁部の破片で、長方形の区画内部には単節LRの縄文が施文される。06は05と同様であるが充填縄文はRLである。07は直線的に立つ口縁部の破片で、口唇直下に無文帯が回り、以下に円管の刺突列が連続施文される。胴部には懸垂文が見られRLの縄文が施文される。連弧文様式土器の可能性が高い。08は単節縄文を地文に太い沈線が縦方向に描かれた後口辺に沿って斜方向の沈線が加わる。09は大形の深鉢である。平縁の口縁であろう。胴部で屈曲して口縁は大きく開く。10は無文の口縁部破片である。直立気味に立つ。11はキャリパー形土器の頸部括れ部分の破片である。頸部と胴部の境には二重隆線が巡る。口縁部文様帯は隆帯が描かれるものか、地文には複節RLRの縄文が施文される。12～16は深鉢形土器の胴下半部～底部の破片である。いずれも縦の懸垂文が垂下する。地文はRLの縦施文が大半であるが、15のみ条線が地文となっている。加曾利EⅢ式古段階と加曾利EⅡ～Ⅲ式段階が混在する。また、これらの土器に伴うものであろう少量の連弧文様式の土器が出土している。

17～23は屈曲する口縁部の資料で、18・19・21～23では口縁部の無文帯直下に交互刺突文が施文される。勝



第74图 SI03出土遺物(1)



第75図 SI03出土遺物(2)

第8表 3区SI03古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
47	ASSW-3区-SI-3	土師器	小型甕(底部)	—	5.0	<3.3>	73.0	底部は平底で小形。胴部下端は直線的に開く。	底部は丁寧ナデ及びミガキ整形。胴部下端には部分的なミガキが観察される。	良好	内面10YR5/4にふい黄褐色 外面7.5Y3/1オリーブ黒	雲母多い、白色粒子少量。	底部	古墳時代中期
48	ASSW-3区-SI-3	土製品	手づくね	5.1	2.7	3.9	31.4	バケツ形を呈する。底部は平底。	手・指による調整と共に、外面には篋状工具による整形が認められる。	良好	内面10YR5/3にふい黄褐色 外面10YR6/2灰黄褐色	白色粒子少量、雲母微量。	口縁1/2欠損	

坂式の影響を受ける広義の中峠式と判断される。24～27も勝坂式の土器であろう。

28・29はキャリパー形土器で、二重隆線による貼り付け文が口縁部に区画帯を設ける。地文には28でRL、29ではLR縄文が施文される。加曾利E I式段階であろう。

30～45は土器片錘である。30は30.4g、31は30.1g、32は23.4g、33は23.2g、34は24.3g、35は16.8g、36は17.4g、37は11.7g、38は10.4g、39は10.1g、40は7.7g、41は6.2g、42は18.4g、43は14.3g、44は15.2g、45は11.6gを計る。

47・48はミニチュア土器である。口縁部はいずれも欠損する。無文。土師器手づくね土器の可能性があるので、古代遺物観察表第8表に掲載した。

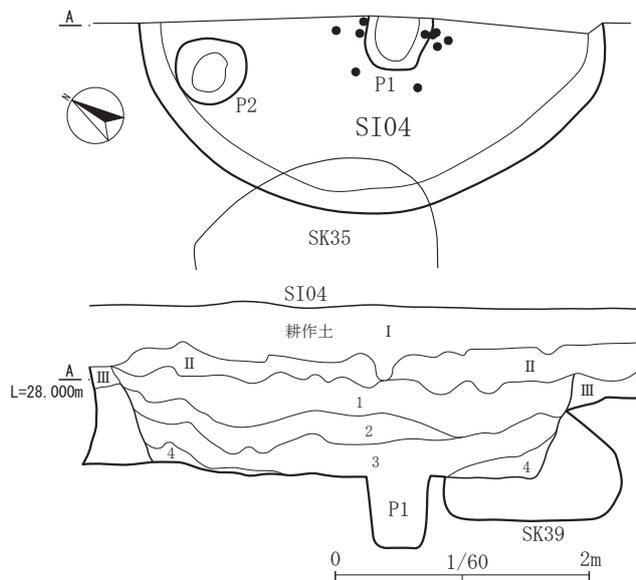
石器・石製品

46 は磨石である。側面および上下両端ともに欠損する。右側面は擦られて平坦になる。材質は安山岩である。

49 は石核である。チャート製で打面を平坦に折りとった後、複数の剥片を剥がしている。

50 は琥珀の大珠である。上端部に穿孔が施されている。穿孔は円筒状を呈し1方向から行われる。本来本琥珀玉は楕円形を呈するものであったと思われ、擦切り技法によって分割が行われている。最終的な切断時に中心部が臍状に残されている。加曽利 E III 式期に伴うものと判断される。重量は 13.2g を計る。

本遺構から検出された遺物は加曽利 E I 式段階、勝坂式段階、中峠式段階と加曽利 E III 式段階および加曽利 E III 式段階平行と考えられる 2 群の遺物が確認されている。遺構の重複があったものと判断される。



第 76 図 SI04

SI04 (第 76・77 図、図版 27・82)

本遺構は B-15 グリッドにおいて検出された。SK35・39 を切っている。北東側が調査区外になるために、平面形状は明確ではないが円形を呈するものと思われる。壁側の長さは 3.73 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 78 cm、覆土は自然堆積で 4 層に分層される。柱穴は 2 本検出されている。炉は検出されていない。

本遺構出土遺物では 18 点を提示した。

SI04

- 1 層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロック ϕ 1~2mm 多量、焼土ブロック ϕ 1~2mm 微量。しまりあり。
- 2 層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロック ϕ 1~5mm 中量、焼土ブロック ϕ 1~3mm 極微量。しまりあり。
- 3 層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロック ϕ 1~10mm 極多量。しまりあり。
- 4 層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロック ϕ 1~20mm 極多量。しまりあり。

土器・土製品

01 は 4 単位の突起を有するキャリパー形の土器である。胴下半から底部を欠損する。口縁部の突起は 4 単位の大形把手と、その間を埋める小波状の突起が付される。口縁部文様帯は口縁部の沈線から連繋する渦巻により円形もしくは三角形の区画が設けられ内部には単節 LR の縄文が充填される。頸部の無文帯は明瞭でなく S 字の沈線が胴部との境に巡る。胴部は LR の縄文が全面に施文された後直線状に垂下する 3 本の懸垂文と蛇行する 2 本の懸垂文が交互に描かれる。加曽利 E II 式新段階と判断される。02 は胴部の資料である。底部および口縁部は欠損している。沈線による懸垂文が 3 本 1 単位で施文され、沈線間の磨消は明瞭ではない。やはり加曽利 E II 式新段階の範疇で収まるものと判断される。

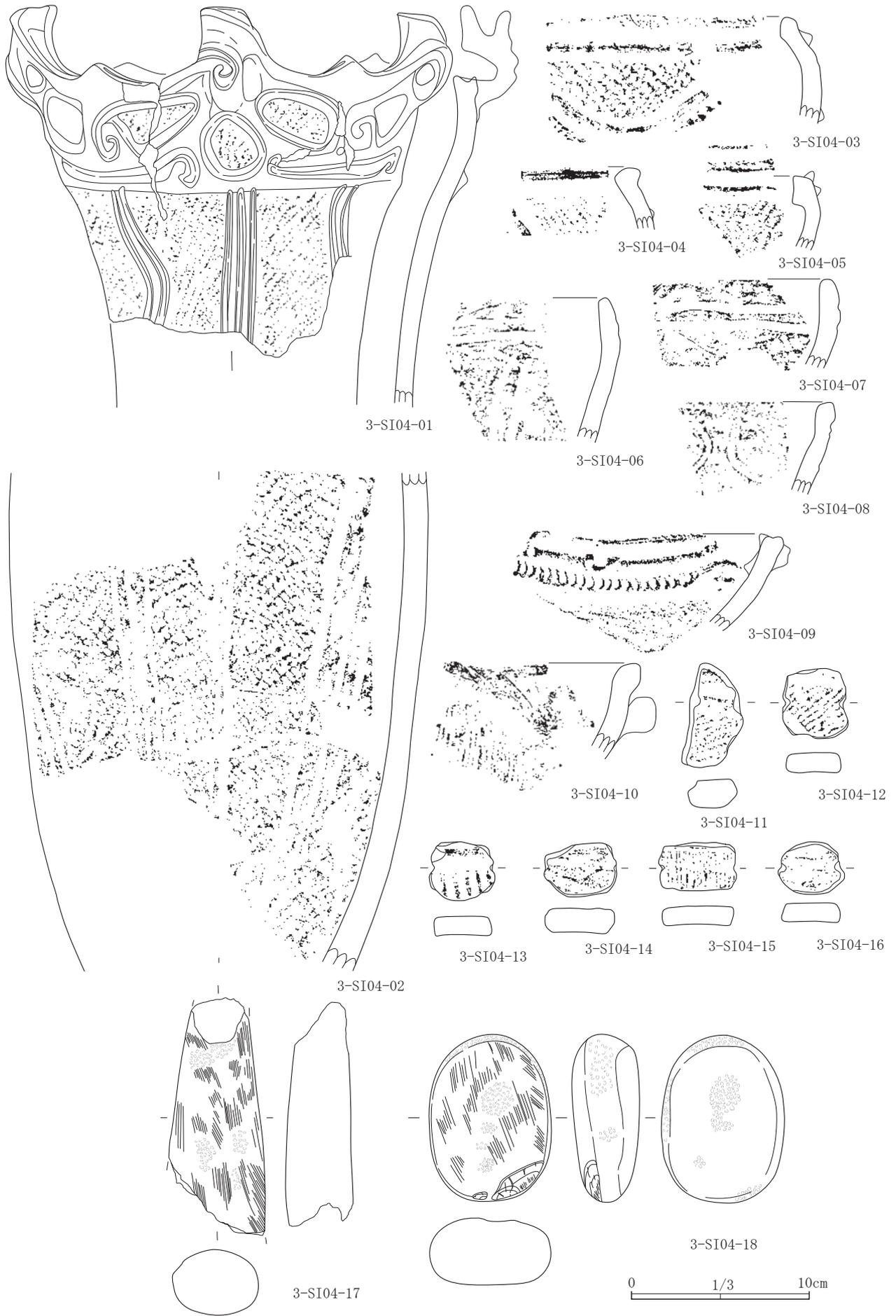
03 ~ 05 は二重隆線が口縁部文様帯に曲線を描く資料である。地文はいずれも単節 RL である。加曽利 E I 式新段階 ~ E II 式古段階の資料であろう。06 ~ 08 は直線的に開く深鉢の口縁部資料で、沈線による文様が描かれる。口縁部は無文帯を有す。地文には単節縄文が施文される。

09 は浅鉢口縁部の破片である。口縁部に沿って隆線が巡り、隆線には交互刺突によるクランク文が等間隔に刻まれる。折り返し部分には刻みが施される。胴部は無文で、勝坂式土器と判断される。10 は内湾する深鉢口縁で、Y 字状の貼付文が口縁直下に付される。阿玉台 IV 式の可能性がある。

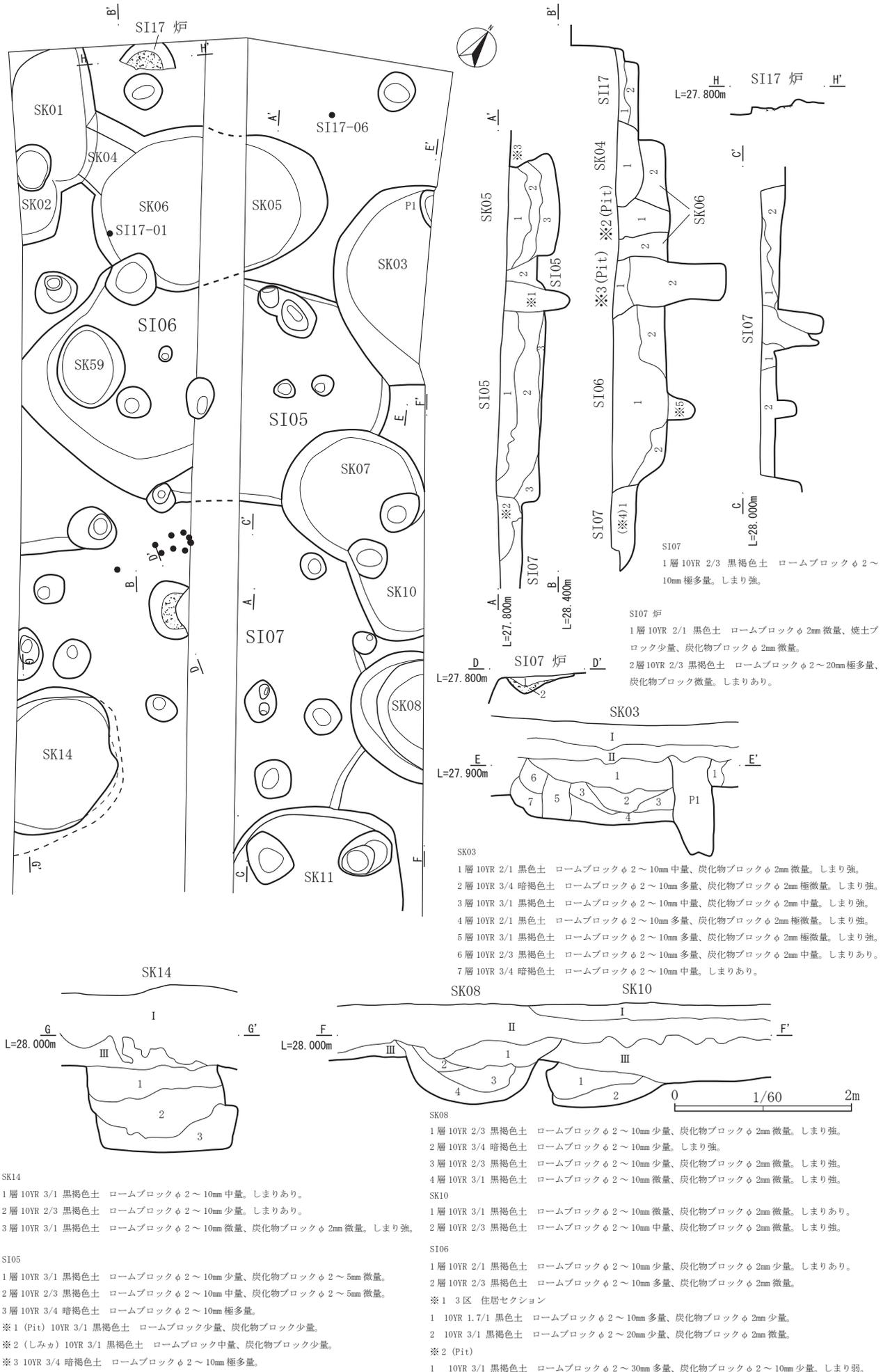
11 ~ 16 は土器片錘である。11 は 24.4g、12 は 16.3g、13 は 18.4g、14 は 20.5g、15 は 19.5g、16 は 15.7g を計る。

17 は断面形状が丸みを帯びる、乳棒状の磨製石斧である。緑色岩類を素材にするもので基部および刃部は欠損している。全体に研磨は粗く、敲打痕が残る。重量は 404.6g。

18 は凹石・磨石である。上下両面に窪みが穿たれるが、浅い。側面および上下両面はよく擦られている。材質は安山岩。重量は 364.3g を計る。



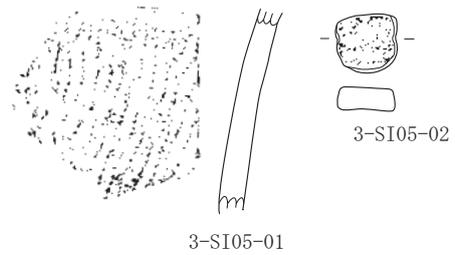
第 77 图 SI04 出土遺物



第78図 SI05・06・07・17

SI05 (第78・79図、図版29・82)

本遺構はA・B-3グリッドにおいて検出された。SI06・07・SK03・05・07と重複しており、さらに中央部分に送水管による攪乱がこれらの遺構を切っており、新旧関係は複雑な様相を呈している。平面形状は円形と想定される。長軸は不明、短軸2.47mを計る。確認面下の掘り込みの深さは49cm、覆土は自然堆積で3層に分層される。柱穴は北壁寄りに4本検出されるが明瞭ではない。炉は検出されていない。床面は全面に硬化が見られる。



第79図 SI05 出土遺物

本遺構から出土した遺物は僅かで、掲載資料は2点である。SI05-01は深鉢胴部破片である。単節RLを地文にし、蛇行懸垂文が垂下する。上半部に頸部無文帯が観察されることより、加曾利EⅡ式古段階カ。02は土器片錘である。7.8gを計る。小形の土器片錘で、全体に丁寧に削られている。

SI06 (第78図、図版29)

本遺構はA・B-3グリッドにおいて検出された。本遺構はSI05・07・17・SK04・06・59と重複しており、SK06に切られるものの、SI07・SK59を切っている。また、SI17は本遺構の上層にかぶっている。平面形状は不整形円形を呈し、長軸は不明、短軸2.27mを計る。確認面下の掘り込みの深さは64cm、覆土は自然堆積で2層に分層される。柱穴は3本検出されているものの配置は不明瞭である。炉は検出されていない。

本遺構に伴う遺物として掲載資料はない。

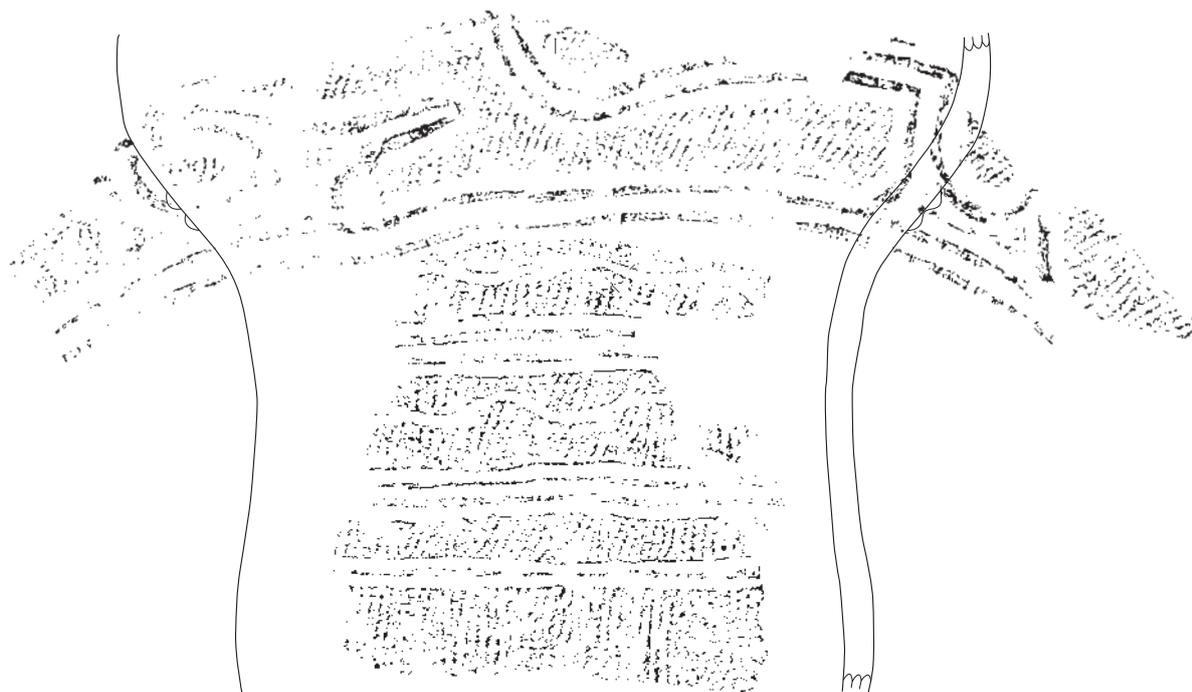
SI07 (第78・80図、図版28・29・83)

本遺構はA・B-3・4グリッドにおいて検出された。SI05・06・SK07・08・10・12・14と重複しているが、新旧関係は不明瞭である。平面形状は楕円形を呈し、長軸3.93mを計り、短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは19cm、覆土は自然堆積で2層に分層される。柱穴は9本検出され、概ね楕円形に配列される。炉は住居の中央やや西寄りに位置し浅い皿状の地床炉である。長軸72cmを計り、短軸は不明。床面は炉を中心に全面に硬化が見られる。

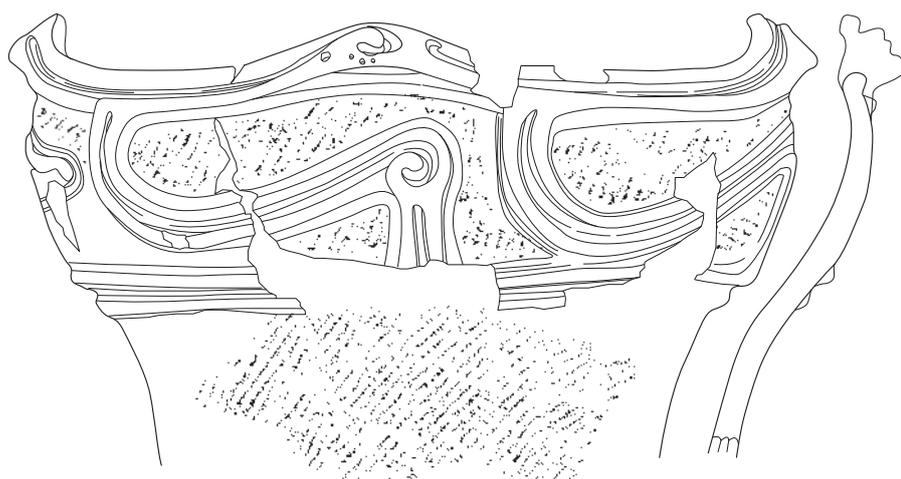
本遺構から出土した遺物は完形に近い深鉢2点と、胴部から頸部の破片資料1点、土器片錘1点、石鏃1点である。01はキャリパー形の深鉢口縁部文様帯から胴部にかけての資料である。口唇部および胴下半から底部は欠損している。頸部で緩やかにくびれた後胴部は下半に向かいやや下膨れとなる。口縁部文様帯には二重隆線によって頸部との区画がなされ、同じ二重隆線により剣先文、S字文様が描かれる。頸部には無文帯は有さず、横走る平行沈線によって多段に区分けされた内部に波状の沈線が描かれる。地文は単節LRの縄文がやや45°の方向に施文させ、縦方向の縄文を構成している。加曾利EⅠ式最古段階東京都駒木野遺跡例に酷似する。02は4単位の緩やかな波状を呈する深鉢の口縁から胴部上半の資料である。二重隆線により胴部と頸部は区画され、口縁部文様帯には同じ二重隆線によってS字の文様が描かれる。地文には0段多条のRLが縦方向に回転施文される。加曾利EⅠ式最古段階～古段階の資料と判断される。03は01・02と同様の頸部から胴部上半の破片である。頸部と胴部の境には、隆帯が1条巡る。地文は無節Rの縄文が口縁部では横方向に、胴部には縦方向に回転施文されている。加曾利EⅠ式古段階と判断される。04は土器片錘である。小形の土錘で、周縁はよく削り込まれている。重量は9.3gを計る。05は石鏃である。先端部を僅かに欠損する。外側が内湾する凹基三角鏃である。材質はチャートである。

P19-01～03は本住居内において検出されたピット出土遺物である。したがって、本遺構に伴う遺物と判断されるが、遺物の説明はピットの項で行った。

SI08・09 土坑と判断されたため、欠番である。



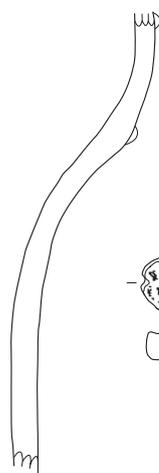
3-SI07-01



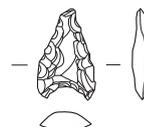
3-SI07-02



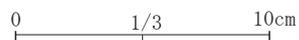
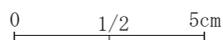
3-SK07-03



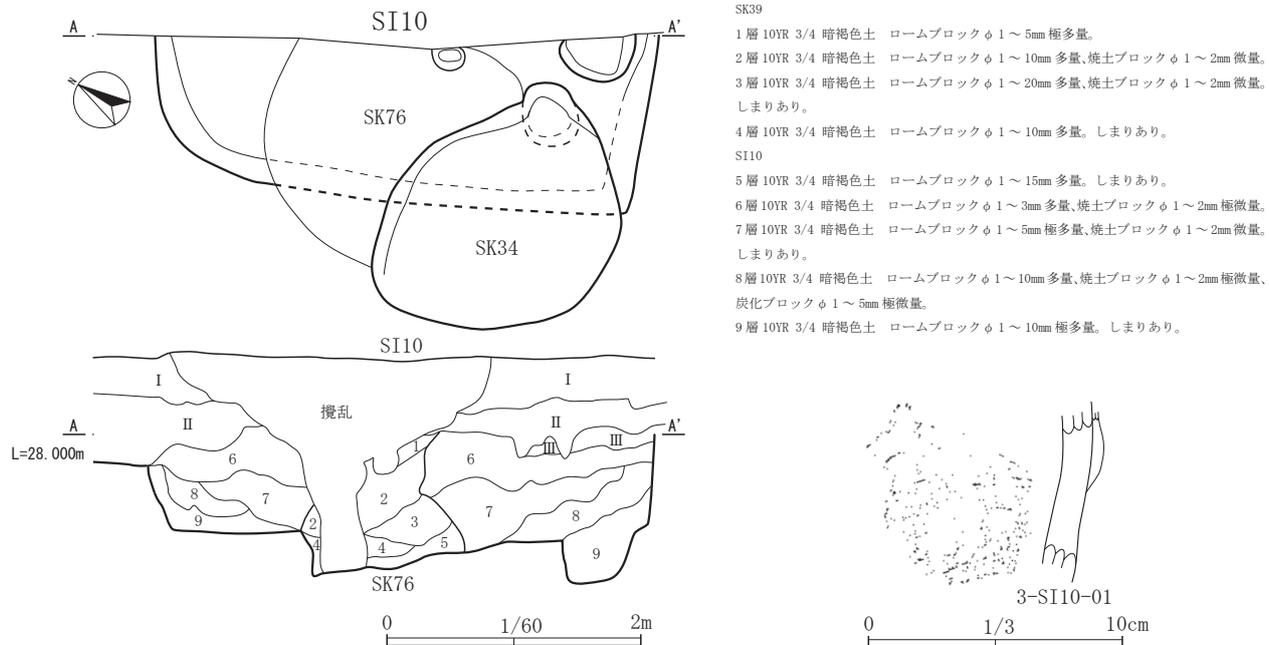
3-SI07-04



3-SI07-05



第 80 图 SI07 出土遺物



第81図 SI10・同出土遺物

SI10 (第81図、図版29・30・83)

本遺構はB-14グリッドにおいて検出された。SK34およびSK76によって切られている。平面形状は不明、東側調査区壁では3.96mを計る。確認面下の掘り込みの深さは50.2cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。柱穴は1本検出されている。炉は検出されていない。

本遺構から出土した遺物は僅かである。時期が判別できる資料として土器片1点を掲げた。

01は口縁直下から頸部付近の資料である。胴部には単節LRの縄文が施文される。口縁部は太い隆帯の貼付による渦巻文が描かれるものであろう。加曾利EⅢ式と判断される。

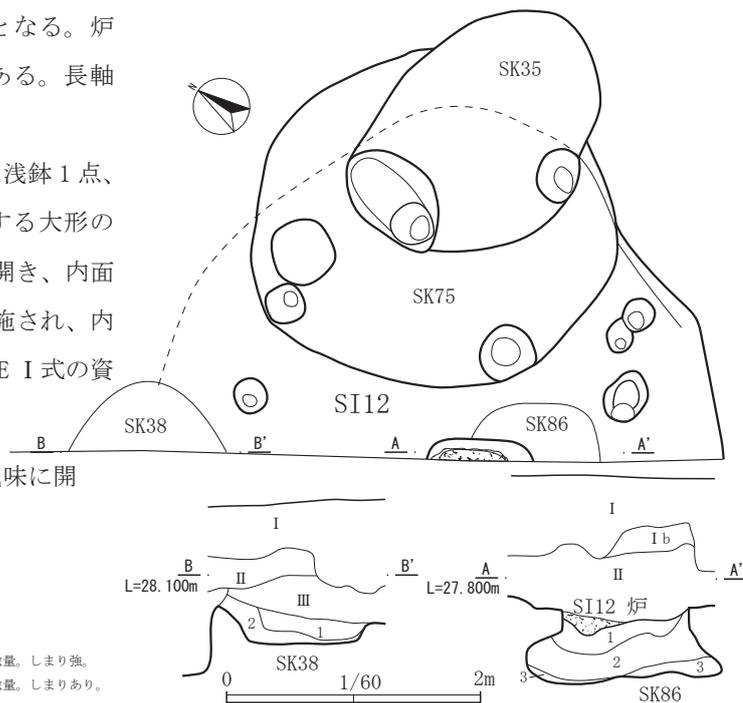
SI11 欠番である。

SI12 (第82・83図、図版30・83)

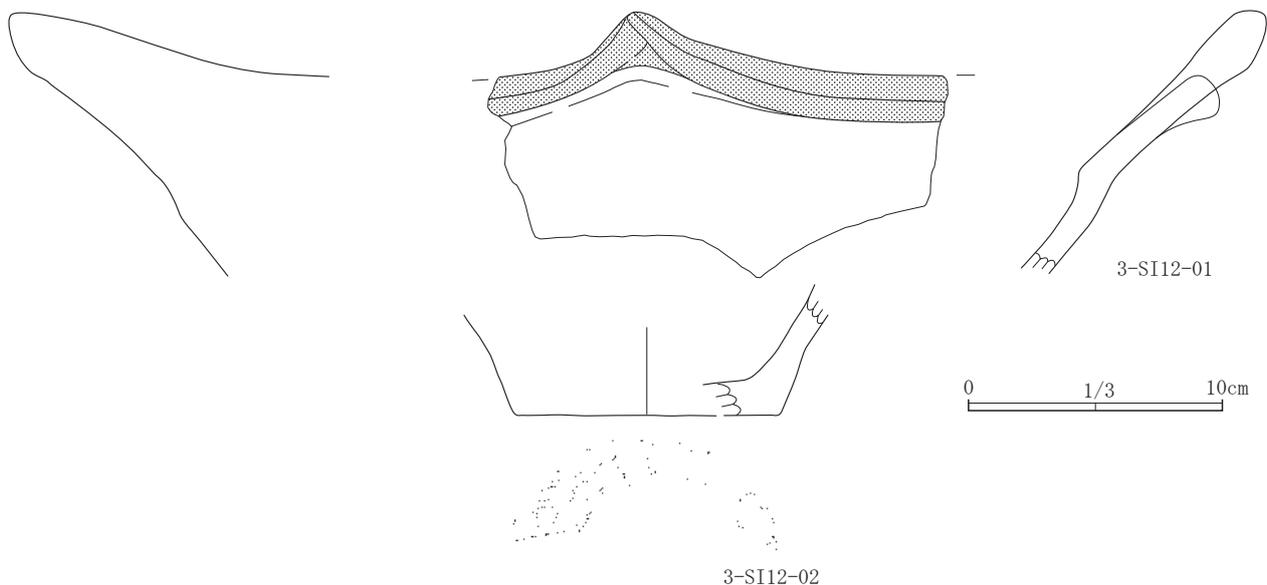
本遺構はA-14・15グリッドにおいて検出された。平面形状は西側が調査区域の外となり、さらにSK35・38・75に切られており、SK86を切る。円形を呈するものと判断される。長軸不明、短軸4.44m前後と推定される。柱穴は7本検出され、弧状に配列され、支柱穴となる。炉は住居の中央に位置し浅い皿状の地床炉である。長軸85.2cm、短軸は調査区外のため不明。

本遺構から出土した遺物で掲載した資料は浅鉢1点、深鉢底部1点の2点である。01は波状を呈する大形の浅鉢で4単位の波状を呈する。口縁は大きく開き、内面に段を有する。口唇部および内面には赤彩が施され、内面はよく磨かれている。阿玉台Ⅳ式~加曾利EⅠ式の資料と判断される。

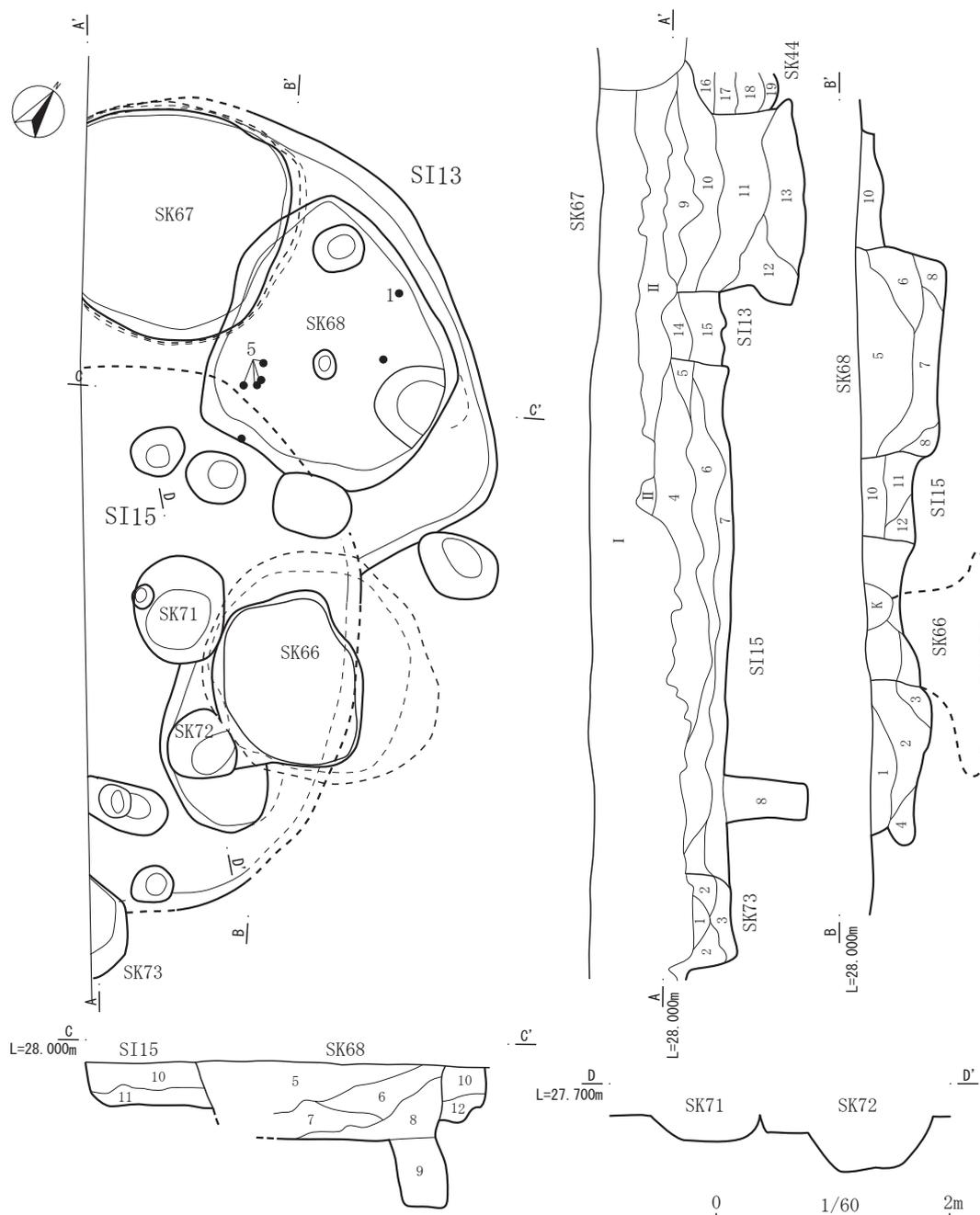
02は深鉢底部の資料である。胴部は外反気味に開く。底部には木葉痕が残る。胴下半部は無文。



第82図 SI12・SK35・38・75・86



第83图 SI12 出土遺物



第84图 SI13・15・SK66・67・68・71・72・73

SI13・15・SK44・66・67・68・73

- 1層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～2mm 中量。
- 2層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～5mm 多量、焼土ブロックφ1～3mm 微量。
- 3層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～5mm 多量。しまりあり。
- 4層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～2mm 極多量、焼土ブロックφ1～2mm 微量、炭化物ブロックφ1～3mm 極微量。
- 5層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～2mm 中量。
- 6層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～3mm 極多量、焼土ブロックφ1～5mm 少量、炭化物ブロックφ1～3mm 極微量。
- 7層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～20mm 多量、炭化物ブロックφ1～5mm 極微量。しまりあり。
- 8層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～5mm 極多量。
- 9層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～2mm 多量、焼土ブロックφ1～5mm 極微量。

- 10層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～3mm 極多量、焼土ブロックφ1～2mm 極微量。
- 11層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～10mm 極多量、焼土ブロックφ1～2mm 微量、炭化物ブロックφ1～3mm 少量。
- 12層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～20mm 極多量。
- 13層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～100mm 多量、焼土ブロックφ1～3mm 微量。
- 14層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～3mm 中量。
- 15層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～5mm 中量、焼土ブロックφ1～3mm 極微量、炭化物ブロックφ1～5mm 極微量。
- 16層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～5mm 極多量、焼土粒子φ1～10mm 極微量。
- 17層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～3mm 極多量、炭化物ブロックφ1～3mm 極微量。
- 18層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～5mm 極多量。しまりあり。
- 19層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～10mm 多量、炭化物φ1～5mm 極微量。しまりあり。

SI13 (第84図、図版30・31)

本遺構はA-15・16グリッドにおいて検出された。本遺構はSI15・SK67・68によって切られており、平面形状は不整形円形を呈すると思われるが詳細不明である。長軸は不明、短軸4.57mを計る。確認面下の掘り込みの深さは47cm、覆土は自然堆積で2層に分層される。柱穴および炉は検出されていない。

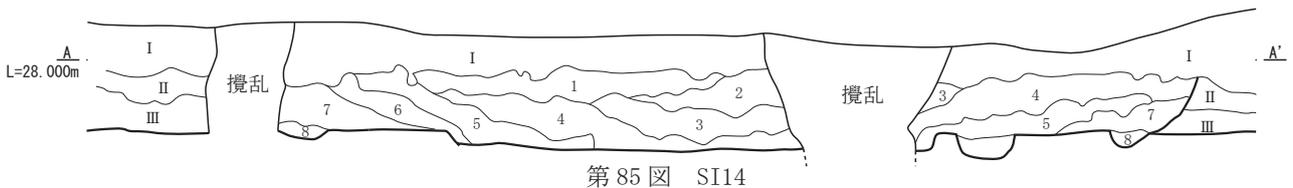
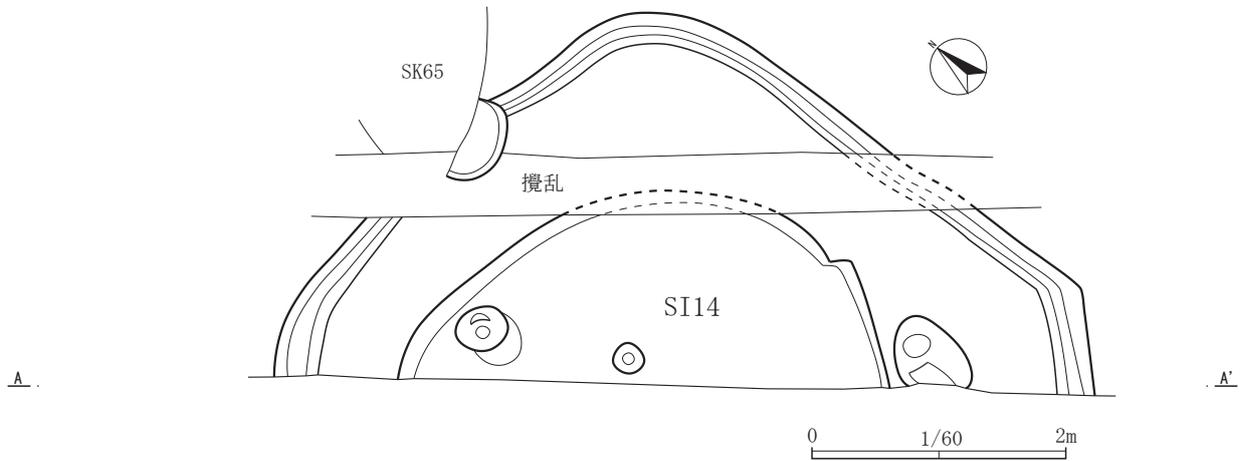
本遺構に伴う掲載遺物はない。

SI14 (第85・86図、図版31・83)

本遺構はA・B-24・25グリッドにおいて検出された。平面形状は隅丸方形を呈し、住居跡中央部分に1段低い床面を持つ。長軸は不明、短軸は4.06mを計る。確認面下の掘り込みの深さは57cm、覆土は自然堆積で8層に分層される。柱穴は3本検出されている。炉は検出されていない。外面壁際には壁溝が全周している。

本遺構から出土した遺物で、時期が判別できる資料は2点のみであった。いずれも深鉢の資料で01は口縁部、02は口縁直下の文様部下半の資料である。いずれも隆帯に沿って角押文が施文されている。阿玉台式土器と判断される。

住居跡の構造が2段に掘り込まれる類例は、阿玉台式期において通有に見られるものである。



SI15 (第84・87図、図版30・32・83)

本遺構はA-16グリッドにおいて検出された。SI13・SK66・68・71・72・73と重複しており、SI13が最も古くSI15が次に新しい。土坑はすべて住居跡を切っている。平面形状は円形を呈するものと思われる。長軸4.74m、短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは42cm、覆土は自然堆積で8層に分層される。柱穴は4本検出されている。炉は検出されていない。

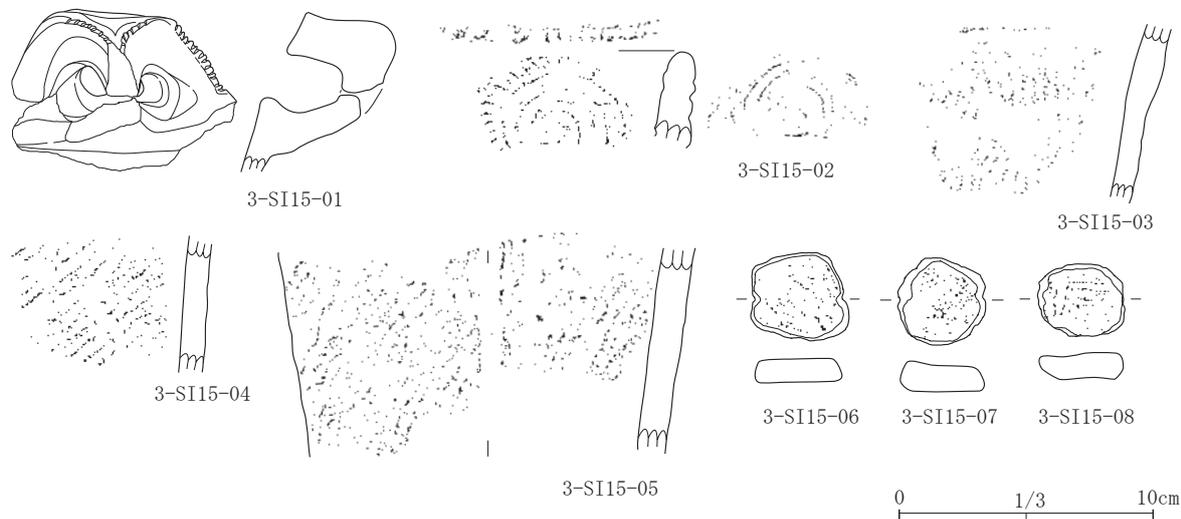
本遺構から出土した遺物で、掲載した遺物は土器資料5点、土製品の土器片錘3点である。

01・02は把手部分の資料である。01では隆帯による眼鏡状の把手で、端部に刻みが施されている。02は円形の扇状把手で、内外面に沈線による渦巻文様が描かれる。また円形の縁辺部には刻みが施される。

03～05は深鉢胴部の破片である。03では縦方向を意識した単節縄文が施文される。04では単節RLの縄文が縦方向に回転施文され、蛇行沈線が垂下する。05ではやはりRLの縄文が縦方向に回転されるもので、2本の沈線による懸垂文が垂下する。

これらの資料は加曽利E I式段階に比定されるものであろう。

06～08は土器片錘である。06は15.1g、07は14.5g、08は11.2gを計る。いずれも側面の調整が粗い。



第87図 SI15 出土遺物

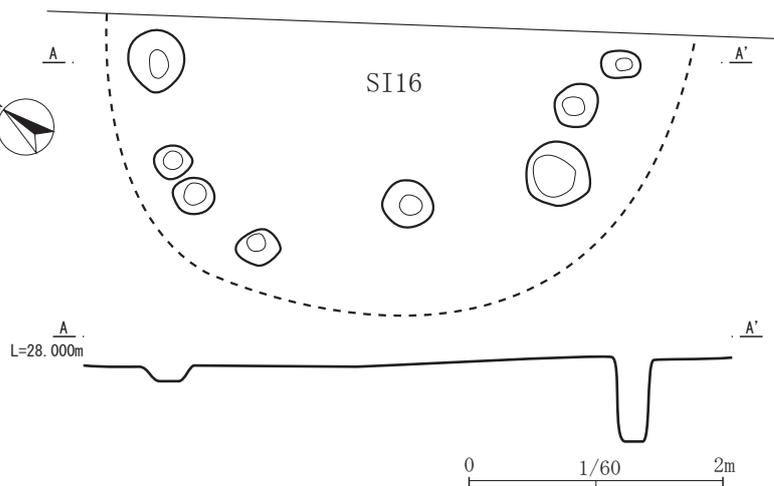
SI16 (第88・89図、図版32・84)

本遺構はB-7・8グリッドにおいて検出された。平面形状は円形を呈し、直径4.68mを計る。本遺構は遺構確認面において弧状に並ぶ柱穴8本をもって住居跡とした。炉は検出されていない。

本遺構から出土した遺物は、総重量20668.9gと大量に出土している。このうち土器・土製品7点について掲載した。

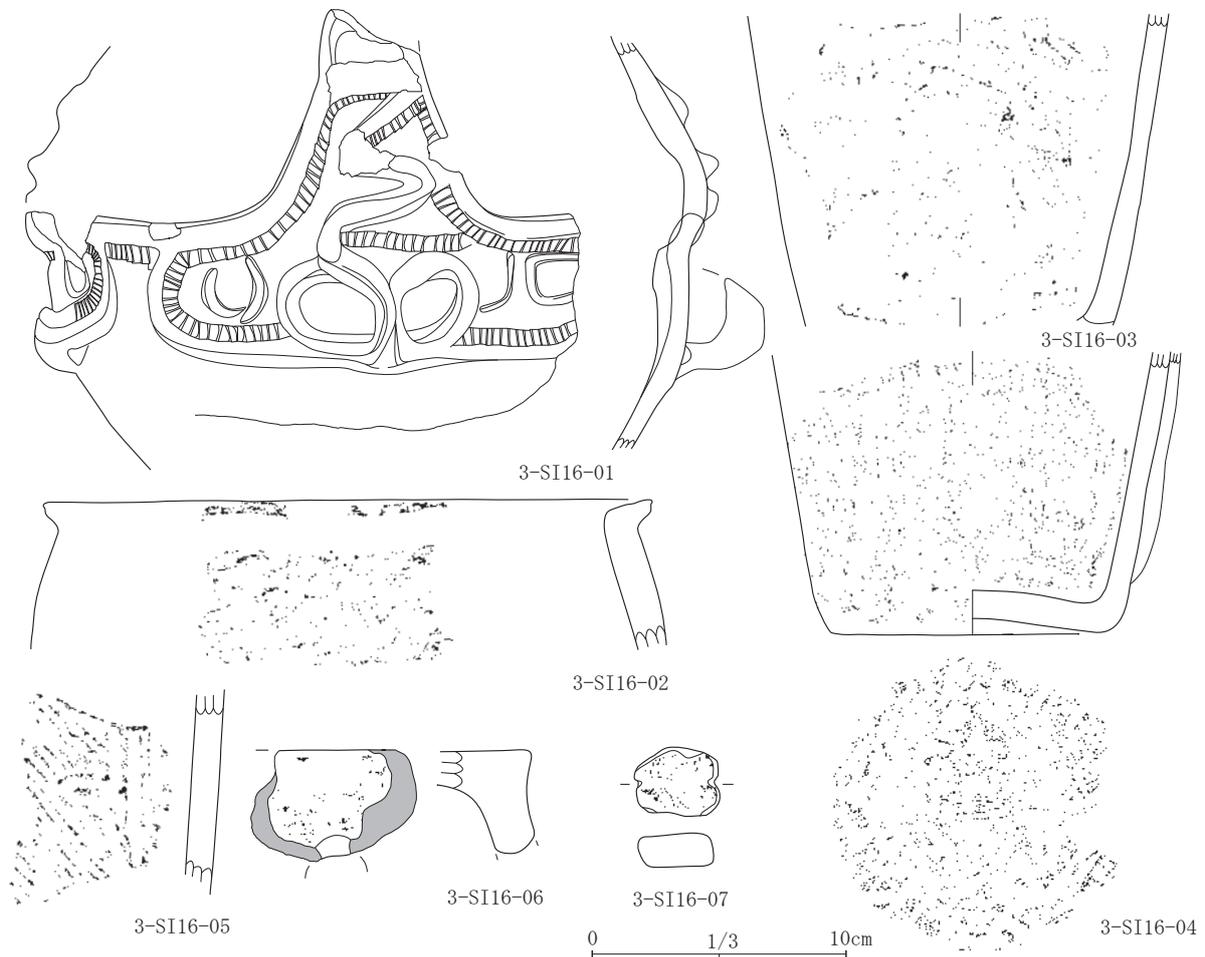
01は大波状の4単位把手を有する深鉢口縁部から胴上半部の資料である。把手

はやや内湾気味に立ち隆帯に沿ってキャタピラ状の角押文が施文される。隆帯により窓枠状の区画が設けられ、内部には沈線が充填される。また、突起の直下には波頂部から蛇行する隆帯と連結して眼鏡状の突起が付される。胴部は無文。阿玉皿Ⅲ式であろう。02は内傾する口縁部で口唇部は直角に屈曲して開く。胴部は無文。勝坂式系カ。03・04は胴下半部～底部にかけての資料である。03では無文で胴下半は筒状を呈する。04は同様にあまり開かない胴部～底部の資料であるが、胴部には隆帯が垂下し、隆帯に沿って角押文が施文される。底部には網代状の圧痕



第88図 SI16

が施されている。阿玉台Ⅱ～Ⅲ式と判断される。05は深鉢胴部の破片である。直線的に立つ部分で、胴下半であろう。無節の縄文Lが縦方向に回転施文され、沈線によりトの字文が施文される。加曾利EⅠ式古段階であろう。06は台形土器である。台部から脚部へと屈曲する部分の細片である。台部は平坦で平滑に仕上げられる。脚部はほぼ垂直に垂下し、下端に円孔が穿たれている。破片の為に径・高さ共に不明である。07は土器片錘である。無文部の破片を用いている。重量は13.0gを計る。



第89図 SI16出土遺物

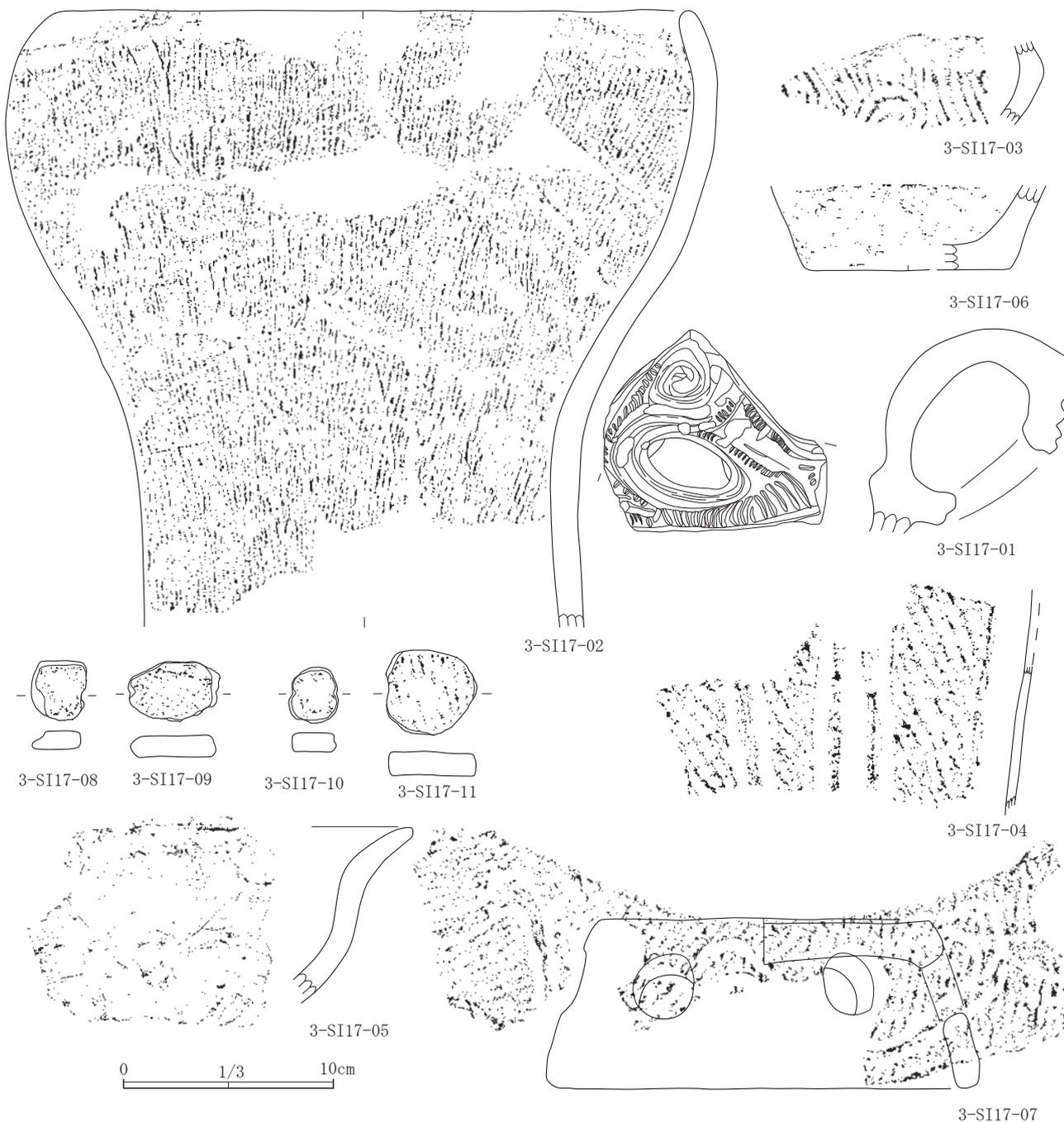
SI17 (第78・90図、図版32・83)

本遺構はA・B-2・3グリッドにおいて検出された。本遺構はSI05・06・SK01・02・03・05・06と重複している。この内SK06は本住居跡よりも古く、その他は新しい。平面形状は不明。柱穴は6本、弧状に配されている。炉は住居の西側に位置し浅い皿状の地床炉である。長軸は不明、短軸55cmを計る。

本遺構からは遺物が9743g出土している。第78図に掲載した遺構の中でSK06上層に出土した遺物は、本遺構に伴うものと判断した。このうち時期形状の判る遺物11点について掲載した。

01は円環状の把手部分である。単位数は不明であるが、外傾して土器の口縁に付されている。頂部に渦巻を配し、端部には刻みを施し、隙間には太い沈線が縦方向に充填される。広義の中峠式に含まれるものであろう。02は深鉢形土器の口縁から胴下半にかけての資料である。口縁部から頸部にかけて大きく内湾する。胴部は下方に向かいやや外反気味に開く。口縁直下に僅かながら無文部があるが、後は全面に縦方向の条線を意識する撚糸が施文される勝坂式土器(井戸尻式3段階)であろう。下半部は欠損するが底部はそろばん玉状に張る可能性がある。03は内湾する頸部の破片である。口縁部は無文帯となり、以下は沈線による文様が描かれる。勝坂式と判断される。04は磨消懸垂文が施文される胴部の破片である。加曾利EⅡ式。混入資料であろう。05は浅鉢口縁部の破片である。口縁は大きく外反して開く。内外面共に無文である。形状から判断できないが出土遺物のセットから勝坂式と判断される。

06 は深鉢底部。無文で時期形式は不明。07 は台形土器である。台部はやや中央がくぼみ、平滑に成形されている。脚部は直線的にやや開き気味になる。端部は丸みを帯びる。側面には全面に単節 LR の縄文が施文された後、2本の沈線により波状の文様が全体に巡る。その後、脚部には6個の円孔が等間隔に穿たれている。内面の整形は比較的粗い。08～11 は土器片錘である。胴部の破片を用いるもので、形はあまり整ってはいない。重量は08は7.3g、09は14.8g、10は7.6g、11は22.0gを計る。



第90図 SI17 出土遺物

SI18 (第157図)

本遺構はB-16・17グリッドにおいて検出されている。SK69・70と重複しており、いずれの土坑からも切られている。したがって、本遺構の形状・規模については不明である。さらに、本遺構に伴う遺物も確認されていない。

遺構図面はSK69・70と併記した。

2 土坑 (SK)

SK01 (図版 33)

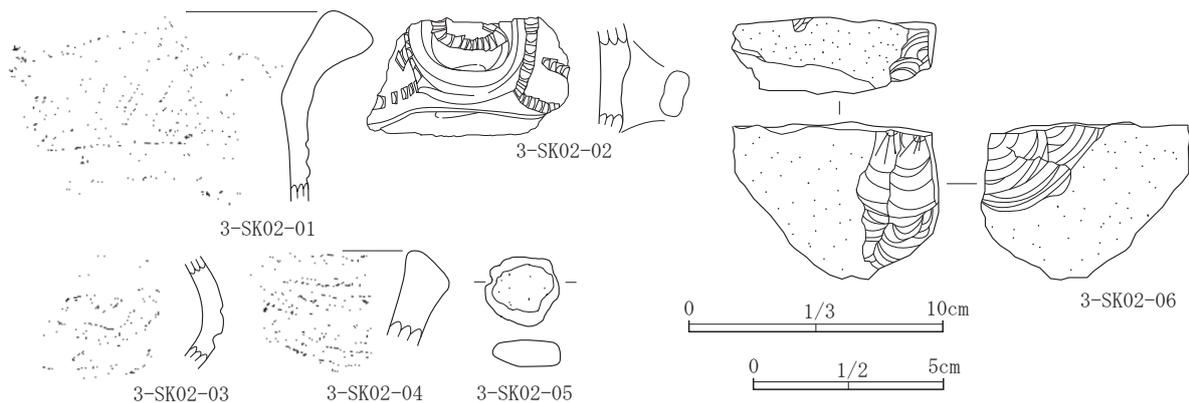
本遺構は A-2 グリッドにおいて検出されたものであるが、遺物の出土もなく、割愛した。

SK02 (第 78・91 図、図版 33・85)

本遺構は A-2 グリッドにおいて検出された。平面形状は不明。確認面下の掘り込みの深さは 36 cm を計る。

本遺構から出土した遺物は土器・土製品 5 点、石器 1 点について掲載した。全体に明瞭な資料が少なく、時期の判別できる資料のみ提示した。

01 は胴部から口縁部にかけての破片である。胴部は直立気味で、口縁部は屈曲し、くの字に外反する。口縁部は三角形に肥厚し平坦に面取られる。口縁部は無文。頸部は単節 RL の縦回転施文。胴部との境には竹管による平行沈線が 2 条巡る。勝坂式と判断される。02 は円環状の突起を有する口縁部文様帯の破片である。隆帯により区画された内部には、角押文が 1 条描かれる。阿玉台式後半と判断される。03 は口縁部直下の破片で、口縁直下に無文部を有す。太い沈線により渦巻文が描かれる。渦巻により残された隆起部分には単節 RL の縄文が施文される。阿玉台 IV 式。04 は 01 同様の断面三角形の口縁部の破片である。隆帯状の突起直下には、キャタピラ状の角押文が施文される。勝坂式。05 は土器片錘である。重量は 10.7g を計る。06 はチャートの石核である。板状を呈する原石を用いるもので、端部に打撃を加えて打面を形成した後、縦長の剥片を 2 枚剥がしている。



第 91 図 SK02 出土遺物

SK03 (第 78・92 図、図版 33・85)

本遺構は B-3 グリッドにおいて検出された。北側に SI17 の柱穴が重複し、本遺構を切っている。平面形状は東側が調査区外となるため不明。長軸 2.25 m を計り、短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは 30 cm、覆土は自然堆積で 7 層に分層される。

本遺構で出土した遺物で器形・時期が判別できる 6 点の資料を提示した。

01 は深鉢口縁から胴上半部の資料である。外反気味に開く胴部は口縁で緩やかに内湾する。口唇端部はやや平坦に面取りされる。口縁部の文様帯には隆線により退化した渦巻文が描かれる。胴部は、やや幅の狭い磨消懸垂文が垂下する。02～04 は 01 同様の渦巻部分の破片で、いずれも口縁部直下に配されている。加曽利 E III 式古段階である。

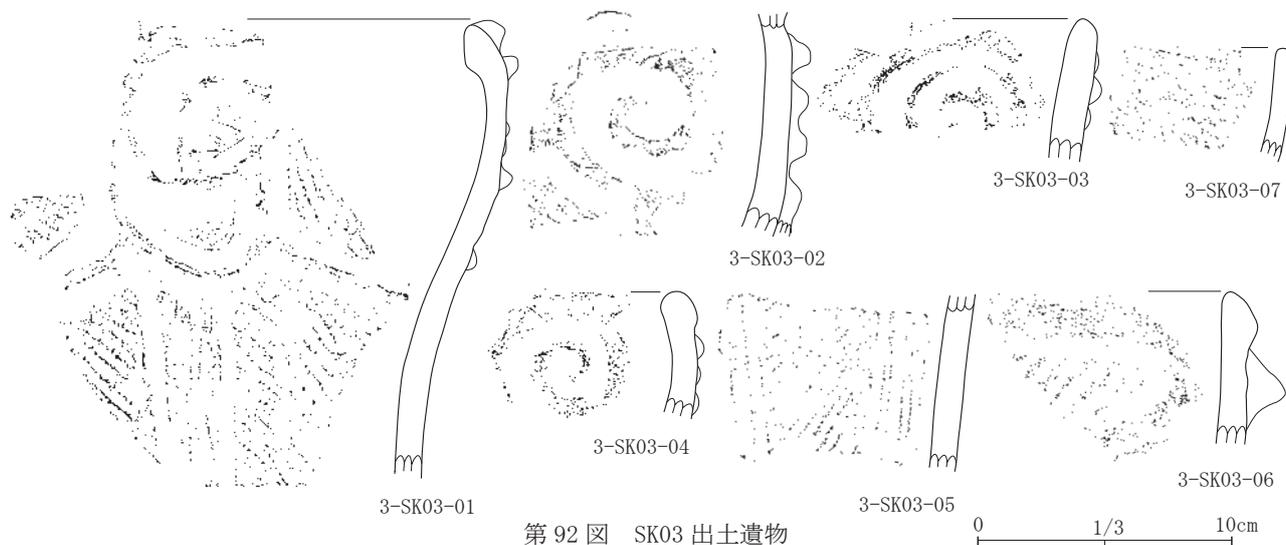
05 は深鉢胴部下半の破片である。単節 RL の縄文を縦方向に回転施文し、3 本の沈線による懸垂文が垂下する。加曽利 E II 式段階であろう。

06 は隆帯により窓枠状の区画が設けられる口縁部の破片である。口縁部はやや三角形に尖り、内面に平坦な面

取りが行われる。区画内にはLの無節縄文が充填される。加曾利E式であろう。

07はやや内湾気味に立つ口縁部の破片である。外面には複節の縄文が無作為に施文するものである。口縁内面に沈線は見られない。堀之内式土器の可能性はある。

本遺構は出土遺物から加曾利EⅢ式古段階と判断される。



第92図 SK03 出土遺物

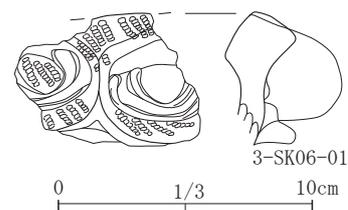
SK04・05 (図版33)

本遺構はA-2・3グリッドにおいて検出されたものであるが、遺物の出土もなく、割愛した。

SK06 (第78・93図、図版34・85)

本遺構はA-2・3グリッドにおいて検出された。SI05・06・17・SK05と重複している。これらの中で最も古いものと思われる。平面形状は不明、長軸は不明、短軸1.96mを計る。確認面下の掘り込みの深さは40.5cmを計る。

本遺構からは僅か150g程度の遺物が出土している。このうち深鉢突起部分の破片01の1点のみ提示した。隆帯により眼鏡状の隆帯を作り、隆帯上には単節RLの縄文が施文される。阿玉台Ⅳ式段階であろう。



第93図 SK06 出土遺物

SK07 (第78・94図、図版34・85)

本遺構はB-3グリッドにおいて検出された。SI07・SK10と重複するが、新旧関係は不明である。平面形状は円形を呈し、長軸1.1m、短軸0.84mを計る。確認面下の掘り込みの深さは59cmを計る。

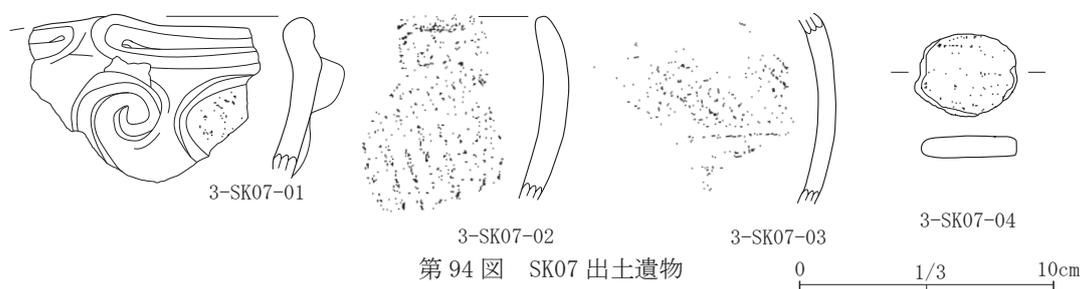
本遺構から出土した遺物は、2591gである。この内4点について掲載した。

01は深鉢口縁部の破片である。緩やかな波状を呈する。口縁部は緩やかに内湾し、口唇部で短く屈曲してくの字に内屈する。口縁部文様帯には渦巻状の隆帯を貼り付けを行う。隆帯による窓枠状の区画の内部には僅かながら縄文が観察される。加曾利EⅢ式新段階。

02は内湾する口縁部の破片。口唇直下より全面に縦方向の条線が施文される。加曾利E式であろう。

03は大きく内湾する胴部下半の資料である。磨消懸垂文が垂下し、単節LRの縄文が施文されている。加曾利EⅢ式新段階と判断した。

04は土器片錘である。胴部の懸垂文の部分であろう。重量は15.1gを計る。



第94図 SK07 出土遺物

SK08 (第78図、図版34)

本遺構はB-4グリッドにおいて検出された。SI07と重複する。新旧関係は不明。平面形状は楕円形を呈するものと思われる。長軸は不明、短軸1.51mを計る。確認の掘り込みの深さは58cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。本遺構の掲載遺物はない。

SK09 (第102図)

本遺構はA・B-5グリッドにおいて検出された。SI01・SK18と重複する。平面形状は不明。確認の掘り込みの深さは44cmを計る。本遺構の掲載遺物はない。

SK10 (第78図、図版34)

本遺構はB-4グリッドにおいて検出された。SK07・08と重複しており、SK08に切られている。平面形状・長軸・短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは64cmを計る。

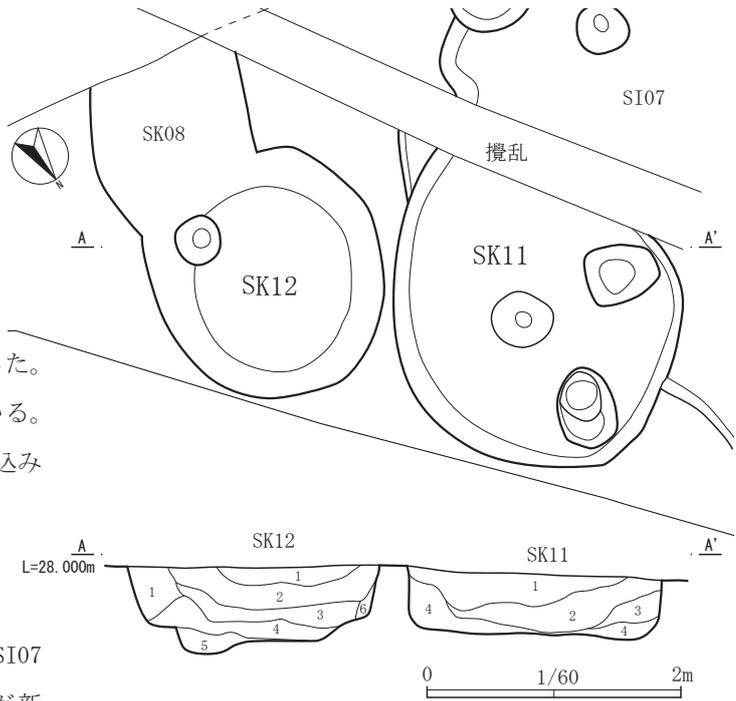
本遺構から遺物は出土していない。

SK11 (第95・96図、図版34・85)

本遺構はB-4グリッドにおいて検出された。SI07と重複する。SI07を切っており、本遺構の方が新しい。平面形状は楕円形を呈し、長軸不明、短軸1.43mを計る。確認面下の掘り込みの深さは29cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。断面形状は鍋底状を呈する。

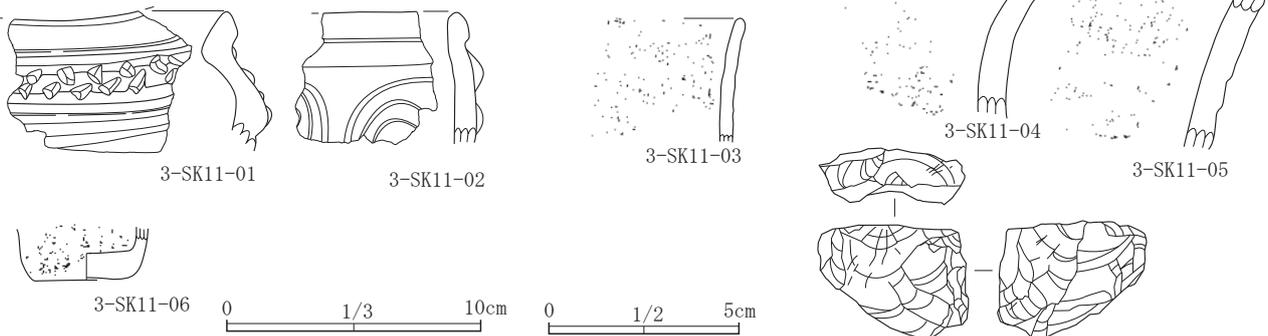
01は口縁部の破片である。頸部で緩やかに内湾した後口縁部はくの字に屈曲して開く。口縁部文様帯は口唇部に無文部を有し、直下に隆線で囲まれる

内部に交互刺突文が配される。広義の中峠式。02は直立気味に立つ口縁。外面には太い隆線による貼り付けが行われ円形の区画文が描かれる。勝坂式カ。03は外反気味に開く口縁部の破片である。口唇部の折り返しは無い。口唇部に僅かながら無文部を有した後、縦方向の条線が平行沈線を用いて描かれる。阿玉台IV式カ。04は外反する口縁部の破片である。口縁直下にやや幅広の無文部を有し、以下に単節LRの縄文を施文する。勝坂式系カ。05は04と同一個体か、外反する頸部下半の土器である。04同様の縄文が縦方向を意識して回転施文されている。頸部には太い沈線が3条巡って、胴部と画している。06は小形の深鉢底部である。3条の懸垂文が胴部下端にまで施文される。加曽利E II式のミニチュア土器カ。07はチャートの石核である。折面を打点にして縦方向に複数の剥片を剥がしている。



第95図 SK11・12

- | | | |
|------|-------------------|--|
| SK11 | 1層 10YR 2/1 黒褐色土 | ロームブロックφ2~20mm微量、炭化物ブロックφ2mm少量。しまりあり。 |
| | 2層 10YR 1.7/1 黒色土 | ロームブロックφ2~20mm少量、炭化物ブロックφ2mm少量。しまりあり。 |
| | 3層 10YR 2/1 黒褐色土 | 炭化物ブロックφ2mm極微量。 |
| | 4層 10YR 1.7/1 黒色土 | ロームブロックφ2~20mm中量、炭化物ブロックφ2mm極微量。しまりあり。 |
| SK12 | 1層 10YR 2/1 黒褐色土 | ロームブロックφ2~20mm少量、炭化物ブロックφ2mm少量。しまりあり。 |
| | 2層 10YR 2/1 黒褐色土 | ロームブロックφ2~20mm中量、炭化物ブロックφ2mm少量。しまりあり。 |
| | 3層 10YR 3/1 黒褐色土 | ロームブロックφ2~10mm少量、炭化物ブロックφ2mm微量。しまりあり。 |
| | 4層 10YR 2/1 黒褐色土 | ロームブロックφ2~20mm中量、炭化物ブロックφ2mm少量。しまりあり。 |
| | 5層 10YR 1.7/1 黒色土 | ロームブロックφ2~20mm中量、炭化物ブロックφ2mm少量。しまりあり。 |
| | 6層 10YR 2/3 黒褐色土 | ロームブロックφ2~10mm多量、炭化物ブロックφ2mm多量。しまりあり。 |



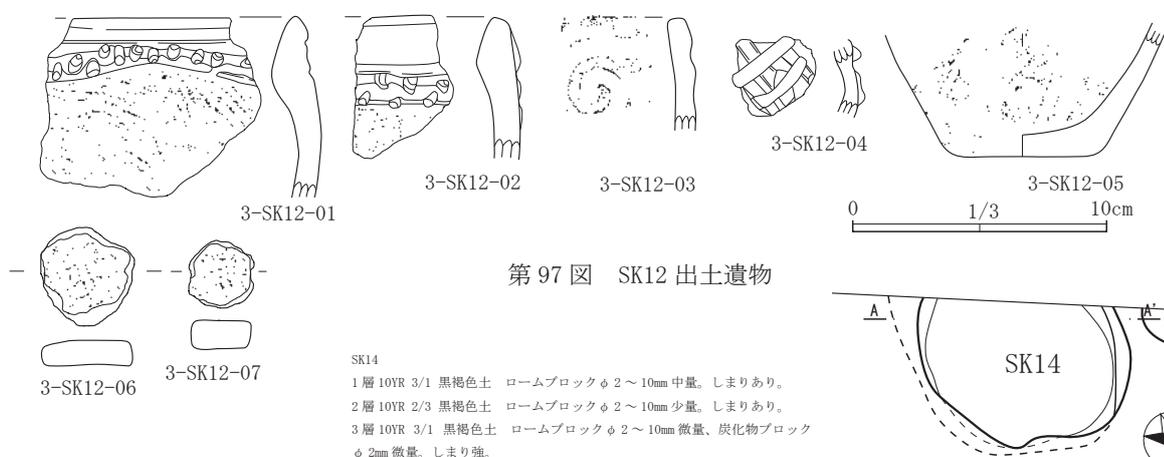
第96図 SK11 出土遺物

SK12 (第95・97図、図版35・85)

本遺構はB-4・5グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸1.22m、短軸1.11mを計る。確認面下の掘り込みの深さは50.3cm、覆土は自然堆積で6層に分層される。断面形状は鍋底状を呈する。南壁寄りに小ピットが1基穿たれている。

本遺構から出土した遺物は3975gである。この内269.7g、7点について提示した。

01・02は深鉢口縁部の破片である。いずれも直立気味の口縁で、内面に僅かな段を有する。01では口縁直下の無文帯はほとんどなく、02ではやや幅広の無文帯の下に、それぞれ1列の交互刺突列が横方向に施文される。地文は01で無節のL、02では単節縄文が施文されている。加曾利EⅢ式平行の連弧文様式土器に見られる手法である。03は口縁部の渦巻文である。太い沈線によりシャープに描かれている。加曾利EⅡ式新段階であろう。04は粘土紐を格子目状に貼り付ける、口縁直下の資料である。曾利Ⅱ式の影響を感じさせる。05はやや開き気味に立つ底部から胴部下半の資料である。胴部最下端にまで磨消懸垂文が描かれている。加曾利EⅢ式であろう。06・07は土器片錘である。いずれも上面に縄目が残る。重量は06は16.3g、07は9.1gを計る。

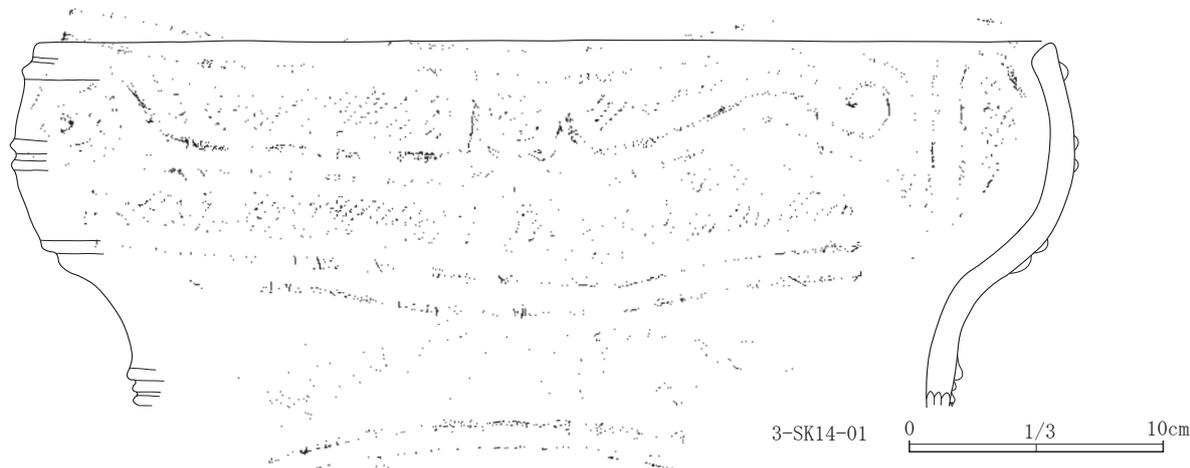
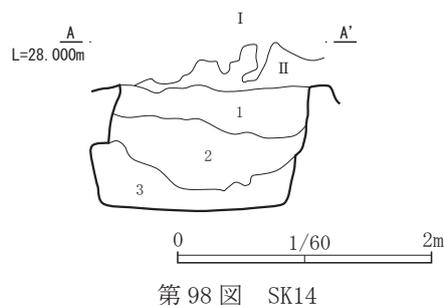


SK13 欠番である。

SK14 (第98・99図、図版35・85)

本遺構はA-4グリッドにおいて検出された。平面形状は不整円形を呈し、長軸不明、短軸1.66mを計る。確認面下の掘り込みの深さは96cm、覆土は自然堆積で3層に分層される。

本遺構からは1391gの遺物の出土があった。この内01の遺物は1308gを計り、本遺物の他には細片が僅かに出土したのみである。



01はキャリパー形の深鉢である。口縁は平縁で、口縁部文様帯には単節LRの縄文を施文した後に、二重隆線により横S字と剣先文同士が剣先で合体した文様が描かれる。口縁部並びに、頸部との境にも同様の隆帯が貼付される。頸部は無文帯となる。頸部と胴部の境にはやはり同じ二重隆線が巡る。突起部の剥落は確認できない。形状、文様構成から加曾利E I式古段階の資料と判断される。

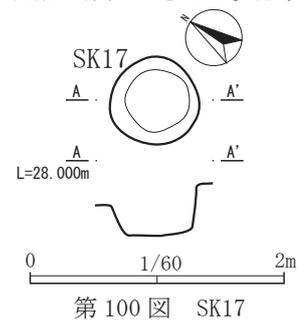
SK15・16 欠番である。

SK17 (第100・101図、図版86)

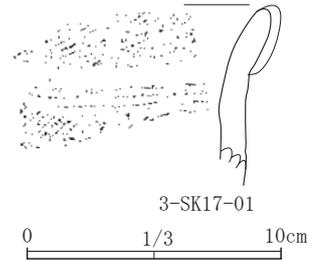
本遺構はA-4グリッドにおいて検出された。平面形状は円形を呈し、直径72cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは36cm、断面形状は鍋底状を呈する。

本遺構から出土した遺物の総量は183.7gと僅かである。この内1点(65.5g)のみ掲載した。

01は直立する胴部で、口縁は内面に段を有し緩やかに屈曲して開く。口縁部は折り返し隆帯状になる。外面胴部には沈線が2条巡り、口縁部および沈線の下は単節LRの縄文が施文される。阿玉台IV式段階であろう。



第100図 SK17



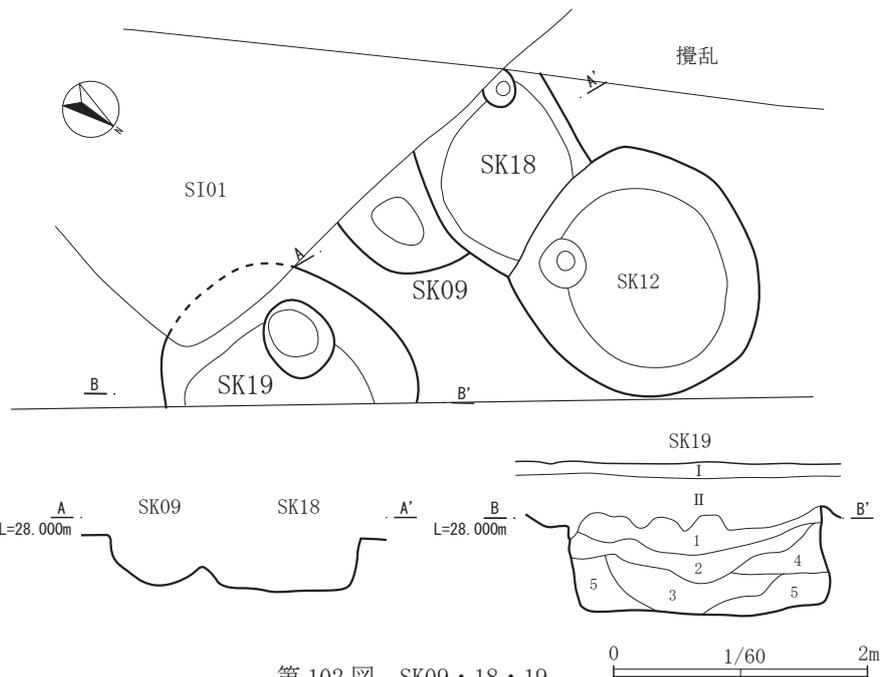
第101図 SK17出土遺物

SK18 (第102・103図、図版35・86)

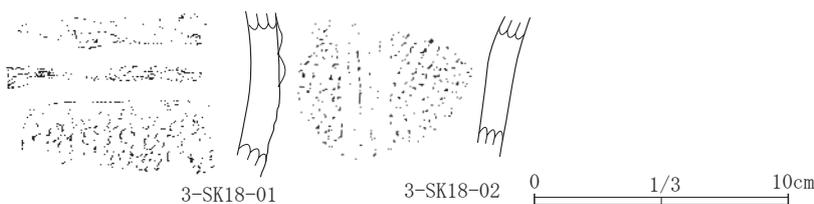
本遺構はA・B-4・5グリッドにおいて検出された。SI01およびSK09・12と重複する。SK09よりも新しく、SI01・SK12よりも古い。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸不明、短軸1.38mを計る。確認面下の掘り込みの深さは44cmを計る。

本遺構からは852gの遺物が出土している。この内時期が明瞭な破片2点について示した。

01は口縁部直下の区画帯の破片である。太い沈線によって長方形に区画され内部には単節LRが充填される。加曾利E II式新段階。02は胴部上半の資料である。大きく外反して開く。LRの縄文が施文された後、縦方向の3本線による磨消懸垂文が施文される。加曾利E II式段階であろう。



第102図 SK09・18・19



第103図 SK18出土遺物

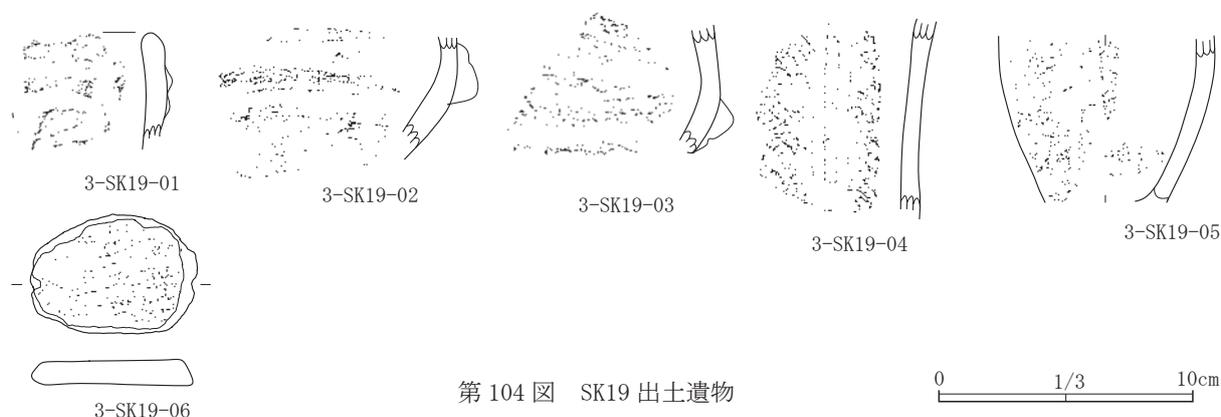
- SK19
- 1層 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロックφ2~10mm少量、炭化物ブロックφ2mm微量。しまり強。
 - 2層 10YR 2/1 黒褐色土 ロームブロックφ2~20mm微量、炭化物ブロックφ2mm少量。しまり強。
 - 3層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ2~10mm中量。しまり強。
 - 4層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~3mm多量。しまり強。
 - 5層 10YR 2/3 黒褐色土 ローム粒子φ2~10mm極多量。しまり強。

SK19 (第102・104図、図版35・86)

本遺構はB-5グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸は不明、短軸2.13mを計る。確認面下の掘り込みの深さは63cm、覆土は自然堆積で5層に分層される。断面形状はやや袋状を呈する。

本遺構から出土した遺物は、3665.9gと比較的多量の遺物が出土している。大半が細片で時期・器形が判別できる資料は提示した6点である。

01は直立気味に立つ深鉢口縁部の破片である。やや太い隆帯の貼付により区画帯が設けられ渦巻が描かれる。加曾利EⅡ式であろう。02は頸部の破片である。口縁部文様帯と頸部の境には太い隆帯が貼り付けられる。頸部は無文。加曾利EⅡ式カ。03は口縁部文様帯の下半部の破片であろう。隆帯により文様が描かれ、隆帯上にはRLの縄文が施文される。阿玉台IV式カ。04は外反気味に立つ胴部の破片である。縦方向に2本の沈線による懸垂文が垂下し、懸垂文の間には縦回転の縄文LRが充填される。加曾利EⅡ式であろう。05はミニチュア土器の深鉢胴部下半の破片である。地文に単節LRの縄文を施文した後に、2本の沈線による磨消懸垂文が垂下する。加曾利EⅡ～Ⅲ式であろう。06は楕円形を呈する土器片錘である。胴部の破片を用いるもので、器面には単節縄文が僅かに残る。重量は37.4gを計る。



第104図 SK19 出土遺物

SK20 欠番である。

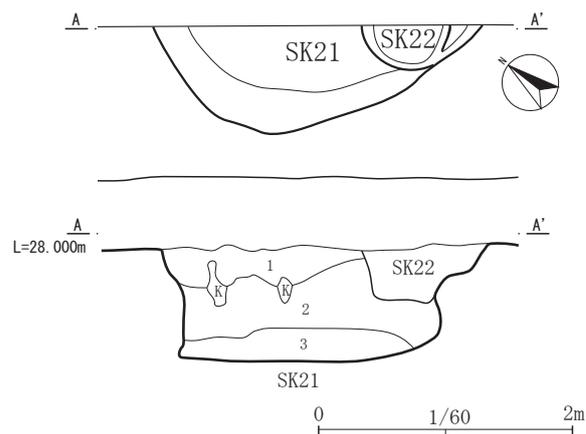
SK21 (第105図、図版35・36)

本遺構はB-6グリッドにおいて検出された。SK21・22は重複関係にあり、SK22が21を切る。平面形状は不明、長軸は2.6mを計り、短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは94cm、覆土は自然堆積で3層に分層される。断面形状はやや袋状を呈する。

本遺構の掲載遺物はない。

SK21

- 1層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ2～10mm 極多量、炭化物ブロック極微量。しまり強。
- 2層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ2～10mm 極多量。しまり強。
- 3層 10YR 1.7/1 黒色土 ロームブロックφ2～50mm 少量、炭化物ブロック極多量。しまり強。

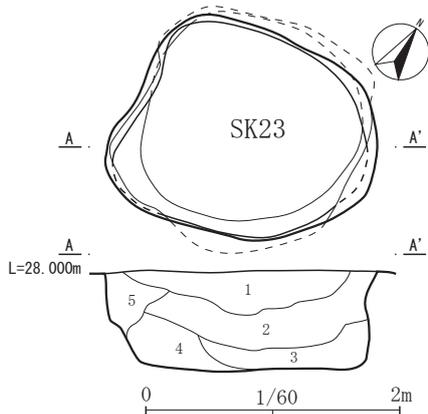


第105図 SK21・22

SK22 (第105図、図版35)

本遺構はB-6グリッドにおいて検出された。SK21・22は重複関係にあり、SK22が21を切る。平面形状は不明、長軸は1.01mを計り、短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは39cmを計る。

本遺構の掲載遺物はない。



第106図 SK23

SK23 (第106図、図版36)

本遺構はB-6グリッドにおいて検出された。平面形状は不整楕円形、長軸は1.99m、短軸は1.57mを計る。確認面下の掘り込みの深さは75cm、覆土は自然堆積で5層に分層される。断面形状はやや袋状を呈する。

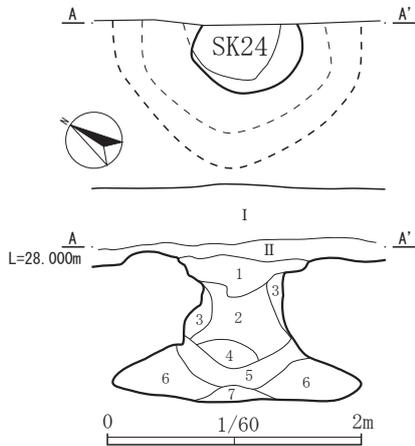
本遺構の掲載遺物はない。

SK23

- 1層 10YR 2/1 黒褐色土 ロームブロックφ2~10mm少量、炭化物ブロックφ2~10mm少量。
- 2層 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロックφ2~10mm微量、炭化物ブロックφ2~10mm微量。
- 3層 10YR 1.7/1 黒色土 ロームブロックφ2~10mm少量、炭化物ブロックφ2~10mm多量。
- 4層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ2~10mm多量、炭化物ブロックφ2~10mm少量、しまり強。
- 5層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ2~10mm極多量。しまりあり。

SK24 (第107・108図、図版36・86)

本遺構はB-6グリッドにおいて検出された。東側は調査区外となっている。平面形状は円形を呈するものと思われる。上端の長軸は87cmであるが、下端は195cmを計る。短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは111cm、覆土は自然堆積で7層に分層される。断面形状はいわゆる袋状を呈する。



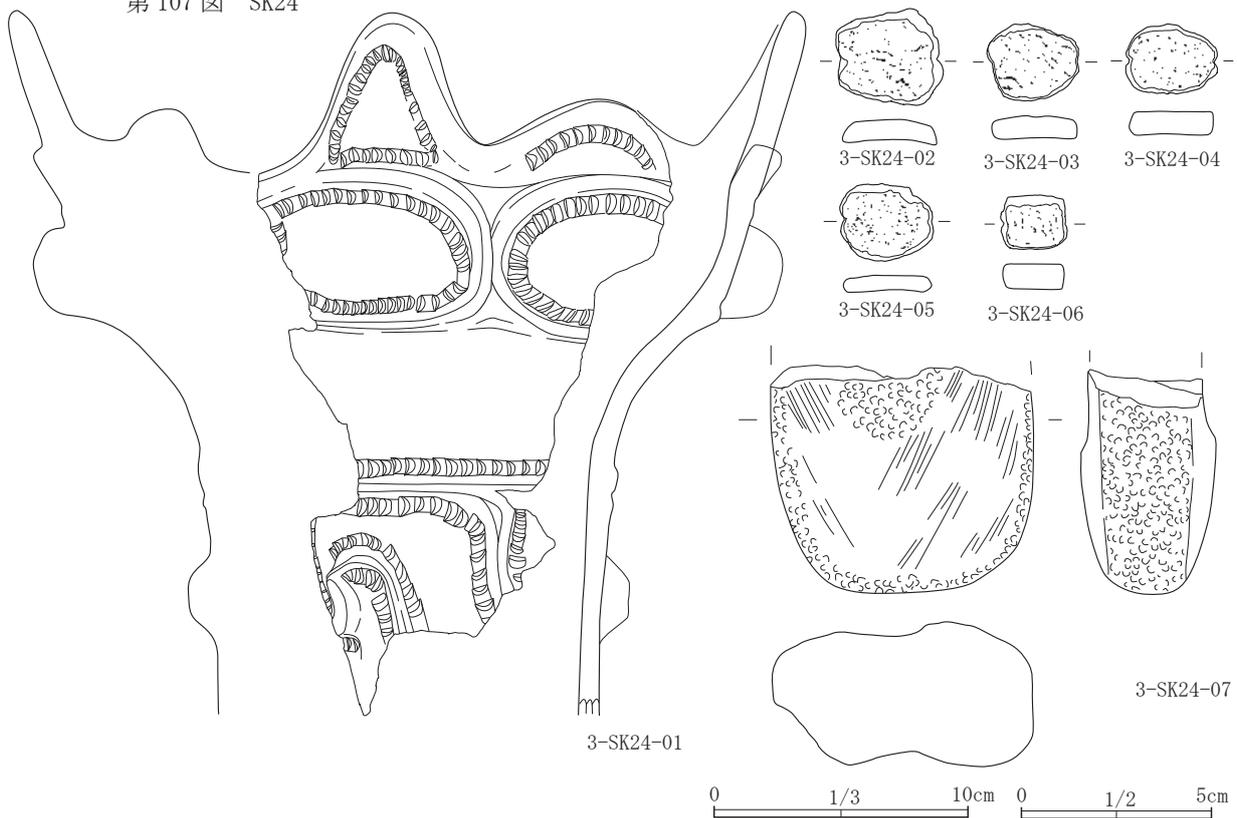
第107図 SK24

本遺構からは1768gの遺物が出土している。この内7点について提示した。

01は4単位波状の深鉢口縁から胴前半部までの資料である。三角形に突出する大形の把手が4単位配され、その間に半円形の小突起が埋めら

SK24

- 1層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~2mm多量、炭化物ブロックφ1~3mm極微量。しまりあり。
- 2層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~5mm極多量、焼土ブロックφ1~3mm少量、炭化物ブロックφ1~3mm微量。しまりあり。
- 3層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~20mm極多量。
- 4層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~5mm極多量。
- 5層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ1~5mm多量、焼土ブロックφ1~3mm少量。
- 6層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ1~30mm極多量。しまりなし。
- 7層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ1~30mm極多量。しまりあり。



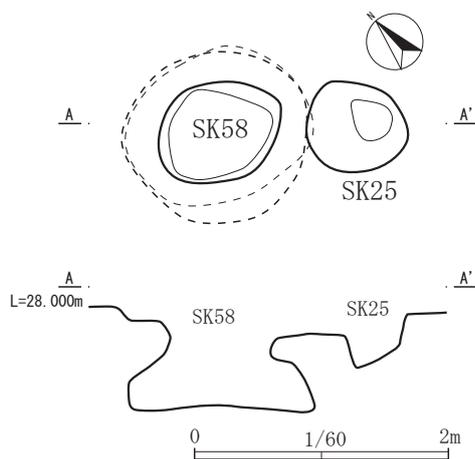
第108図 SK24 出土遺物

れる。口縁部文様帯は隆帯により楕円形の窓枠状の区画を設ける。三角形および円形の突起、楕円区画の内面に沿って幅広の角押文が施文される。頸部は無文。胴部には断面蒲鉾状の隆帯が1条巡り隆帯から同様の隆帯による懸垂文が垂下する。隆帯の両側面には口縁部同様の角押文が施文される。阿玉台Ⅲ式である。

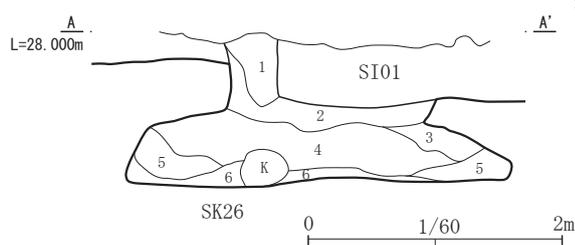
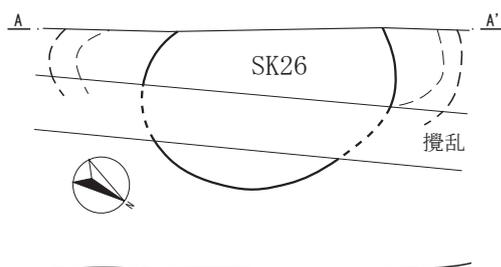
02～06は土器片錘である。02は18.4g、03は11.6g、04は11.7g、05は8.1g、06は7.7gを計る。全体に小ぶりで外面の整形は粗雑である。

07は磨石・凹石である。ほぼ半分に欠損している。上下両面の中央付近に窪みが施され、研磨されている。側面は全面に敲打痕が残る。重量は231.5g、材質は安山岩。

本遺構は阿玉台Ⅲ式期の遺構と判断される。



第109図 SK25・58



第110図 SK26

SK25 (第109図、図版36)

本遺構はA・B-6・7グリッドにおいて検出された。SK58と近接する。平面形状は不整円形を呈すし、長軸77cm、短軸72cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは49cm、底面は北側に向かって大きく傾斜する。断面形状はV字形を呈する。

本遺構の掲載遺物はない。

SK26 (第110・112図、図版36・86・87)

本遺構はA-6グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、上端部の長軸1.93m、短軸1.47mを計る。確認面下の掘り込みの深さは97.5cm、覆土は自然堆積で6層に分層される。断面形状はいわゆる袋状を呈する。

本遺構からは纏まった資料が出土している。検出された遺物の総重量は17770.9gを計る。この内11点について掲載した。

01は4単位波状の深鉢形土器である。胴部下半部から底部にかけては欠損している。口縁部は大形の波状把手が4単位直立する。波頂部の装飾は1箇所のみ異なり逆渦巻状の文様が付加される。把手部分には渦巻状の文様が隆帯の貼り付けにより描かれる。隆帯に沿ってキャタピラ状の幅広の刺突列が加わる。

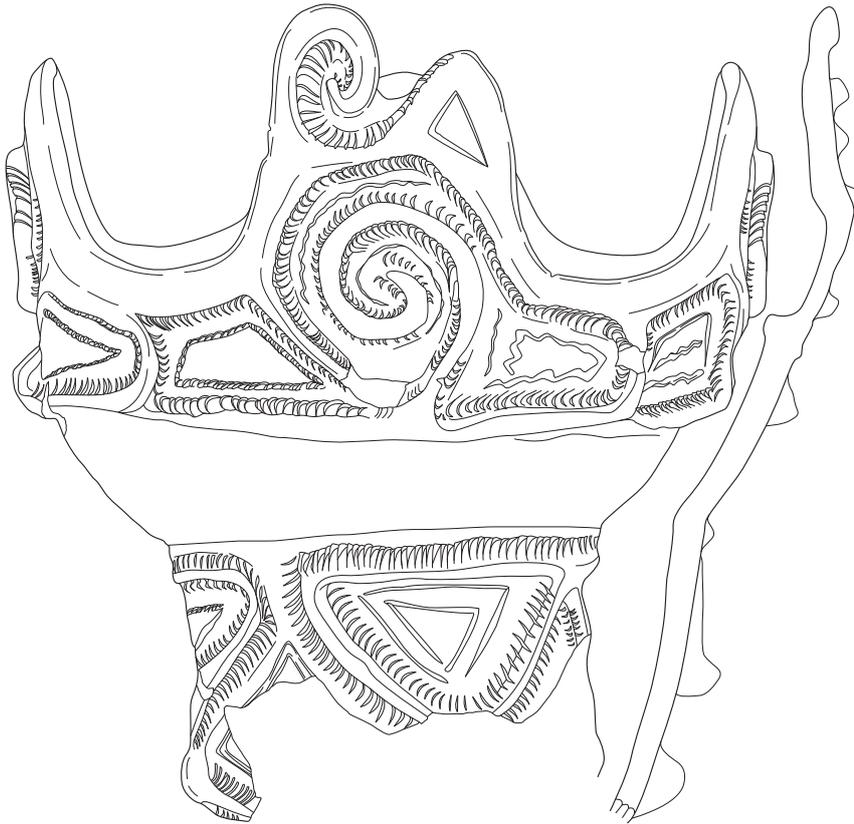
SK26

- | | |
|------------------|--|
| 1層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロックφ1～2mm 多量、焼土ブロックφ1～3mm 微量。しまり強。 |
| 2層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロックφ1～30mm 多量。 |
| 3層 10YR 2/3 黒褐色土 | ロームブロックφ1～5mm 極多量。 |
| 4層 10YR 2/3 黒褐色土 | ロームブロックφ1～2mm 極多量。しまりなし。 |
| 5層 10YR 2/3 黒褐色土 | ロームブロックφ1～10mm 極多量。しまりなし。 |
| 6層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロックφ1～5mm 極多量。 |

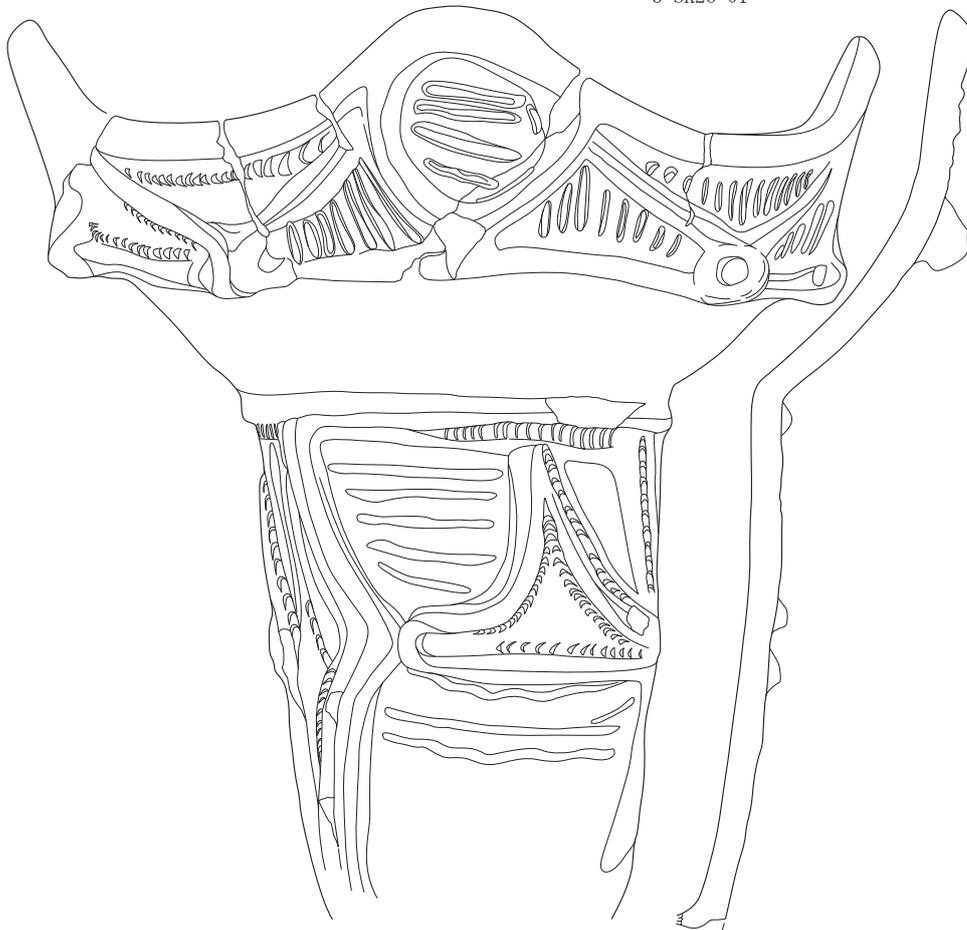
口縁部文様帯は渦巻を中心にこれを取り囲むように台形の区画が同様の隆帯の貼り付けで描かれ、やはり幅広の角押文がこれに沿って施文される。頸部は無文。胴部文様帯には同様の隆帯による重三角文状の区画文が描かれ、口縁部文様帯同様の隆帯と角押文により構成されている。勝坂式藤内3段階的な要素が強い。

02は4単位波状の深鉢でやはり底部は欠損している。波頂部分には円形の区画を設け、口縁部文様帯は、重三角文様の区画帯が隆帯によって描かれ内部には太い短沈線が円形区画の内部で横方向に、三角形区画内には縦方向に施文される。また、一部ではあるが隆帯に沿ってペン先状の角押文が充填され、文様構成は統一されていない。頸部は無文で胴部は隆帯による重三角文を意識する区画が設けられ内部には横方向の太い沈線が充填される部分と、ペン先状の角押文がこれに沿う部分の双方に分けられる。阿玉台Ⅱ～Ⅲ式の範疇でとらえられるものであろうが、勝坂式の影響を強く感じさせる。

03は深鉢形土器のほぼ完形である。口縁は平縁で口縁部の文様帯は01・02に比べて狭く、断面方形の隆帯によって窓枠状の長方形の区画が設けられる。この区画隆帯に沿って内側には1条の角押文が施文される。頸部は2条の有節沈線を意識する波状の沈線が巡る。胴部は屈曲部分に隆帯が巡り突起部分から隆帯は懸垂状に垂下する。懸垂



3-SK26-01



3-SK26-02

0 1/3 10cm

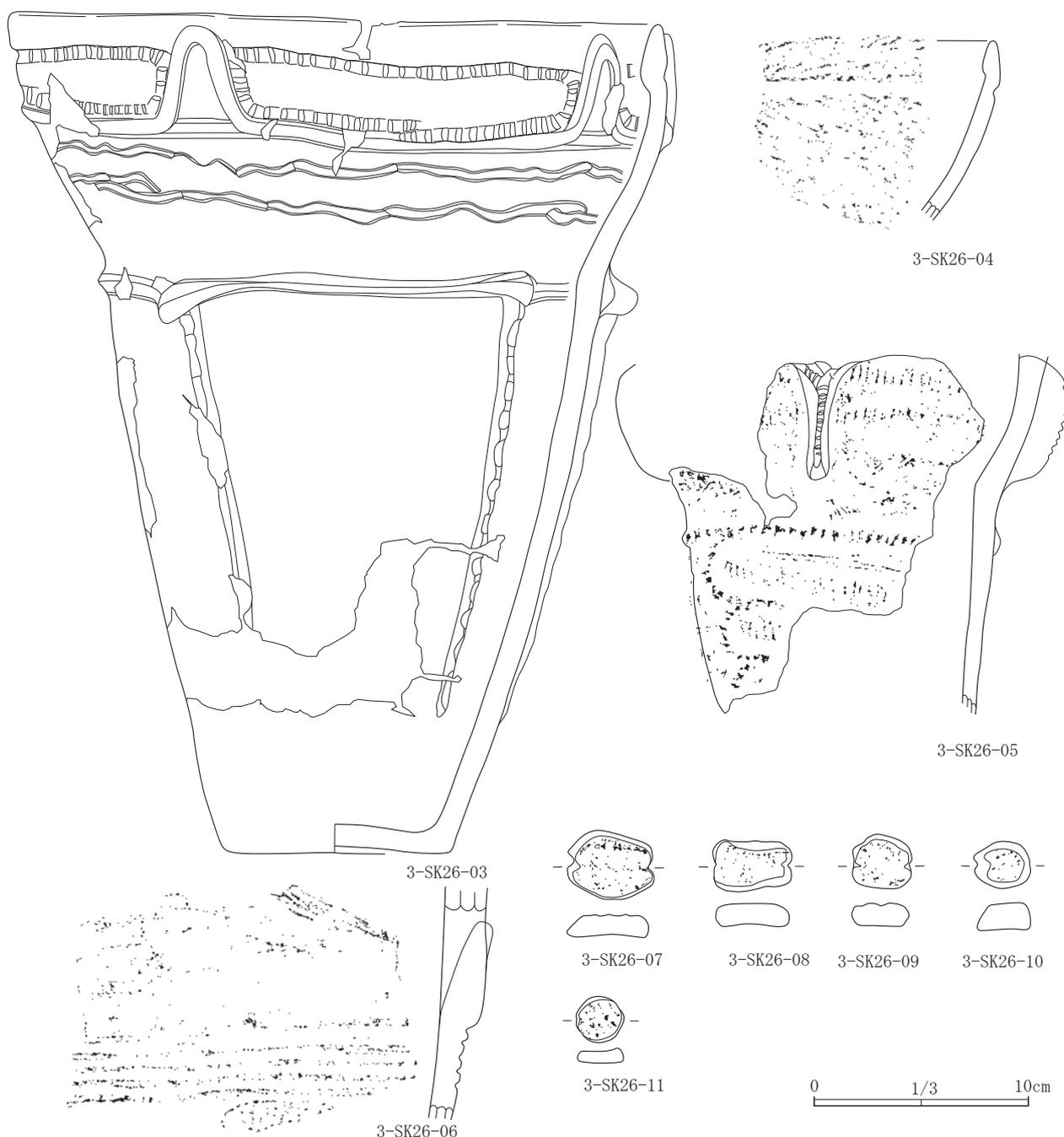
第111図 SK26出土遺物(1)

する隆帯上には指で押したような緩やかな刻みが施される。地文はない。口縁部の文様帯は阿玉台Ⅰb式的な様相であるが、頸部に描かれる2条の有節沈線から阿玉台Ⅱ式と判断した。

04は口縁部の破片である。大きく内湾する口縁で平縁。口縁は折り返すものであろうか、口唇直下に1条の沈線が巡る。内面にも段を有している。口縁部および胴部にかけて無節Lの縄文が、口縁部では横方向に、胴部では縦方向に回転施文されている。形式は不明。比較的大形の破片で本土坑に伴わない遺物として除去できなかったために掲載した。

05は頸部の屈曲部から胴部の資料である。頸部、胴部共に隆帯によるY字状の懸垂文が垂下する。また鋸歯状の文様が描かれる。頸部の括れ部分には刻みを有する隆帯が1条巡り、形骸化された襞状文が爪状の工具によって刺突される。阿玉台Ⅰb式新段階～Ⅱ式と判断した。

06は波状口縁の口縁部破片である。かなり大形の波状になるものと推測される。口縁部直下は幅広の無文帯が広がる。以下、単節縄文を施文後に太い沈線が5条巡る。口縁部の幅広な無文帯は勝坂式的ではあるが、器形では異なる。縄文施文より阿玉台式とも異なる。形式不明。

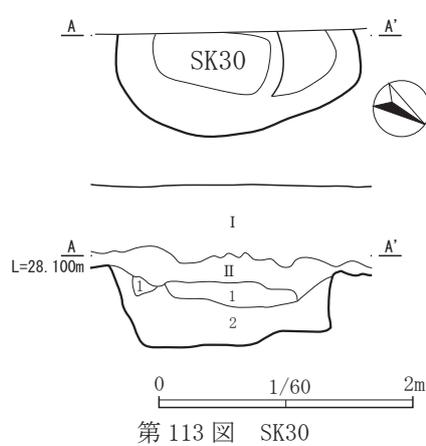


第112図 SK26 出土遺物(2)

07～11は土器片錘である。比較的小形のものが主体で周縁の整形も荒い。重量は07は14.9g、08は11.6g、09は9.3g、10は7.0g、11は3.5gを計る。

本住居跡は阿玉台Ⅱ式段階と藤内3段階が共伴する良好な資料といえる。

SK27～29 欠番である。



SK30 (第113図、図版36)

本遺構はA-12グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、北東側が調査区域外にあたる。長軸1.95mを計り、短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは49cm、底部は北側の方が1段深くなる。覆土は自然堆積で2層に分層される。断面形状は鍋底状を呈する。

本遺構の掲載遺物はない。

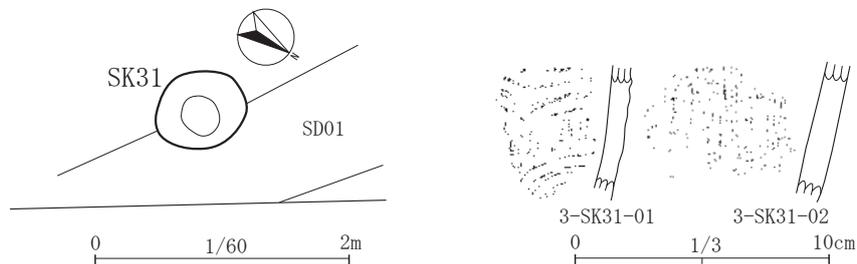
SK30
1層 10YR 3/4 暗褐色土 炭化物ブロックφ2～5mm少量。しまり強。
2層 10YR 2/3 黒褐色土 炭化物ブロックφ2mm微量。

第113図 SK30

SK31 (第114図、図版36・87)

本遺構はB-13グリッドにおいて検出された。SD01に上部を切られている。平面形状は円形を呈し、長軸67cm、短軸57cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは35cmを計る。

本遺構から出土した遺物は少ないが、出土した全資料2点(61.9g)について提示した。01・02はいずれも胴部の破片である。地文に縦方向の条線または撚糸が施文される。01では太い沈線3本以上の単位で連弧文が描かれている。所謂連弧文様式土器で、加曾利EⅡ新～Ⅲ式段階の遺物と判断した。



第114図 SK31・同出土遺物

SK32・33 欠番である。

SK34・76 (第115～117図、図版37・44・87～89)

本遺構はB-14グリッドにおいて検出された。SK34・76いずれもSI10を切っている。平面形状はSK34は不整形、76は円形を呈す。SK34は開口部の長軸が1.78m、袋状の底部最大径が2.69mを計る。断面形状はいわゆる袋状を呈する。確認面下の掘り込みの深さは1.12mを計る。SK76は長軸2.24mを計り、短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは97.8cmを計る。SK76が新しい。

本遺構から出土した遺物は、20799.1gと膨大な量に上る。土坑は2基の重複で、厳密に遺物の区分けは行えていない。この内提示した資料は42点である。

01は大きく内湾し口縁部に隆帯が巡る口縁部の破片である。隆帯直下には刺突が施される。内面に段を有するもので、深鉢であろう。外面は無文である。阿玉台式と判断される。02は直立気味の口縁部破片で、太い沈線による渦巻状の文様が描かれる。口縁部、沈線以外はRLの縄文が全面に施文される。阿玉台Ⅳ式であろう。03は屈曲して開く口縁部の破片である。口縁部は無文帯が巡り以下に重三角形文を意識した隆帯が貼り付けられ隆帯に沿って幅広のキャタピラ文が施文される。勝坂式と判断される。04は内湾気味に立つ口縁部で口唇直下で僅かに

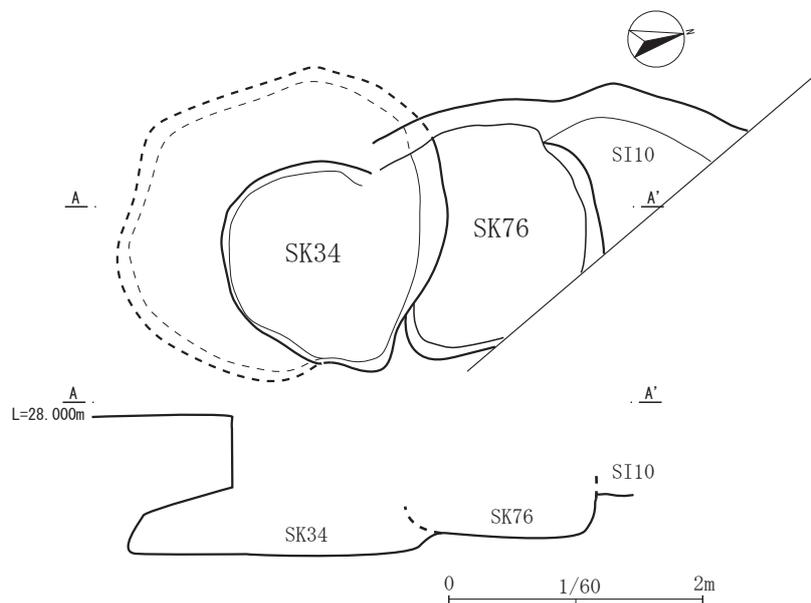
外反する。波状を呈するもので波頂部は欠損する。波頂部から隆帯がS字状に垂下し、隆帯上には刻みが施される。勝坂式カ。05は三角形の区画帯を突起とする口縁部の破片である。隆帯上には刻みが施される。勝坂式カ。06は胴部の大破片である。胴部下半の境には隆帯が巡り、隆帯の交点には眼鏡状の突起が付される。この交点から隆帯により三角形の区画帯が設けられる。隆帯に沿って幅広のキャタピラ文が連続刺突される勝坂式。07は屈曲する胴部上半から口縁の破片。口縁は折り返し、外反して立つ。無文で勝坂式であろう。08は浅鉢の口縁部から胴上半の破片である。口縁は棒状にやや膨れ、内面に沈線が巡る。勝坂式カ。09は浅鉢口縁部の破片である外反気味に大きく開く。口縁内面には平坦部が設けられたい沈線が二重に巡る。また、内面全面に赤漆による赤彩が施されている。10は波状口縁の波底部の破片である。隆帯による円形の滑車状の貼り付けが施される。隆帯の縁辺に沿って刻みが施される。勝坂式であろう。11は波状を呈する口縁突起部の破片である。斜め上方に向かって開いて付されるもので、上端は平坦面を有す。この平坦面から渦巻状の沈線が口縁へと連続して描かれる。加曾利E I式カ。

12-01・02は同一個体の破片であるが接合しない。キャリパー形の深鉢口縁部で隆帯による区画帯の内部に口縁から頸部に連結される二重隆線によるS字状の文様が描かれる。頸部には幅の狭い無文帯が僅かに巡る。地文は0段多条のRL縄文が施文されている。また13・14も12と同一の可能性ある。口縁直下に幅の狭い無文帯が巡るもので胴部上半には隆帯が2本巡った後同様の隆帯が波状に貼り付けられ胴部に巡る。地文は0段多条のRL縄文が施文されている。加曾利E I式古段階であろう。

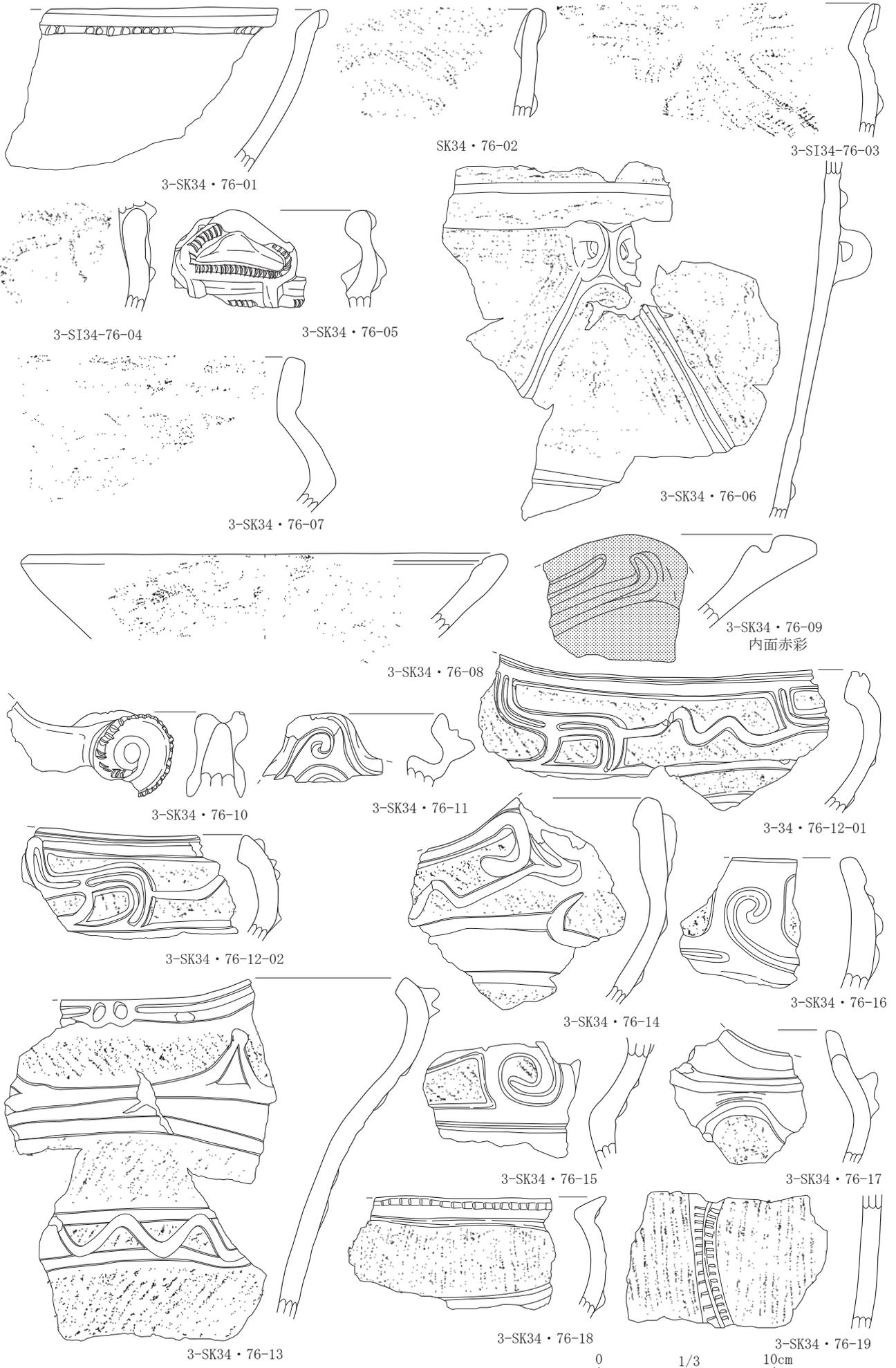
15は口縁直下の破片で、16は口縁部の破片である。同様にたい沈線による渦巻が描かれ隆帯により窓枠状の区画が設けられる。地文には単節RLの縄文が施文される。加曾利E III式古段階カ。17は波状を呈する深鉢口縁部の破片である。隆帯により円形の区画帯が設けられ内部に縄文が充填される。加曾利E III式古段階カ。18は窓枠状の区画帯の中に縦方向の撚糸文を充填する。口唇部には角押文が1列巡る。阿玉台IV式から加曾利E式I段階カ。19は隆帯状に刻みを有する二重線により区画が設けられ、内部に沈線が充填される。加曾利E III式平行連弧文様式カ。20・21は台形土器である。20では平坦な上部に垂直な脚部が付される。脚側面には円孔が穿たれる。21では上部がやや丸みを帯びる椀状を呈するもので、脚端部は比較的細い。台付鉢の可能性もある。脚側面には円孔が穿たれる。

22～35は土器片錘である。重量は22は16.0g、23は11.5g、24は13.6g、25は12.5g、26は12.8g、27は14.3g、28は15.4g、29は10.2g、30は12.4g、31は8.7g、32は9.2g、33は11.9g、34は8.1g、35は12.4gを計る。36は円形に側面が研磨され重量は12.4gを計る。紐かけの切り目はなく、土製円盤と判断した。

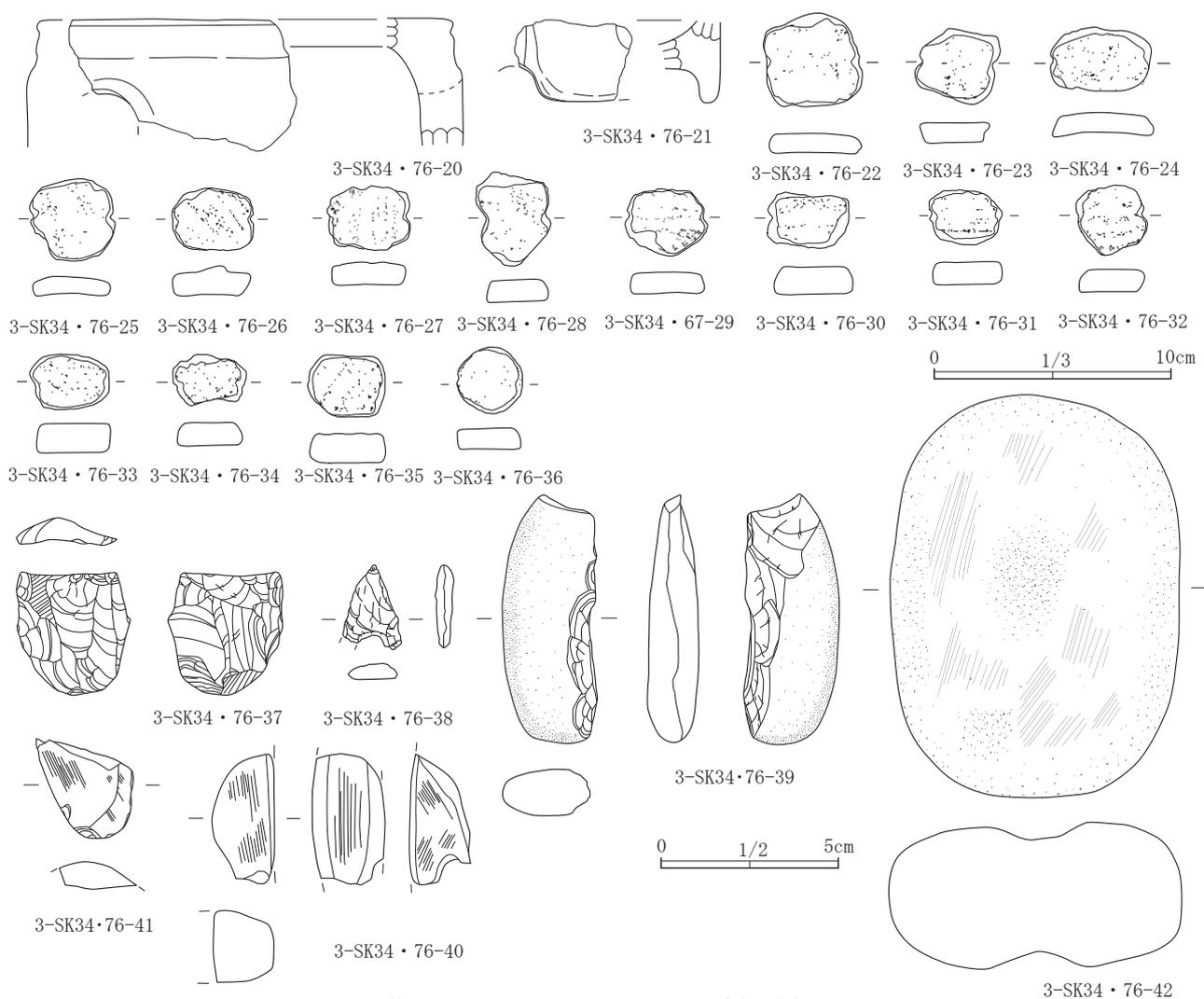
37～42は石器である。42は剥片または残核である。使用痕はない。38は石鏃で凹基三角鏃である。左脚部の



第115図 SK34・76



第116图 SI10 · SK34 · 76 出土遺物 (1)



第117図 SI10・SK34・76 出土遺物 (2)

先端を僅かに欠損する。材質は黒色緻密安山岩である。

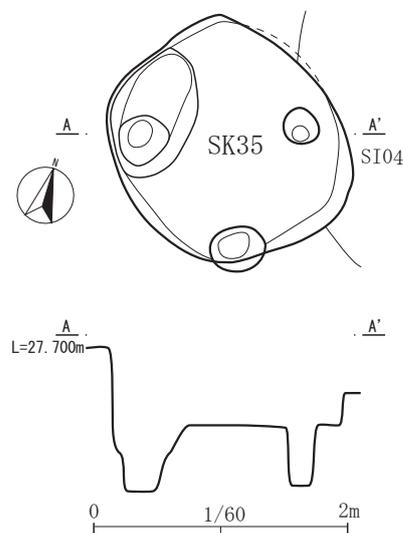
遺物より判断すれば概ね3期に区分することができる。一方で遺構の重複関係ではSI10がSK76によって切られている。したがって、SK34が最も古く勝坂式・阿玉台式期、SI10が加曾利E I式古段階、SK76が加曾利E III式と推察することが可能である。

SK35 (第118・119図、図版89)

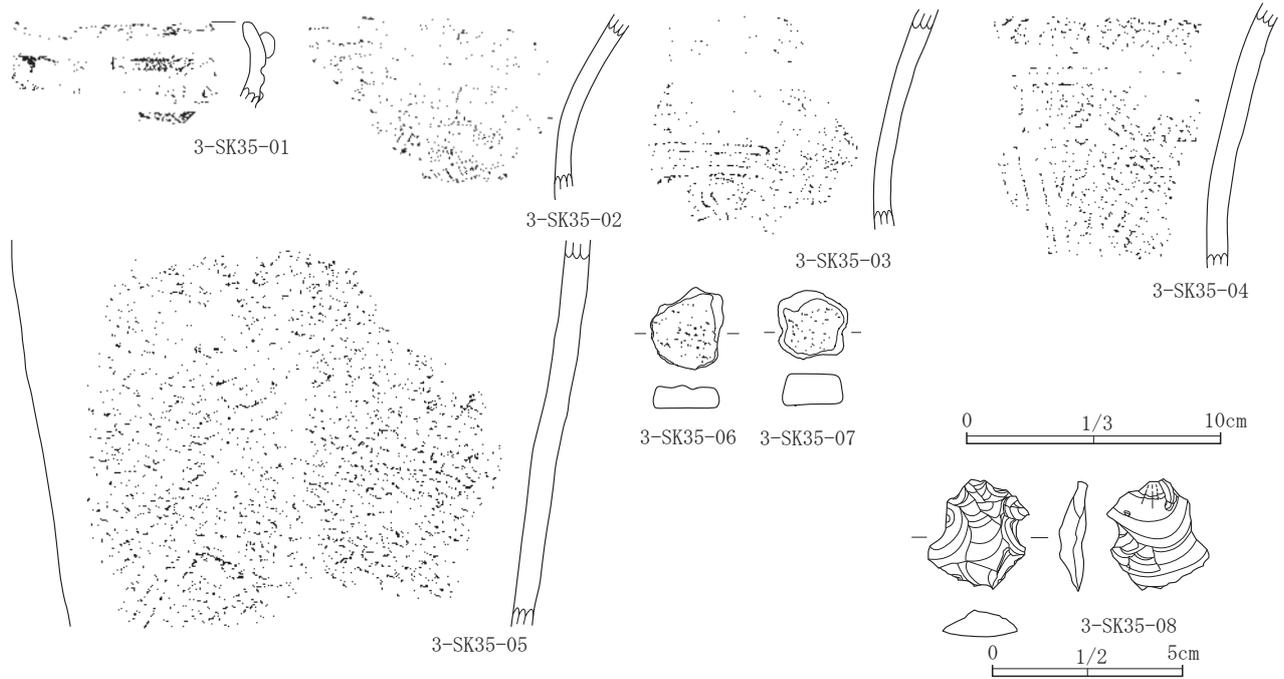
本遺構はA・B-15グリッドにおいて検出された。SI04と重複しており、本遺構の方が古い。平面形状は円形を呈し、長軸2.06m、短軸1.79mを計る。断面形状は部分的袋状を呈する鍋底状である。確認面下の掘り込みの深さは77cmを計る。

遺物は7点提示した。

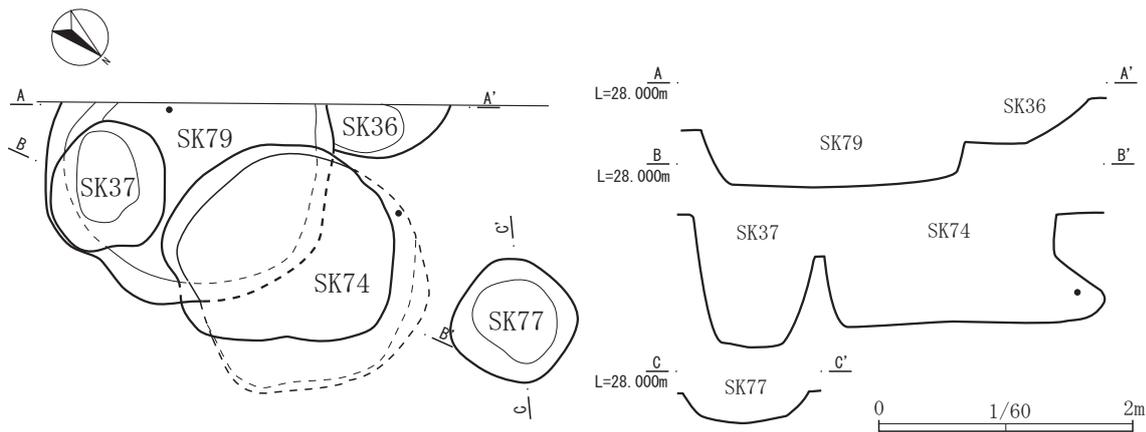
01は深鉢口縁部隆帯により区画帯が描かれ区画内に角押文が施文される。阿玉台III式カ。02・03は外反して開く胴部の破片。縦方向に櫛描波状文が垂下する。03では平行沈線が描かれる。阿玉台III~IV式。04はキャリパー形土器の胴部破片である。LRの縄文が整然と施文された後沈線により横位の2本、それより懸垂する3本の沈線が描かれる。加曾利E I式。05は胴部の破片全面に0段多条のLR縄文が全面施文。06・07は土器片錘である。重量は06が10.1g、07は11.6gである。08はチャートの剥片である。ややポイントフレック状で打点は尖った端部となる。



第118図 SK35



第 119 図 SK35 出土遺物



第 120 図 SK36・37・74・77・79

SK36・37・74・77・79 (第 120・121 図、図版 37・43・89)

SK36・37・74・77・79 は重複関係が明瞭でなかったため、一括して掘り下げを行った。したがって、切り合い関係は明確ではない。

SK36 は A-13・14 グリッドにおいて検出された。平面形状、長軸、短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは 36 cm を計る。断面形状は皿状を呈する。

SK37 は A-14 グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸 1.08 m、短軸 0.95 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 111 cm を計る。断面形状は U 字を呈する。

SK74 は A-14 グリッドにおいて検出された。平面形状は不整形円形を呈し、上端長軸 1.78 m、短軸 1.77 m、袋状底部の最大径は 1.86 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 78 cm を計る。断面形状は袋状を呈する。

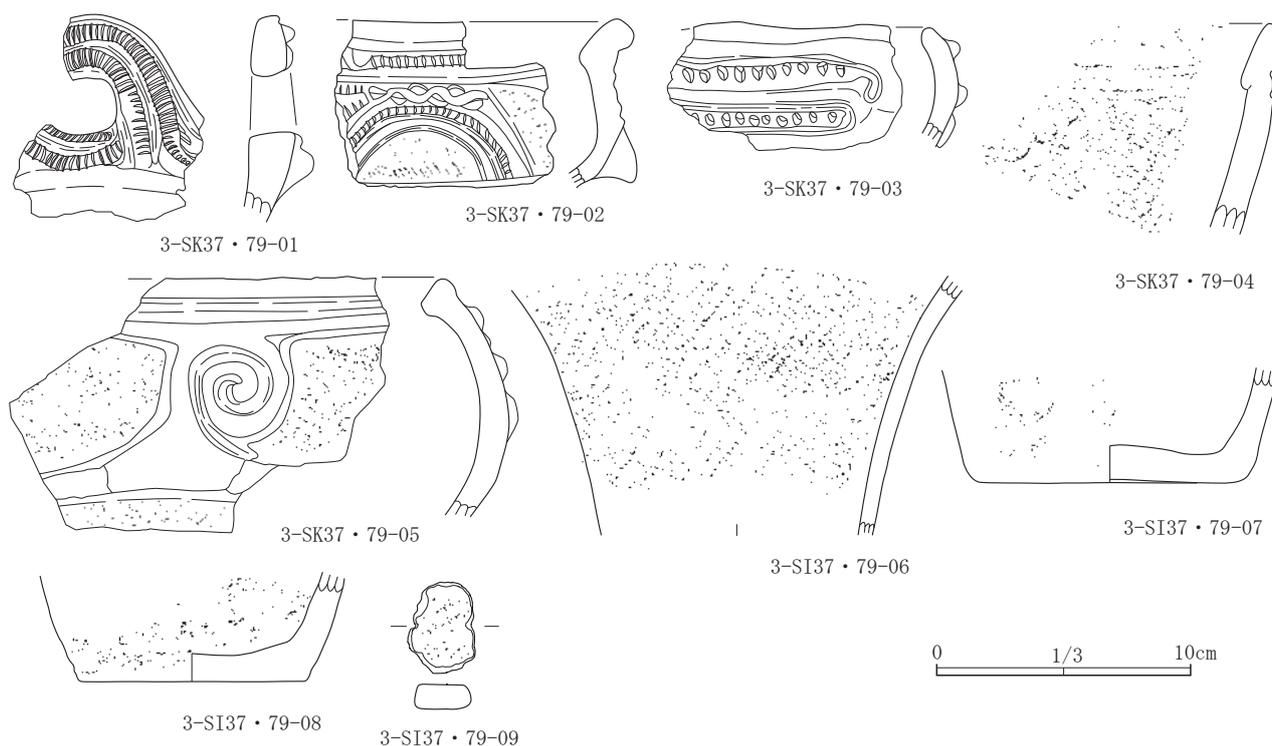
SK77 は A-13 グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸 1.0 m、短軸 0.99 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 29 cm を計る。断面形状は浅い皿状を呈する。

SK79 は A-14 グリッドにおいて検出された。平面形状は円形を呈し、長軸 2.36 m、短軸 2.13 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 46 cm を計る。断面形状は鍋底状を呈する。

SK37 出土遺物は SK79 と重複していたため、SK37・SK79 として掲載した。遺物は 9 点掲載した。

01 は環状の把手部分である隆帯に沿って刻みが施される。02 は深鉢胴部の破片で内面に段を有し逆 U 字状の隆帯が貼り付けられ口縁部の隆帯間には交互刺突文が施され、区画内部には斜方向の条線が充填される。03 は内湾する口縁部の破片で、3 条の隆帯による区画帯が設けられる。隆帯間には刺突列が加わる。04 は内面に折り返した様な段を有し、口唇部は三角形に尖る。口唇部は狭い無文帯となり平行沈線の下には LR の縄文が施文される。05 は大きく上半部が膨らむキャリパー形土器の口縁部である。隆帯により渦巻が描かれ頸部の隆帯と連結する。地文は RL の縄文。06 は外反気味に開く。地文は単節 LR。07・08 は底部の資料で無文である。07 は胴部は直立気味に立ち、徐々に上方に開く。08 は内湾気味に立つ。09 は土器片錘である。やや縦長の形状で周辺の整形は粗雑。重量は 10.3g。

出土遺物より本遺構は加曾利 E I 式古段階と判断される。



第 121 図 SK37・79 出土遺物

SK38 (第 82 図、図版 37)

本遺構は A-14 グリッドにおいて検出された。西側が調査区域外となるため、平面形状は不明、東西軸は不明、南北軸は 1.23 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 26 cm、覆土は自然堆積で 2 層に分層される。断面形状は皿状を呈する。

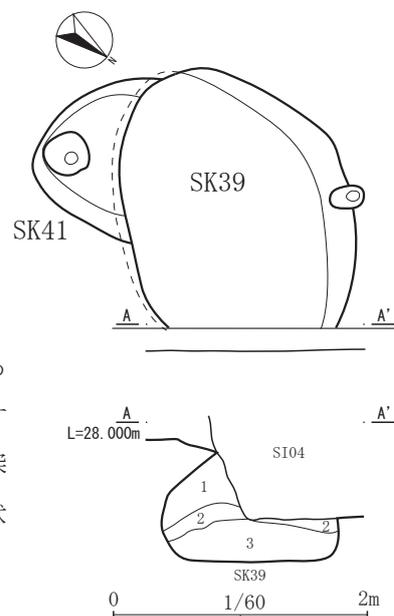
本遺構の出土遺物はない。

SK39 (第 122・123 図、図版 37・89)

本遺構は B-15 グリッドにおいて検出された。SI04 および SK41 と重複するもので、SI04 によって切られ、SK41 を切っている。平面形状は楕円形を呈するものと思われる。長軸不明、短軸 1.78 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 81.5 cm、覆土は自然堆積で 3 層に分層される。断面形状はいわゆる袋状を呈する。

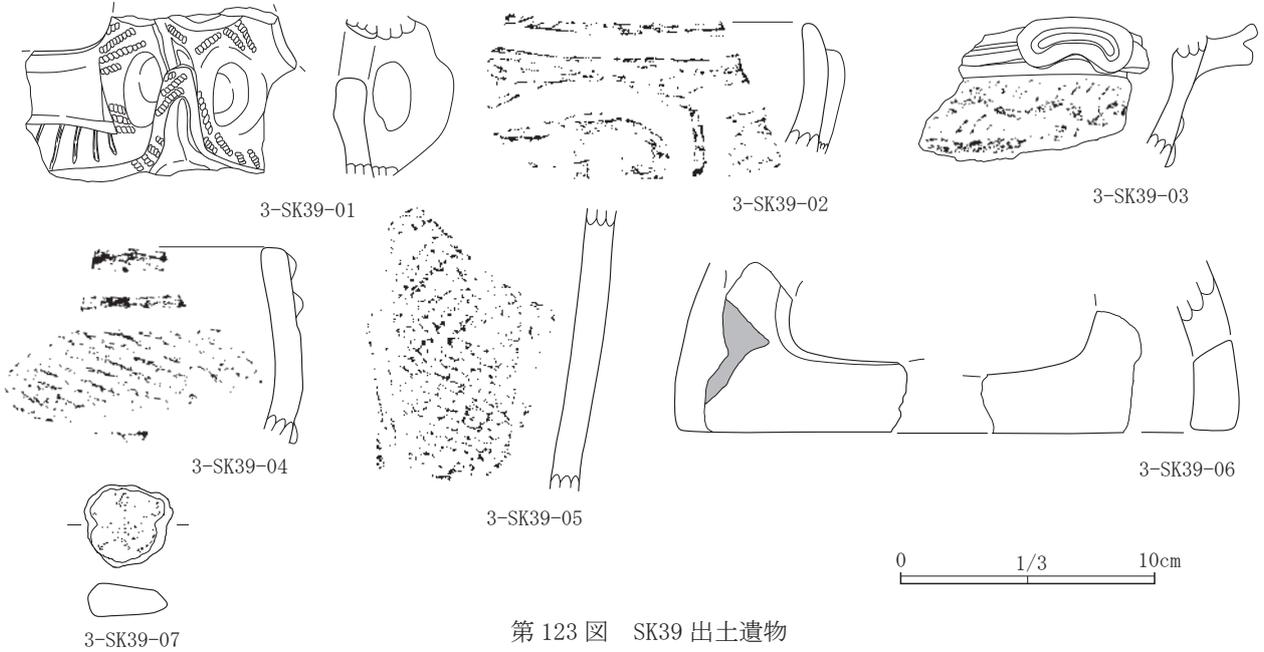
SK39

- 1 層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロック φ 1 ~ 50mm 多量。しまりあり。
- 2 層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロック φ 1 ~ 5mm 極多量、炭化物ブロック φ 1 ~ 2mm 極多量。
- 3 層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロック φ 1 ~ 10mm 多量。



第 122 図 SK39・41

遺物は7点提示した。01は眼鏡状の把手部分の破片である。隆帯上にはRL縄文が施文され区画内には沈線が充填される。阿玉台IV式。02は口縁部の破片で隆帯により渦巻が描かれる。加曾利E II式新段階。03は口縁直下には楕円形の貼り付け、胴部には縄文を地文にし蛇行する隆線が貼り付けられる。大木8a式カ。04は太い隆帯による窓枠状の区画を有する口縁部の破片で、内部にはRLの縄文が充填される。05は胴部下半の資料で幅の狭い磨消懸垂文が見られ、縄文は縦回転施文。05・06は加曾利E II式であろう。06は台形土器である。2点出土して同一個体と判断されるが接合しない。脚はやや内湾気味になり楕円形と思われる透かし孔が穿たれている。台部は欠損している。07は土器片錘である。重量は13.0g

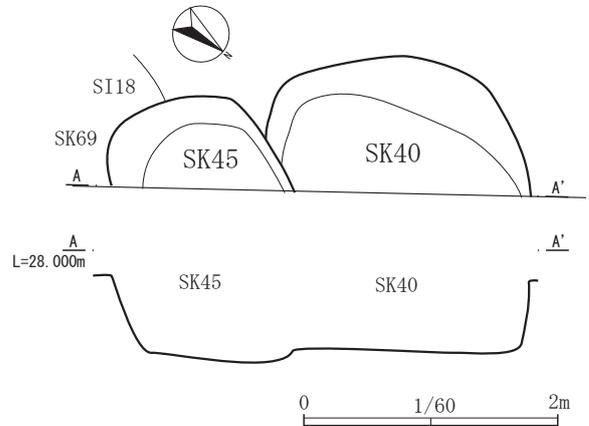


第123図 SK39 出土遺物

SK40 (第124・125図、図版37・90)

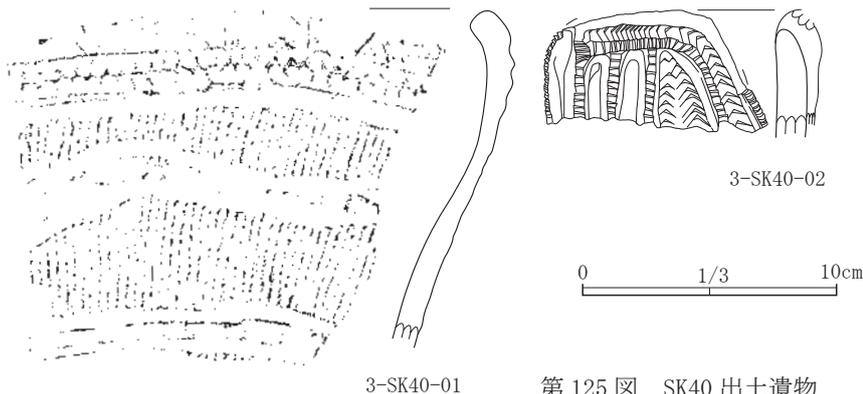
本遺構はB-16グリッドにおいて検出された。平面形状は不明、長軸、短軸ともに不明。確認面下の掘り込みの深さは58.5cmを計る。断面形状は鍋底状を呈する。

出土遺物は2点を掲載した。01は内湾するキャリパー形土器の上半部の資料である。口縁部直下に円形の刺突列が施され、以下、2本の平行沈線が波状に巡る。地文には縦方向の撚糸文が施文される。括れ部には平行沈線が巡る。連弧文様式土器と判断される。02は板状の把手部分の破片である。隆帯に沿って角押文が巡る。阿玉台II式土器であろう。



第124図 SK40・45

01の大形資料の出土から判断して連弧文様式土器の時期、加曾利E III式平行と判断される。



第125図 SK40 出土遺物

SK41 (第122図、図版38)

本遺構はB-15グリッドにおいて検出された。SK39によって切られている。平面形状、長軸、短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは41cmを計る。床面にピット1基がある。

本遺構の出土遺物はない。

SK42 (第126図、図版38)

本遺構はA・B-15グリッドにおいて検出された。SI04と近接しているが新旧関係は不明。平面形状は不整形円形を呈し、長軸48cm、短軸41cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは49cmを計り、ピット状を呈す。

本遺構の出土遺物はない。

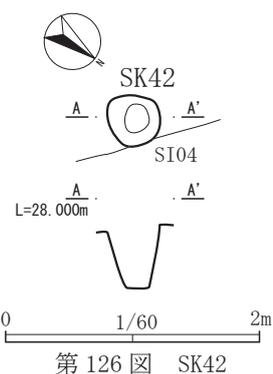
SK43 欠番である。

SK44 (第127・128図、図版38・90)

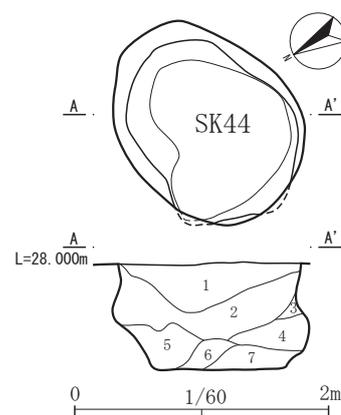
本遺構はA-15グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸1.66m、短軸1.39mを計る。確認面下の掘り込みの深さは83cm、覆土は自然堆積で7層に分層される。断面形状はいわゆる袋状を呈する。

遺物は6点について掲載した。

01はキャリパー形土器上半部の資料である。横S字状の隆帯が口縁部に貼り付けられ、隆帯上には縄文が施文される。内面の段は見られない。大木式の影響を



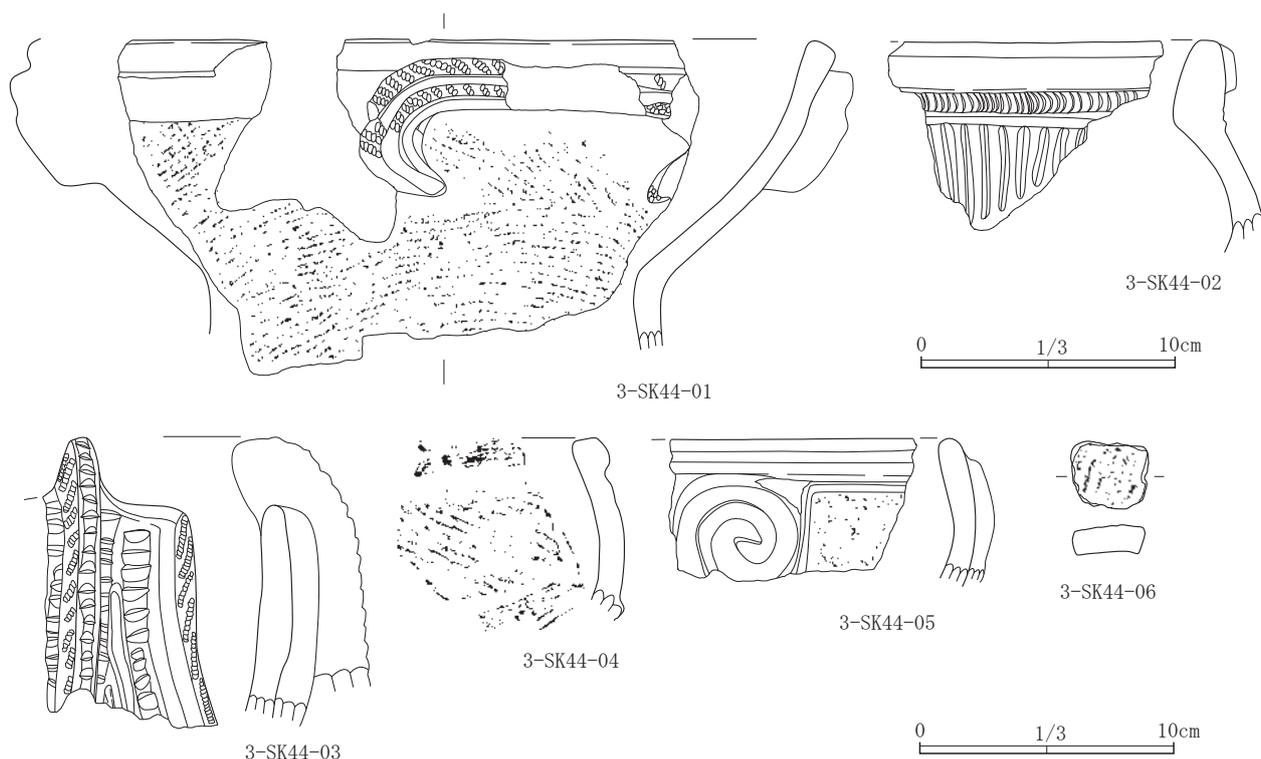
第126図 SK42



第127図 SK44

SK44

- 1層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~5mm多量、焼土ブロックφ1~2mm極微量。
- 2層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~10mm極多量、焼土ブロックφ1~3mm極微量。
- 3層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~20mm極多量。
- 4層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~50mm極多量。しまりあり。
- 5層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ1~5mm中量、炭化物ブロックφ1~3mm極微量。
- 6層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ1~3mm多量、炭化物ブロックφ1~5mm極微量。
- 7層 10YR 4/6 褐色土 ロームブロックφ1~5mm極多量。



第128図 SK44 出土遺物

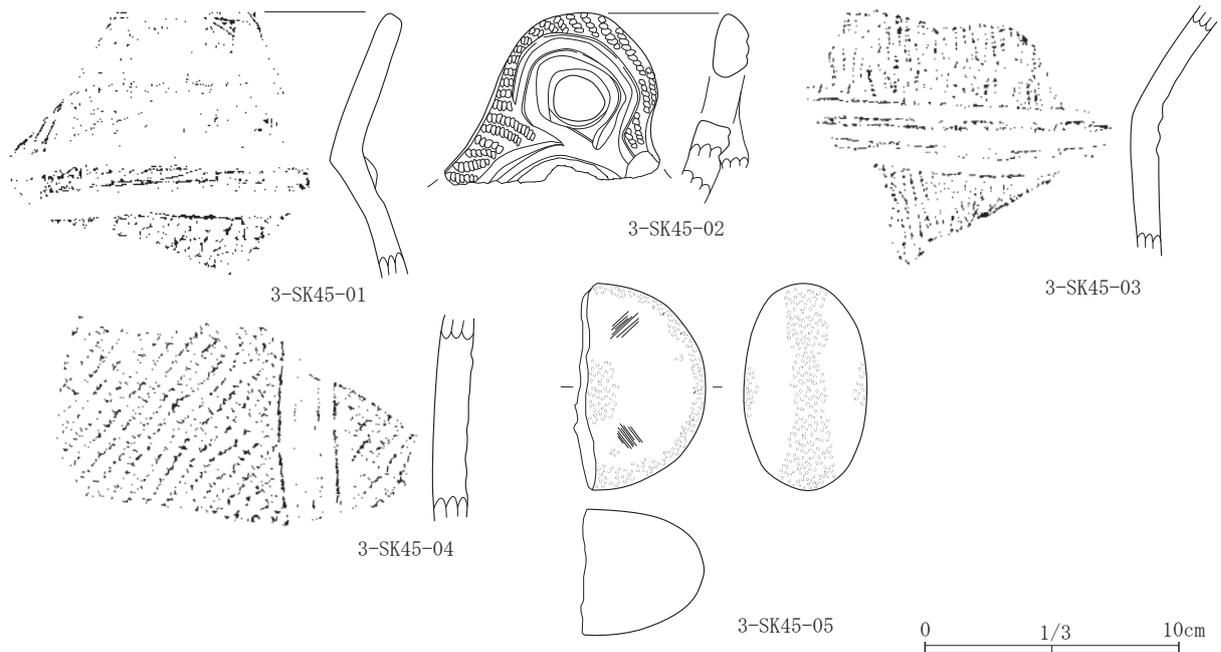
受ける加曾利 E I 式と判断される。02 は屈曲した口縁部の資料で口唇直下に角押文、以下は縦方向の集合沈線が描かれる。阿玉台 III 式または勝坂式の影響を受けるものであろう。03 は波状口縁の波頂部の資料である。とさか状の隆帯が中央に垂下し、両脇に角押文が沿う。阿玉台 IV 式であらう。04 はキャリパー形土器の口縁部である。隆帯により窓枠状の区画が施され、区画内には無節 R が充填される。05 はキャリパー形土器の口縁部で、太い隆帯により渦巻文が描かれる。区画内には単節 RL が充填される。06 は土器片錘である。深鉢胴部破片を利用している。器面には LR の縄文が施文されている。重量は 11.5g。

SK45 (第 124・129 図、図版 37・90)

本遺構は B-16 グリッドにおいて検出された。平面形状は不明、東西軸は不明、南北軸 1.36 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 68 cm を計る。

遺物は 5 点を提示した。01 は屈曲する深鉢頸部から口縁の破片である。屈曲部には隆帯が 1 条巡る。口縁部は幅広の無文帯、胴部以下は単節 LR。02 は環状を呈する把手部分の資料である。把手部分全面に単節 RL の縄文が施文される。03 は胴部屈曲部の破片である。屈曲部には 3 条の沈線が巡る。地文は縦方向の撚糸文。04 は磨消懸垂文が縦に施される。地文は単節 LR。05 は磨石・敲石である。側面および上下両面の中央部に敲打痕が残る。材質は安山岩。

検出された遺物は 02 で阿玉台 IV 式と判断されるが、他は加曾利 E III 式およびそれに平行する連弧文様式土器が出土している。該期の遺構と判断される。



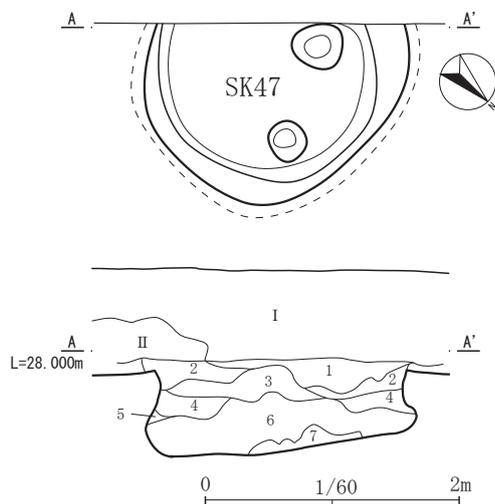
第 129 図 SK45 出土遺物

SK46 欠番である。

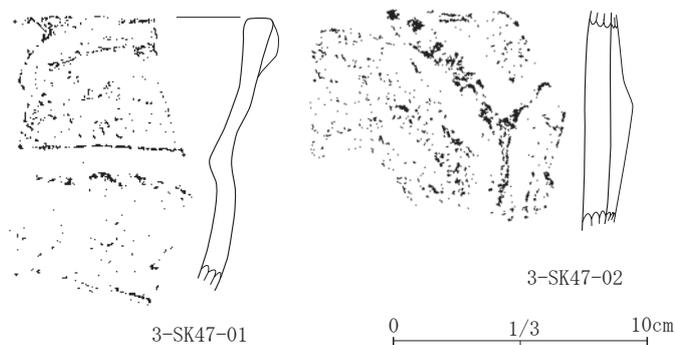
SK47 (第 130・131 図、図版 38・90)

本遺構は A-17 グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸 2.10 m、短軸 1.81 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 78 cm、覆土は自然堆積で 7 層に分層される。断面形状はいわゆる袋状を呈する。

出土遺物は 2 点を掲載した。01 は内湾するキャリパー形土器の上半部の資料である。口縁部直下に断面三角形の隆帯が窓枠状に貼付され、隆帯の内側に沿って角押文が描かれる。02 は 01 の胴部破片であらう。同様の隆帯が Y 字に貼付される。阿玉台 I b 式の資料である。遺物から判断して阿玉台 I b 式期の遺構と判断される。



第 130 図 SK47



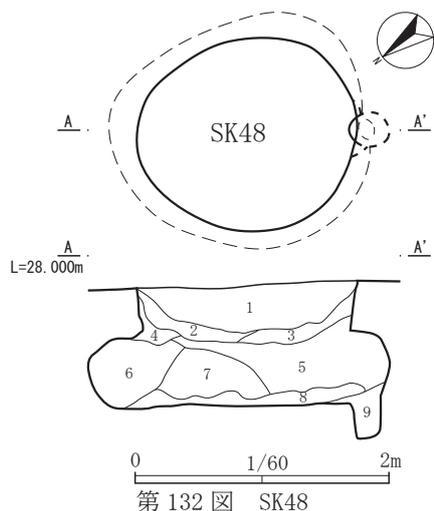
第 131 図 SK47 出土遺物

SK47

- 1層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~3mm 中量。
- 2層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~3mm 多量。
- 3層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~10mm 多量。
- 4層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~5mm 多量。
- 5層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ5~30mm 多量、炭化物ブロックφ2~3mm 極微量。しまりあり。
- 6層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~3mm 多量。しまりあり。
- 7層 10YR 4/6 褐色土 ロームブロックφ1~20mm 多量。しまりあり。

SK48 (第 132・133 図、図版 38・90・91)

本遺構は A・B-17 グリッドにおいて検出された。平面形状は円形を呈し、長軸 1.76 m、短軸 1.46 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 88 cm、覆土は自然堆積で 9 層に分層される。断面形状はいわゆる袋状を呈する。床面南西部にピット状の掘り込みがある。



第 132 図 SK48

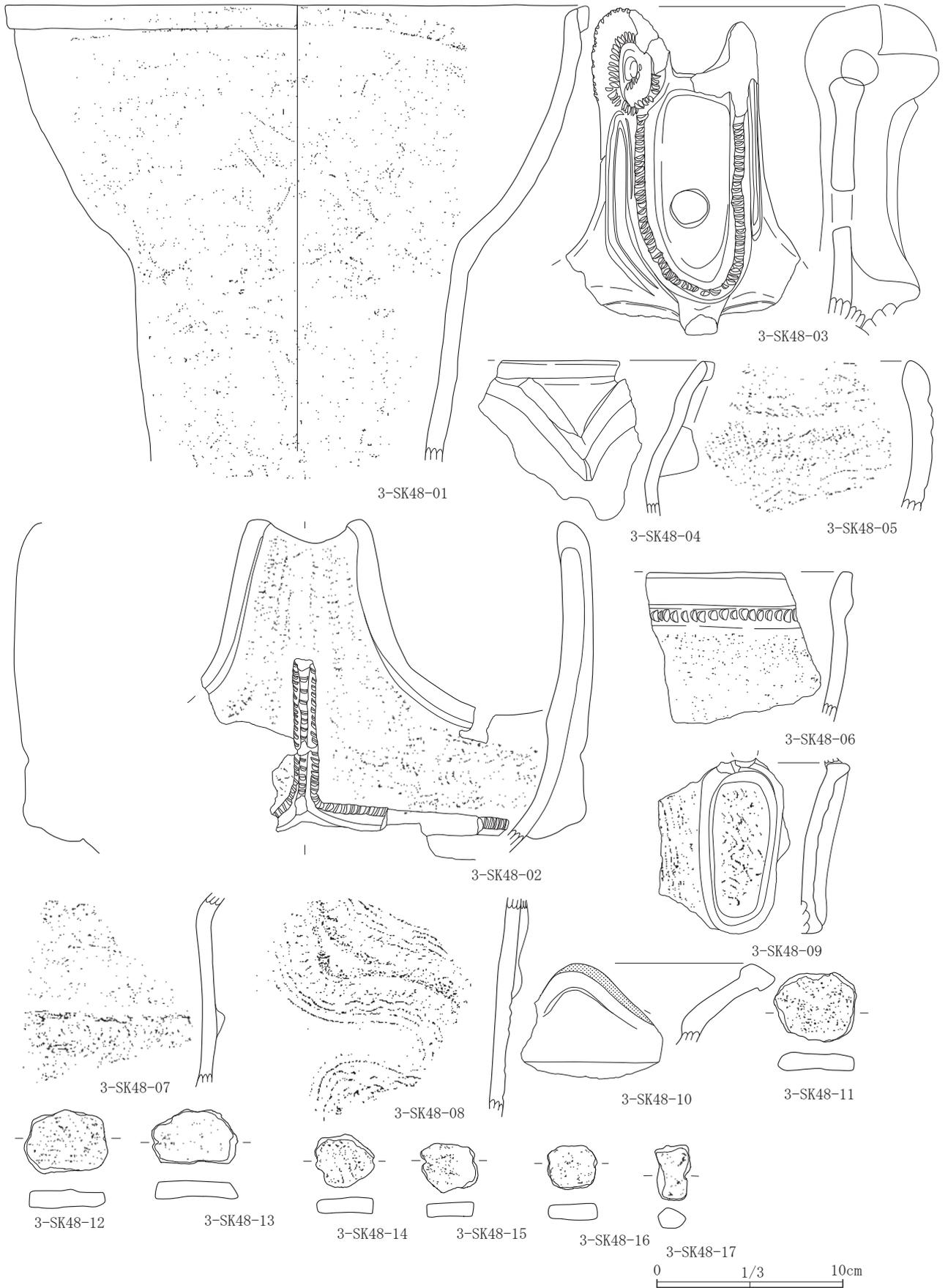
SK48

- 1層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~3mm 極多量、焼土ブロックφ1~2mm 多量、炭化物ブロック中量。
- 2層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~3mm 多量。炭化物φ1~2mm 少量。
- 3層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~10mm 極多量、焼土ブロックφ1~10mm 極多量、炭化物φ1~2mm 少量。
- 4層 10YR 3/3 暗褐色土 ロームブロックφ1~3mm 多量。
- 5層 10YR 4/6 褐色土 ロームブロックφ1~3mm 極多量、焼土ブロックφ1~3mm 極微量、黒褐色土ブロックφ1~10mm 微量。
- 6層 10YR 4/6 褐色土 ロームブロックφ1~50mm 多量、黒褐色土ブロックφ1~5 少量。
- 7層 10YR 4/6 褐色土 ロームブロックφ1~100mm 多量。
- 8層 10YR 3/3 暗褐色土 ロームブロックφ1~50mm 多量。しまりあり。

出土遺物は 17 点について掲載した。

01 はキャリパー形を呈する深鉢である。底部は欠損している。胴上半部は緩やかに内湾し、口縁部で折り返す。器面は無文で文様の施文はない。02 は羽子板状の大形把手を 4 単位有する深鉢。把手の中央部には刻みを有する隆帯が縦に垂下し、胴部上半で窓枠状の区画帯を作る。区画内部には隆帯に沿って角押文が 2 列描かれ、中央部分には鋸歯状の文様が充填される。03 は羽子板状の大形把手部分の資料である。先端部分は孔を有する双頭の突起が付される。把手の中央部分には円形の孔が穿たれている。また U 字形の刻み目を有する隆帯が垂下し、隆帯に沿って角押文が 2 列配される。02 と同一個体の可能性がある。04 は屈曲して開く胴上半から口縁部にかけての破片である。口縁部は折り返し隆帯状になり、折り返し隆帯から Y 字の隆帯が垂下する。05 は内湾する口縁部の破片で隆帯が 1 条巡り、隆帯に沿って角押文が 1 条描かれる。地文には単節 RL が施文され、下半には沈線による波状の文様が描かれる。06 は折り返し口縁の直下に角押文が 1 条巡る。胴部は無文。07 は屈曲部の破片胴上端部に隆帯が 1 条巡り、隆帯上には刻みが施される。08 は蛇行する刻みを有する隆帯が垂下し、隆帯に沿って幅広の角押文が施文される。09 は隆帯によって楕円形の縦方向の区画を設け、内部に鋸歯文が充填される。胴部は縦方向の条線。10 は大きく外反して開く浅鉢口縁。波状口縁で、口唇端部から内面にかけて赤彩が施される。11~17 は土器片錘である。阿玉台式土器の胴部破片を用いている。11 は 15.7g、12 は 16.0g、13 は 17.2g、14 は 9.8g、15 は 8.1g、16 は 7.2g、17 は 7.0g を計る。

出土遺物から本遺構は阿玉台 II~III 式で勝坂式土器を僅かながら混入する時期である。

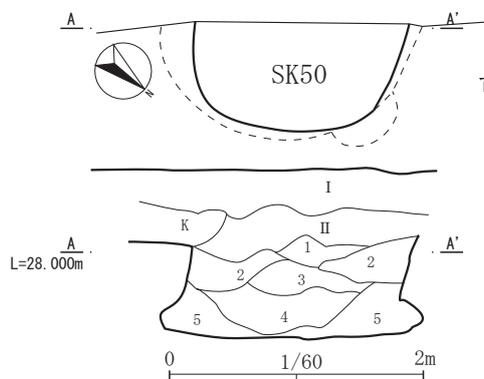


第133图 SK48 出土遺物

SK49 欠番である。

SK50 (第134・135図、図版39・91)

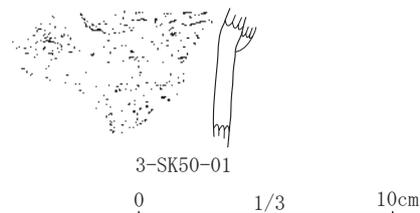
本遺構はA-17・18グリッドにおいて検出された。平面形状は西側は調査区域外となるため、明瞭ではないが円形を呈するものと思われる。南北軸は1.76mを計る。確認面下の掘り込みの深さは71cm、覆土は自然堆積で5層に分層される。断面形状はいわゆる袋状を呈する。



第134図 SK50

出土遺物は1点を掲載した。01は鋸歯状の文様が胴部に描かれる阿玉台Ⅱ式土器であろう。

SK50
 1層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～2mm 中量。
 2層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～5mm 多量。
 3層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～3mm 多量。しまりあり。
 4層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～20mm 多量。しまりあり。
 5層 10YR 4/6 褐色土 ロームブロックφ1～5mm 多量。しまりあり。



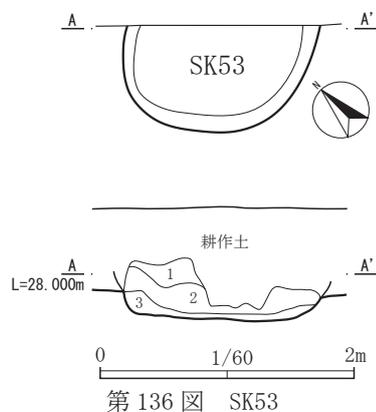
第135図 SK50 出土遺物

SK51 (第73図、図版39)

本遺構はA・B-18グリッドにおいて検出された。位置関係よりSI03と重複することになるが、SI03の掘り込みがなく、新旧関係は不明である。平面形状は不整形円形を呈し、長軸99cm、短軸90cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは21cm、覆土は自然堆積で3層に分層される。断面形状は浅い皿状を呈する。

本遺構の掲載遺物はない。

SK52 欠番である。



第136図 SK53

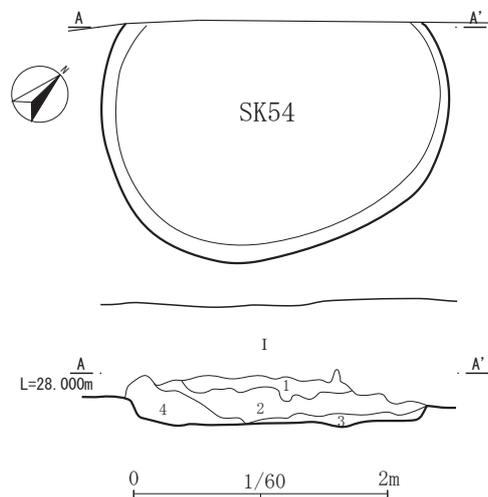
SK53 (第136図、図版39)

本遺構はB-19グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形カ、長軸不明、短軸1.39mを計る。確認面下の掘り込みの深さは46cm、覆土は自然堆積で3層に分層される。断面形状は浅い皿状を呈する。

本遺構の掲載遺物はない。

SK53
 1層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～5mm 中量。
 2層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～10mm 多量。
 3層 10YR 4/4 褐色土 ロームブロックφ1～30mm 多量。しまりあり

SK54 (第137図、図版39)



第137図 SK54

本遺構はB-19・20グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸2.73mを計り、短軸不明。確認面下の掘り込みの深さは38cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。断面形状は浅い皿状を呈する。

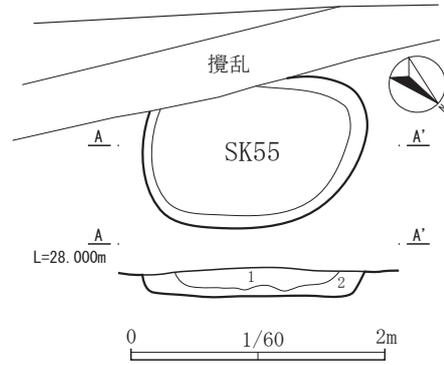
本遺構の出土遺物はない。

SK54
 1層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～10mm 中量。
 2層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～30mm 多量。
 3層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～50mm 極多量。しまりあり。
 4層 10YR 4/6 褐色土 ロームブロックφ1～50mm 多量。

SK55 (第138図、図版39・40)

本遺構はA-19・20グリッドにおいて検出された。南側を攪乱により破壊されている。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸1.79m、短軸1.13mを計る。確認面下の掘り込みの深さは29cm、覆土は自然堆積で2層に分層される。断面形状は皿状を呈する。

本遺構の出土遺物はない。



第138図 SK55

SK55

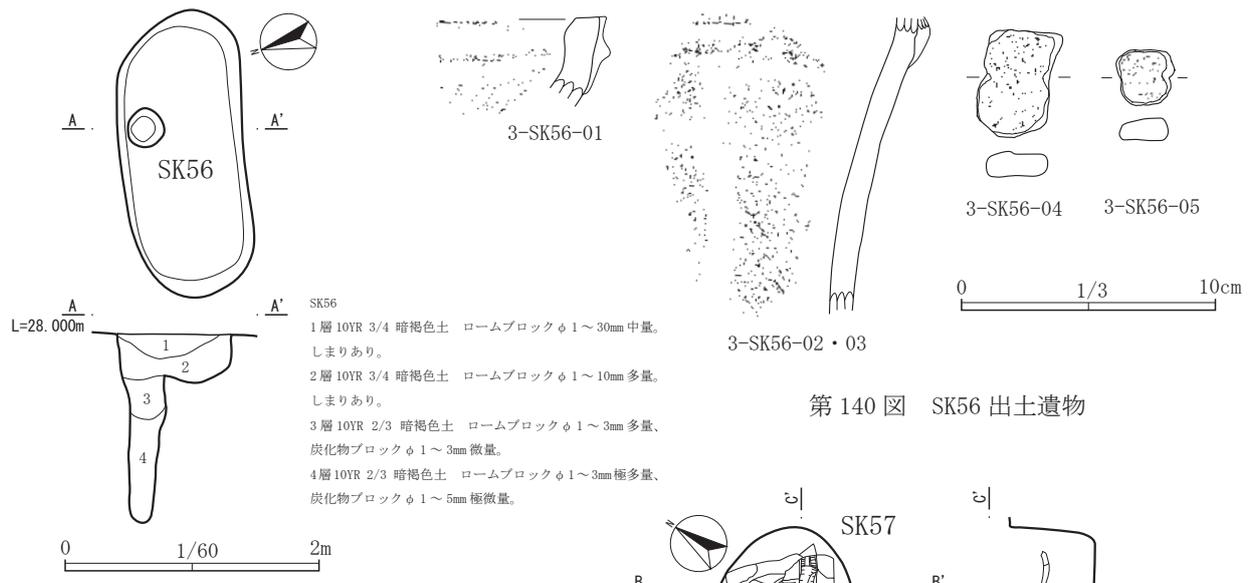
- 1層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~5mm中量、焼土ブロックφ1~2mm極微量。
- 2層 10YR 4/6 褐色土 ロームブロックφ1~10mm多量。

SK56 (第139・140図、図版91)

本遺構はA・B-7・8グリッドにおいて検出された。平面形状は長楕円形を呈し、長軸2.34m、短軸0.98mを計る。確認面下の掘り込みの深さは39cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。鍋底状を呈する。また、中央北側壁寄りに円形のピットが1基検出されている。直径26cmで小規模であるが深さは112cmと深い。セクションから判断して本遺構に伴うピットと判断される。

出土遺物は4点を掲載した。01は深鉢口縁部細片である。口辺部に無文帯を有し、胴部との境には微隆帯が巡る。以下胴部には単節LRの縄文が施文される。02・03は胴部の接合資料である。やや幅の狭い磨消懸垂文が垂下する。地文は単節LRの縦回転施文による充填縄文。04・05は土器片錘である。04は15.8g、05は5.5gを計る。

出土遺物より、本遺構は加曾利EⅢ式と判断される。



第140図 SK56 出土遺物

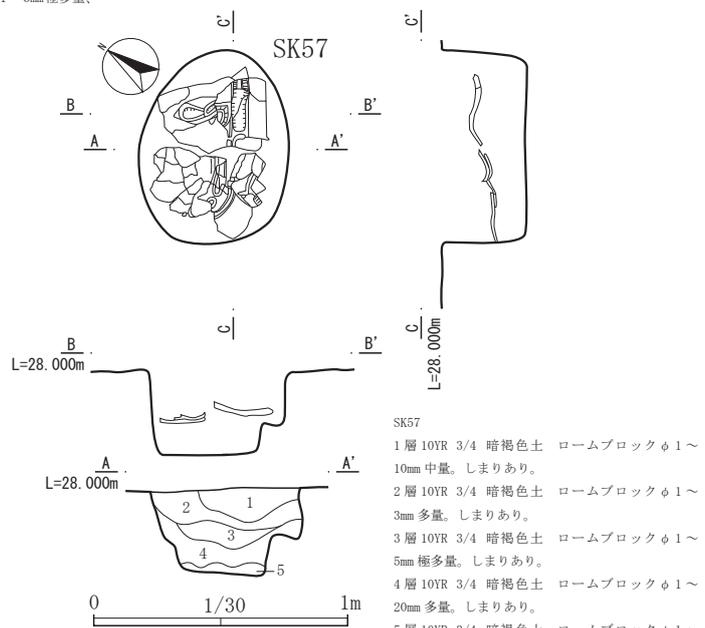
第139図 SK56

SK57 (第141・142図、図版40・91)

本遺構はA-8グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸76.5cm、短軸58.5cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは32.3cm、覆土は自然堆積で5層に分層される。断面形状は南側にテラスを有す。鍋底状を呈する。

出土遺物は2点を掲載した。いずれも上層から2個体並んで横位に出土している。

01はバケツ形の胴部で口縁部は大きく屈曲して開く。口縁部は無文でキャタピラ状の角押文により横帯の区画が設けられ、内部に有節沈線が波



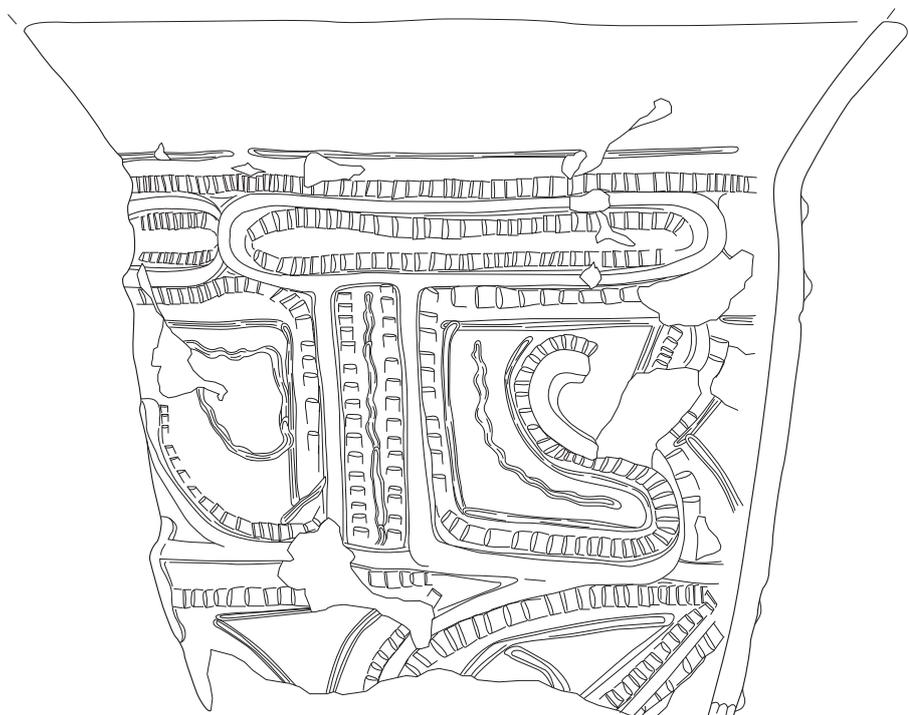
第141図 SK57

SK57

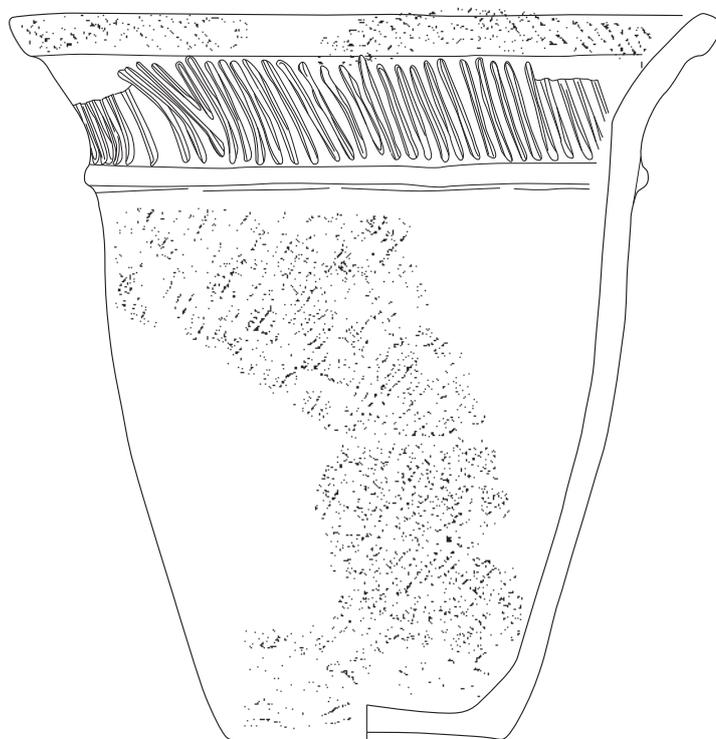
- 1層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~10mm中量。しまりあり。
- 2層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~3mm多量。しまりあり。
- 3層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~5mm極多量。しまりあり。
- 4層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~20mm多量。しまりあり。
- 5層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~10mm極多量。しまりあり。

状に充填される。勝坂式である。

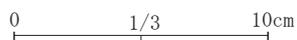
02 はやや丸みを有する胴部で頸部に隆帯が1条巡り胴部と口縁部文様帯を画している。口縁部は折り返して棒状になりLRの縄文が施文される。頸部には縦方向の集合短沈線が描かれる。口唇および胴部以下は0段多条LRが全面に施文される。



3-SK57-01



3-SK57-02



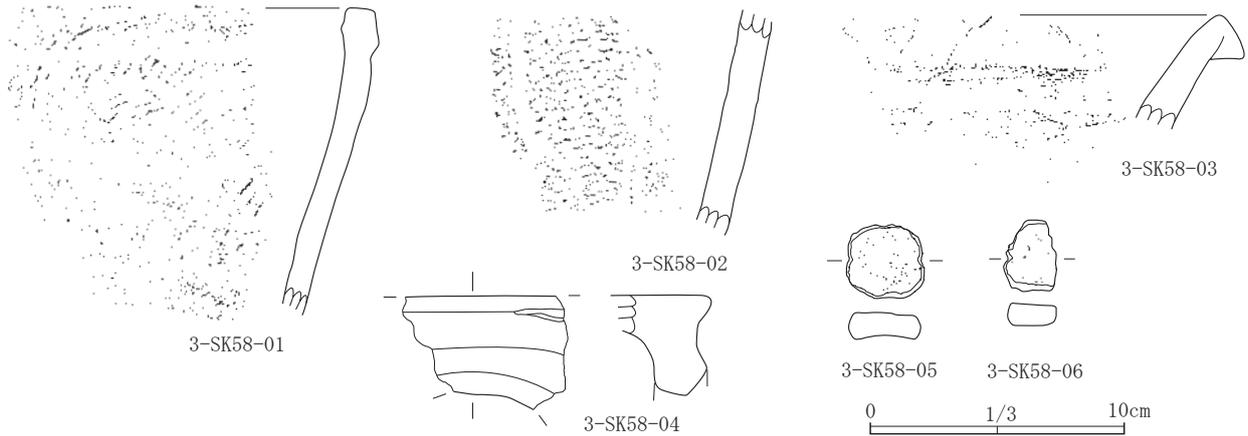
第142図 SK57 出土遺物

SK58 (第109・143図、図版40・92)

本遺構はA・B-6グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、上端の長軸1.72m、短軸0.83mを計る。確認面下の掘り込みの深さは80cm、断面形状はいわゆる袋状を呈するもので、底部の最大径は長軸で1.47m、短軸で1.36mを計る。

出土遺物は4点を掲載した。01はやや内湾し口縁部で折り返す深鉢胴上半部。器面には無節Lが口縁部まで施文されている。02は胴下半部の破片である。磨消懸垂文が描かれ、区画内にLRの縄文が縦方向に回転施文される。03は大きく開く口縁部の破片で、口唇部は折り返して三角形に尖る。器面は横方向の擦痕。04は台形土器の破片である。上部は水平で脚部はやや外反する。脚部には円形の透かし孔が穿たれている。05・06は土器片錘である。いずれも深鉢胴部破片を用いている。重量は05は9.7g、06は5.6g。

出土遺物より、加曾利EⅢ式前後と判断される。



第143図 SK58 出土遺物

SK59

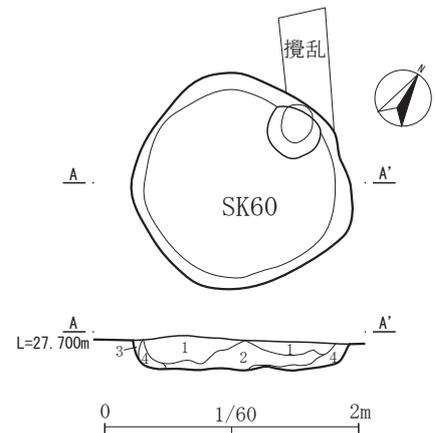
本遺構はA-20・21グリッドにおいて検出されたものであるが、SK78と重複するものと当初考えていたものが、同一遺構と判断されたためにSK59を欠番とし、SK78とした。ただし、遺物に記した注記番号はSK59になっている。遺構および遺物の説明はSK78において行っている。

SK60 (第144・145図、図版40・92)

本遺構はB-20・21グリッドにおいて検出された。平面形状はほぼ円形を呈し、直径1.7mを計る。確認面下の掘り込みの深さは29cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。断面形状は浅い皿状を呈する。床面南側壁寄りにピットが1基検出されている。

出土遺物は4点を掲載した。01は深鉢口縁部の破片。口唇直下に鋸歯状の突起列が1条巡り、胴部は単節LR。02～04は深鉢胴部の破片である。太い沈線により懸垂文が描かれる02・03、波状の平行線が描かれる04。地文は02・04は単節LR、03は単節RL。

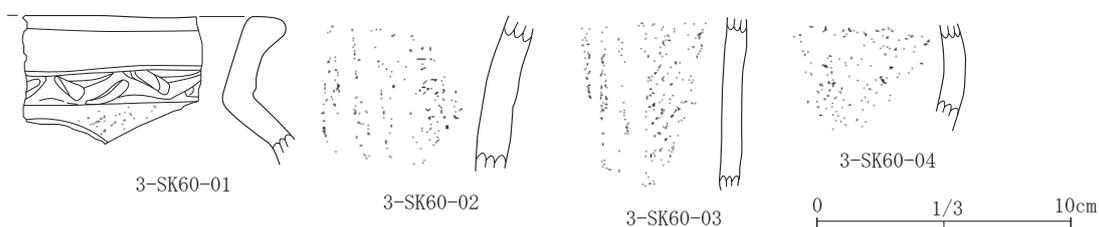
これらの遺物から、加曾利EⅡ式と判断される。



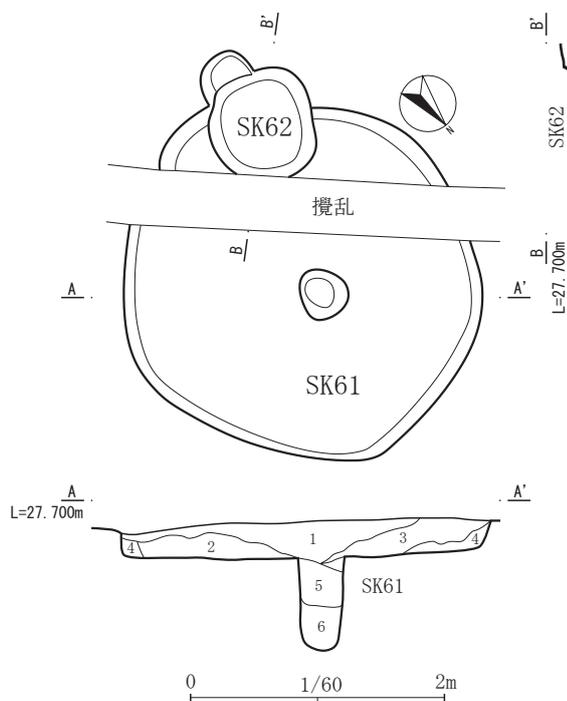
第144図 SK60

SK60

- 1層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～3mm 多量、炭化物ブロックφ1～2mm 極微量。
- 2層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～30mm 多量。
- 3層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～30mm 極多量。しまりあり。
- 4層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～20mm 多量。



第145図 SK60 出土遺物



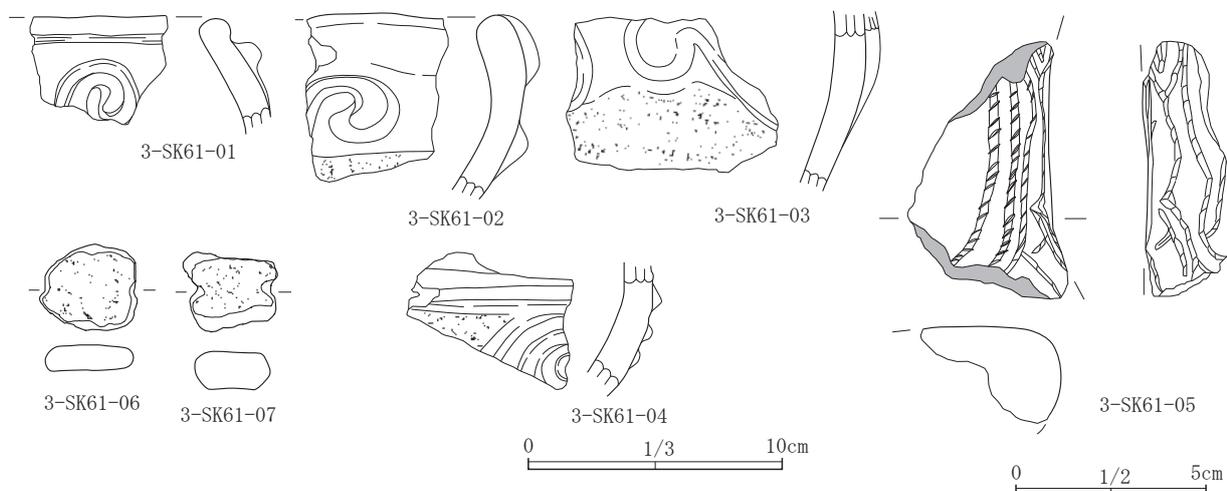
第146図 SK61・62

SK61

- 1層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～10mm 極多量。
 2層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～5mm 極多量。焼土ブロックφ1～3mm 極微量。
 3層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～20mm 極多量。しまりあり。
 4層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～30mm 多量。しまりあり。
 5層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～10mm 極多量。
 6層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～20mm 極多量。

SK62

- 1層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～10mm 多量。焼土ブロックφ1～3mm 微量。
 2層 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロックφ1～3mm 多量。
 3層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～5mm 多量。焼土ブロックφ1～5mm 微量。
 4層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～20mm 多量。



第147図 SK61 出土遺物

01は深鉢口縁部破片、太い隆帯により渦巻文が描かれる。02は01と同様であるが、渦巻はやや簡略化されている。また、胴部には磨消懸垂文が垂下する。03は02同様簡略化された渦巻文で、胴部は幅広の磨消懸垂文が垂下する。01～03は加曾利EⅢ式古段階であろう。04は地文に単節RLを施文後、隆帯による渦巻文を貼り付けている。加曾利EⅠ式段階であろう。05は土偶の胴～腰部にかけての破片である。上面および右側面には有節沈線による文様が描かれる。断面形状はやや厚手の板状を呈する。阿玉台式に伴う土偶と判断される。06・07は土器片錘である。深鉢胴部破片を用いている。06は15.2g、07は16.6gを計る。いずれも阿玉台式土器の破片を用いている。

本遺構出土遺物は加曾利EⅢ式・加曾利EⅠ式・阿玉台式の各遺物が出土しているものの、最も新しい加曾利EⅢ式をもって本遺構の時期と考える。

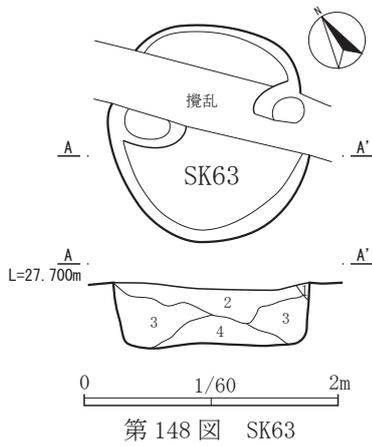
SK61・62 (第146・147図、図版40・41・92)

本遺構はA・B-21・22グリッドにおいて検出された。SK61はSK62に切られている。SK61の南側の一部、SK62の北側は攪乱により破壊されている。

SK61の平面形状は円形を呈し、長軸3.05m、短軸2.75mを計る。確認面下の掘り込みの深さは39cm、覆土は自然堆積で6層に分層される。断面形状は浅い皿状を呈する。遺構の床面ほぼ中央からピット1基が検出された。

SK62の平面形状は不整形円形を呈し、長軸92cm、短軸83cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは49cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。断面形状は鍋底状を呈する。本遺構の出土遺物はない。

SK61の出土遺物のうち7点を掲載した。



第148図 SK63

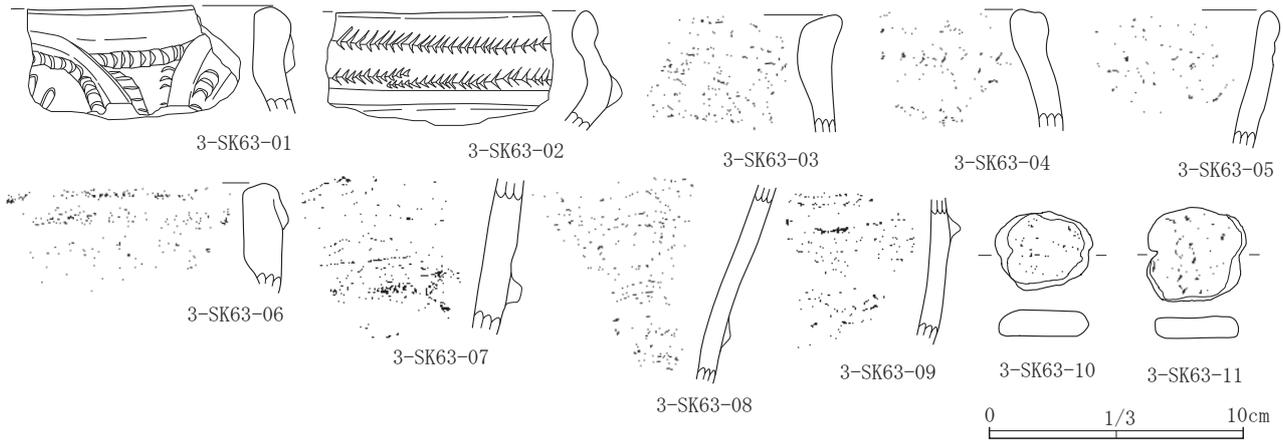
SK63 (第148・149図、図版41・92)

本遺構はA・B-22グリッドにおいて検出された。遺構の中央やや北寄りを攪乱によって破壊されている。平面形状はほぼ円形を呈し、長軸1.69m、短軸1.65mを計る。確認面下の掘り込みの深さは43cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。断面形状は鍋底状を呈する。土坑の短軸側壁寄りに2基対峙してピットが検出されている。本土坑に伴うものと判断した。

本遺構の出土遺物のうち11点を掲載した。

SK63

- 1層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~3mm 極多量。
- 2層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~5mm 多量、炭化物ブロックφ1~2mm 極微量。
- 3層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~10mm 多量。
- 4層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~40mm 多量。



第149図 SK63 出土遺物

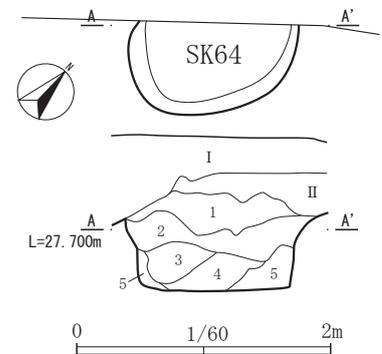
01は深鉢口縁部の破片である。隆帯による窓枠状の区画が設けられ、隆帯に沿って角押文が施文される。02は内湾する口縁部破片で口辺と頸部の境に隆帯が1条巡る。口辺部にはペン先状の工具による押し引き文様が2列描かれる。03は2列の角押文により区画帯を設け、内部に鋸歯文を充填する。04は角押文による区画を設ける。05はハの字に開く工具を用い、角押文を描く。下位は沈線による波状文が描かれる。06は折り返し口縁で、内面に段を有す。無文。07は05と同一個体であろうか。同様の沈線および角押文が描かれる。08は胴部下端に隆帯が1条巡る。上半には連弧文が平行沈線で描かれる。09はハの字に開く工具を用いた角押文で波状の文様を描いている。10・11は土器片錘である。深鉢胴部の破片を用いるものであるが、10は無文、11はLの原体圧痕が施文されている。10は13.4g、11は17.1g。

以上の遺物より、本遺構は阿玉台Ⅱ~Ⅲ式と判断される。

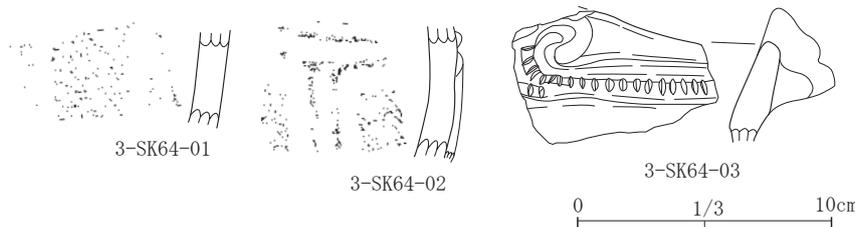
SK64 (第150・151図、図版41・92)

本遺構はB-23グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形、長軸は不明、短軸は80cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは31cm、覆土は自然堆積で5層に分層される。断面形状は鍋底状を呈する。

遺物は3点掲載した。



第150図 SK64



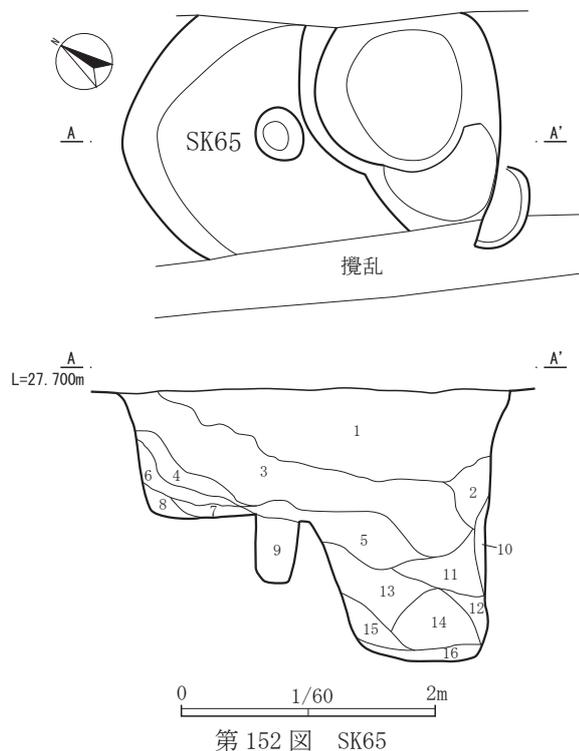
第151図 SK64 出土遺物

SK64

- 1層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~2mm 中量。
- 2層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~5mm 多量。
- 3層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~2mm 極多量、焼土ブロックφ1~3mm 微量。
- 4層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~5mm 極多量、焼土ブロックφ1~5mm 少量。
- 5層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~20mm 極多量。しまりあり。

01 は深鉢胴部の破片で、磨消懸垂文が垂下する。区画内には単節 RL の縄文が充填される。02 はキャリパー形土器の口縁直下の資料であろう。二重隆線により T 字状の文様が描かれる。03 は小波状を呈する深鉢口縁の突起部である。渦巻文が描かれ、渦巻に沿って刺突列が施される。

遺物より、加曾利 E I 式新段階と判断される。



SK65 (第 152 ~ 154 図、図版 41・92・93)

本遺構は B-23・24 グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈すものと思われる。南北軸は 2.98 m を計る。床面の北西側に小ピット 1 基、東側に円形の掘り込みが見られる。底部は 2 段の掘り込みになっており、テラス部分で 1.21 m、最深部で 2.29 m を計る。覆土は自然堆積で 16 層に分層される。

SK65

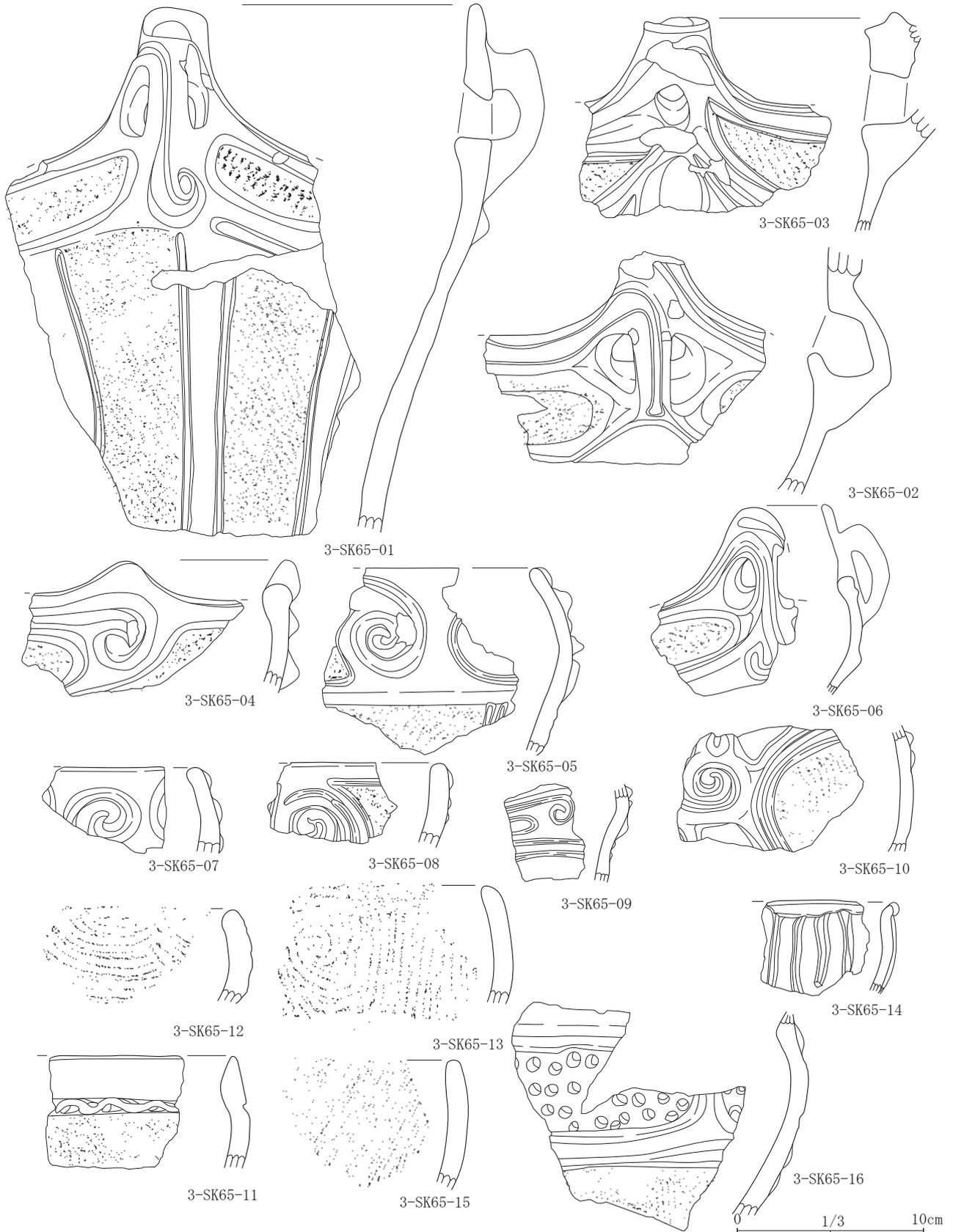
1層 10YR 3/4 暗褐色土	ロームブロックφ1~5mm 多量、炭化物ブロックφ1~5mm 微量。しまりあり。
2層 10YR 3/4 暗褐色土	ロームブロックφ1~10mm 極多量、炭化物ブロックφ1~極微量。
3層 10YR 3/4 暗褐色土	ロームブロックφ1~10mm 極多量。
4層 10YR 3/4 暗褐色土	ロームブロックφ1~5mm 極多量、炭化物ブロックφ1~3mm 極微量。
5層 10YR 3/4 暗褐色土	ロームブロックφ1~20mm 極多量、炭化物ブロックφ1~10mm 極微量。
6層 10YR 2/3 暗褐色土	ロームブロックφ1~3mm 多量。
7層 10YR 5/6 黄褐色土	ロームブロックφ1~5mm 極多量。粘性強。
8層 10YR 3/4 暗褐色土	ロームブロックφ1~10mm 極多量。
9層 10YR 3/4 暗褐色土	ロームブロックφ1~3mm 極多量。
10層 10YR 4/6 褐色土	ロームブロックφ1~20mm 極多量。
11層 10YR 2/3 暗褐色土	ロームブロックφ1~10mm 多量。
12層 10YR 2/3 暗褐色土	ロームブロックφ1~5mm 極多量。
13層 10YR 3/4 暗褐色土	ロームブロックφ1~3mm 極多量、炭化物ブロックφ1~2mm 極微量。
14層 10YR 3/4 暗褐色土	ロームブロックφ1~5mm 極多量。
15層 10YR 2/3 暗褐色土	ロームブロックφ1~5mm 極多量、褐灰色粘土ブロック第3~10mm 多量。しまりあり。
16層 10YR 5/6 黄褐色土	ロームブロックφ1~10mm 多量。しまりあり、粘性強。

01 は 4 単位の大波状突起を有する深鉢である。突起部分は渦巻文から頂上に向かって S 字の文様が描かれ、孔が貫通している。口縁部文様帯は、窓枠状の横区画を設け、左側の区画には LR の縄文を、右側の区画には刺突を充填させる。胴部はやや幅の狭い磨消懸垂文が垂下する。地文は RL である。02 は波状口縁の波頂部付近の破片である。橋状の把手が附され、盲孔が穿たれている。区画帯の中には LR の縄文が充填される。03 は 02 同様の盲孔が穿たれる把手部の資料である。口縁部文様帯には RL の縄文が充填される。04 は小波状口縁の突起部分の破片である。突起の直下に渦巻文を配し、区画内には LR の縄文が充填される。05 は内湾する深鉢口縁の破片である。太い隆帯により渦巻文が施文され、以下は磨消懸垂文が垂下する。地文には LR の縄文が施文される。06 は 01 と同一個体であろうか。S 字の沈線が垂下する突起部分には盲孔が穿たれる。区画内は単節 RL の縄文。07 は 05 同様の破片で渦巻文が描かれる。08 は平縁の深鉢口縁で沈線による渦巻文が描かれる。区画内は無節の縄文か。09 は渦巻文が描かれる口縁部破片。頸部、区画内は無文。10 は壺形の土器胴部であろうか、隆帯による弧状の線が対峙しそれを連結する部分には渦巻文が配される。弧状の区画帯内部は単節 LR の縄文が充填施文される。11 は口縁部が直立気味に立ち三角形に尖る。口辺は無文で胴部との境には交互刺突文が施文される。胴部は単節 RL 。12 は内湾する口縁部の破片で沈線により弧状の文様が連続して描かれる。13 は平行沈線により渦巻・縦方向の集合沈線が描かれる。14 は口縁部の破片で細い隆線が縦方向に等間隔に貼り付けられる。15 は内湾する口縁部の破片斜方向に 3 本 1 単位の条線が全面に描かれる。16 は口縁直下文様帯の大破片。隆帯による区画の内部に円形の刺突文を充填させる。17 は双耳壺形の土器であろうか、橋状の把手は欠落しているのか観察できない。口縁部はやや外反気味に内傾し、無文帯となる。屈曲部分には円管の刺突列が巡り、胴部は懸垂文が変化した逆 U 字形の文様が描かれ内部に縦回転の RL 縄文が施文される。18 は条線を地文にし屈曲部分に磨消手法による T 字状の文様を描く。19 は磨消懸垂文が垂下し、縦方向の撚糸文を地文にしている。20 ~ 35 は土器片錘である。無文部、懸垂文、など様々な胴部破片が用いられる。重量は 20 は 30.9g、21 は 31.8g、22 は 18.4g、23 は 19.7g、24 は 16.3g、25 は 18.4g、26 は 18.9g、27 は 20.4g、28 は 13.9g、29 は 17.9g、30 は 12.0g、31 は 11.5g、32 は 11.7g、33 は 10.8g、34 は 8.0g、

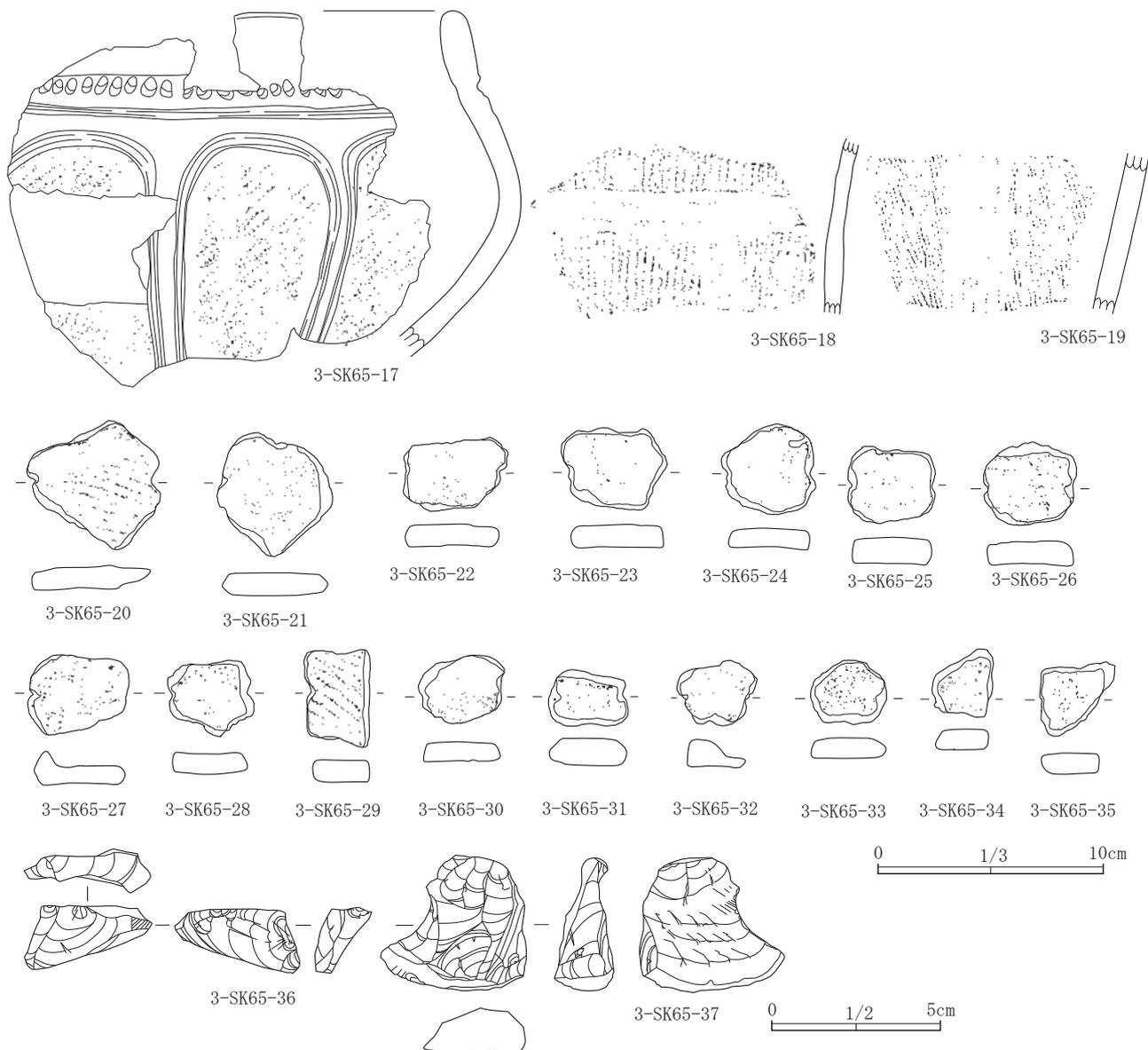
35は11.8gを計る。

36はチャートの石核である。プラットホームを平坦に成形したのち最終剥離を行うもので小形で横長の剥片をはがしている。37は方形の剥片である。二次的な加工は認められない。材質はチャート。

出土遺物は01～10が加曽利EⅢ式、12～14は曾利Ⅱ～Ⅲ式、11・15～19は連弧文様式土器の特徴を兼ね備えた加曽利EⅢ式期と判断される。



第153図 SK65出土遺物(1)



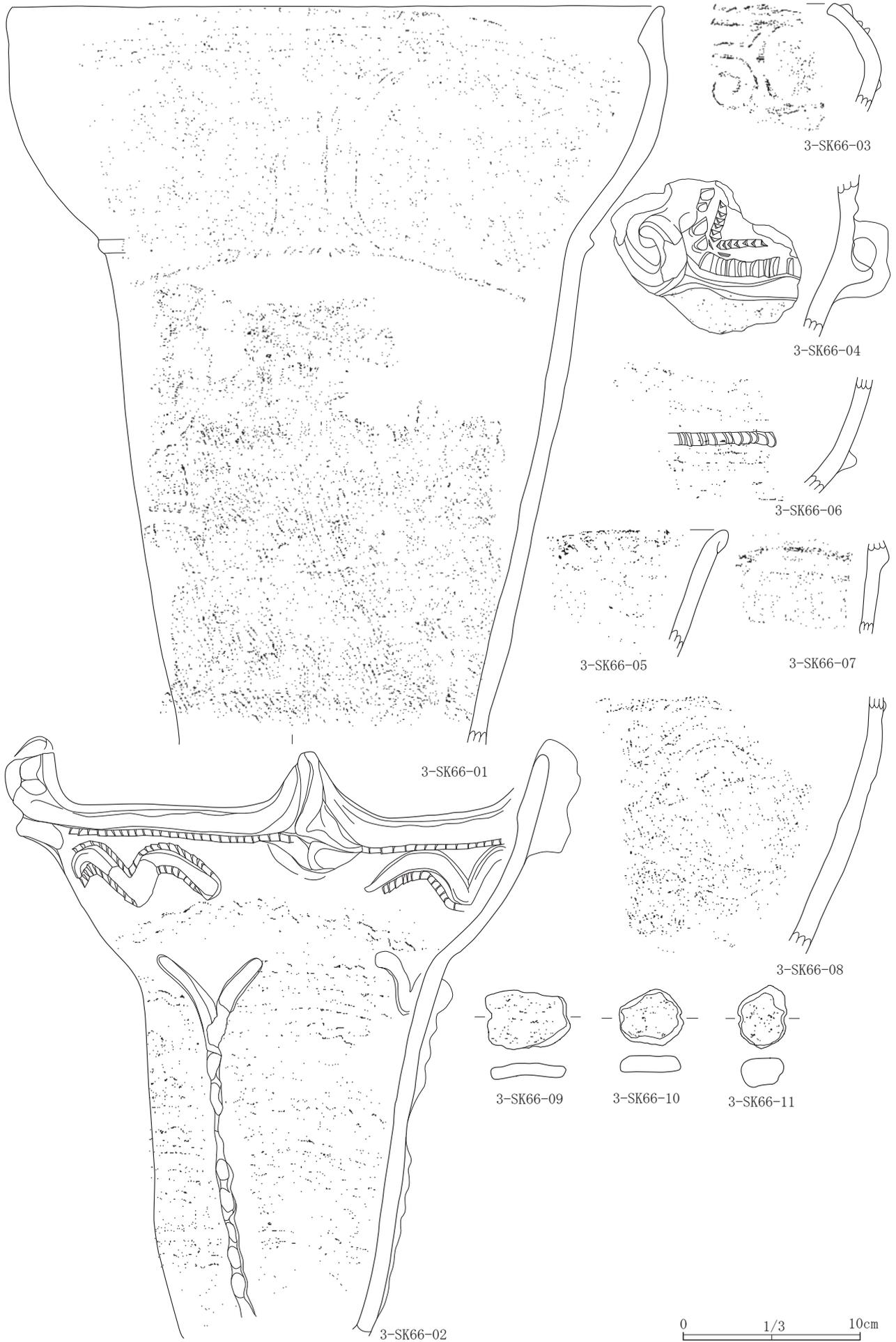
第154図 SK65 出土遺物 (2)

SK66 (第84・155図、図版41・94)

本遺構はA-16グリッドにおいて検出された。SI13・15・SK71・72と重複する。上端部は長軸1.59m、短軸1.30mの不整形円形を呈するが、下端は大きく広がって長軸2.16m、短軸1.91mのほぼ楕円形になっている。確認面下の掘り込みの深さは99.3cm、断面形状はいわゆる袋状を呈する。

遺物はまとめて良好な資料が出土している。

01は底部を欠損する深鉢で、胴下半より口縁までほぼ完形である。胴部は直線的に立ち上がり、上半で屈曲した後大きく内湾する。屈曲部には刻みを有する隆帯が1条巡る。全面に無節の縄文を施文した後、口縁部直下に沈線により窓枠状の区画を描いている。口唇部内面に段を有する。02は4単位の突起を有する深鉢である。底部は欠損するがほぼ完形である。胴部は直線的に立ち上がり、上半で屈曲した後大きく内湾する。口縁直下には角押文が1列巡り、以下m字状の貼り付け文が等間隔に施される。胴部は5列の横位角押文によって区画され、内部に波状沈線が充填される。また、Y字の貼り付け文が垂下する。地文はない。01・02は形状および文様の特徴から、阿玉台Ⅲ～Ⅳ式であろう。03はキャリパー形土器の口縁部破片である。二重隆線の貼り付けにより渦巻文から剣先文様が描かれるものでであろう。地文は単節LR。加曾利EⅠ式。04は屈曲部の破片である。渦巻状の突起が貼り付けられ、渦巻より連繋する隆帯に沿って角押文が配される。阿玉台Ⅳ式。05は直線的に大きく開く口縁部破片で、口縁は折り返す。無文。06は内湾する屈曲部から口辺部下半の破片である。屈曲部には隆帯が1条巡り、隆帯に沿って角押文が巡る。地文は無文。07は屈曲部から胴部にかけての破片である。屈曲部には隆帯が1条巡り、胴部は



第155图 SK66 出土遺物

縦方向の条線が施文される。08は屈曲部から胴部にかけての破片である。屈曲部には隆帯が1条巡り、胴部には沈線による菱形の文様が入れ子状に描かれる。地文は縦方向の撚糸文が隆帯上にまで施文される。加曽利E I式。09～11は土器片錘である。09は15.2g、10は11.6g、11は14.8gを計る。

本遺構は袋状を呈する遺構で、出土遺物から判断される時期は阿玉台式の最終末～加曽利E式初頭段階と判断される。

SK67 (第84図、図版42)

本遺構はA-15・16グリッドにおいて検出された。SI13・15・SK68・44と重複する。上端部は長軸2.19m、短軸2.02mの不整円形を呈するが、下端は僅かに広がって長軸2.19m、短軸2.16mのほぼ円形になっている。確認面下の掘り込みの深さは1.01m、断面形状はいわゆる袋状を呈する。

本遺構の出土遺物はない。

SK68 (第84図、図版42・95)

本遺構はA-16グリッドにおいて検出された。SI13・15・SK67と重複し、SI13・15を切っている。長軸2.56m、短軸1.94mの不整形を呈する。確認面下の掘り込みの深さは70cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。断面形状は鍋底状を呈する。

遺物は床面から出土している。01は深鉢で口縁部を欠損するものの、口辺から底部まで残存している。口辺は無文で、屈曲部に眼鏡状の把手を退化させた文様が隆帯によって4単位描かれる。以下、胴部上半には2条の沈線により区画され、内部に窓枠状の区画が描かれる。地文は縦方向のRLで、隆帯上にまで施文される。02は屈曲部から口辺部にかけての破片である。口辺部には渦巻文から連繋する隆帯が巡り、窓枠状の区画を設けている。隆帯に沿って幅広の角押文が施文される。屈曲部には3条の沈線が巡り、胴部および頸部には縦および横方向の櫛歯状工具による格子目状の文様が描かれる。03は口縁部の破片である。口縁はくの字に屈曲して開く。口縁部は無文で、口辺に隆帯による区画帯を設け、渦巻文、交互刺突文を充填させる。04も03と同様の破片で交互刺突文が施文されている。05は浅鉢である。底部は平底で胴部は内湾する。鉢形に近い形状を示す。内面に2段の段を有するもので、阿玉台式の特徴を備えている。06・07は土器片錘である。06は10.6g、07は9.0gを計る。

01～04は文様の特徴を細かに観察すれば、勝坂式的要素、阿玉台式的要素の双方が見られ、いわゆる広義の中峠式段階と判断される。

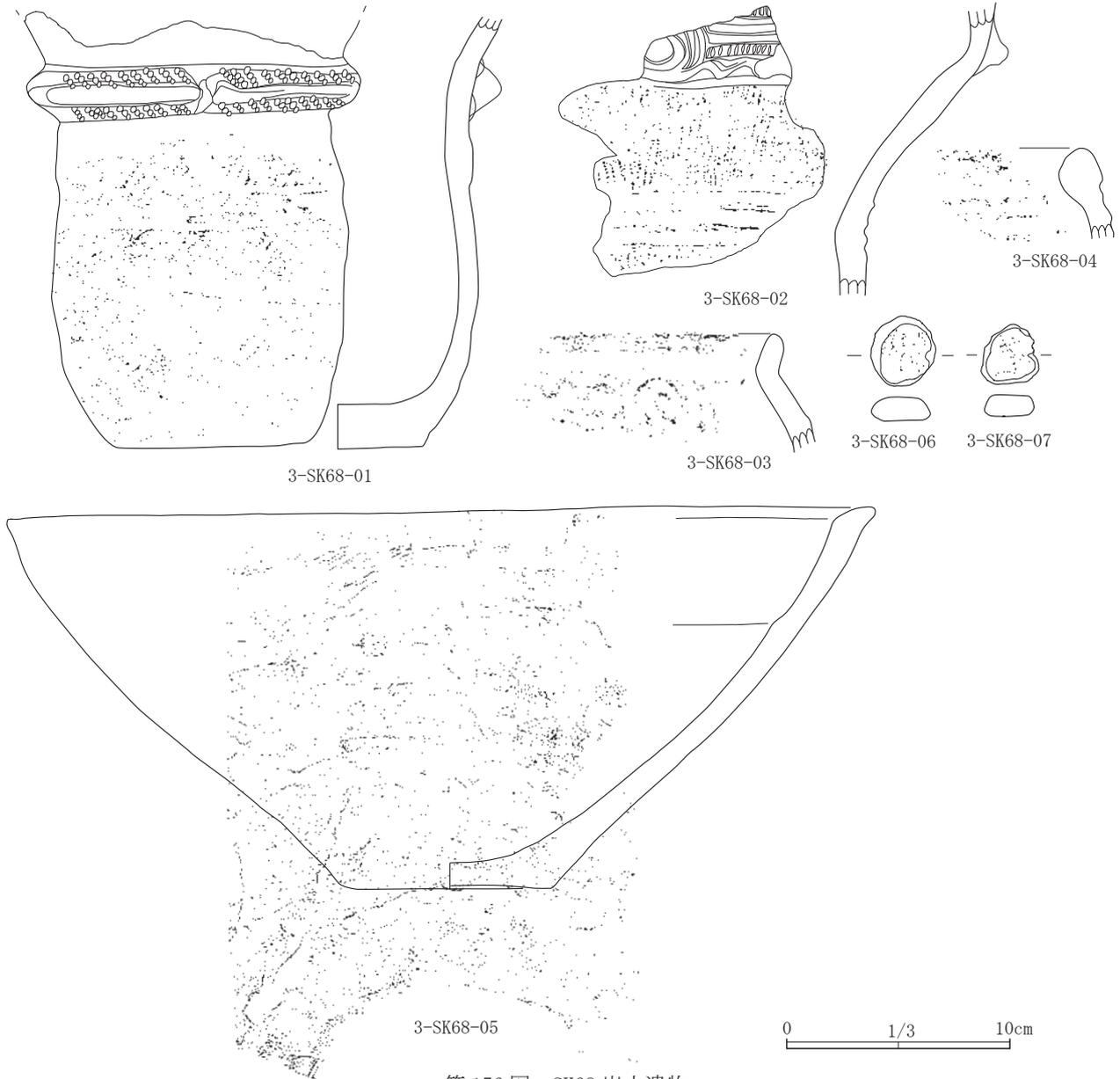
SK69・70 (第157・158図、図版42・95・96)

SK69はB-16・17グリッドにおいて検出された。SI18・SK45・70と重複するもので、本遺構が最も新しい。北東側が調査区域外となるが、平面形状はほぼ楕円形を呈するものと思われる。長軸不明、短軸1.61mを計る。確認面下の掘り込みの深さは86cm、覆土はやや不自然であるが、概ね自然堆積で5層に分層される。断面形状は鍋底状を呈する。

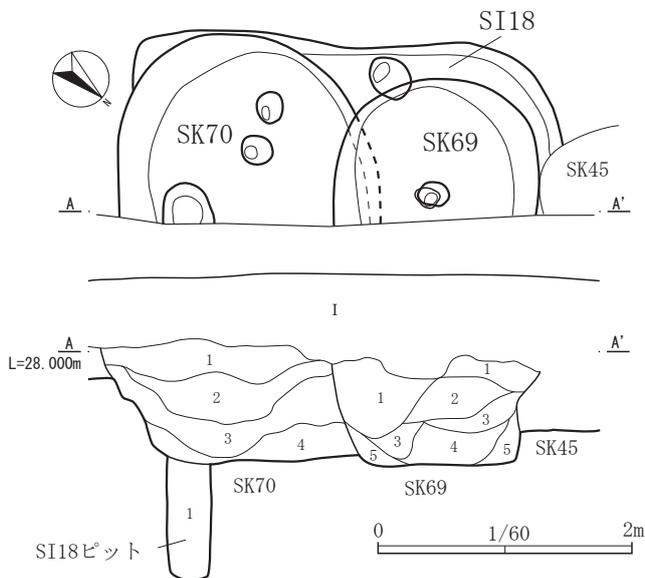
SK70はB-17グリッドにおいて検出された。SI18・SK69と重複し、SI18を切り、SK69に切られている。北東側が調査区域外となるが、平面形状はほぼ楕円形を呈するものと思われる、長軸不明、短軸2.1mを計る。確認面下の掘り込みの深さは97.5cm、覆土は自然堆積で4層に分層される。断面形状は鍋底状を呈する。本遺構の北東壁際にピットが1基検出されており、ピットの深さは89.9cmを計る。

遺物は両遺構から多量に出土しているが、調査時に2つの土坑の新旧関係を明確にできず、SK69・70として双方の遺物を一括して取り上げている。

01は深鉢土器の底部を欠損する資料である。平縁の口縁で文様帯には渦巻を中心に隆帯が延び、三角形や菱形の区画を構成する。区画内には縦方向の条線が充填される。胴部は3本の太い沈線が垂下し、地文には不完全な撚



第156図 SK68 出土遺物



第157図 SI18・SK69・70

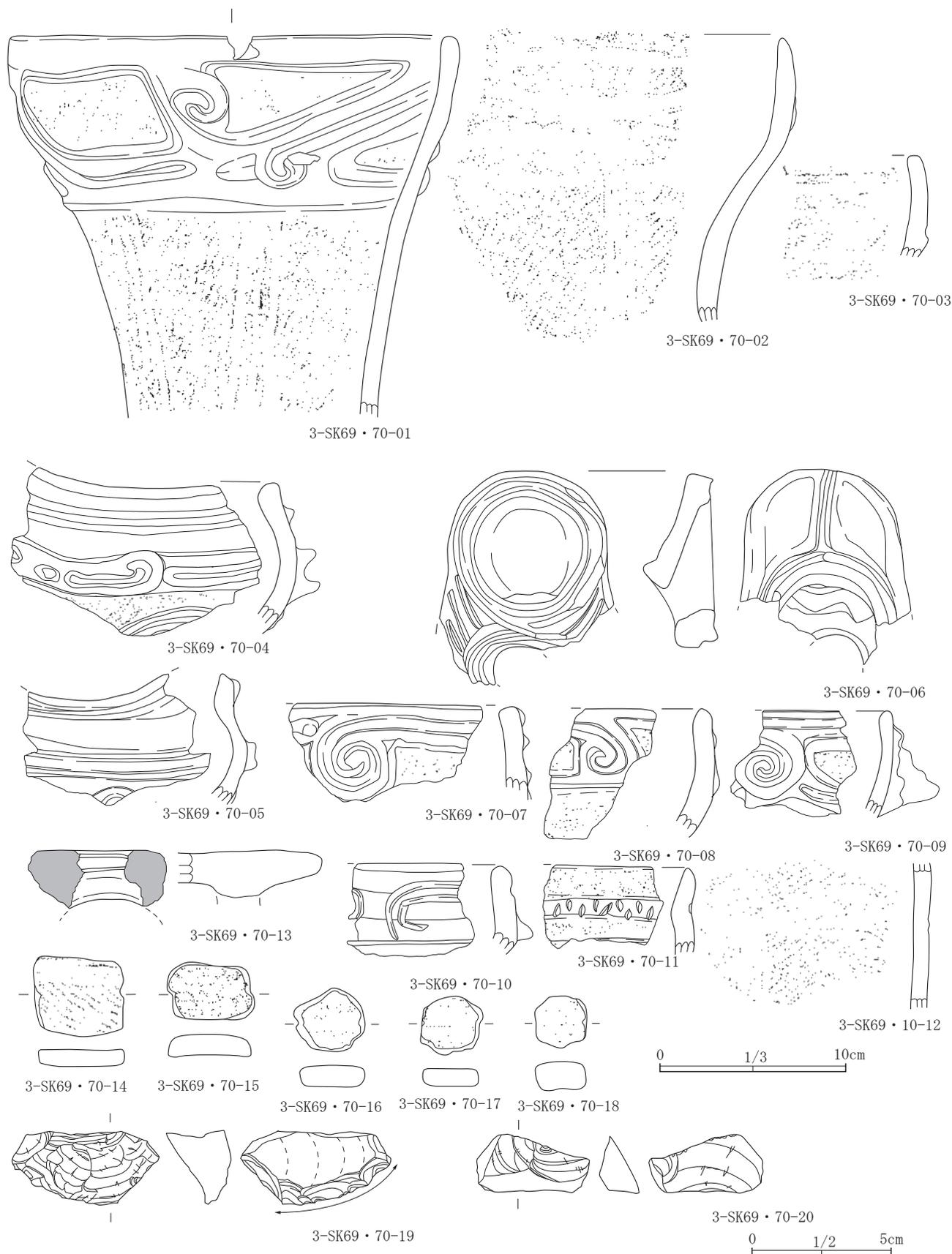
SK69

- 1層 10VR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~2mm多量、炭化物ブロックφ1~2mm少量。しまりあり。
- 2層 10VR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~5mm多量、焼土ブロックφ1~10mm極微量、炭化物ブロック中量。
- 3層 10VR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~2mm極多量、炭化物ブロックφ1~3mm極微量。
- 4層 10VR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~5mm極多量。
- 5層 10VR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~10mm極多量。

SK70

- 1層 10VR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~2mm極多量、焼土ブロックφ1~2mm極微量。しまりあり。
- 2層 10VR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~3mm中量、焼土ブロックφ1~3mm極微量、炭化物ブロックφ1~3mm極微量。しまりあり。
- 3層 10VR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~5mm多量。しまりあり。
- 4層 10VR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1~10mm極多量。しまりあり。

り戻しによる縄文が全面に施文される。02は太い隆帯により窓枠状の区画が設けられ、内部にLR縄文が充填される。胴部は太い沈線3条による磨消懸垂文が垂下する。地文はLR。03は02と同様の破片である。同一個体の可能性がある。04はキャリパー形土器の口縁部破片。波状を呈す。二重隆線によって文様が描かれている。地文はLR。05は04と同一個体カ。キャリパー形土器の口縁部破片。波状を呈す。06は環状の把手部分である。沈線による文様が描かれている。07は平縁の深鉢口縁部破片である。口縁から連繋する隆帯が渦巻文を構成する。区画内にはLR



第158図 SK69・70 出土遺物

の縄文が充填される。08は07と同様、平縁の深鉢口縁部破片である。口縁から連繫する隆帯が渦巻文を構成する。区画内および胴部にはLRの縄文が施文され、頸部の無文帯は見られない。09も07・08と同様。10はやや内傾する深鉢口縁部。口辺部に2本の沈線によるS字文様が描かれる。頸部との境には隆帯が1条巡る。11はややくの字に外反して開く口縁部。頸部との境に交互刺突文が1条巡る。地文は口辺部までLR。12は深鉢胴部の破片である。括れ部には沈線が1条巡り、上位に波状の沈線が沿う。地文はRL縄文を縦方向に回転施文を行う。13は鏝付形の台形土器である。受面は大きく張り出し鏝状となる。脚部は中位より欠損しているが円形の透かし孔が確認できる。14～18は土器片錘である。14は28.4g、15は22.9g、16は16.6g、17は13.2g、18は14.3gを計る。

19はスクレーパーである。縦長剥片の基部を除去し周縁に剥離を加え、刃部としている。材質は黒色緻密ガラス質安山岩。20は石核である。剥片を利用するもので、小形の剥片を2枚剥がし取っている。材質はチャート。

出土遺物は01～03・11・13は加曽利EⅢ式古段階。この内11は連弧文様式の土器で、加曽利EⅢ式平行である。04～06は加曽利EⅠ式新段階。07～09・12は加曽利EⅡ式である。出土遺物から判断して、加曽利EⅢ式が最も新しくSK69、次にSK70が加曽利EⅡ式、最も古い遺構はSI18と想定できる。

SK71 (第84図、図版43)

SK71はA-16グリッドにおいて検出された。SI13・15・SK66と重複するが、新旧関係は不明である。平面形状は楕円形を呈する。長軸93cm、短軸77cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは25cm、断面形状は逆台形を呈する。

本遺構の出土遺物はない。

SK72 (第84図)

SK72はA-16グリッドにおいて検出された。SI13・15・SK66と重複するが、新旧関係は不明である。平面形状は不整形円形を呈する。長軸64cm、短軸60cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは46cm、断面形状は皿状を呈する。

本遺構の出土遺物はない。

SK73 (第84図、図版43)

SK73はA-16グリッドにおいて検出された。SI13・15・SK66と重複するが、新旧関係は不明である。平面形状・長軸・短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは33cm、断面形状は鍋底状を呈する。

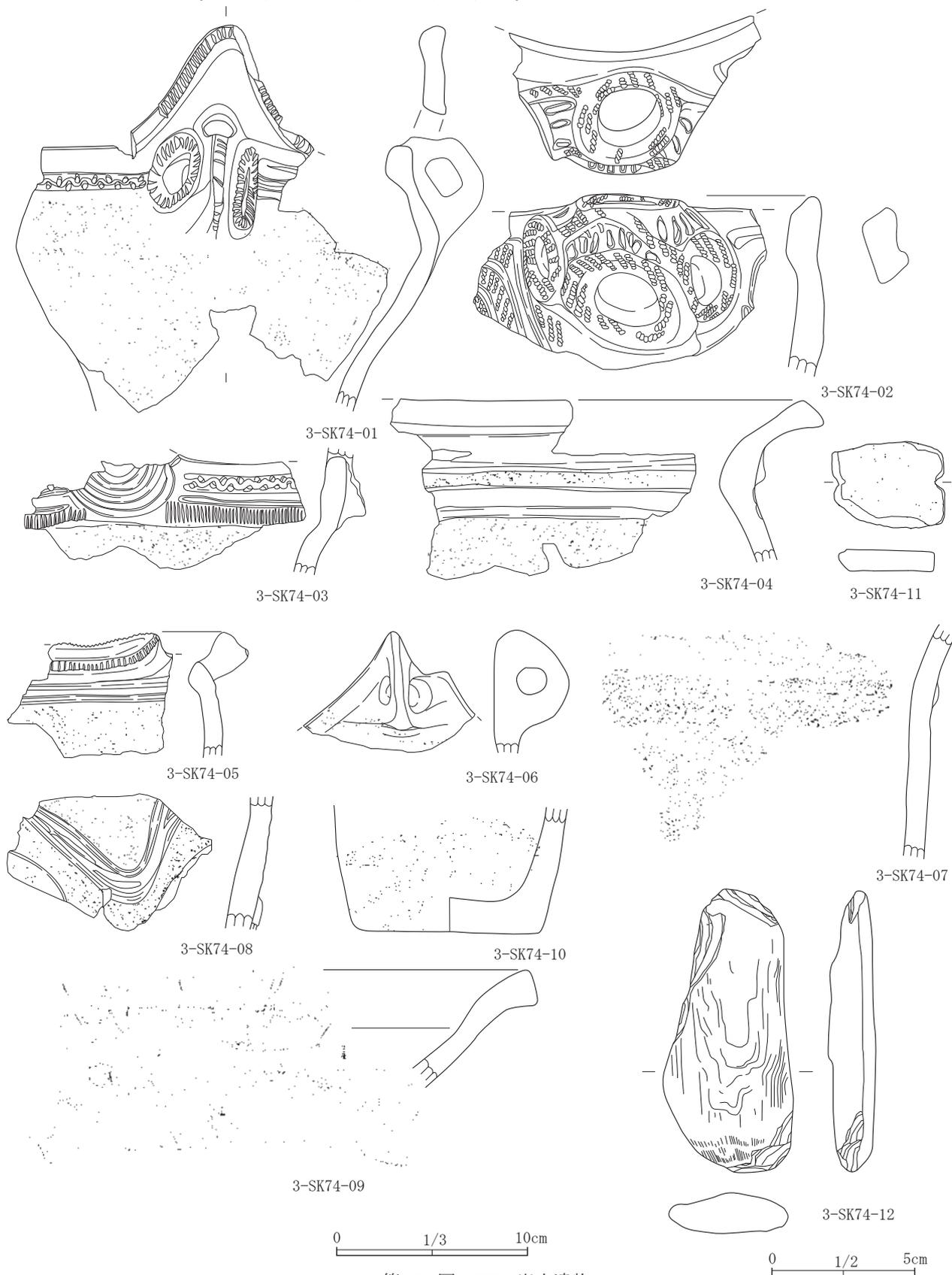
本遺構の出土遺物はない。

SK74 (第120・159図、図版43・96)

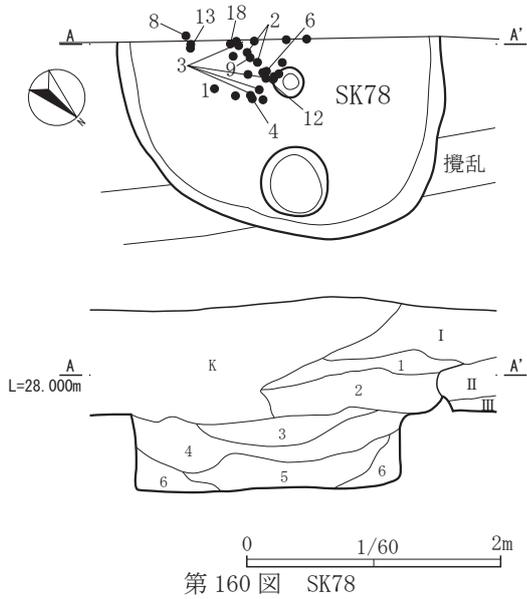
本遺構の詳細についてはSK37と併記した。本遺構の出土遺物のうち、12点を掲載した。

01は底部がそろばん玉状になる勝坂式のキャリパー形土器であろうか、胴部下半より底部にかけては欠損している。口縁は平縁で三角形の大形の把手が1箇所が付される。突起の周囲には刻みが施される。また、把手部分の直下には眼鏡状の把手が付され、盲孔が穿たれている。口縁部は屈曲して直立するもので、無文帯となる。屈曲部には交互刺突列が1条巡る。器面には単節RLが粗雑に施文される。勝坂式的な要素を多く持つ土器である。02は環状の隆帯を組合せ内部が空洞になる袋状の把手である。盲孔を有す。隆帯上には単節RLの縄文が施文される。同部には沈線により文様が描かれる。地文はRL。阿玉台Ⅳ式から加曽利EⅠ式段階の遺物であろう。03は口縁部文様帯が庇状に突出するもので、文様帯部分に渦巻文による突起部が付され、交互刺突文が1条、縦方向の刻みが下端に施される。胴部には単節LRの縄文が施文される。04は外反して開く口縁部の資料である。口縁直下には太い沈線が2条巡り、沈線間に残された隆起部分にはRLの縄文が、地文には単節LRの縄文が施文される。05は深鉢口縁部の破片で、隆帯による片切状の突起が付される。突起の周辺には刻みが施され、以下に沈線が2条巡る。胴部は単節RL。06は三角形の突起部分の資料である。眼鏡状の把手が付される。浅鉢の可能性はある。07は深鉢

胴部の破片である。胴部中位に低い隆帯が巡り、上下を区分けしている。上部は無文で下半はRL縄文を縦方向に施文するもので、Z字状の結節文が垂下する。08は胴部上半の破片でU字状の隆帯が貼り付けられる。隆帯は端部で二重隆線になる。地文は単節RL。09は浅鉢口縁部の大破片である。口縁は内部にやや緩やかな段を有し大きく開く。口唇端部は平坦になる。10は深鉢同部の下半から底部の資料である。下端は無文であるが上端部に僅かながらRLの縄文が観察される。11は土器片錘である。重量は38.7gである。12は磨製石斧である。材質が絹雲母片岩であり摩耗が激しい。先端部および基部側は一部欠損する。



第159図 SK74出土遺物



第160図 SK78

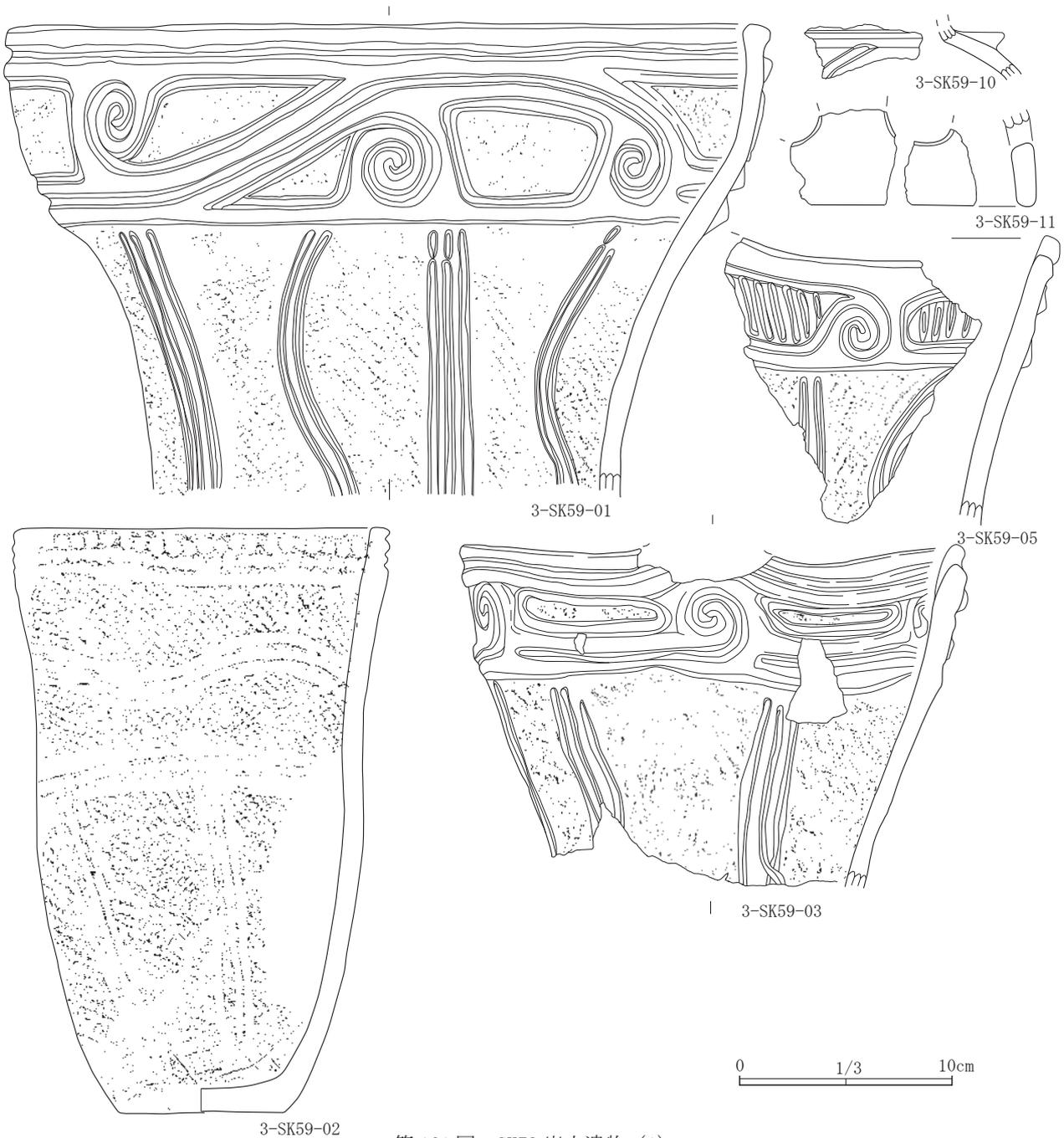
SK78 (第160～162図、図版43・44・97)

本遺構はA-20・21グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈するものと思われる。長軸不明、短軸2.4mを計る。確認面下の掘り込みの深さは58.5cm、覆土は自然堆積で6層に分層される。断面形状は鍋底状を呈する。

調査時にSK78出土遺物をSK59と誤記したために、遺物に記した注記番号はSK59になっている。

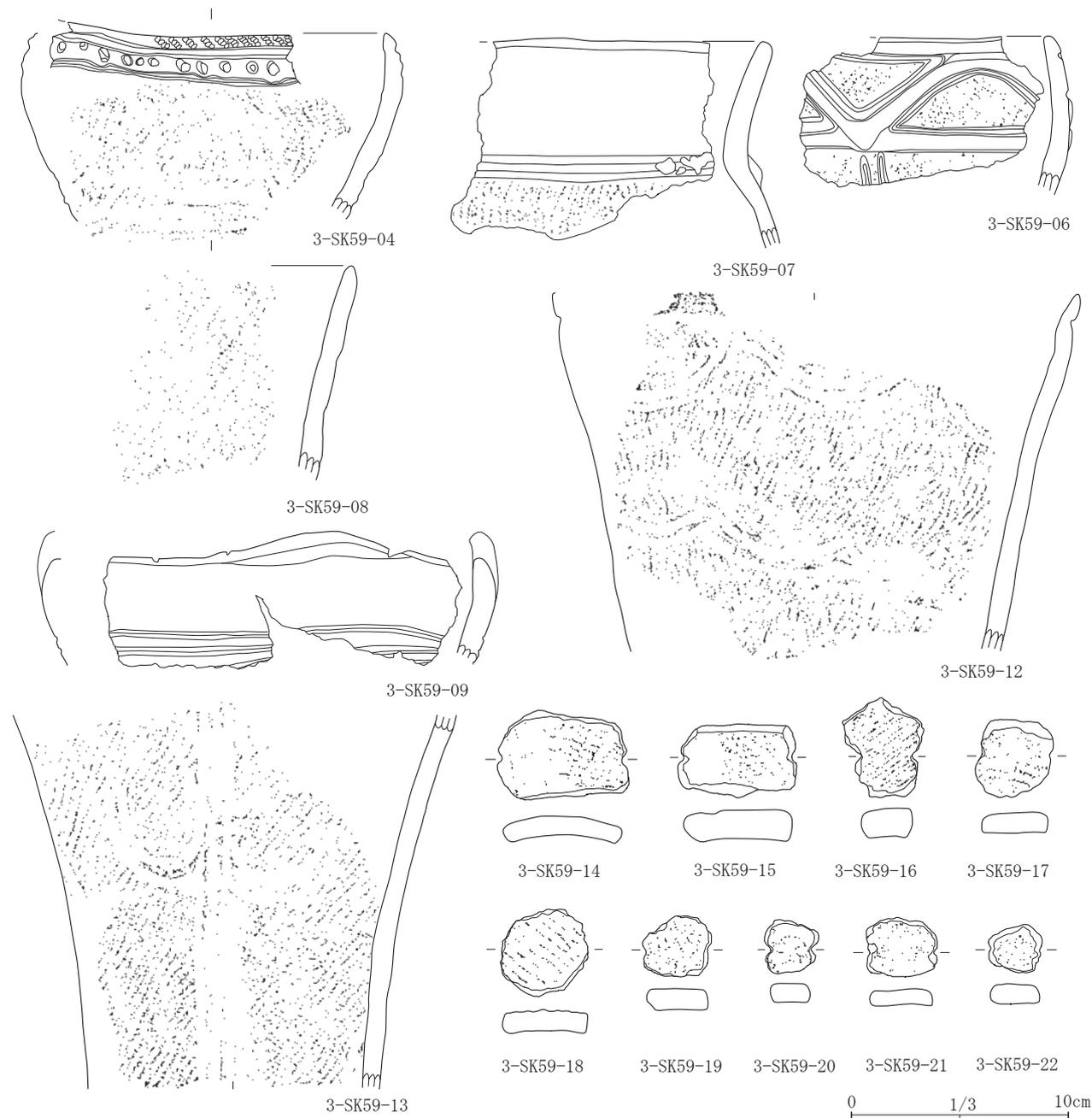
SK78

- 1層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～10mm 中量、焼土ブロックφ1～2mm 極微量。
- 2層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～5mm 中量、焼土ブロックφ1～3mm 極微量。
- 3層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～3mm 多量、焼土ブロックφ1～3mm 極微量、炭化物ブロックφ1～2mm 極微量。
- 4層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～10mm 多量、炭化物ブロックφ1～2mm 極微量。しまりあり。
- 5層 10YR 4/6 褐色土 ロームブロックφ1～20mm 多量、炭化物ブロックφ1～3mm 極微量。しまりあり。
- 6層 10YR 4/6 褐色土 ロームブロックφ1～5mm 多量、炭化物ブロックφ1～2mm 極微量。しまりあり。



第161図 SK78 出土遺物 (1)

01 はキャリパー形の深鉢上半部の資料である。胴下半より底部にかけては欠損している。口縁部文様帯には二重隆線の貼り付けにより、渦巻文が描かれ、渦巻間を同様の隆線で連結する。頸部に文様帯はなく胴部には3本1単位のやや太い沈線により懸垂文、蛇行懸垂文が交互に描かれる。区画内および胴部には単節LRの縄文が施文される。02 は円筒状の器形を呈する。口縁は平縁で、口縁直下には円形の刺突列が2列巡る。交互刺突にはならない。胴括れ部より上半には3本1単位の沈線により緩やかな波状の文様が描かれる。胴部の括れ部分には3条の沈線が巡り、以下同じ沈線による懸垂文が等間隔で垂下する。03 は4単位波状の口縁深鉢である。把手部分は欠損している。波頂部の直下に渦巻文が施文され胴下半には3本1単位の懸垂文が垂下する。01 と同様の文様構成を用いている。地文には無節Rの縄文が施文される。04 は内湾する深鉢の口縁部資料。胴部以下は欠損する。口唇部はやや三角形に尖り、RLの縄文が施文される。口唇直下には2本の沈線により区画された内部に円形の刺突列が1条巡る。胴上半部には太い沈線により2本1単位の連弧文が描かれる。胴部括れ部には沈線が2条巡る。05 は波状口縁の口縁部破片である。渦巻を中心に窓枠状の区画帯が設けられ、内部に縦方向の沈線が充填されている。胴部はLRの縄文を地文に沈線による懸垂文が垂下する。06 は口縁部の破片である。口縁部文様帯部分には低い隆帯による三角形の区画文が描かれ、内部にLRの縄文が充填される。胴部は沈線による懸垂文が垂下するが地文は無文のようである。07 は口縁部が幅広の無文帯で大きく屈曲して開く深鉢口縁。両耳壺形の土器であろうか、屈曲部には



第162図 SK78 出土遺物 (2)

隆帯が1条巡り、胴部は単節 RL の縄文が縦方向に施文される。08 は直線に開く深鉢口縁部の破片で口縁部に文様帯は無い。全面に単節 LR の縄文が施文されている。09 は緩やかな3単位の波状口縁である。口縁部は幅広の無文帯となり、胴部との境に2条の沈線が巡る。10 は有孔鏝付土器の胴部破片である。器厚は薄く、鏝状の突起部分に貫通孔は確認できない。鏝部より隆帯が斜方向に伸びている。11 は大形土器の脚部片である。2点出土しているが、同一個体と判断した。脚部中央付近に円形の透かし孔が連続して穿たれている。外面は黒色に処理されている。12 は深鉢口縁から胴部にかけての大資料である。口縁は折り返され、胴部には2本1単位の連弧文が2段に渡ってやや斜め方向に描かれる。13 は深鉢胴部下半の資料である。緩やかに外反して立ち上がる。底部は欠損している。沈線による3本の懸垂文が垂下し、懸垂文の途中から、弧状の沈線が2本対峙して描かれる。14～22 は土器片錘である。重量は14は28.1g、15は32.7g、16は23.6g、17は16.4g、18は18.8g、19は10.6g、20は6.7g、21は8.8g、22は6.0gを計る。

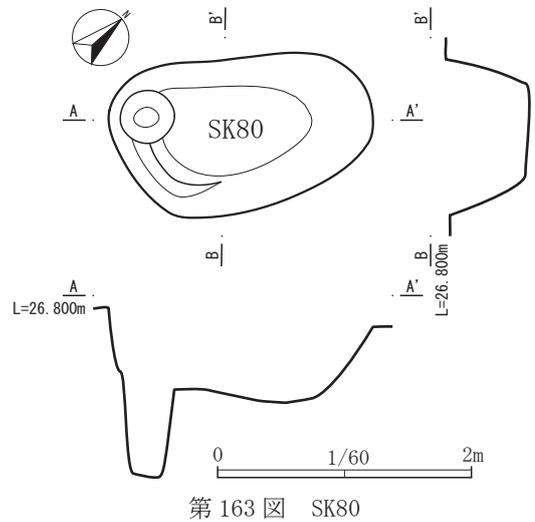
本遺構出土遺物は加曽利 E II 式新段階が中心となるものであるが、連弧文様式土器が完形で共伴しており、本地域に連弧文様式土器の出現時期が従来よりも古くなる可能性を示している。

SK80 (第163・164図、図版44・98)

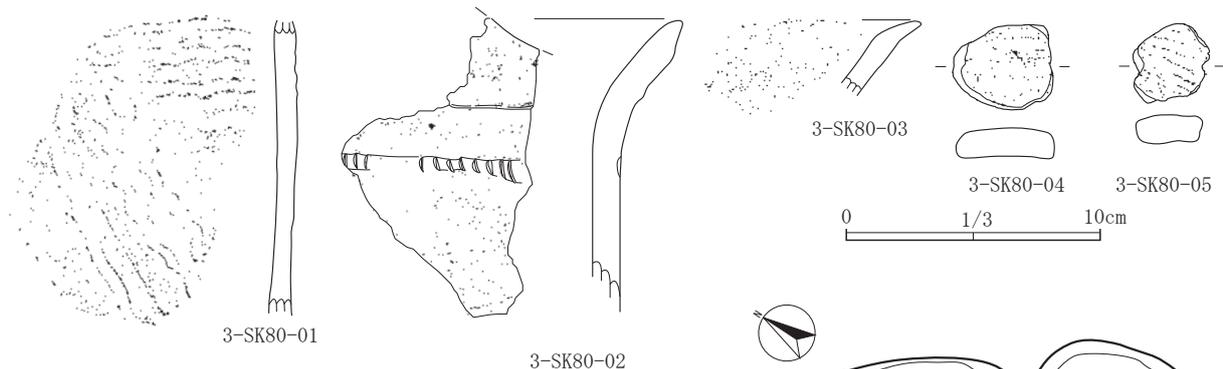
本遺構は A-10 グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈する。長軸 2.07 m、短軸 1.27 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 68 cm、断面形状は逆台形を呈する。南東隅にピットが1基検出されている。直径 42 cm、底面からの深さは 76.5 cm を計る。

本遺構の出土遺物の内、5点を掲載した。

01 は胴部の破片である。隆帯に沿って有節沈線が2条描かれる。02 は外反する深鉢口縁である。口縁は折り返しの跡がみられる。胴上半部に浅い角押文が施文される。03 は浅鉢口縁部の破片である。口唇部は三角形に尖る。器面は無文。04・05 は土器片錘である。04 は角押文が施文され、05 では縄文が施文される。重量は04で19.0g、05は12.5gを計る。



第163図 SK80

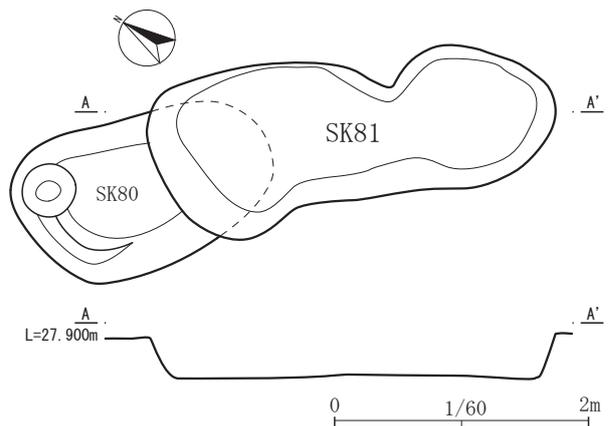


第164図 SK80 出土遺物

SK81 (第165図、図版44)

本遺構は A-10 グリッドにおいて検出された。西側で SK80 と重複しているが新旧関係は不明。平面形状は瓢形を呈する。長軸 3.16 m、短軸 1.14 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 36 cm、断面形状は浅い鍋底状を呈する。

本遺構の出土遺物はない。



第165図 SK81

SK82・83 (第166・167図、図版98)

SK82・83はB-10グリッドにおいて検出された。重複して検出されているが新旧関係は不明である。

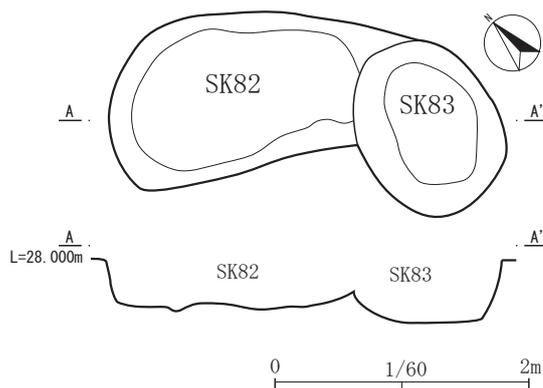
SK82は平面形状は不整楕円形を呈する。長軸不明、短軸1.22mを計る。確認面下の掘り込みの深さは39cm、断面形状は鍋底状を呈する。

SK83は平面形状は楕円形を呈する。長軸1.38m、短軸1.08mを計る。確認面下の掘り込みの深さは49cm、断面形状は鍋底状を呈する。

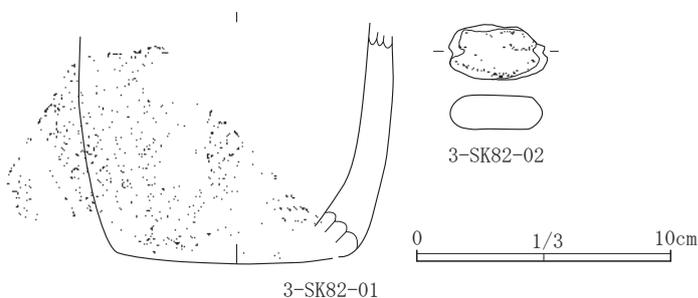
SK82の出土遺物の内2点を掲載した。

01は深鉢胴部下～底部の破片である。やや丸みを有する胴部である。器面には細い磨消懸垂文が垂下する。地文は縦回転施文のRL。02は土器片錘である。無文の深鉢胴部破片を用いる。重量は11.9g。

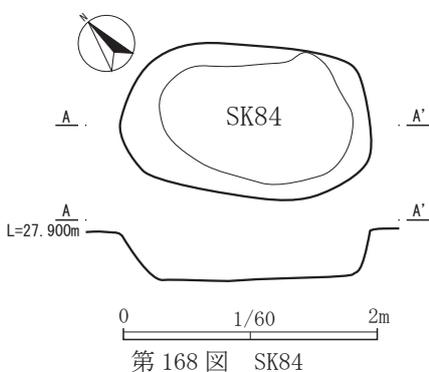
出土遺物より判断して、加曾利EⅡ式と判断される。



第166図 SK82・83



第167図 SK82 出土遺物



第168図 SK84

SK84 (第168図、図版44)

本遺構はB-10・11グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈する。長軸2.05m、短軸1.19mを計る。確認面下の掘り込みの深さは39cm、断面形状は鍋底状を呈する。

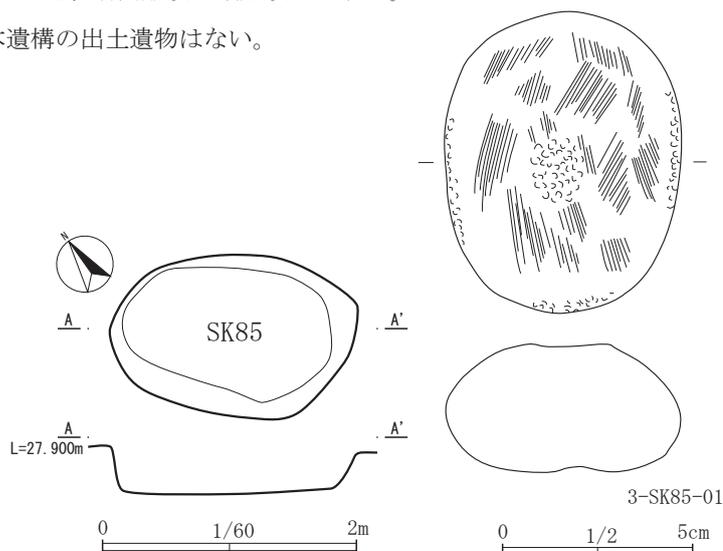
本遺構の出土遺物はない。

SK85 (第169図、図版44・98)

本遺構はA・B-11グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈する。長軸1.87m、短軸1.33mを計る。確認面下の掘り込みの深さは39cm、断面形状は鍋底状を呈する。

本遺構の出土遺物の内1点を掲載した。

01は磨石・凹石である。全面に磨り面および上下両面の中央部分には、敲打によるくぼみが観察される。材質は安山岩である。



第169図 SK85・同出土遺物

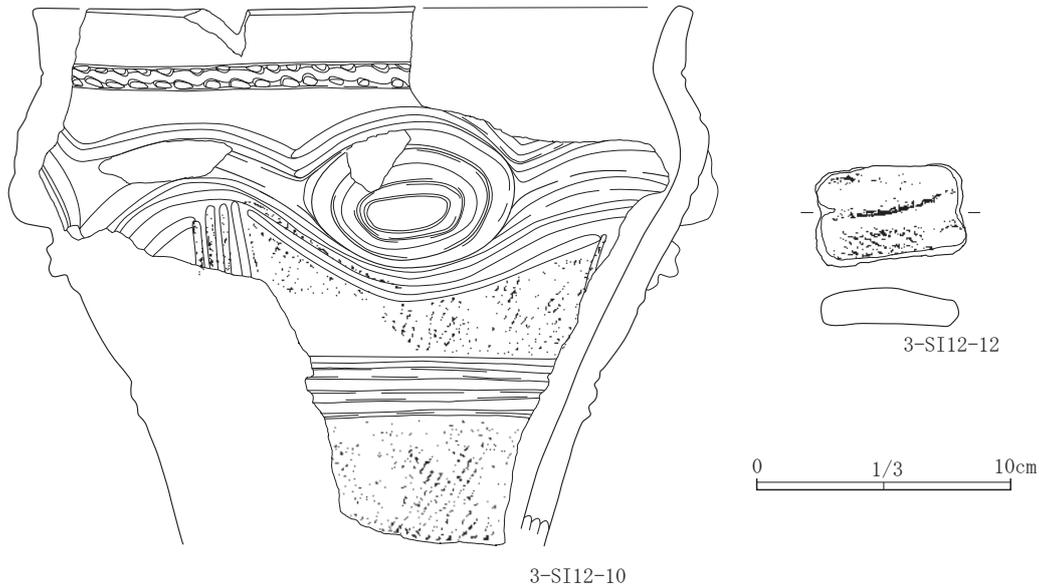
SK86 (第82・170図、図版98)

本遺構はA-15グリッドにおいて検出された。SI12と重複するものであるが、覆土上層においてSI12の炉が検出されており、本土坑の方が古いことが分かる。平面形状は不明。上端部の長軸97.5cmを計り、短軸は不明。いわ

ゆる袋状を呈する土坑で、底部の直径は1.56 mを計る。確認面下の掘り込みの深さは39 cm、覆土は自然堆積で3層に分層される。

本遺構の遺物は2点掲載した。

10は深鉢形土器の口縁～胴下半部にかけての資料である。口縁部はくの字に屈曲して開き、屈曲部に交互刺突文が1条巡る。口縁部文様帯には隆帯による円形の貼り付け文が等間隔に配され、隆帯がその間を繋いでいる。胴部中位には3条の隆帯が巡る。地文は縦回転のRL縄文が施文される。本遺物はその特徴から広義の中峠式と判断される。12は土器片錘である。重量は34.5gを計る。

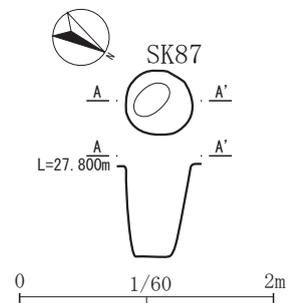


3-SI12-10
第170図 SK86 出土遺物

SK87 (第171図、図版44)

本遺構はB-17グリッドにおいて検出された。平面形状は円形を呈する。直径62 cmを計る。確認面下の掘り込みの深さは68.2 cmを計る。断面形状はピット状を呈する。

本遺構の出土遺物はない。



第171図 SK87

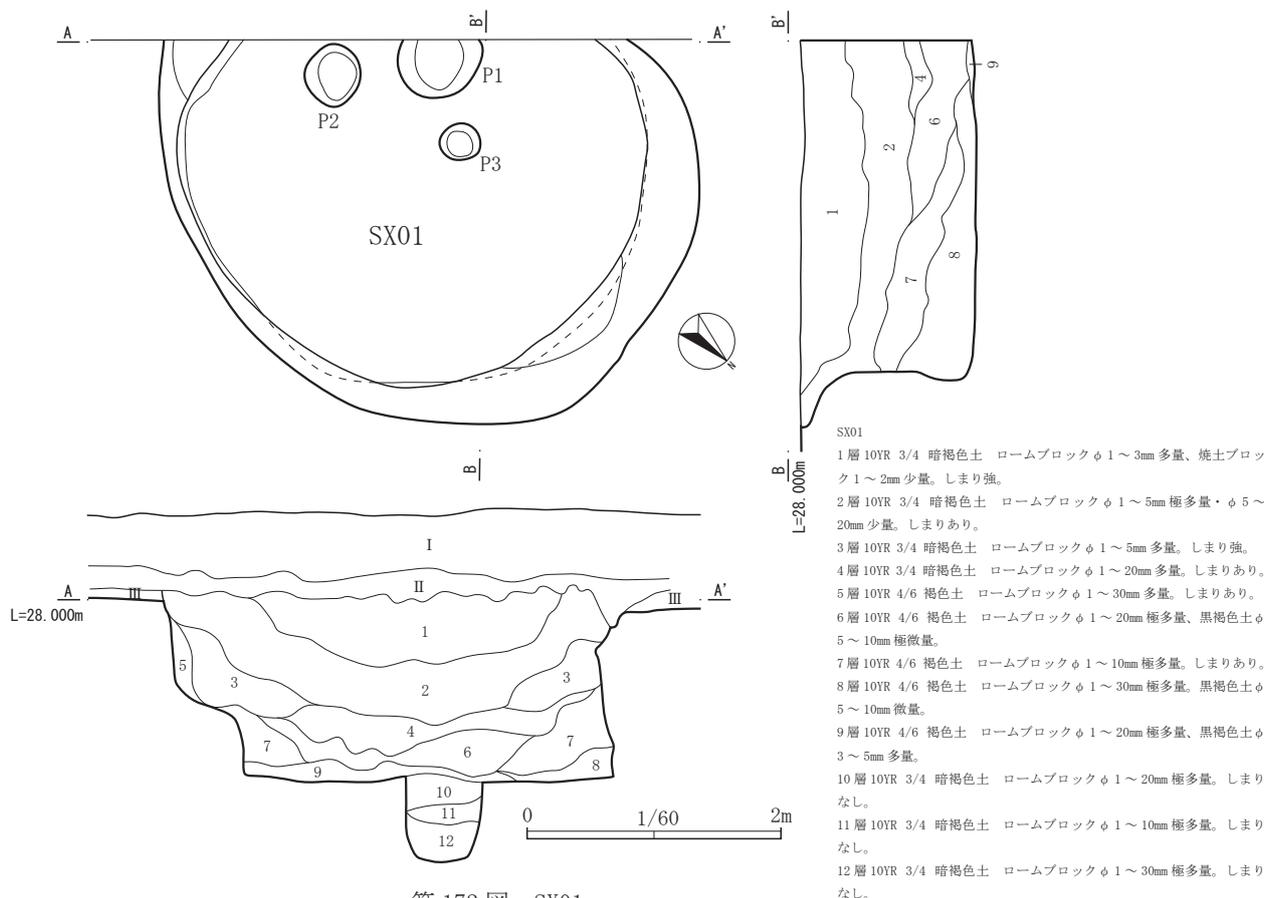
3 性格不明遺構 (SX)

SX01 (第172・173図、第9表、図版33・98・99)

本遺構はA・B-12・13グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈するものと思われる。長軸4.38 m、短軸3.75 mと他の土坑に比べて規模が大きく、所謂小堅穴と呼ばれるものであろう。本遺跡においては性格不明遺構SXとして取り扱った。確認面下の掘り込みの深さは1.40 m、覆土は自然堆積で12層に分層される。壁は北側でやや袋状を呈するもので、その他はほぼ垂直に立ち上がる。北側に僅かながら段を有する。断面形状は鍋底状を呈し、床面中央南壁寄りに3基のピットが検出されている。ほぼ中央に位置するP1は長軸69 cm、深さ65 cmを計る。

本遺構の出土遺物の内、11点を掲載した。

01は口縁がくの字に開く鉢形の土器である。口縁部は幅広く大きく開き、屈曲部に隆帯が1条巡る。胴部には2本の太い沈線で、緩やかな波状文様が平行に描かれる。地文は単節LR。02は01同様の鉢形土器である。口縁部の文様帯を有する加曾利EⅢ式で、渦巻による文様を起点に窓枠状の区画が設けられ区画内には縦方向の短沈線が充填される。胴部には縄文が施文されている。03は深鉢形土器の底部を欠損するほぼ完形の資料である。口縁部は平縁で口縁部文様帯は渦巻を中心に隆帯により区画が設けられる。胴部には隆帯が1条巡り3本1単位の懸垂文が



第172図 SX01

垂下している。区画帯内部および胴部には縦方向の撚糸文が施文される。04は胎土中に繊維を混入する土器で器面に横方向の条痕が施文される。口唇部には刻みが施されるもので、広義の茅山式土器であるが、子母口式の可能性がある。05はやや内湾する口縁部の破片で口縁直下に円形刺突列が1条巡る。口唇部および胴部にRLの縄文が施文され、3本の太い沈線による懸垂文が垂下する。06は03同様の隆帯による区画帯を設け区画内に撚糸文が充填される。07は三角形の把手部分の破片である。中央部分に刻みを有する隆帯が垂下する。08は浅鉢口縁部の破片である。三角形に尖り、内外面ともに無文である。09は口縁部文様帯に隆帯による区画帯を設け内部に単節LRの縄文を充填させている。

01から09は縄文時代中期加曾利EⅢ式古段階の遺物と判断され、連弧文様式土器01・03・05がこれに共伴している。

10・11は遺構の確認面から出土していた古墳時代中期後半の遺物であるが本遺構の時期とは明らかに時期の異なる遺物である。詳細については第9表に記載した。

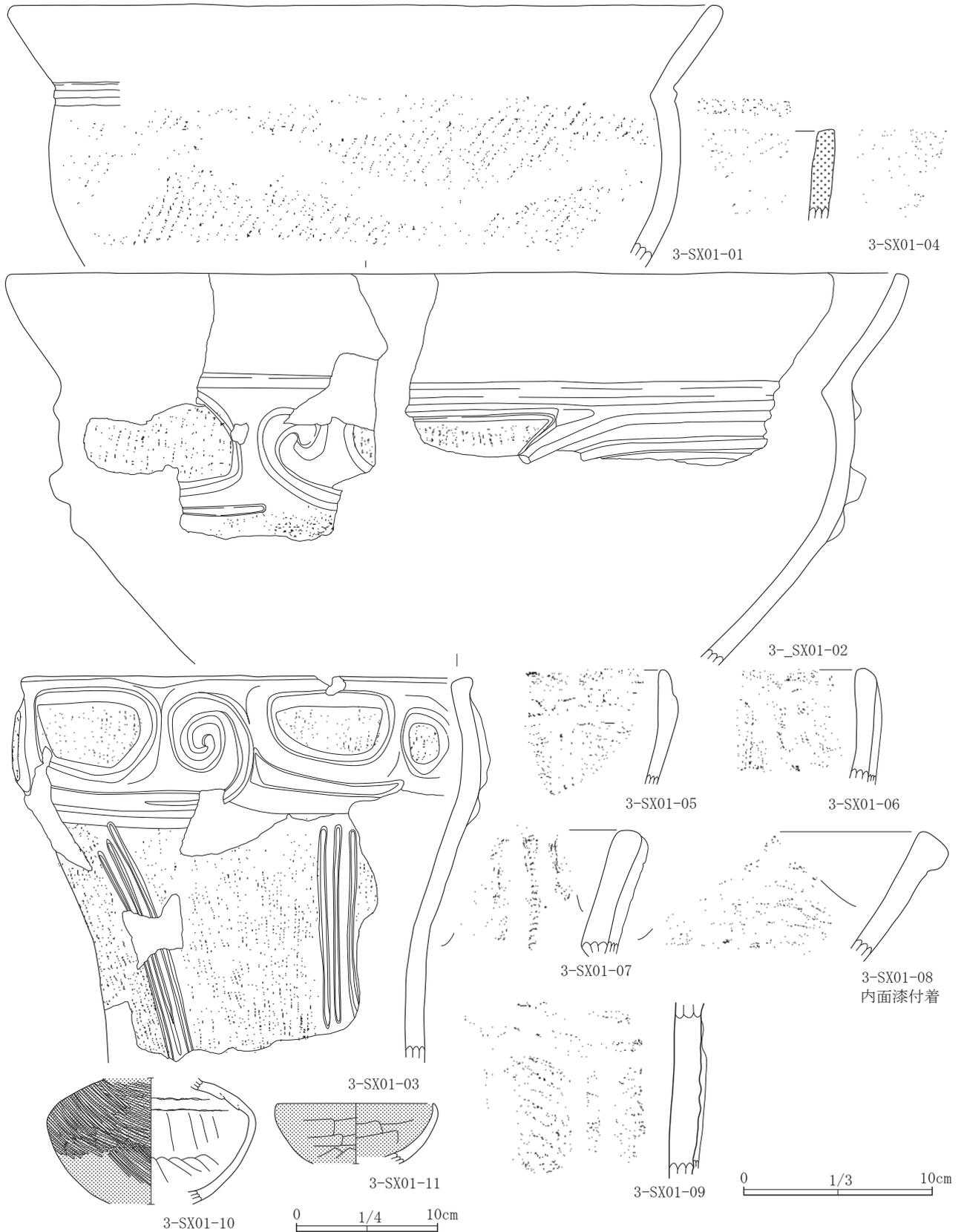
4 ピット (第173・174図、第9・10表、図版99)

3区から検出されたピットについては、遺構が重複する部分が多く、単独でピット状の遺構と判断できたものは少ない。全体図にこれらのピットについて位置を示したが、詳細については割愛する。尚、遺物を出土したピットについてのみ位置と計測値を第10表において示した。

P11-01は鏝付土器であろう。孔は観察されない。鏝の上部に短沈線による爪状の文様が描かれる。02は、くの字に外反する口縁部の破片である。浅鉢の可能性がある。器面は無文である。内面に段を有することから阿玉台式土器と判断される。

P13-01は、3単位波状の深鉢である。ほぼ完形で、口唇部には沈線が巡り、波頂部には渦巻文が配される。胴部は全面に単節LRの縄文が施文される。大木8b式中葉段階の遺物である。

P14-01は渦巻状の貼り付け部分が剥落したものである。加曾利EⅡ式段階であろう。02は土器片錘である。重



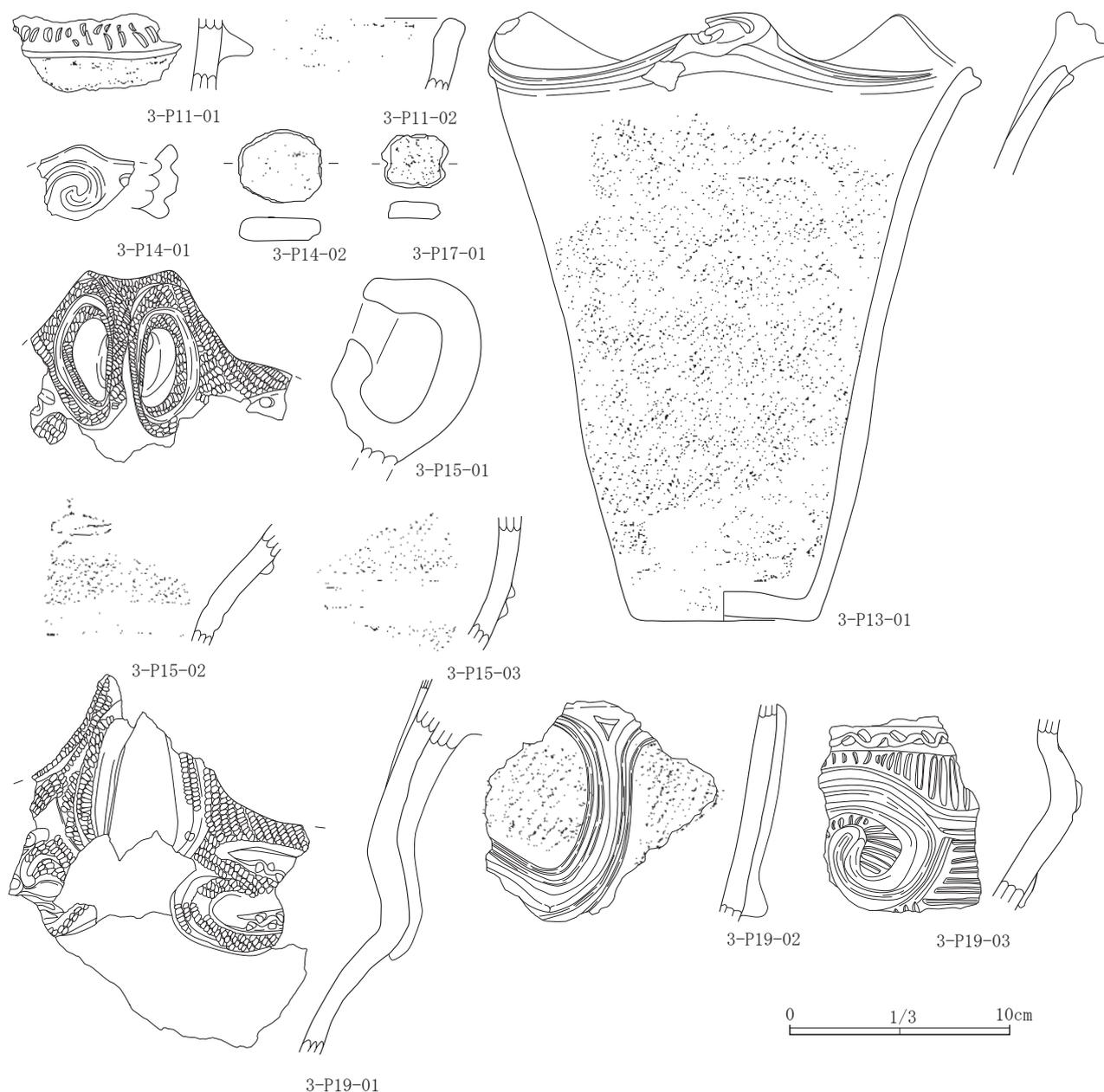
第173図 SX01 出土遺物

第9表 3区 SX01 古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
10	ASSW-3区-SX-1	土師器	埴	—	—	<9.0>	124.9	丸底と思われる。胴中央部で強く屈曲する。	外面はミガキ。内面はナデ、頸部付近に輪積痕を残す。	良好	内面 5Y4/2 暗灰黄 外面 2.5YR4/6 赤褐色	白色粒子多量に混入。	胴部 1/5	古墳時代中期 外面赤彩、胴上半部は被熱により赤彩が失われている。
11	ASSW-3区-SX-1	土師器	坏	10.9	—	<43.6>	43.0	体部は緩やかに内湾して口唇部に至る。	外面はヘラケズリの後、ナデ。内面はナデ。	良好	内外面 2.5YR5/6 明赤褐色	白色粒子・雲母多量。	1/5	古墳時代中期 内外面赤彩

第10表 3区ピット計測表

遺構名	検出グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	備考
P11	A-11	32	28	90	SK56 を切る
P13	A-4	—	44	44	P14 に切られる
P14	A-4	—	52	41	P13 を切る
P15	A-4	44	40	47	
P17	B-4	48	36	48	
P19	A-4	60	—	65	



第174図 3区ピット出土遺物

量は 17.0g を計る。胴部の破片を用いるものであるが、無文である。

P15-01 は、波頂部に付される眼鏡状の把手である。隆帯によって構成され、全面に単節 RL の縄文が施文される阿玉台最終末～加曾利 E I 式古段階の資料であろう。02・03 は同一個体の破片であろう。口縁部直下から頸部の破片で二重隆帯による文様が構成される。胴部および区画内には単節 LR の縄文が施文される。01 と同時期と判断される。

P19 は SI07 と重複する遺構である。同住居跡の南西壁寄り確認されている。01 は隆帯により大形の把手を有

するもので、隆帯上には単節RLの縄文が密に施文されている。阿玉台最終末～加曾利E I 式古段階の資料であろう。02は口縁部文様帯に付された二重隆線による文様が描かれる。区画内の地文は単節LR。03は口縁直下から文様部にかけての破片である。口唇直下には交互刺突文が1条巡り、以下S字の隆帯が貼り付けられ、同様の隆帯で横方向に連結され、区画を設ける。区画内には太い集合短沈線が縦および横方向に充填される。01は阿玉台IV式段階、02は加曾利E式I古段階、03は広義の中峠式と判断される。

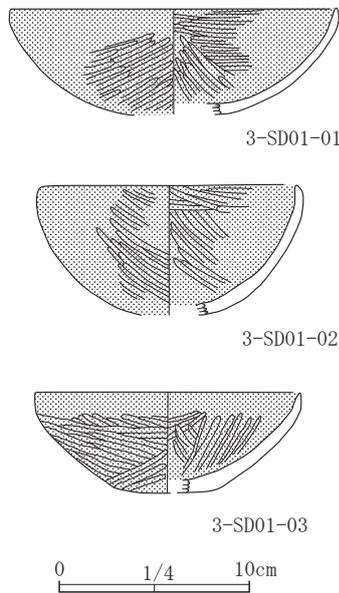
5 溝 (SD)

SD01 (第175・176図、第11表、図版44・45・99)

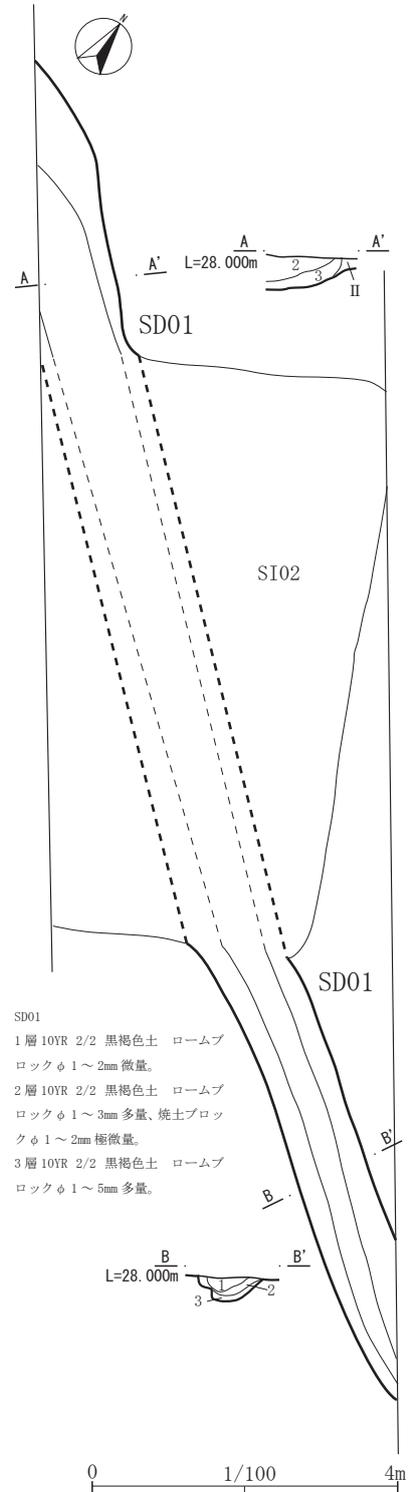
本遺構はA-10・11・12、B-12・13グリッドにおいて検出されている。調査区の南東から北西に向かい直線的に走行するもので、検出された全長は16.29m、最大幅は1.83m、確認面下の掘り込みの深さは43cmを計る。SI02と重複関係にあるもので、当初溝の方が古いと考え、調査を進めたが、断面図によって本遺構の方が新しいことが判明した。したがって、SI02部分の溝の図は作図できていない。

溝の覆土は3層に分層され、自然堆積を示している。

遺物は赤彩が施された坏3点が出土している。形状より5世紀中葉～後半の遺物と判断されるが、SI02出土遺物と同様の遺物が出土している点から、SD01として取り上げたこれらの遺物3点は本来SI02の遺物であり、本溝に伴う遺物ではないと判断される。一方で、掲載しなかった未使用遺物の中に近世の瓦が出土しており、同遺物をもって判断するならば、遺構は近世に伴う可能性が高い。



第176図 SD01 出土遺物



第175図 SD01

第 11 表 3 区 SD01 古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
1	ASSW-3区-SD-1	土師器	坏	(17.1)	—	5.5	74.7	底部は丸底カ。体部は緩やかに内湾して開き、口縁で僅かに内傾する。	内外面共にミガキ。	良好	内面 7.5R4/3 にぶい赤褐 外面 10R5/4 赤褐	長石・石英等小 ～中礫目立つ、 雲母多い。	1/4	内外面赤彩
2	ASSW-3区-SD-1	土師器	坏	(13.2)	—	<6.6>	54.9	底部は丸底カ。体部は緩やかに内湾して開き、口縁で僅かに内傾する。	内外面共にミガキ。	良好	内外面 2.5YR5/6 明赤褐	長石・石英・雲 母やや多い。	1/5	内外面赤彩
3	ASSW-3区-SD-1	土師器	坏	(13.9)	(5.2)	5.2	80.7	底部は僅かに丸みを帯びた平底、体部は直線的に開き口縁は短く直立する。	内外面共に口縁は横ナデ、体部はミガキ。	良好	内面 10R5/4 赤褐 外面 10R4/3 赤褐	長石・石英等小 ～中礫目立つ、 雲母やや多い。 白色針状物質微量。	1/5	内外面赤彩

6 遺構外出土遺物 (第 177 図、第 12 表、図版 99・100)

本区の表土掘削時に出土した遺物(表土)および遺構に伴わないグリッド出土遺物について、遺構外出土遺物としてまとめた。

表土-01 は胎土中に繊維を混入する、早期末葉、広義の茅山式土器である。内外面にアナダラ族の腹縁による条痕が横方向に施文される。02 は胴部は直線的に開き口縁に至る。全面に単節 RL の縄文を縦方向に施文している。縄文の施文方向から判断して中期加曾利 E 式でも古い段階の可能性はある。03 は深鉢形土器の上半部の資料である。口縁直下に 3 条の沈線が巡り、頸部には 2 本の沈線間を磨消たゆるやかな波状文が描かれる。胴部の括れ部には同様の磨消手法を用いた沈線が 2 条巡る。地文は単節 LR。文様構成より、連弧文様式土器と判断され、加曾利 E III 式前後に平行するものであろう。

表土-04 は表土中より検出されたもので、3 つに破損していたものが接合している。形状は受面はやや中央がくぼみ、鏝は無い。受面より屈曲して脚部に至る。脚部の孔は 6 箇所に分かれ、5 箇所で等間隔となるが、1 箇所のみ狭く、室伏徹氏の分類における単孔 2 孔・単孔 1 孔のいずれの分類基準からも外れる。脚端部はいずれも折損しており、折損後破断面を磨滅させて二次利用(再生)を行っている。受面の内側に鋭く尖った工具により絵画が描かれている。渦巻・山形などの文様が組み合わせられている。モチーフが何であるかは判断できない。内外面、特に内面に絵画が描かれる類例は福島県袋原遺跡・東京都玉川学園町遺跡などが知られているが、蛇体をモチーフとするものが従来知られており、本遺物も 2 匹の蛇体をデフォルメしたものとも想定できる。

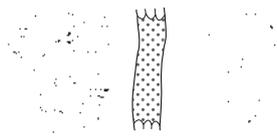
表土-05 はやや厚手の板状を呈する土偶の腹部側面の断片である。上下および側面には有節沈線による文様が描かれる。施文方法および形状より阿玉台式に伴う土偶と判断される。

表土-06 は土器片錘である。重量は 11.7g を計る。

B15-01 は土師器高坏である。脚柱部はやや円筒状を呈し、裾部で直角に曲がって開く。上腕部は欠損している。5 世紀中葉の遺物であろう。尚、詳細な観察については第 12 表にまとめた。

第 12 表 3 区遺構外古代遺物観察表

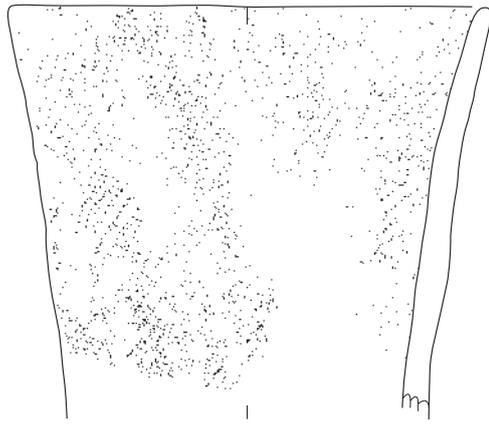
遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
1	ASSW-3区-B-15	土師器	高坏	—	(14.4)	<9.5>	228.4	脚柱は膨らみを有して開き、裾部ではほぼ水平に開く。	外面はヘラケズリ後ミガキ、裾部は内外面共にナデ、内面は輪積痕複数有り。	良好	内外面 10YR6/4 にぶい黄橙	長石・石英・雲 母多い、スコリア少量。	脚部	



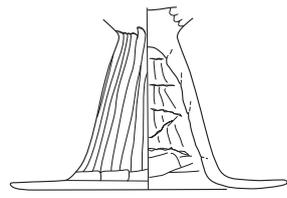
3-表土-01



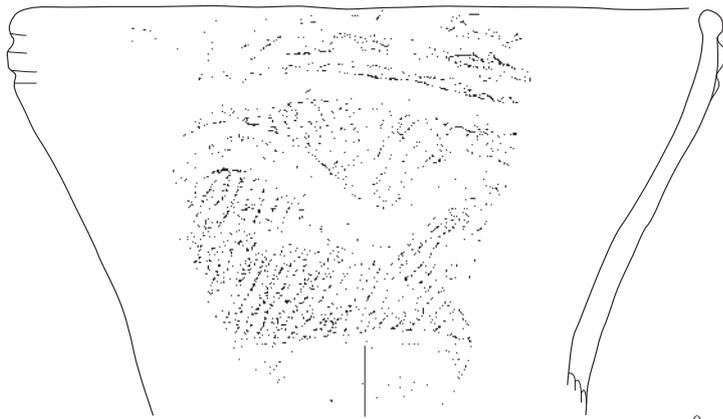
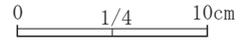
3-表土-06



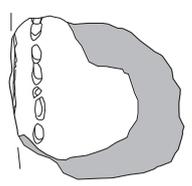
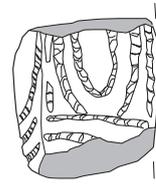
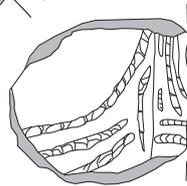
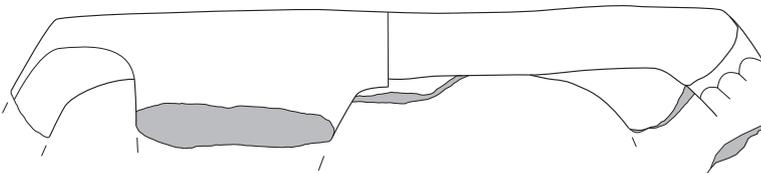
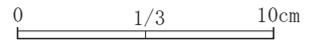
3-表土-02



3-B15-01

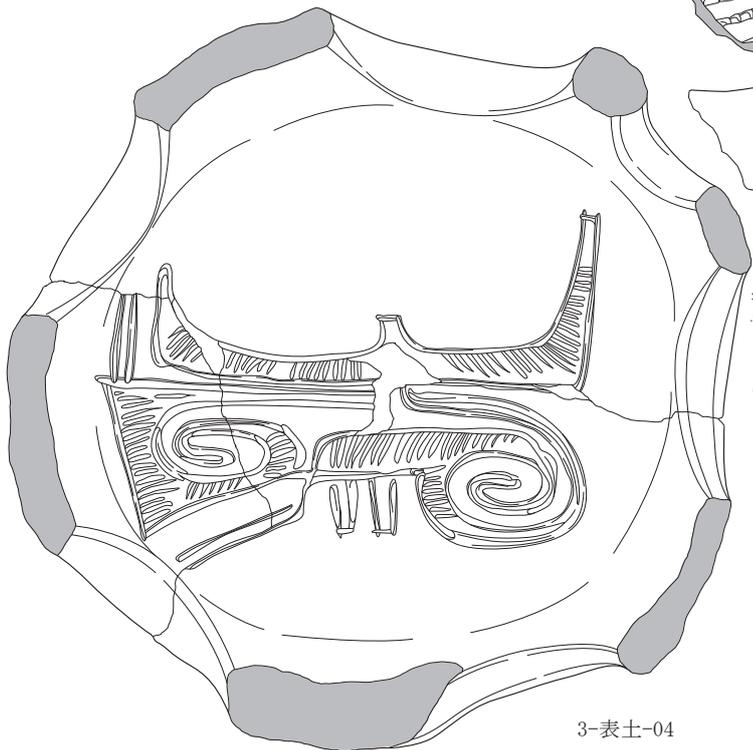


3-表土-03

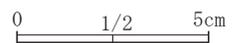


3-表土-05

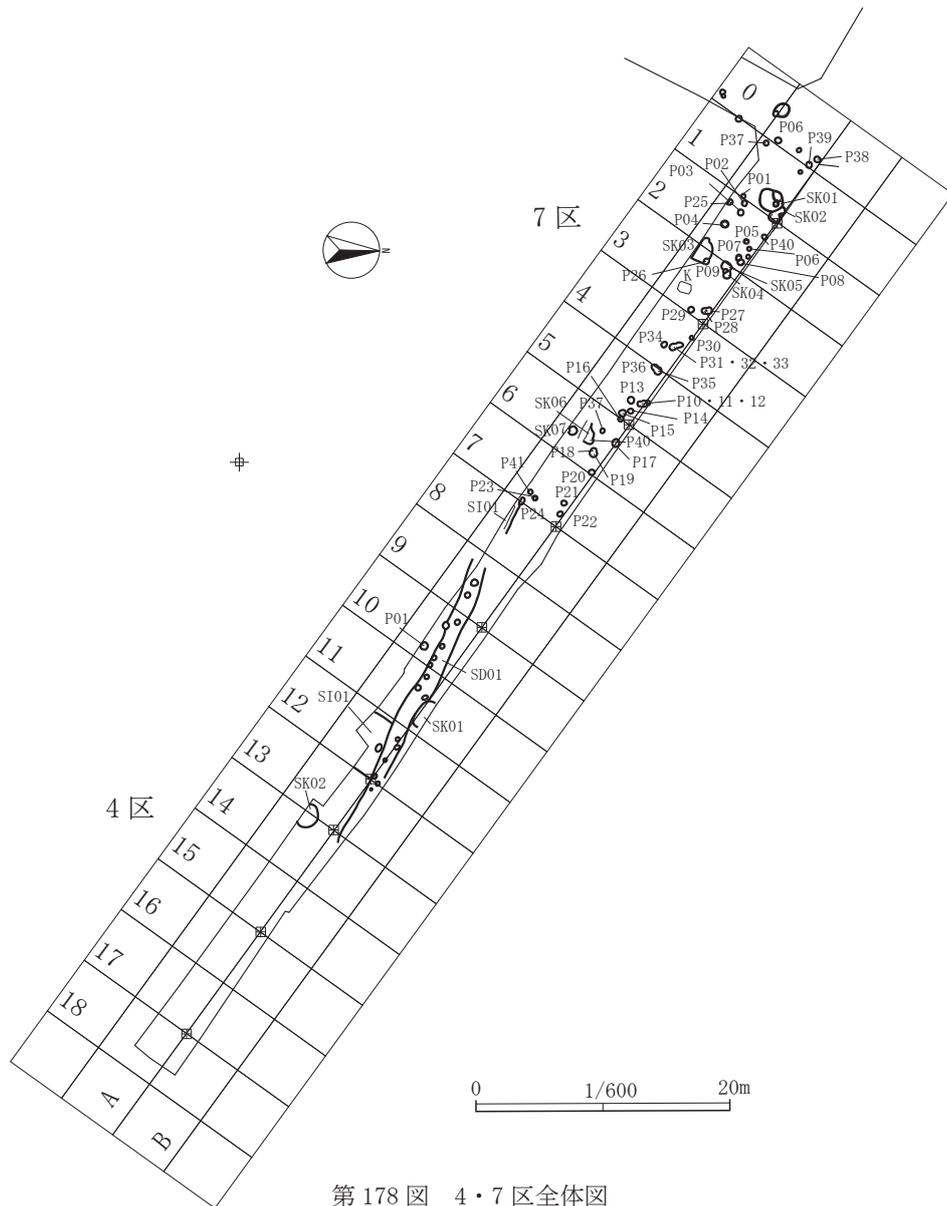
土偶



3-表土-04



第177图 3区遺構外出土遺物



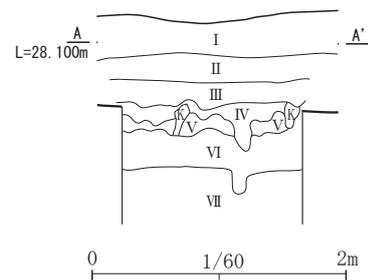
第178図 4・7区全体図

第4項 4区・7区

4・7区は1区の東側延長上に位置する。2区との交差部分よりも東側に当たる。A-8グリッド部分に電柱が設置されていたために、この電柱を境に西側を7区、東側を4区と呼称した。尚、前述したが、工事の都合上4区の調査を先行するようとの指示が出されたために、地区の呼称が4区になっている。また、7区の調査は6区の調査後に実施したために区番号の呼称が後になっている。したがって、グリッドの呼称については4・7区を一括しているものの区番号は離れる結果になっている。

遺構は4区東側端部に向かい疎になり、中央部分に近世と判断される溝が東西方向に走るのが目をひく程度で全体には遺構数は激減している。7区側はこれに比べ遺構は土坑・ピットを中心に増加傾向を示す。尚、4区と7区の境に位置するSI01については電柱により一部破壊されており、十分な調査は行えていない。

4区はA・B-9グリッドからA・B-18までの間になる。7区はA・B-0～A・B-8グリッド間となる。



第179図 4・7区標準堆積土層

- I層 表土層 耕作により攪拌された土層
- II層 黒褐色土 ロームブロックφ1～5mm多量。
- III層 ローム漸移層 褐色土層でやや粘性がある。
- IV層 ソフトローム層 黄褐色を呈し、やや粘性がある。
本区における遺構確認面である。
- V～VII層はハードローム層である。

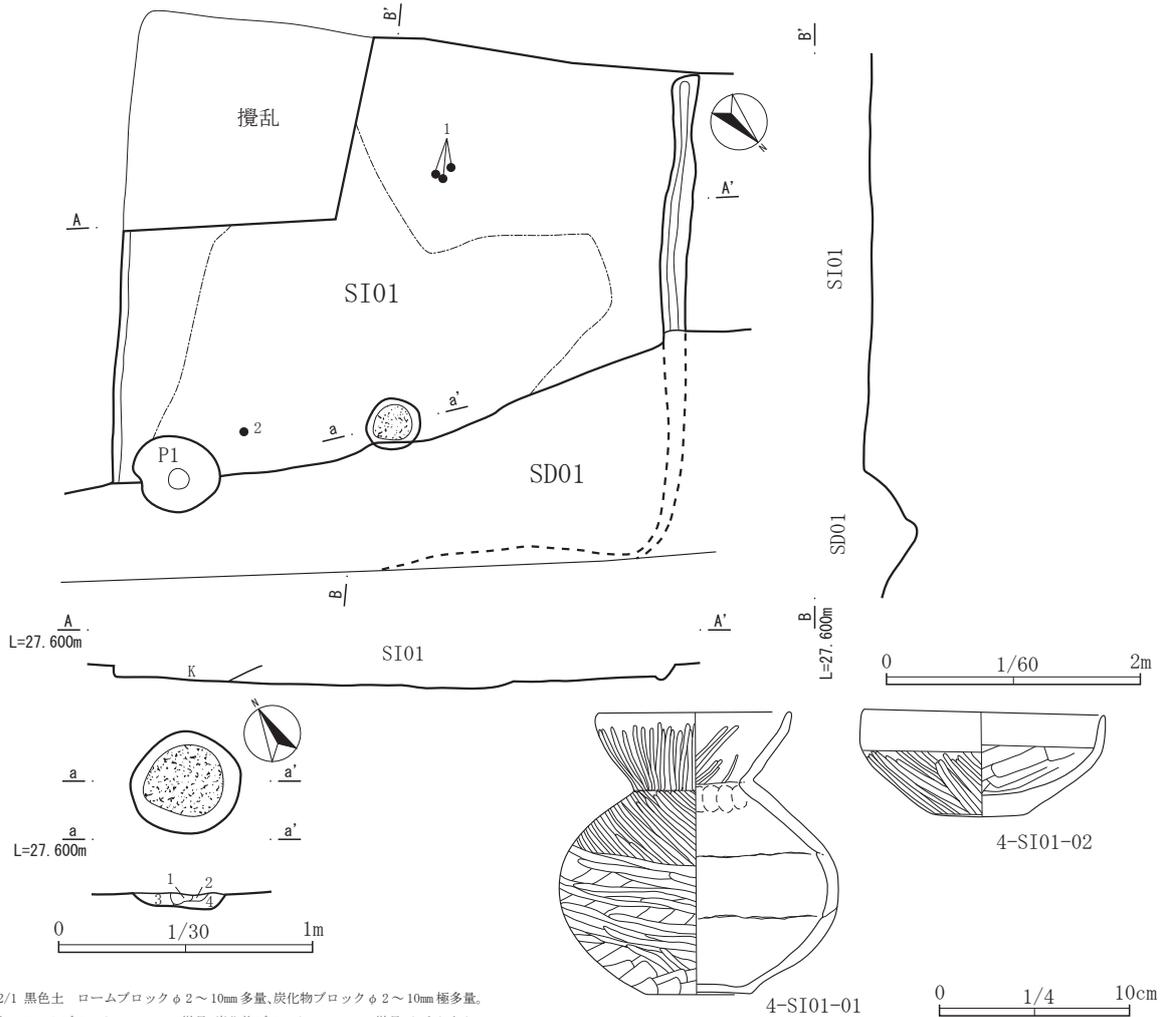
[4区]

1 住居跡 (SI)

SI01 (第180図、第13表、図版46・47・100)

本遺構はA-12グリッドにおいて検出された。SD01に北側を切られ、南側が調査区域外となるため全容はつかめていない。方形を呈するものと推定される。東西方向の長さは4.44mを計る。炉は床面中央やや北東側に位置するもので、楕円形を呈する。堀り込みは浅く、皿状を呈し4層に分層される。壁溝は北西壁に一部確認されているが南東壁では確認されていない。柱穴は東側コーナー付近に1基検出されている。

遺物は住居南側中央部分から埴形土器1点が破損した状態で、また、P1の西側において坏1点が出土している。出土遺物より判断して、5世紀中葉の住居と判断される。



第180図 SI01・同出土遺物

第13表 4区SI01古代遺物観察表

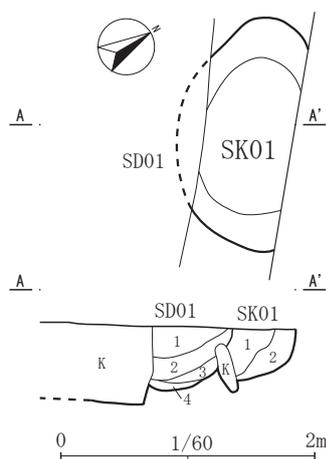
遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
1	ASSW-4区-SI-3	土師器	埴	10.0	4.8	14.5	673.0	底部は僅かに上底気味の平底。胴部は潰れた球形を呈する。頸部は強く窄まる。口縁は頸部で「く」の字に屈曲した後やや内湾して開く。口縁は胴部に比べ径も小さく浅い。	外面底部及び胴部下端はヘラケズリ、口縁～胴部は口唇を除きミガキ。胴部内面は輪積痕が確認出来るものの調整は不明、頸部直下に指頭圧痕、口縁は大きく横ナデの後粗いミガキ。	良好	内面5YR6/8 橙 外面5YR5/8 明赤褐	黒色粒子やや多い、雲母少量、白色粒子・白色針状物質微量。	完形	No. 2, 3
2	ASSW-4区-SI-1	土師器	坏	12.5	4.8	5.5	242.6	底部は僅かに丸みを帯びた平底、体部は直線的に開き口縁は直立する。	口縁は内外面共に横ナデ、外面体部～底部はミガキ、内面はナデ。	良好	内外面2.5YR5/6 明赤褐	黒色粒子・雲母やや多い。	口縁1/3欠損	内外面赤彩

2 土坑 (SK)

SK01 (第 181 図、図版 47)

本遺構は A・B-11 グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈するものと思われる。南西側を SD01 に切れ、北東側は調査区域外となっている。長軸 1.80 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 58 cm、断面形状は緩やかな U 字形を呈する。

本遺構からは少量の縄文土器が出土しているが、掲載遺物はない。



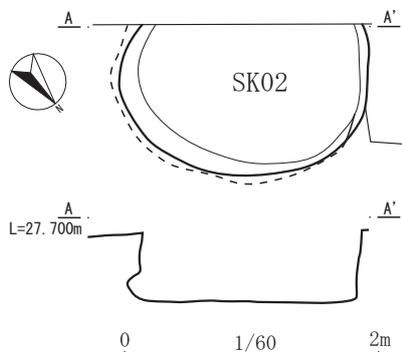
第 181 図 SK01

SK01
現地での土層説明は行っていない。

SK02 (第 182 図、図版 47)

本遺構は A-13・14 グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈する。南側が調査区域外となっている。長軸 1.91 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 55 cm、断面形状は東側で僅かに袋状を呈する。

本遺構の出土遺物はない。



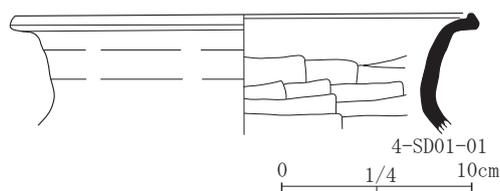
第 182 図 SK02

3 溝 (SD)

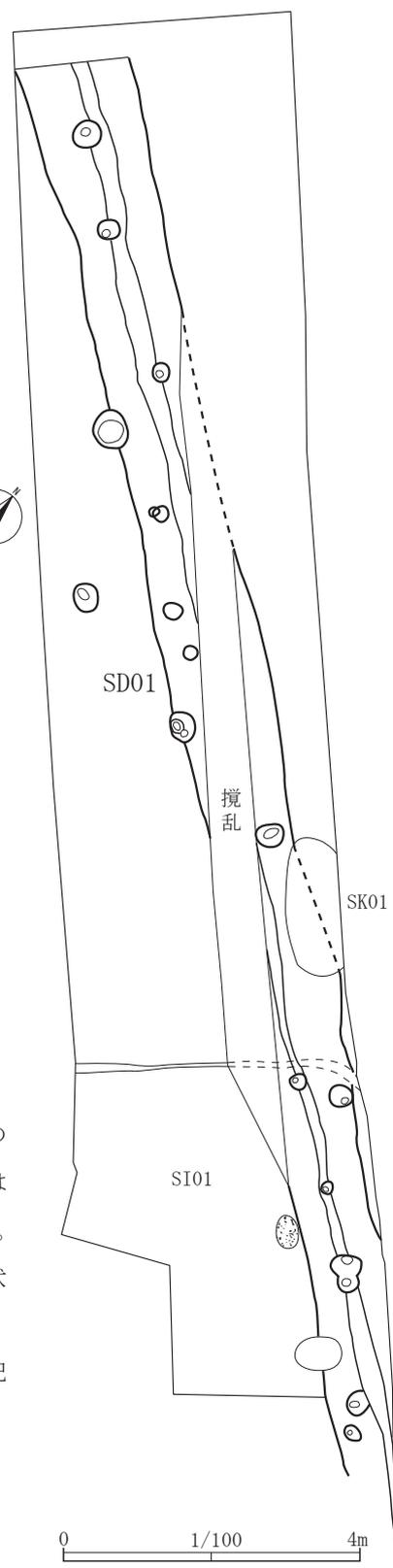
SD01 (第 180・183・184 図、第 14 表、図版 47・100)

SD01 は A-9 ~ 12、B-12・13 グリッドにおいて検出されている。調査区の南東から北西に向かいやや蛇行しながら走行するもので、検出された全長は 24.27 m、最大幅は 0.99 m、確認面下の掘り込みの深さは 39.5 cm を計る。SI01 と重複関係にあるもので、本遺構の方が新しい。溝の底部にはピット状の掘り込みが多数見られる。これらピットの計測値については割愛した。

本遺構出土遺物の内、1 点を掲載した。須恵器の甕口縁部の破片で 9 世紀に新治で生産された遺物であろう。



第 184 図 SD01 出土遺物



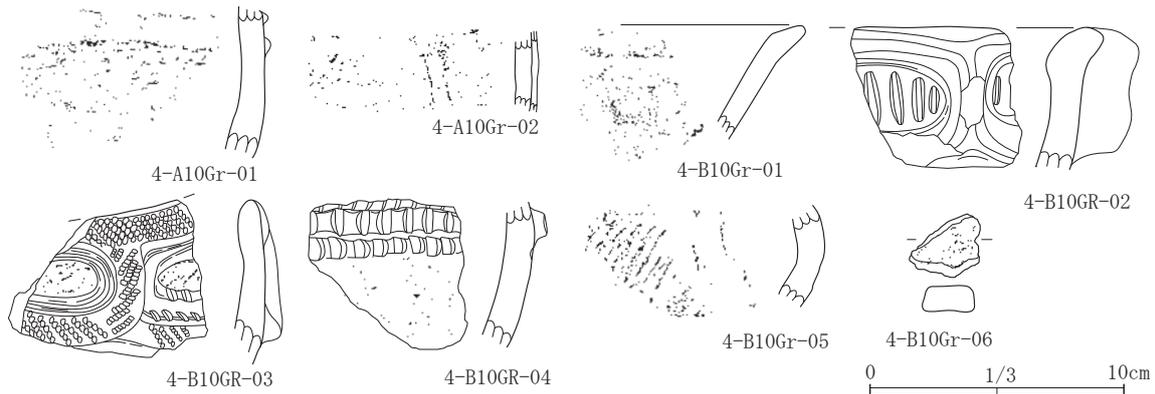
第 183 図 SD01

第 14 表 4 区 SD01 古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
1	ASSW-4区-SD1:A-7GR	須恵器	甕	(23.9)	—	<6.3>	69.1	口縁は「C」の字に外反し、端部は摘み上げられる。	ロクロ整形。(回転台使用カ)	良好	内面2.5Y6/3 におい黄 外面2.5Y5/2 暗灰黄	長石・石英・雲母や多い。	口縁 ～ 頭部 破片	新治産

4 遺構外出土遺物 (第185図、図版100)

遺構確認時にいずれの遺構に伴うかが判断出来なかった遺物を遺構外出土遺物として取り扱った。



第185図 4区遺構外出土遺物

A10Gr-01は角押文が隆帯直下に巡り、以下に連弧文が描かれる。阿玉台I b式。02は隆帯に沿って角押文が描かれ、胴部には単節LRの縄文が僅かに施文される。阿玉台IV式。B10Gr-01は口縁はくの字に外反して開く。浅い鉢形の土器であろう。口唇部は折り返され、器面には条線が施文される。02は隆帯により窓枠状の区画を設け、内部に縦方向の太い沈線を充填する。加曽利E I式カ。03は波状を呈する深鉢口縁部。隆帯により窓枠状の区画を作る。隆帯上には単節RLの縄文が施文される。阿玉台IV～加曽利E I式。04は深鉢胴部破片。隆帯に沿って角押文が描かれる。阿玉台式。05は太い2本の沈線により弧状の文様が描かれる。地文は単節LR。加曽利E式。06は土器片錘である。深鉢胴部片を用いるもので、無文。重量は6.7gを計る。

[7区]

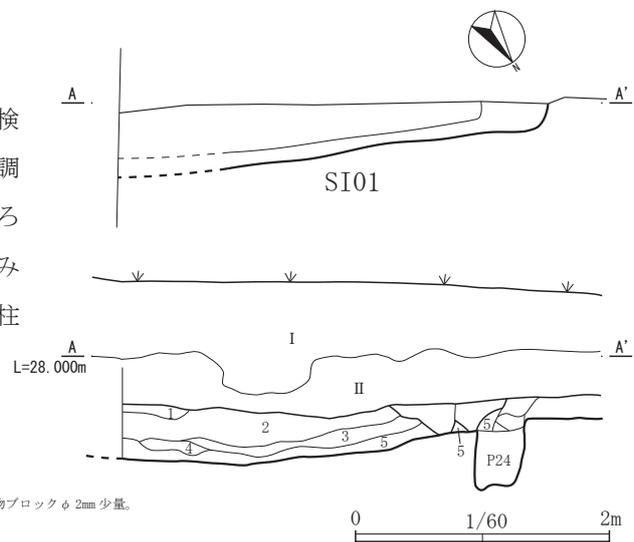
1 住居跡 (SI)

SI01 (第186図、図版63)

本遺構は7区の調査区東端A-7・8グリッドにおいて検出された。前述の通り、電柱が存在したために十分な調査は行えていない。平面形状は方形を呈するものであろう。長軸、短軸ともに不明である。確認面下の掘り込みの深さは68cm、覆土は自然堆積で5層に分層される。柱穴、炉ともに確認されていない。

本遺構の出土遺物はない。

- SI01
- 1層 10YR 2/1 黒色土 ロームブロックφ2～10mm 多量。
 - 2層 10YR 1.7/1 黒色土 ロームブロックφ2～10mm 微量、炭化物ブロックφ2mm 少量。
 - 3層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ2～10mm 少量。
 - 4層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ2～10mm 多量。しまり・粘性あり。
 - 5層 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロックφ2～10mm 微量。しまり強、粘性あり。



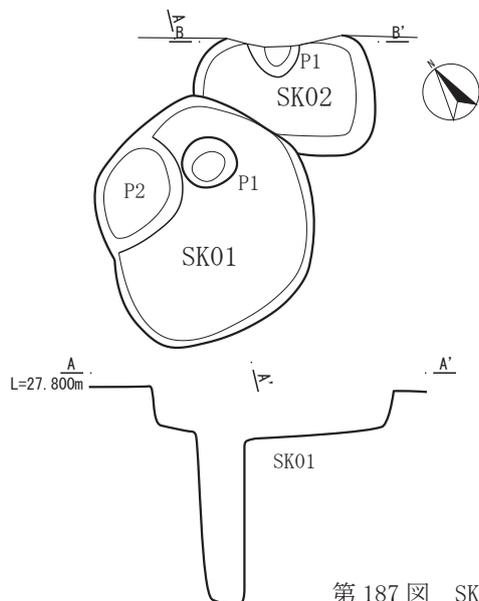
第186図 SI01

2 土坑 (SK)

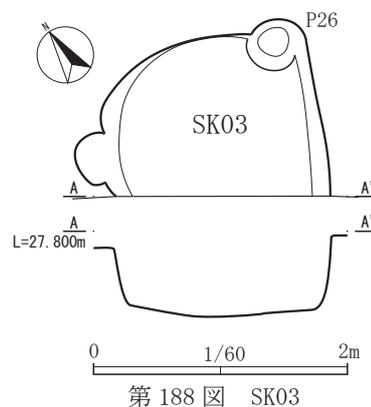
SK01・02 (第187図、図版64)

SK01はA-1グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈する。長軸1.99m、短軸1.19mを計る。確認面下の掘り込みの深さは35cm、断面形状は鍋底状を呈する。底部には2基のピットが穿たれている。P1の深さは1.27mと深い。

SK02はA-1グリッドにおいて検出された。平面形状は隅丸方形を呈する。長軸1.48m、短軸0.97mを計る。



第 187 図 SK01・02



第 188 図 SK03

確認面下の掘り込みの深さは 36 cm、断面形状は逆台形を呈する。床面北側に P1 が穿たれている。深さは 20 cm を計る。

いずれの遺構も出土遺物はない。

SK03 (第 188 図、図版 64)

本遺構は A-2・3 グリッドにおいて検出された。平面形状は不明。長軸不明、短軸 1.71 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 52 cm、断面形状は鍋底状を呈する。

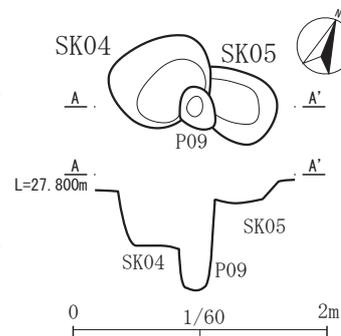
本遺構の出土遺物はない。

SK04・05 (第 189 図)

SK04 は A-3 グリッドにおいて検出された。SK05 および P09 と重複しているが新旧関係は不明である。平面形状は楕円形を呈する。長軸 76 cm、短軸 70 cm を計る。確認面下の掘り込みの深さは 41 cm、断面形状は逆台形を呈する。

SK05 は A-3 グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈すると思われる。長軸不明、短軸 54 cm を計る。確認面下の掘り込みの深さは 20 cm、断面形状は皿状を呈する。

いずれの遺構も出土遺物はない。

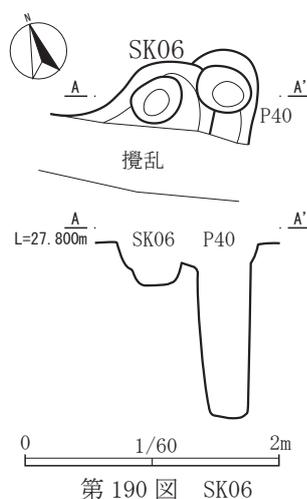


第 189 図 SK04・05

SK06 (第 190 図)

本遺構は A-6 グリッドにおいて検出された。平面形状は不明。長軸、短軸ともに不明。北側壁寄りにピットが 1 基穿たれている。ピットの長軸 36 cm、短軸 33 cm を計る。確認面下の掘り込みの深さはピット最下部で 36 cm を計る。

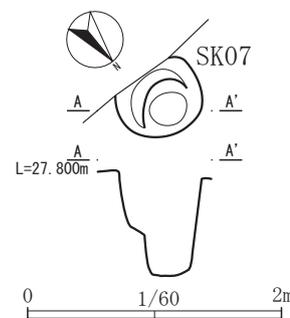
本遺構の掲載遺物はない。



第 190 図 SK06

SK07 (第 191 図)

本遺構は A-6 グリッドにおいて検出された。平面形状はほぼ円形を呈する。長軸 69.6 cm、短軸不明。掘り込みの中段にテラスを有する。確認面下最深部の掘り込みの深さは 81 cm を計り、ピット状を呈する。本遺構の掲載遺物はない。



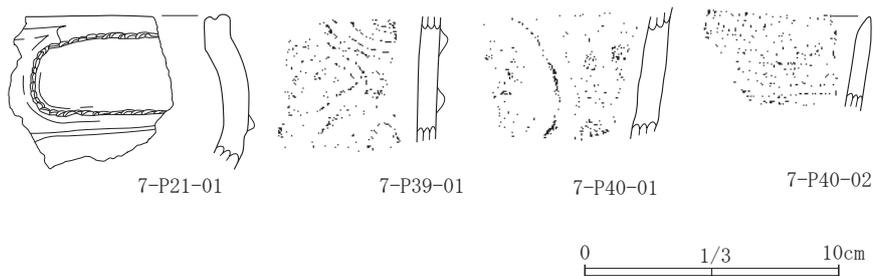
第 191 図 SK07

3 ピット (第192図、第15表、図版102)

本地区からは40基のピットが検出されている。これらのピットは掘り込みが深く住居跡の柱穴と判断されるものも多く、7区全体に削平が進んでいることが伺える。ピットは北東側に偏在する傾向がある。遺物の出土したピットの計測値および位置については以下の第15表にまとめた。

第15表 7区ピット計測表

遺構名	検出グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	出土遺物
P21	A-7	44	39	27	01
P39	A-0	30	30	24	01
P40	A・B-6	43	35	129	01・02

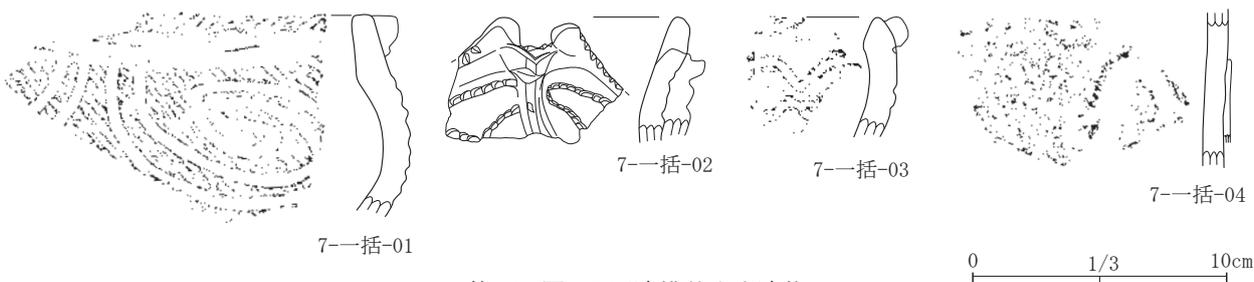


第192図 7区ピット出土遺物

P21-01は口縁部破片である。窓枠状の区画に沿ってやや細い角押文が描かれる。阿玉台I b式。P39-01は胴部破片で隆帯が瓢状に垂下し、それに沿って有節沈線が描かれる。阿玉台II式。P40-01は深鉢胴部破片である。断面三角形の隆帯が弧状に描かれ、胴部には襞状文が施される。阿玉台I b式。P40-02は直線的に開く深鉢口縁部の破片。口唇部には刻みが施され、胴上半部には幅広の変形爪形文が施文される。縄文前期浮島II式土器である。

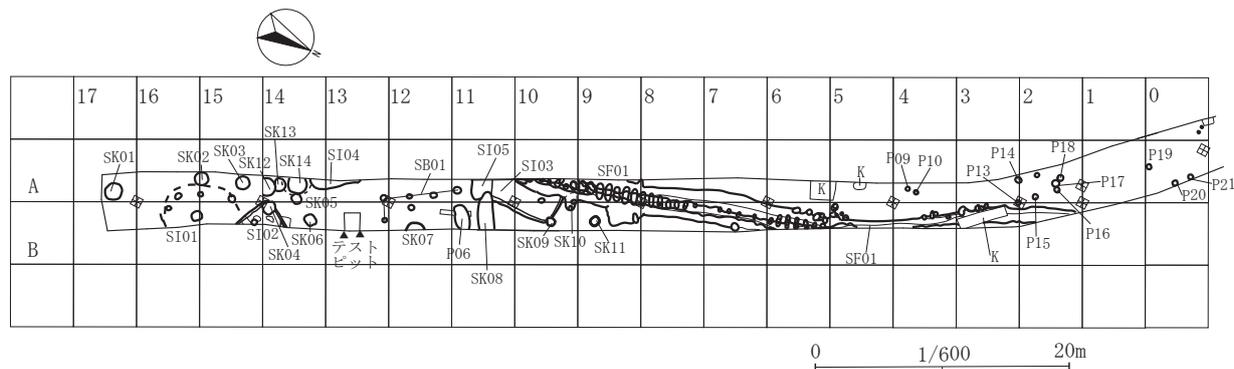
4 遺構外出土遺物 (第193図、図版102)

遺構確認時にいずれの遺構に伴うかが判断出来なかった遺物を遺構外出土遺物として取り扱った。



第193図 7区遺構外出土遺物

01は深鉢口縁部の破片である。口唇部は折り返して棒状となる。口唇直下に2本1単位の沈線により渦巻文が対照形に描かれる。地文は無節R。口唇部にはLRの縄文が施文されることより、阿玉台IV～加曾利E I式にかかる土器であろう。02は波状口縁波頂部の破片である。双頭の突起となり側面には刻みが施される。窓枠状の区画の中にはやや細い角押文が描かれる。阿玉台I b式。03は内湾する口縁部の破片である。内面に段を有す。口唇部は折り返され、棒状になる。胴上半部には角押文により弧状の線が瓢形に対峙して描かれる。阿玉台I b式。04は深鉢胴部破片。隆帯による逆U字形の文様が描かれ、上位には襞状文が僅かに観察される。地文はない。阿玉台I b式カ。



第194図 5区全体図

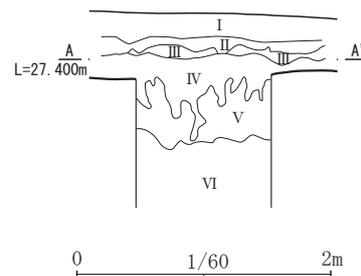
第5項 5区

本区は3区の南西側の延長部分になる。台地の縁辺部に近くっており、遺構の検出数が増加するものと予測されたが、3区に比べて遺構数はやや減少している。また、3区が縄文時代の遺構を中心に展開していたのに対して、古墳時代の遺構が数を増す傾向にある。

さらに、本区の南西から北東方向にSF01が大きく縦断しており、遺跡全体図を見る限りでは同遺構の存在が特徴的である。その他SK03は井戸状の遺構であり、馬の骨が上層より出土している。溝を含め中世から近世にかけての遺構の可能性もある。

5区との境を以て南側のA・B-0よりA・B-17までの間が本調査区域となる。全長はおおよそ90mを計り緩やかに西方向に屈曲する。

遺構の確認面は3区とほぼ同様であるが、テストピットA-A'で標準堆積土層の観察を行っている。土層の説明は第195図 5区標準堆積土層図中にて行っている。第III層および第IV層の上面が遺構確認面となる。



第195図 5区標準堆積土層

- I層 表土層 耕作により攪拌された土層
 - II層 黒褐色土 ロームブロックφ1～5mm多量。
 - III層 ローム漸移層 褐色土層でやや粘性がある。
 - IV層 ソフトローム層 黄褐色を呈し、やや粘性がある。
- 本区における遺構確認面である。
V～VI層はハードローム層である。

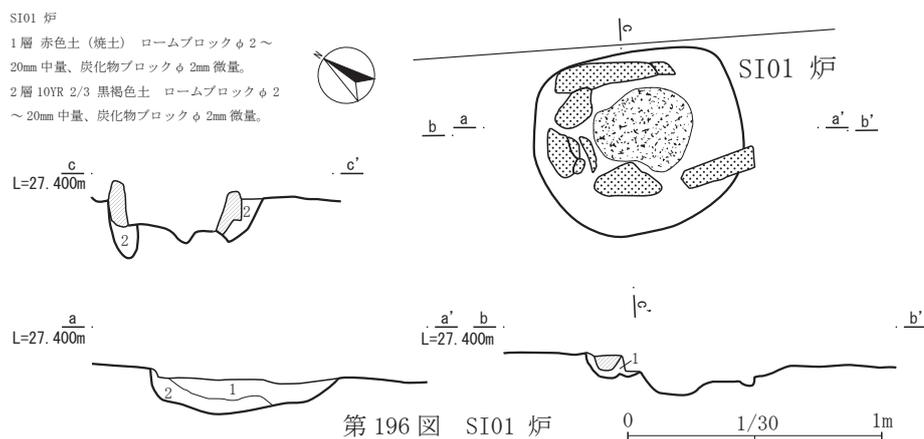
1 住居跡 (SI)

SI01 (第196～198図、図版50・101)

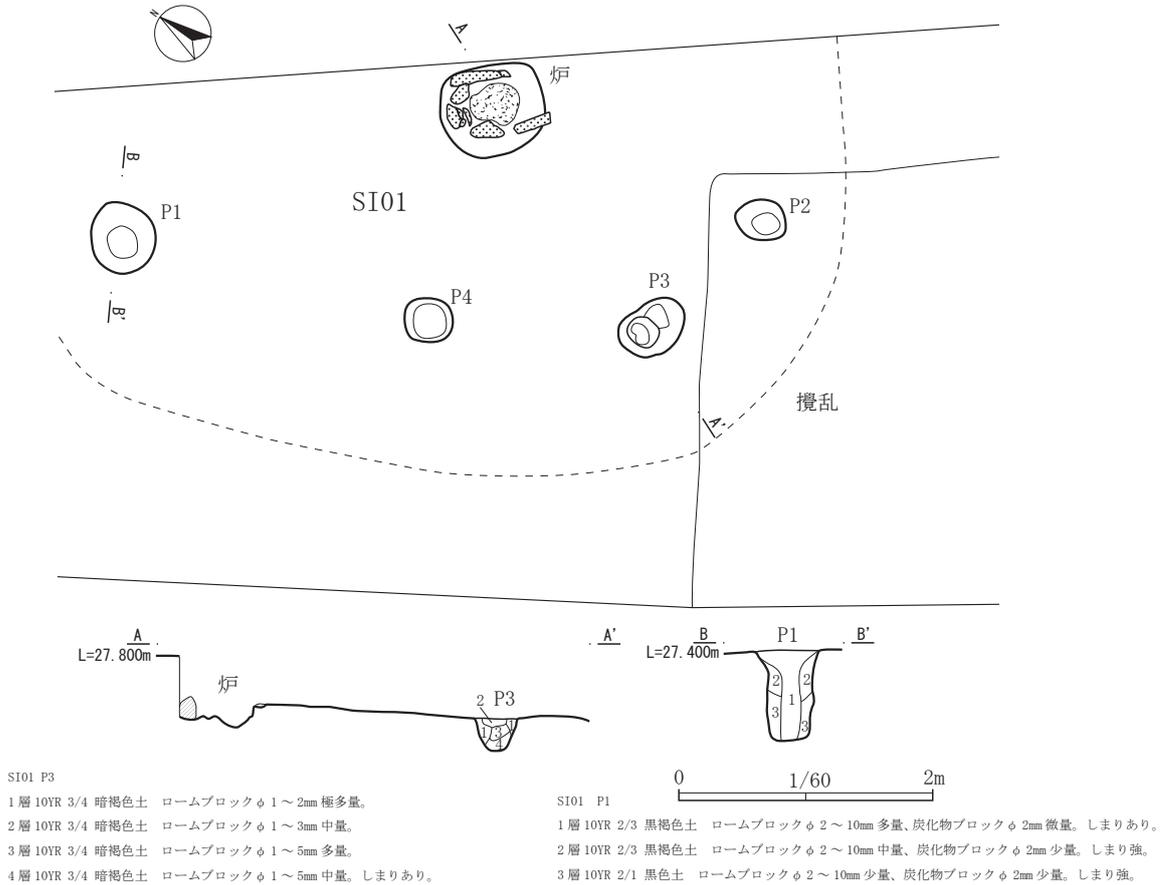
本遺構は調査区域の南端A・B-15・16グリッドにおいて検出されている。縄文時代の遺構で、確認面において4基のピットが弧状に配列され、中央に炉を有することから住居跡と判断されたものである。壁は完全に削平され、床面は明瞭ではない。北東側が調査区域の外となっているため、規模は不明瞭であるが、柱穴の配列から6m前後と想定される。

覆土は不明であるが、P1では柱痕が明瞭である。その他は柱の抜き取り痕も見られず、自然堆積を示している。

炉は調査区の東壁よりに検出されている。長方形に礫が取り囲む石囲炉である。南側の石は欠落している。石囲の内法は長軸71cm、短軸33cmを計る。掘方の平面形は不整形円形を示し、長軸85cm、短軸69cmを計る。床面からの掘り込みの深さは20cmを計る。



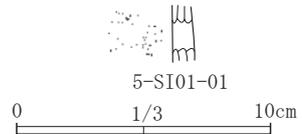
第196図 SI01 炉



第 197 図 SI01

遺物は柱穴内および確認面から僅かながら出土している。

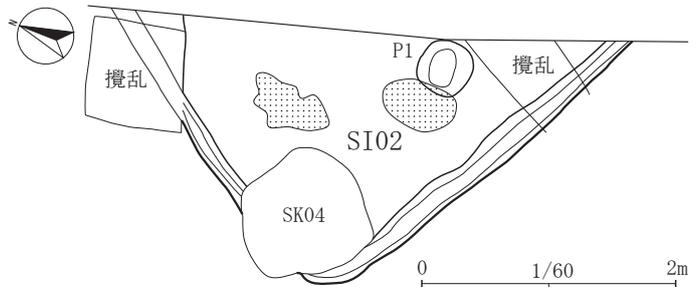
01 は胴部の破片である。形骸化された襷状文が施文されるもので、阿玉台Ⅱ～Ⅲ式。



第 198 図 SI01 出土遺物

SI02 (第 199 図、図版 50・51)

本住居跡は SI01 の北側に近接して検出されている。南東コーナー側のみ調査が行えたもので、全容は不明である。コーナー付近においては SK04 が重複しているが本遺構のほうが新しい。また、北壁側は攪乱によって破壊されている。確認面はほぼ床面で、深さ 8 cm、最大幅 33 cm の壁溝が全周している。



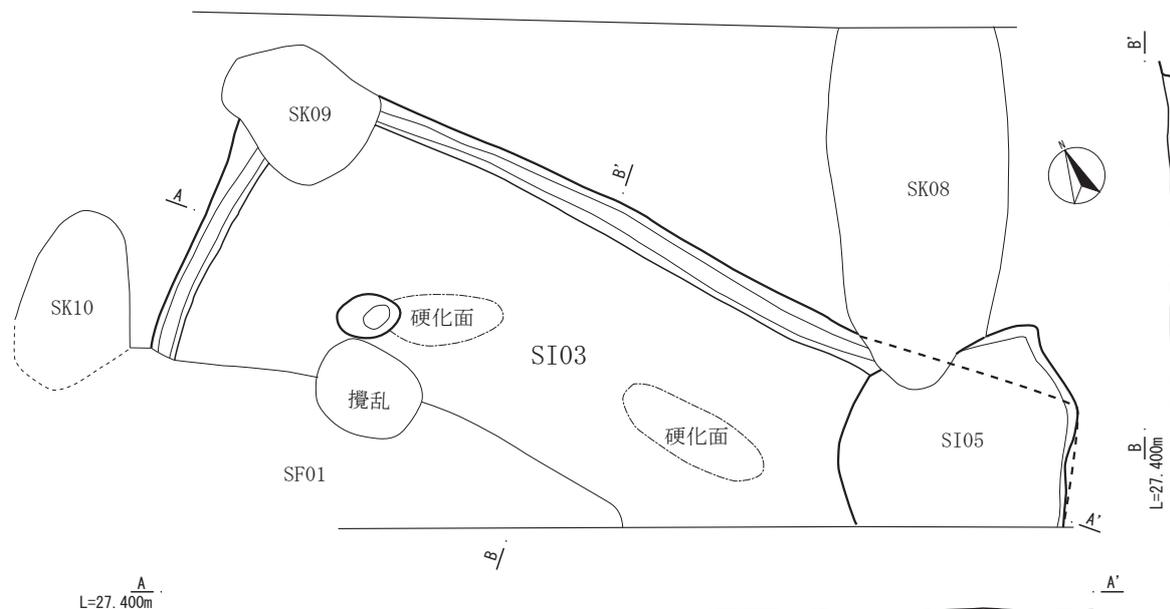
第 199 図 SI02

本遺構の遺物は土師器・縄文土器の細片が出土しているが、掲載遺物はない。土師器の出土より、古墳時代の遺構と判断される。

SI03 (第 200・201 図、第 16 表、図版 50～52・101)

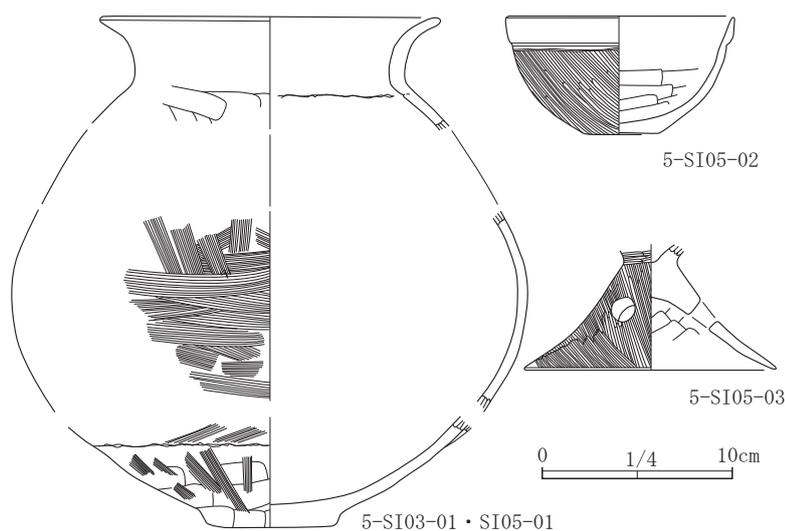
本住居跡は A・B-10・11 グリッドにおいて検出された。SF01 によって南西側を切られ、SI05・SK08・09・10 を切っている。平面形は方形を呈するものであろう。東西軸は 5.9 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 9.7 cm を計る。全面に壁溝が巡る。柱穴は北側コーナー寄りに 1 基のみ検出されている。床面はやや凹凸があるものの、硬化面が部分的に観察される。

遺物は甕 1 点、坏 1 点、高坏 1 点を掲載した。いずれも刷毛による整形が行われ、古墳時代前期の資料である。尚、坏および高坏は SI05 からの出土となっているが、SI05 は縄文の遺構であるため、本遺構の遺物とした。



第 200 図 SI03

0 1/60 2m



第 201 図 SI03 出土遺物

S104 (第 202 図、図版 52)

本住居跡はA-13・14グリッドにおいて検出された。SK14を切っている。平面形は方形を呈するものであろう。東西軸は3.9mを計る。確認面下の掘り込みの深さは39cm、土層は8層に分層され自然堆積を示しているが、中層の第2層に焼土の堆積が見られることから、人為的な堆積の可能性もある。柱穴は検出されていない。床面はやや凹凸があるものの、硬化面が全面に観察される。

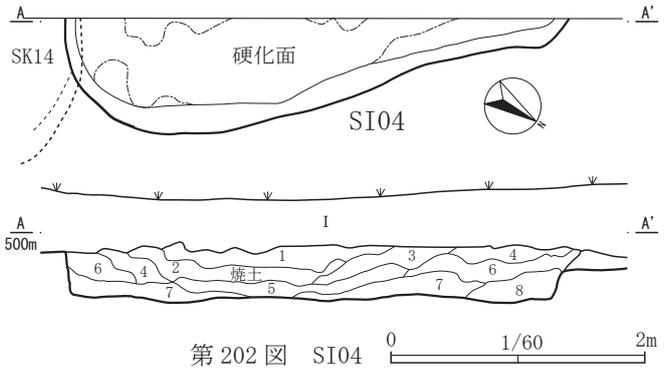
本遺構からの出土遺物としては土師器片・縄文土器片がある。遺構の形状から想定して古墳時代の住居跡と判断した。

第 16 表 5 区 SI03・05 古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
1	ASSW-5区-SI-3	土師器	甕	(17.5)	6.8	<26.8>	354.3	底部は円盤状に突出する。胴部は最大径を中位に有する球形と推定される。口縁は頸部で「く」の字に屈曲し反外する。	体部下半には貼付が観察される。体部下端はヘラナデの後部分的なハケ調整。胴部～頸部は不整方向の細かいハケ。内面はナデ。口縁は内外面共に横ナデ。	良好	内面10YR7/4にぶい黄橙 外面7.5YR7/4にぶい橙	石英多量に含む、長石やや多い、雲母少量。	口縁～底部1/2	5区SI5-1と接合
2	ASSW-5区-SI-5-2	土師器	碗(3/4)	(11.8)	3.9	6.2	134.4	底部はやや上げ底気味の平底。体部は内湾して立ち内側に弱い稜を有した後口縁に至る。	口縁は内外面共に横ナデ、体部外面はミガキ、口縁直下に沈線が1条廻る。内面はナデ。	良好	内外面7.5YR6/6明赤褐	黒色粒子・雲母やや多い、白色粒子・小礫少量。	口縁～底部1/2	No. 2
3	ASSW-5区-SI-5-4・ASSW-5区-SI-5-7	土師器	高坏(脚部破片)	—	(13.1)	<13.1>	92.8	脚はラップ状に大きく開く。接合部にソケット状の窪みが観察される。孔は等間隔に3単位上方から下方に穿たれている。	外面は丁寧な縦方向のミガキ、内面はヘラナデ、裾部は横ナデ。	良好	内面10YR6/6明黄褐 外面10YR7/6明黄褐	雲母多い、黒色粒子・白色粒子少量。	脚部1/2	No. 4, 7

SI04

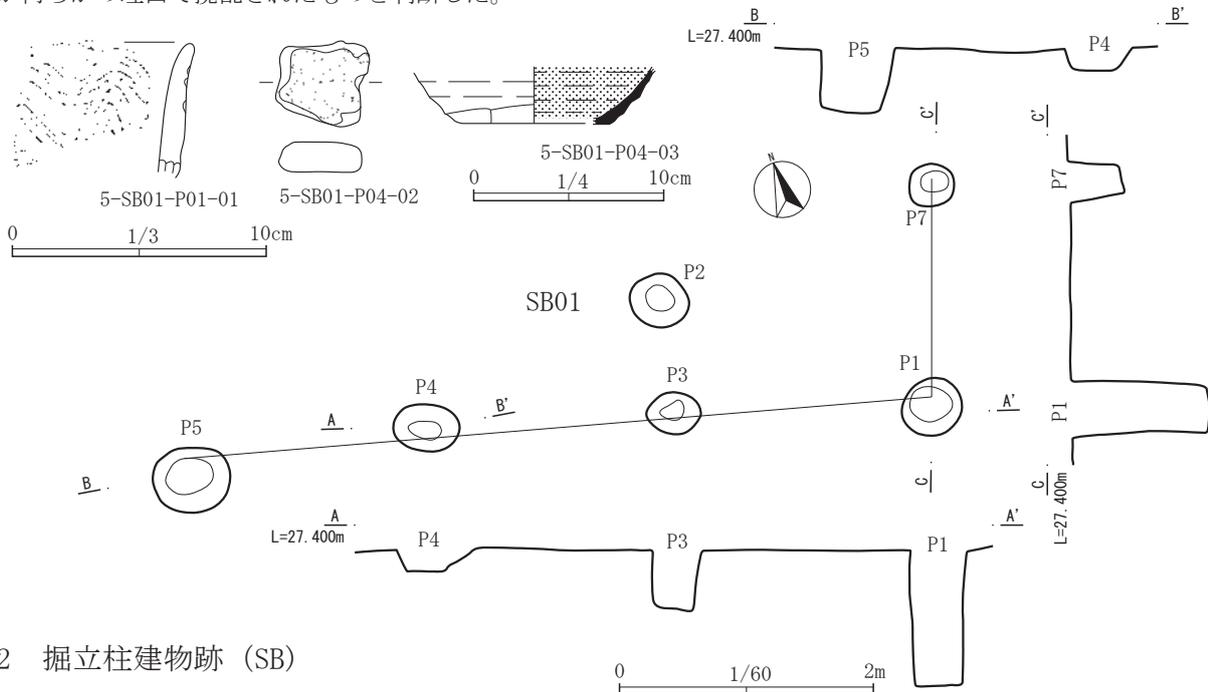
- 1層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ1~3mm 極多量、焼土ブロックφ1~3mm 中量。しまり・粘性あり。
- 2層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ1~3mm 中量、焼土ブロックφ1~100mm 極多量。しまり強。焼土ブロック層。
- 3層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ1~10mm 極多量、焼土ブロックφ1~5mm 多量、炭化物ブロックφ1~5mm 微量。
- 4層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ1~5mm 多量、焼土ブロックφ1~2mm 極微量。
- 5層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ1~10mm 多量、焼土ブロックφ1~3mm 微量。
- 6層 10YR 2/2 黒褐色土 ロームブロックφ1~3mm 中量、炭化物ブロック極微量。しまりあり。
- 7層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ1~10mm 極多量。
- 8層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ1~30mm 多量。



SI05 (第200・201図、図版52・101)

本住居跡はA-11グリッドにおいて検出された。SI03・SK08と重複している。平面形は不整形を呈するものである。南北軸は1.93m、東西軸は1.88mを計る。確認面下の掘り込みの深さは9.7cmを計る。

本遺構はSI03の南東において検出されたものであるが、出土した遺物は第201図 SI03出土遺物の02・03である。一方で、同01はSI05とSI03が接合している。したがって、両遺構は同時期のものと判断し、SI03の南東コーナーが何らかの理由で攪乱されたものと判断した。



2 掘立柱建物跡 (SB)

SB01 (第203図、第17表、図版101) 第203図 SB01・同出土遺物

本遺構はA-11~13、B-12・13グリッドにおいて検出された。直線的に配列されるP1~P5および直角方向に位置するP7・P2の6基の柱跡として確認されたものである。柱間はP1~P3で2.06m、P3~P4で2m、P4~P5で2.03m、P1~P7で1.76m、P2~P3では1.05mを計る。東西軸では柱間はほぼ一定間隔を示しているが、南北方向は東西方向と異なった値になっている。P2~P3は東西軸のほぼ1/2で東柱の可能性もある。一方で、柱穴の掘方はP1で最も深く1.07m、P3が49cm、P4が29cmを計り、確認面がほぼ平坦であるにも関わらず、深さが一定しない点から、掘立柱建物跡として成立するものか疑問が残る。

本遺構からはP1から阿玉台IV式の口縁部片1点、P4から16.5gの土器片錘1点、須恵器片1点が出土している。古代の遺物については下記の第17表にまとめた。

第17表 5区SB01古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
1	ASSW-5区-P-4	土師器	坏	—	(8.0)	<3.0>	11.0	体部下端で緩やかに内湾気味に開く。	ロクロ整形。体部下端は手持ちヘラケズリカ。	良好	内面2.5Y4/1黄灰 外面10YR6/3にぶい黄橙	スコリアやや多い、雲母・白色粒子少量。	体部下端片	内面黒色処理

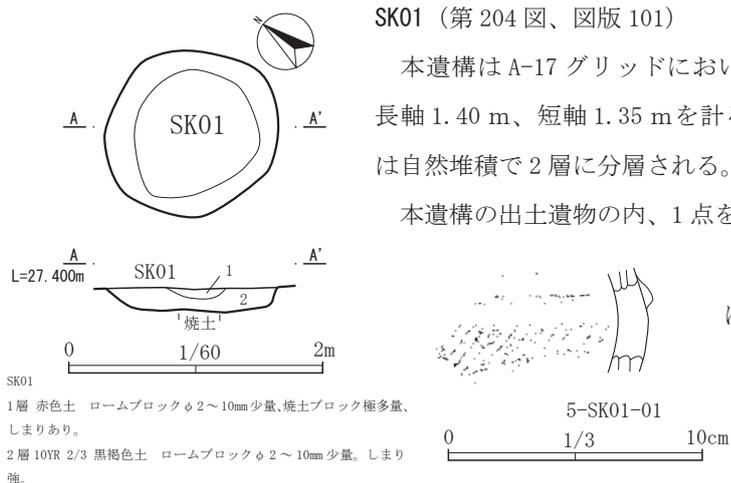
3 土坑 (SK)

SK01 (第 204 図、図版 101)

本遺構は A-17 グリッドにおいて検出された。平面形状は不整形円形を呈する。長軸 1.40 m、短軸 1.35 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 19.5 cm、覆土は自然堆積で 2 層に分層される。断面形状は皿状を呈する。

本遺構の出土遺物の内、1 点を掲載した。

01 は口縁直下の破片で隆帯による区画帯の中に LR の縄文を充填させる。加曽利 E III 式。



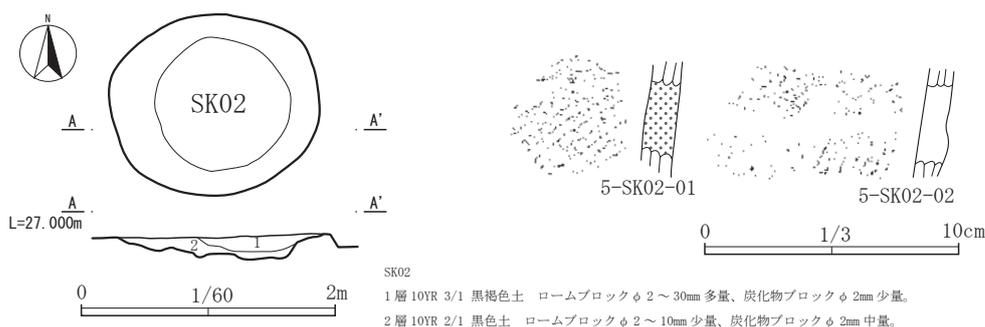
第 204 図 SK01・同出土遺物

SK02 (第 205 図、図版 101)

本遺構は A-15・16 グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈する。長軸 1.65 m、短軸 1.46 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 17.2 cm、覆土は自然堆積で 2 層に分層される。断面形状は皿状を呈する。

本遺構の出土遺物の内、2 点を掲載した。

01 は胴部上半にクランク文が施文され、胎土中に繊維を多量に混入する深鉢胴部片である。地文は 0 段多条の LR。関山式土器。02 は括れ部に太い沈線が 1 条巡り、2 本の沈線による懸垂文が垂下する。地文は単節 LR。加曽利 E 式。



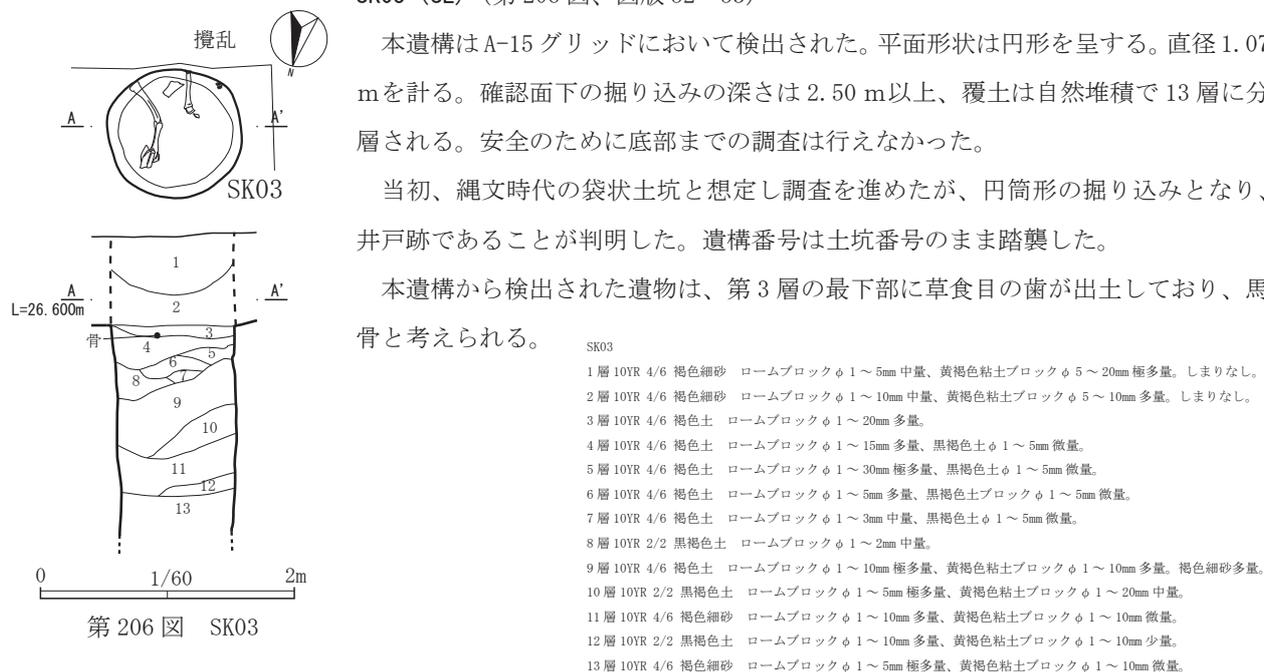
第 205 図 SK02・同出土遺物

SK03 (SE) (第 206 図、図版 52・53)

本遺構は A-15 グリッドにおいて検出された。平面形状は円形を呈する。直径 1.07 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 2.50 m 以上、覆土は自然堆積で 13 層に分層される。安全のために底部までの調査は行えなかった。

当初、縄文時代の袋状土坑と想定し調査を進めたが、円筒形の掘り込みとなり、井戸跡であることが判明した。遺構番号は土坑番号のまま踏襲した。

本遺構から検出された遺物は、第 3 層の最下部に草食目の歯が出土しており、馬骨と考えられる。



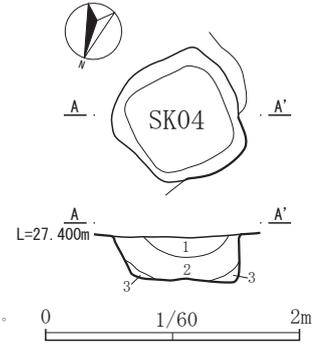
第 206 図 SK03

SK04 (第 207 図、図版 53)

本遺構は B-14 グリッドにおいて検出された。SI02 と重複するが、本遺構の方が古い。平面形状は不整形円形を呈する。長軸 1.14 m、短軸 1.09 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 36.6 cm、覆土は自然堆積で 3 層に分層される。断面形状は鍋底状を呈する。

本遺構の出土遺物の内、掲載遺物はない。

- SK04
 1 層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ 2～10mm 中量、炭化物ブロックφ 2mm 微量。しまりあり。
 2 層 10YR 2/1 黒色土 ロームブロックφ 2～10mm 多量、炭化物ブロックφ 2mm 少量。
 3 層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ 2～10mm 少量、炭化物ブロックφ 2mm 微量。



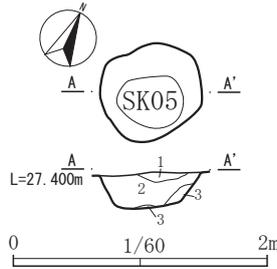
第 207 図 SK04

SK05 (第 208 図、図版 53)

本遺構は A・B-14 グリッドにおいて検出された。平面形状は不整形円形を呈する。長軸 83 cm、短軸 71 cm を計る。確認面下の掘り込みの深さは 29 cm、覆土は自然堆積で 3 層に分層される。断面形状は逆台形を呈する。

本遺構の出土遺物はない。

- SK05
 1 層 10YR 2/1 黒色土 ロームブロックφ 2mm 少量、炭化物ブロックφ 2mm 少量。
 2 層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ 2～10mm 多量、炭化物ブロックφ 2mm 少量。
 3 層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ 2～20mm 中量、炭化物ブロックφ 2mm 微量。



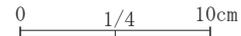
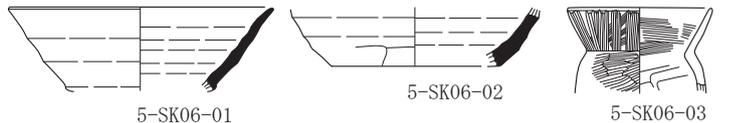
第 208 図 SK05

SK06 (第 209・210 図、第 18 表、図版 53・101)

本遺構は B-14 グリッドにおいて検出された。平面形状は隅丸方形を呈する。長軸 90 cm、短軸 84 cm を計る。確認面下の掘り込みの深さは 29 cm、覆土は自然堆積で 2 層に分層される。断面形状は鍋底状を呈する。

本遺構からは縄文土器・土師器・須恵器など多量に出土している。近世の陶器も出土しており、耕作時に廃棄した可能性が高い。01 は 9 世紀の須恵器坏、02 は 8 世紀末の須恵器坏、03 は古墳時代中期の埴形土器である。

- SK06
 1 層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ 2～30mm 中量、炭化物ブロックφ 2mm 微量。
 2 層 10YR 2/1 黒色土 ロームブロックφ 2～30mm 多量、炭化物ブロックφ 2mm 多量。



第 210 図 SK06 出土遺物

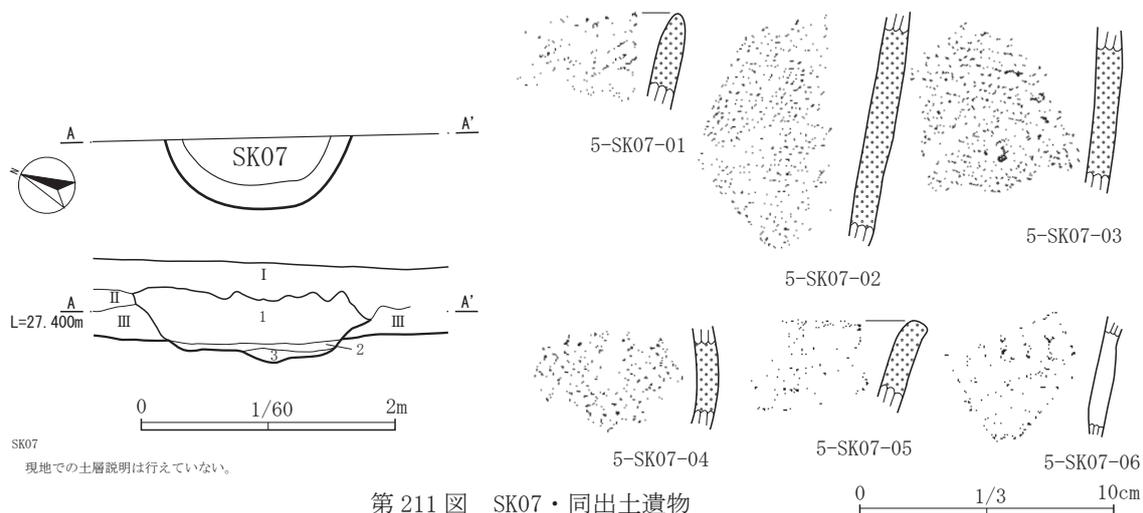
第 18 表 5 区 SK06 古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
1	ASSW-5区-SK-6	須恵器	坏	(13.8)	—	<4.4>	31.6	体部は直線的に開き口縁で僅かに外反する。	ロクロ整形。	還元不良	内面7.5Y3/2 オリブ黒 外面5Y5/2 灰オリブ	雲母多い。長石・石英やや多い。	体部 1/3	
2	ASSW-5区-SK-6	須恵器	坏	—	(8.9)	<3.1>	11.7	緩やかに内湾して開くものカ。	ロクロ整形。体部下端は手持ちヘラケズリ。	良好	内面5Y7/2 灰白 外面10Y7/1 灰白	雲母・黒色粒子少量。	体部 片	
3	ASSW-5区-SK-6	土師器	埴	(7.4)	—	<4.5>	19.91	小型の埴である。胴部の張りは弱く頸部の括れもやや弱い。口縁は浅い。	外面は口縁は縦方向、胴部は横方向の丁寧なミガキ。内面口縁は横方向のハケ整形、胴部はナデ。	良好	内面7.5YR6/6 橙 外面10YR5/6 黄褐	白色粒子やや多い、雲母少量。	胴部 上位 ～ 口縁 1/4	

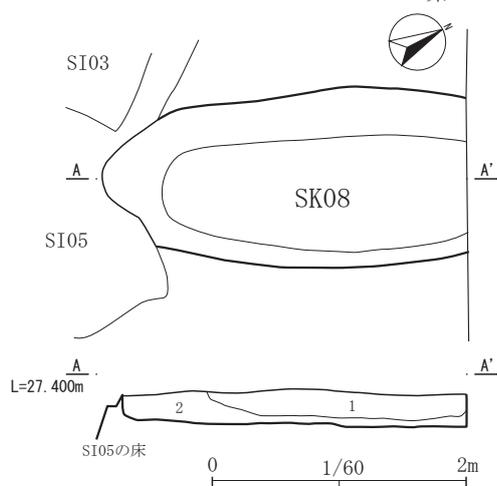
SK07 (第 211 図、図版 101)

本遺構は B-12 グリッドにおいて検出された。平面形状は不明。東側調査区壁際で 1.46 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 16 cm、覆土は自然堆積で 3 層に分層される。断面形状は凹凸のある皿状を呈する。

本遺構からは縄文土器が出土している。01～05 は胎土中に繊維を混入する土器である。01 は口縁部、無筋 L の縄文が施文される。黒浜式カ。02～04 はいずれも深鉢胴部破片で組紐が回転施文される。関山 II 式。05 は外反する口縁部の破片で無文。黒浜式カ。06 は胎土中に繊維は混入せず、器面に鬚状文が施文される。阿玉台 II 式。



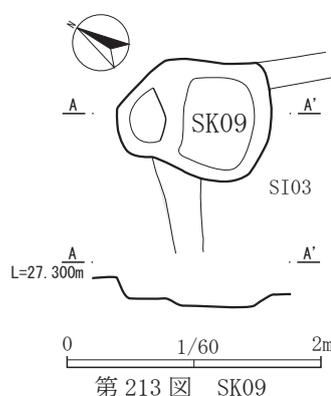
第 211 図 SK07・同出土遺物



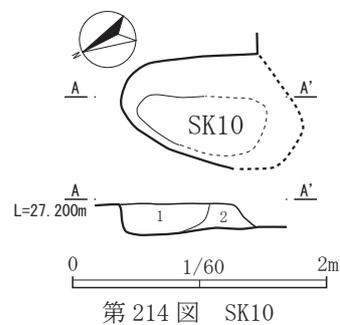
第 212 図 SK08

SK08

現地での土層説明は行えていない。



第 213 図 SK09



第 214 図 SK10

SK10

1層 10YR 1.7/1 黒色土 ロームブロックφ 2~10mm 少量、炭化物
ブロックφ 2mm 少量。
2層 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロックφ 2~10mm 多量、炭化物
ブロックφ 2mm 微量。

SK08 (第 212 図、図版 53)

本遺構は A・B-11 グリッドにおいて検出された。平面形状は長楕円形を呈する。長軸不明、短軸 1.41 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 31 cm、覆土は自然堆積で 2 層に分層される。断面形状は浅い鍋底状を呈する。

本遺構からは土師器・縄文土器が僅かに出土しているが、掲載遺物はない。

SK09 (第 213 図、図版 53)

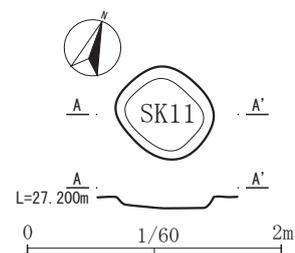
本遺構は B-10 グリッドにおいて検出された。平面形状は不整形を呈する。長軸 1.20 m、短軸 0.88 m を計る。確認面下の掘り込みは 2 段に掘り込まれており、北側にテラスを有する。テラスの深さ 20 cm、最深部は 29 cm を計る。断面形状は段を有する浅い鍋底状を呈する。本遺構の出土遺物はない。

SK10 (第 214 図、図版 53)

本遺構は A・B-10 グリッドにおいて検出された。遺構の南西側を SF01 に切られている。平面形状は不整形楕円形を呈するものと思われる。長軸 1.45 m、短軸 0.84 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 24.8 cm。断面形状は段を有する浅い鍋底状を呈する。本遺構の出土遺物はない。

SK11 (第 215 図)

本遺構は B-9 グリッドにおいて検出された。平面形状は隅丸方形を呈する。長軸 73 cm、短軸 68 cm を計る。確認面下の掘り込みの深さは 11 cm を計る。断面形状は浅い皿状を呈する。本遺構の出土遺物はない。



第 215 図 SK11

SK12・13 (第216図)

本遺構はいずれも A-14 グリッドにおいて検出された。SK12・13・14 は重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

SK12 は平面形状は円形を呈するものと思われる。長軸 1.42 m を計り、短軸は不明。確認面下の掘り込みの深さは 7.8 cm を計る。断面形状は浅い皿状を呈する。

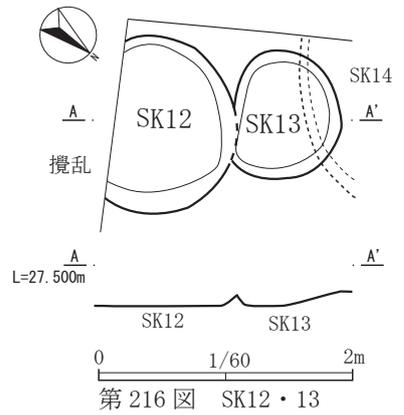
SK13 は平面形状は不整形円形を呈するものと思われる。長軸 99.4 cm、短軸 92.5 cm を計る。確認面下の掘り込みの深さは 9.6 cm を計る。断面は浅い皿状を呈する。

いずれの遺構からも遺物は検出されていない。

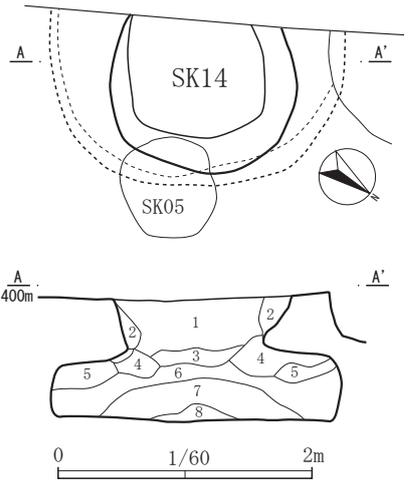
SK14 (第217・218図、図版101)

本遺構は A-14 グリッドにおいて検出された。SK05 と重複するが新旧関係は不明である。平面形状は不整形円形を呈するものと思われる。いわゆる袋状土坑で、上端は長軸 1.54 m、短軸 1.47 m を計る。底部は東西軸で 2.35 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 97.5 cm を計る。

本遺構の出土遺物の内、以下に 13 点掲載した。



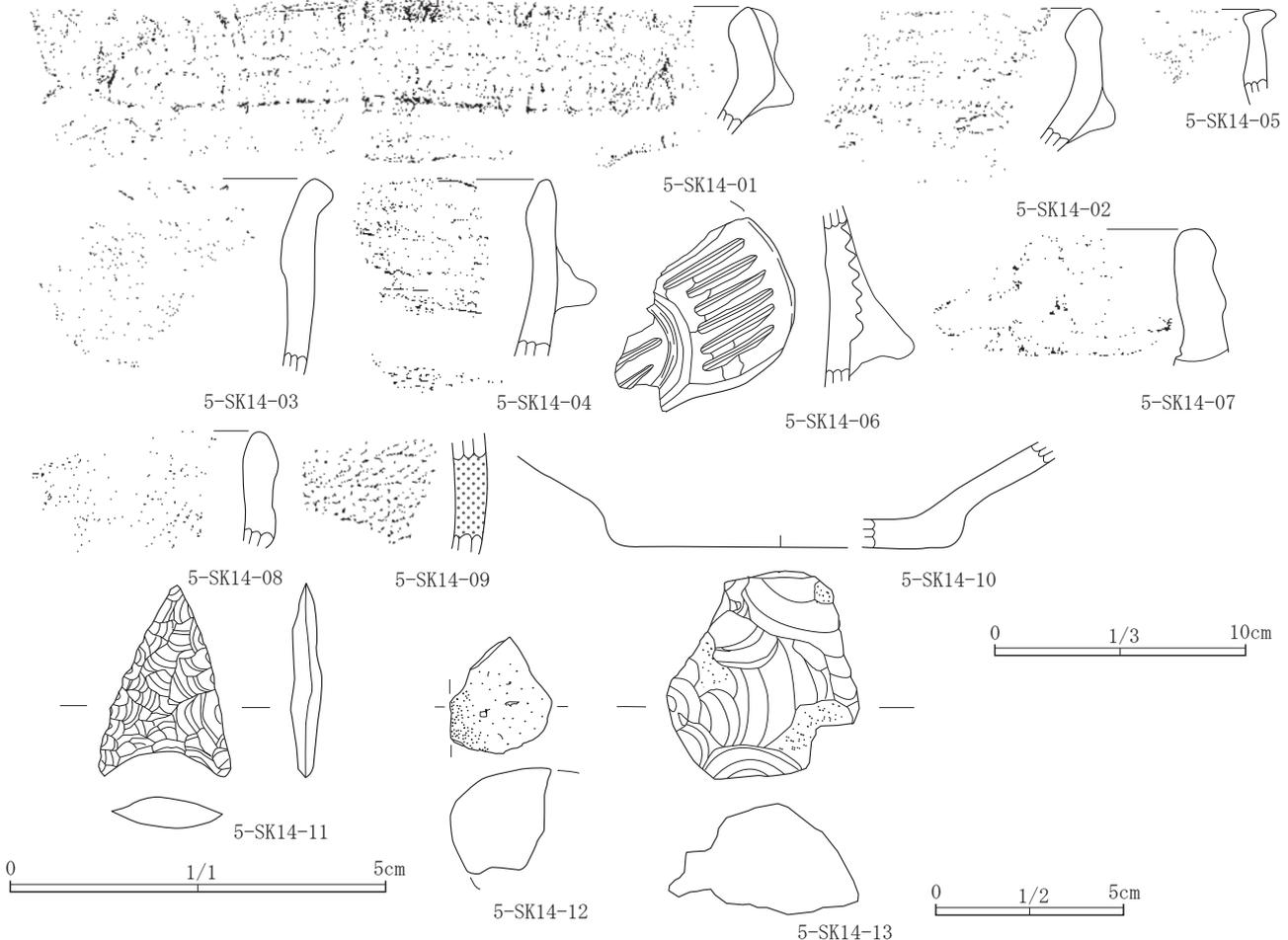
第216図 SK12・13



第217図 SK14

SK14

- | | | |
|------------------|-------------------------------------|-----------------------------------|
| 1層 10YR 2/2 黒褐色土 | ロームブロックφ1~3mm 多量、焼土 | 土ブロックφ1~2mm 中量、炭化物ブロックφ1~5mm 極微量。 |
| 2層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロックφ1~20mm 極多量。 | 5層 10YR 2/2 黒褐色土 |
| 3層 10YR 2/2 黒褐色土 | ロームブロックφ1~2mm 極多量、炭化物ブロックφ1~2mm 少量。 | 6層 10YR 2/2 黒褐色土 |
| 4層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロックφ1~3mm 極多量、焼 | 7層 10YR 3/4 暗褐色土 |
| | | 8層 10YR 3/4 暗褐色土 |



第218図 SK14 出土遺物

01・02 は同様の資料で、隆帯による窓枠状の区画帯を設け、キャタピラ状の角押文を枠に沿って施文し、中央部に波状沈線が描かれる。勝坂式の影響を受ける阿玉台Ⅳ式で、広義の中峠式と判断される。03 は口縁部は折り返す。胴部には楯歯による波状文が斜方向に描かれる。内面に段を有す。阿玉台Ⅳ式。04 は直立する口縁部破片で、口縁直下に鏢状の突起が附される。口縁部には横方向に角押文が複列描かれる。口縁および鏢よりも下位では単節 RL の縄文が施文される。阿玉台Ⅲ～Ⅳ式。05 は口縁は断面が T 字状になる。器面は無文。阿玉台式。06 は扇状の把手部分の破片である。内面には太い沈線により条線が充填される。阿玉台Ⅳ式。07 は波状口縁突起部の破片である。外面に太い沈線で S 字の文様が垂下する。加曽利 E 式カ。08 は口縁はほぼ直立し、口唇部には無文帯を有す。以下胴部は単節 LR の縄文が施文される。加曽利 E 式カ。09 は胎土中に繊維を多量に混入する深鉢胴部破片。器面には多段のループ文が施文される。関山Ⅱ式。10 は平底の底部破片。胴部は大きく開き、浅鉢の可能性はある。

11 は石鏃である。凹基三角鏃。側縁はやや内湾する。材質はチャート。12 は磨石の破片である。側縁は使用により摩耗している。安山岩。13 は石核である。多方向からの剥離を行っている。材質は黒曜石。

4 道路状遺構 (SF)

SF01 (第 219・220 図、第 19 表、図版 54～56・101)

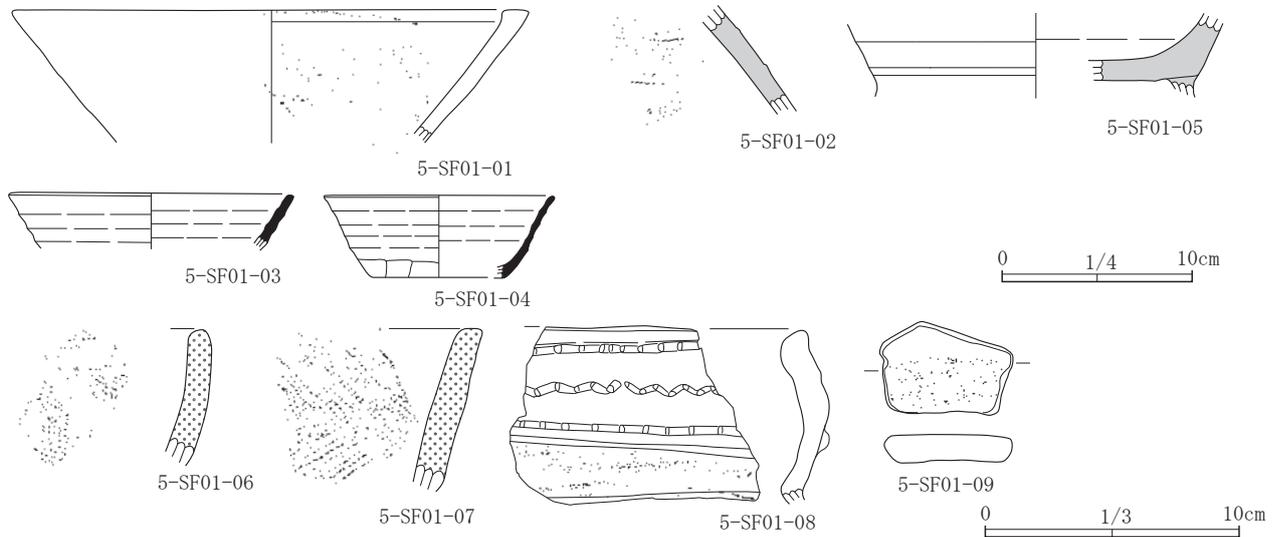
本遺構は B-2～6、A・B-7～10 グリッドにおいて検出された。溝状を呈する。北から南に向かって緩やかな S 字に蛇行している。確認された全長は 40.3m を計る。断面の観察は 4 箇所で行った。いずれのセクションも同様の土層が観察されたため、A～D まで土層説明は統一して行った。尚、本道路は調査区の北端で大きく東に湾曲し、8 区の中央部分さらに 1 区東側端部にまで延長していることが判明している。

道の底部には、A-8～10 グリッドおよび B-6 グリッドを中心に道の走行方向に対し、直角方向の溝が連続して掘り込まれている。この形状については、古代の道路状遺構に見られる波板状凹凸面に類似するもので、本遺構も出土遺物から中世の遺構である可能性が高い。



出土遺物は01・02・05が中世の遺物、03・04は古代の須恵器である。また、06～09は縄文土器である。各時期の遺物が出土しているが、最も新しい中世の遺物をもって本遺構の所属時期と考えられる。01～05は以下の観察表第19表にまとめているが、01の播鉢は土師質土器で口縁の特徴は中世後半の様式を表している。02・05は焼き締め陶器である。02は常滑であろうか。05は不明。03・04は須恵器坏である。03は口径が比較的大きく、直線的に体部が立ち上がる。8世紀代の遺物であろう。04はやや小振りになるが箱形を呈し体部下端が手持ちヘラケズリされることより、03同様8世紀代の遺物と考えられる。

06は深鉢口縁部の破片である。片口土器の可能性もある。胎土中には繊維を多量に混入し、器面には平行沈線による鋸歯文・渦巻文などが組み合わされる。地文は組紐の回転施文である。関山Ⅱ式。07は胎土中に繊維を混入し、口唇直下にコンパス文が1条巡る。地文は直前段半捲りの縄文により羽状を構成する。関山Ⅱ式～黒浜式の初頭。08は隆帯により窓枠状の区画帯を設け、区画に沿って1条の角押文が巡る。中央には鋸歯状の角押文が描かれる。胴部は無文である。阿玉台Ⅰb式。09は土器片錘である。深鉢胴部の破片を用いるもので、下半にはRLの縄文が施文されている。重量は28.3gを計る。



第220図 SF01 出土遺物

第19表 5区 SF01 古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
1	ASSW-5区-SF-1-C-3	土師質土器	すり鉢	(27.0)	—	<7.0>	96.7	直線的に大きく開き口縁は面取りが行われている。	剥落しているものの、僅かに縦方向の沈線が観察される。	良好	内面10YR3/4暗褐 外面5Y2/1黒	雲母やや多い。	口縁部破片	
2	ASSW-5区-SF-1-1	陶器	大甕	—	—	—	52.6	僅かに内湾している。	甕の痕跡有りカ。	良好	内外面2.5YR5/3にぶい赤褐	小礫・鉄分の噴出しやや多い。	胴部片	
3	ASSW-5区-SF-1	須恵器	坏	(14.8)	—	<2.9>	9.3	体部は直線的に開く。	ロクロ整形。	良好	内面7.5Y5/2灰オリーブ 外面10Y5/1灰	雲母・白色粒子少量。	口縁部片	
4	ASSW-5区-SF-1-D-6	須恵器	坏	-11.9	(7.0)	<4.3>	16.3	体部下端で緩やかに内湾した後僅かに外反気味に開く。器壁は薄い。	ロクロ整形、体部下端は手持ちヘラケズリ。底部の調整は不明。	良好	内外面5Y5/2灰オリーブ		口縁部片	
5	ASSW-5区-SF-1	陶器	甕	—	—	<4.5>	123.3	体部下端は見込で緩やかに内湾する。貼付高台。	ロクロ整形。外面体部下端及び底部は回転ヘラケズリカ。	良好	内面5YR5/6明赤褐 外面2.5YR4/3オリーブ褐	小～中礫・白色粒子・黒色粒子少量。	底部1/4	焼締め陶器カ、内面が滑らかな事より摺鉢か捏ね鉢として仕様されたものカ。

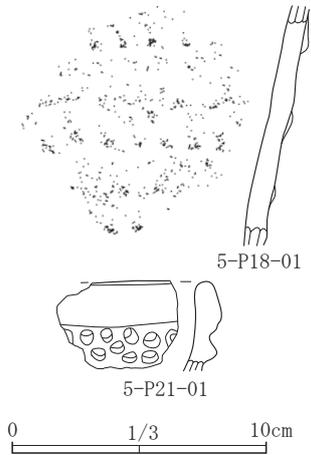
5 ピット (第221図、第20表、図版57・58・101)

本地区からは24基のピットが検出されている。これらのピットは掘り込みが深く住居跡の柱穴と判断されるものも多く、7区同様、全体に削平が進んでいることが伺える。ピットは北西側に偏在する傾向がある。遺物の出土したピットの計測値および位置については以下の第20表にまとめた。

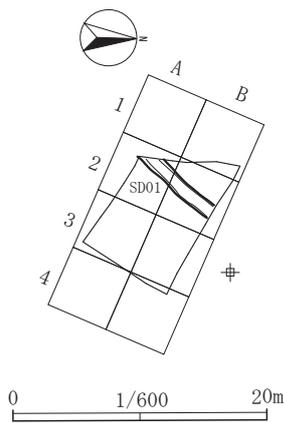
第20表 5区ピット計測表

遺構名	検出グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	出土遺物
P18	A-2	48	44	77	01
P21	A-0	40	36	87	01

P18-01は襷状文が3段にわたり意識的に描かれるもので、阿玉台Ib式。P21-01は口縁部の破片で口縁直下に無文帯を有した後、円形の刺突列が2条巡る。いわゆる連弧文様式の土器と考えられるもので、加曾利EⅢ式平行であろう。



第221図 5区ピット出土遺物



第222図 6区全体図

第6項 6区

本区は1区西側中央部分より北に150mほど離れた位置に存在する。今回の調査の一環として道路建設を目的に調査を実施した。

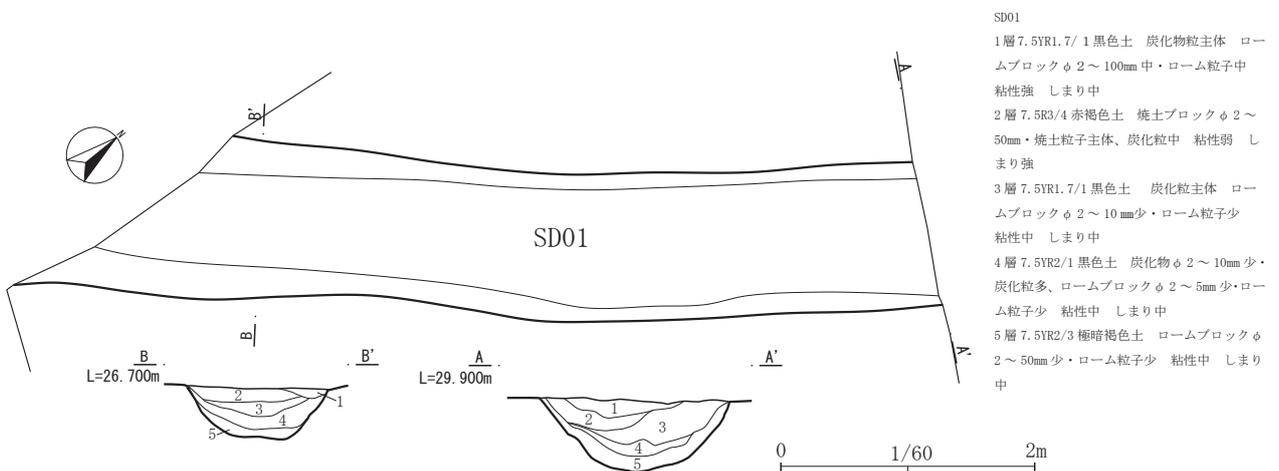
検出された遺構はSD01の溝状遺構1基である。

1 溝 (SD)

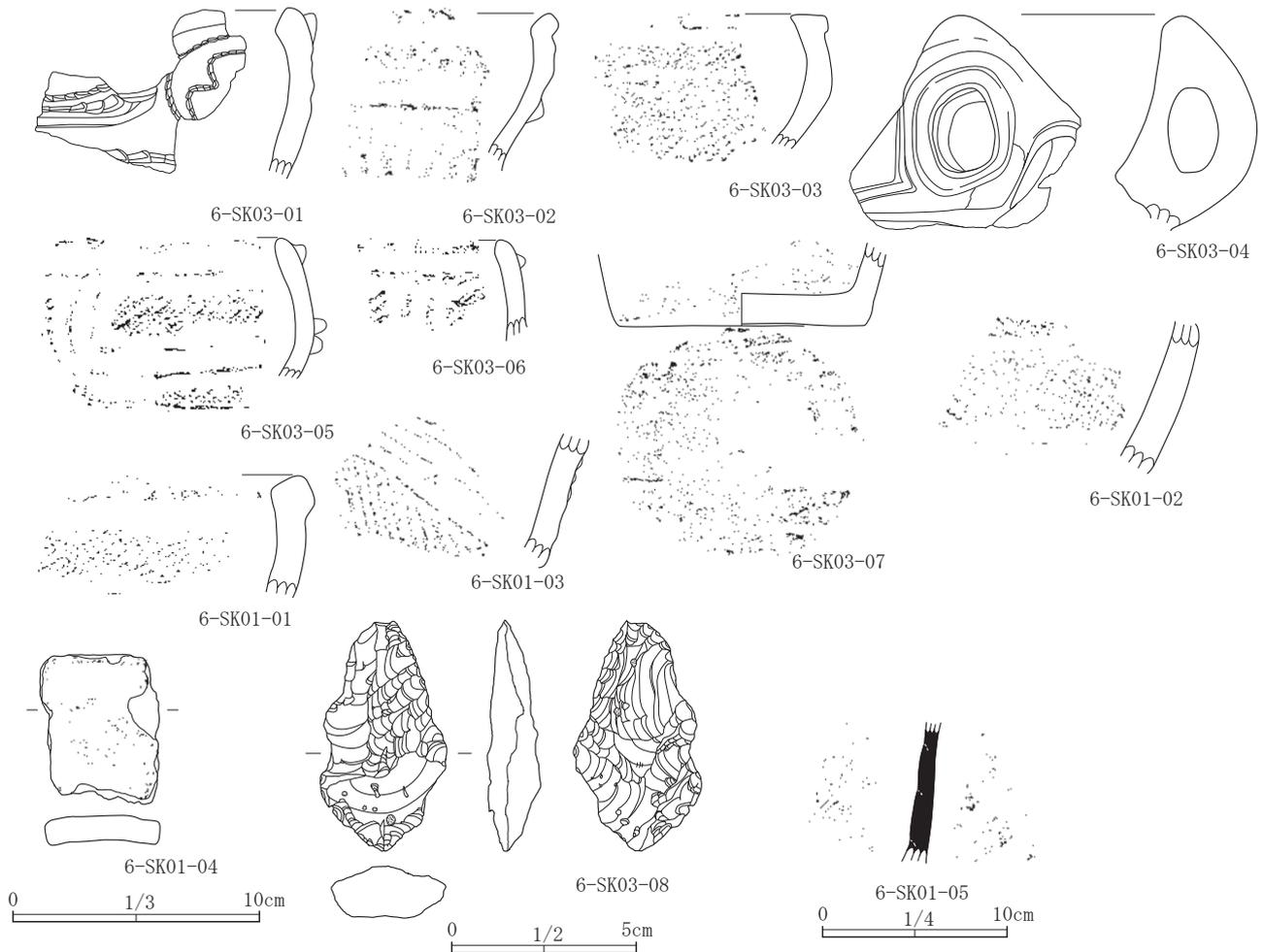
SD01 (第223図、図版61)

本遺構は調査区の西端A・B-2グリッドにおいて検出されている。調査が行えた部分の全長は6.35m、西側端部の幅は1.17m、深さは38cm、北側端部は1.56m、深さは60cmを計る。土層は5層に分層され、自然堆積を示している。溝の断面形状は緩やかなU字形を呈す。

本遺構からの遺物は皆無であった。したがって時期は不明である。



第223図 SD01



第224図 6区遺構外出土遺物

2 遺構外出土遺物 (第224図、第21表、図版60・61・102)

ラベルに本区出土遺物と標記された中に SK01 および SK03 と表記された遺物が確認された。しかしながら同区には溝1条 (SD01) 以外の遺構の存在はなく、本区不明遺物として取り扱った。

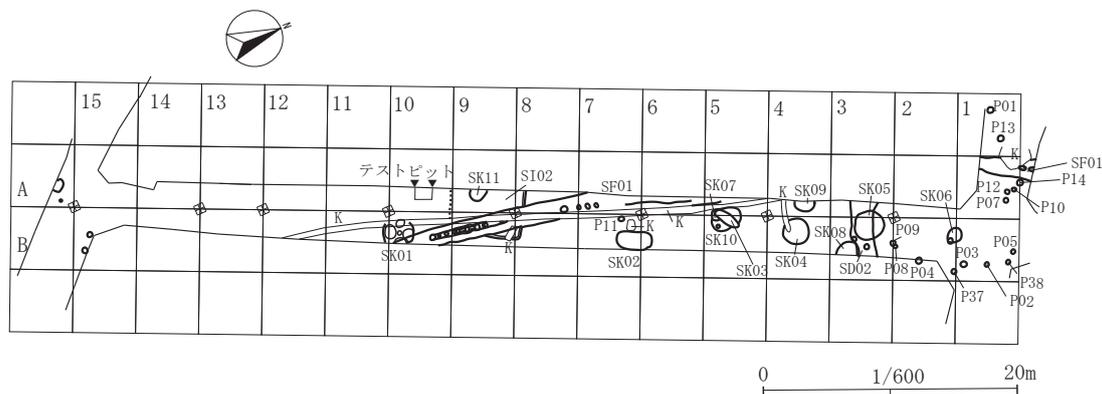
SK03-01 は深鉢口縁部の破片。把手が附される。有節沈線による文様が描かれる。阿玉台 I b 式。02 は口縁部の破片。断面三角形の隆帯が貼り付けられ、区画内に角押文が描かれる。下位には襞状文が巡る。阿玉台 I b 式。03 は内湾する口縁部破片。口唇は折り返す。器面には LR 縄文が施文される。加曽利 E I 式。04 は環状の把手である。加曽利 E I 式。05 は二重隆線によるクランク文が描かれる。加曽利 E I 式。06 は 05 同様。07 は底部の資料である。網代痕が附されている。

SK01-01 は口縁は棒状となる。口唇直下に窓枠状の区画、内部に LR 縄文が充填される。02 は沈線による区画帯内部に単節 RL 縄文が充填。03 は 4 本の沈線によって弧状の文様が描かれる。区画された内部に燃糸文が施文される。いわゆる連弧文様式土器。04 は土器片錘である。磨消懸垂文の胴部破片を用いている。重量は 40.9g を計る。SK01-05 は古代須恵器の破片である。詳細は下記表にまとめた。

SK03-08 は黒曜石の槍先である。縦方向の槌状剥離が見られる。旧石器後半の資料であろうか。

第21表 6区遺構外古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
5	ASSW-6区-SK-1	須恵器	甕 (肩部破片)	—	—	—	42.7	僅かに内湾している。	外面は平行叩き、下半はヘラケズリ。内面は当具痕及び輪積痕有り。	良好	内面5YR5/6 明赤褐 外面2.5YR4/3 オリーブ褐		胴部下半片	



第225図 8区全体図

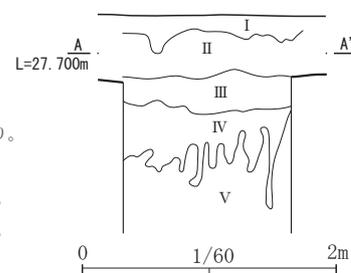
第7項 8区

本区は1・7区の交差部分から3・5区の交差部分までの15グリッドおよそ75mの間である。

検出された遺構は北側に集中する傾向があり、縄文時代の土坑、古墳時代の住居跡並びに中世の道路状遺構が1条検出されている。中世の道状遺構は5区で検出されたSF01の延長に当たり、呼称も同じにした。

標準堆積土層はA-10グリッド西側のテストピットで実施した。

- I層 10YR 3/3 暗褐色土 耕作土。遺構確認面。
- II層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～3mm多量。しまりあり。遺構確認面。
- III層 10YR 4/6 褐色土 ロームブロックφ1～10mm多量。しまりあり。
- IV層 10YR 4/6 褐色土 ロームブロックφ1～40mm多量。しまりあり。
- V層 10YR 4/6 褐色土 ハードローム。しまり強。

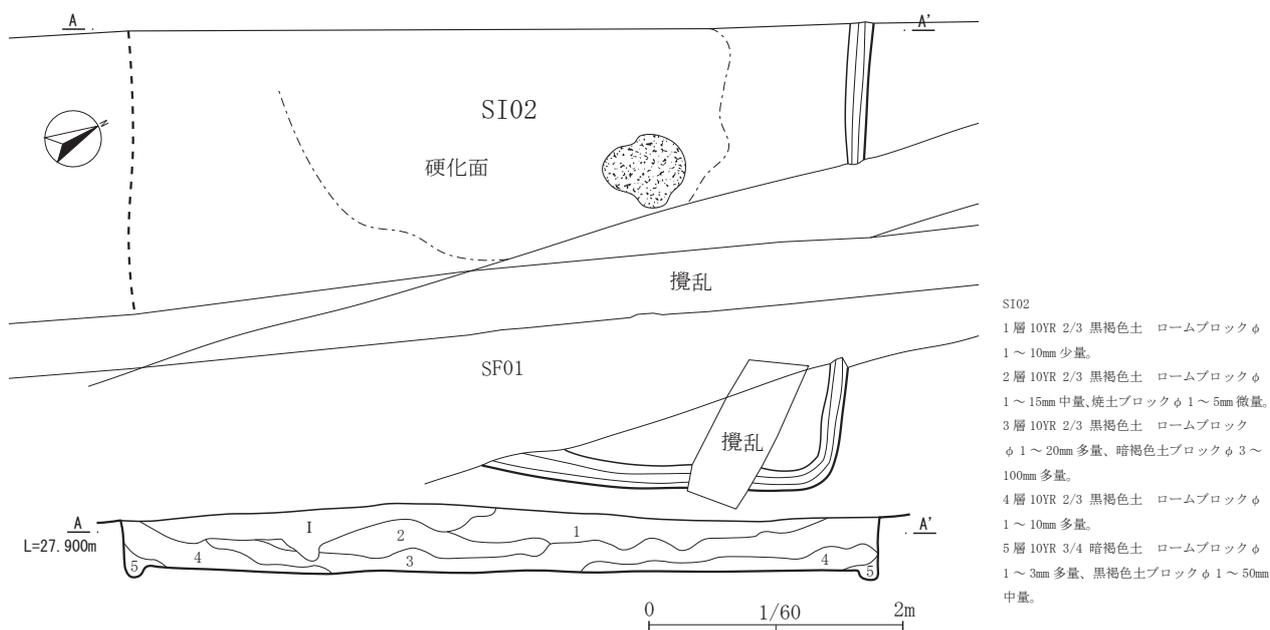


第226図 8区標準堆積土層

1 住居跡 (SI)

SI01

調査区西側壁面A-13・14グリッド部に僅かながら住居跡と思われる断面が確認されたため、番号を付して調査を行ったが、住居跡と認識することができなかつたため欠番とした。



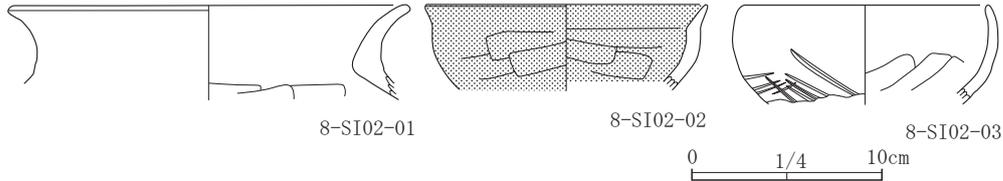
第227図 SI02

- SI02
- 1層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ1～10mm少量。
- 2層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ1～15mm中量、焼土ブロックφ1～5mm微量。
- 3層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ1～20mm多量、暗褐色土ブロックφ3～100mm多量。
- 4層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ1～10mm多量。
- 5層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ1～3mm多量、黒褐色土ブロックφ1～50mm中量。

SI02 (第227・228図、第22表、図版68・102)

本遺構はA・B-8・9グリッドにおいて検出されている。東側はSF01および攪乱によって破壊されている。南北方向は6.05mを計り、西側が調査区域外となるため東西方向は不明である。住居の平面形は方形を呈するものと思われる。住居の南側は大きく削平を受けており、立ち上がりは不明瞭であるが、調査区西側壁に住居の断面が残されており、これによって南北方向の規模が判明している。また、本住居には壁溝が全周することも判断できる。床面は中央部を中心に硬化が見られ、北壁寄りに炉が存在している。土層は5層に分層され、自然堆積を示している。

本遺構の出土遺物は少量であるが土師器甕1点、坏2点が出土しており、遺物の特徴から5世紀中葉から後半の遺構と考えられる。



第228図 SI02出土遺物

第22表 8区SI02古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
1	ASSW-8区-SI-2	土師器	甕	(20.5)	—	<4.85>	91.2	口縁のみの資料。口縁は「C」の字に外反する。器壁は厚い。	内外面共に横ナデ。	良好 二次 焼成 アリ	内外面10YR5/4 にぶい黄褐	長石・石英等小 礫・雲母多い。	口縁 1/5	
2	ASSW-8区-SI-2	土師器	坏	(14.7)	—	<4.4>	28.4	体部は緩やかに内湾し、内側に弱い稜を有した後外傾する。	口縁は内外面共に横ナデ、体部内外面共にナデ整形。	良好	内外面2.5YR5/6 明赤褐	白色粒子・雲母・ 白色針状物質 微量。	口縁 部片	内外面 赤彩
3	ASSW-8区-SI-2	土師器	埴	(12.8)	—	<5.15>	35.0	体部は緩やかに内湾し口縁に至る。体部外面砥石として転用している。	口縁は内外面共に横ナデ、体部内面ナデ、外面は剥落している。	良好 二次 焼成 アリ	内外面7.5YR6/6 橙	白色粒子・黒色 粒子・雲母少量、 白色針状物質	口縁 ~ 体部 1/5	転用砥石

2 土坑 (SK)

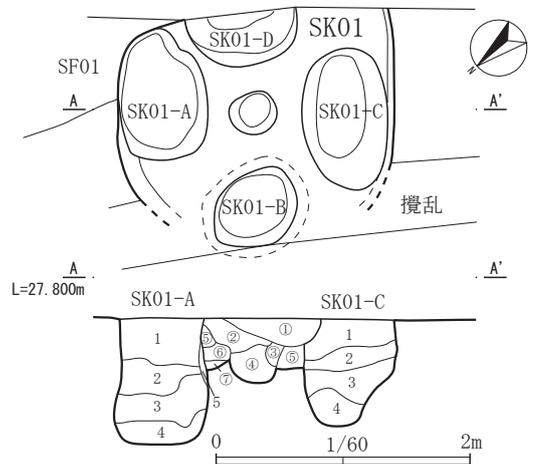
SK01 (第229・230図、第29・30表、図版68・69・102・106)

本遺構はB-10・11グリッドにおいて検出されている。平面形状はほぼ円形を呈するものと思われる。南側は調査区域外、北側は攪乱によって部分的に破壊されている。土坑は当初1基の単体と考えていたが、調査の結果5基の土坑の集合であることが判明した。

SK01は南北軸で2.41m、東西軸で2.36mを計る。確認面下の掘り込みの深さは37cm、土層は7層に分層され自然堆積を示している。土坑中央に直径38cm、深さ19cmのピット1基が存在する。本遺構最上層の第①層からは貝の出土が見られ、地点貝塚と判断される。出土した貝の分類については第5章第6節にまとめた。出土貝としてはサルボウが主体でカキ・ハマグリなどが混在している。魚骨等は検出されていない。第②層以下は自然堆積を示すものであろう。第①層を含め第⑦層に分層される。

SK01-AはSK01と重複しこれを切っている。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸1.03m、短軸0.65mを計る。覆土は自然堆積を示し、4層に分層される。第5層は壁の崩落土層である。

SK01-Bは最も南西に位置する。袋状を呈するもので上端部長



第229図 SK01

- SK01
- ①層 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロックφ2~10mm 微量、貝殻多量。しまりあり。
 - ②層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ2~10mm 微量。しまりあり。
 - ③層 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロックφ2~10mm 極多量。しまり・粘性あり。
 - ④層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロックφ2~10mm 少量。しまりあり。
 - ⑤層 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロックφ2~10mm 微量。しまりあり。
 - ⑥層 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロックφ2~10mm 極多量。しまり強、粘性あり。
 - ⑦層 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロックφ2~10mm 微量。しまり強。
- SK01-A
- 1層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ2~20mm 中量。しまりあり。
 - 2層 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロックφ2~20mm 少量。しまりあり。
 - 3層 10YR 2/1 黒褐色土 ロームブロックφ2~20mm 微量。しまりあり。
 - 4層 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロックφ2~10mm 微量。しまりあり。
- SK01-C
- 1層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ2~10mm 中量。しまりあり。
 - 2層 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロックφ2~10mm 少量。しまりあり。
 - 3層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ2~10mm 微量。しまりあり。
 - 4層 10YR 2/1 黒褐色土 しまりあり。

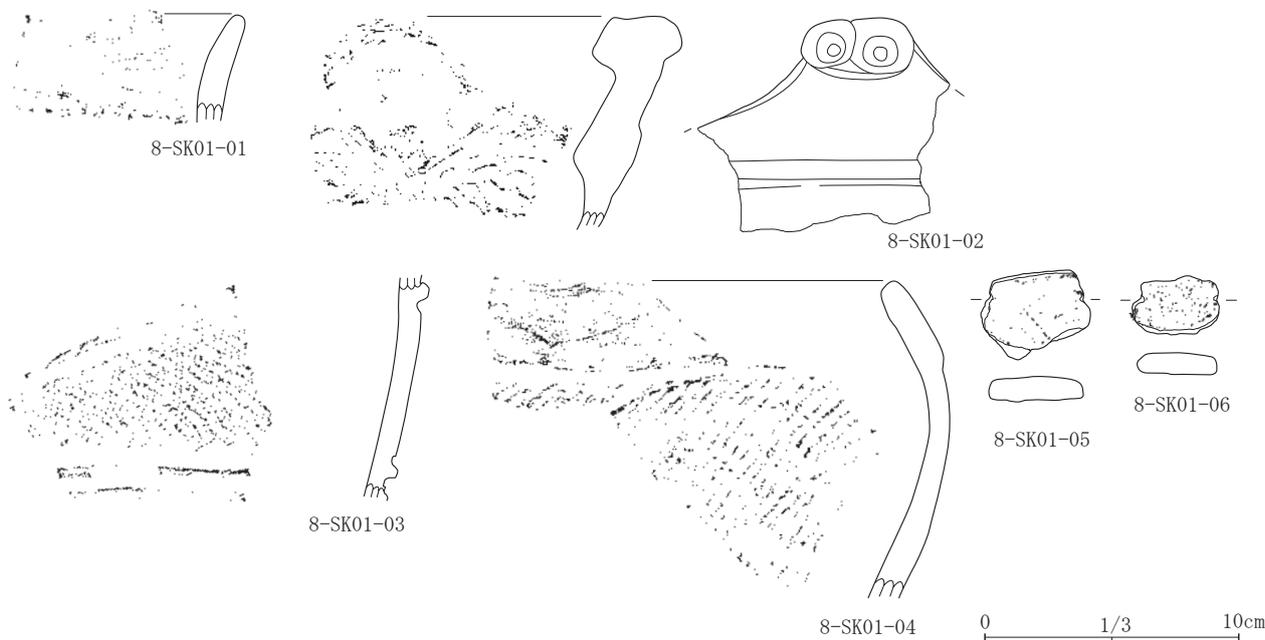
軸 83 cm、短軸 58 cm、下端は最大径 92 cm を計る。SK01 底部からの掘り込みの深さは 54 cm を計る。

SK01-C は南側に位置するもので、平面形状は楕円形を呈する。長軸 1.17 m、短軸 0.73 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 84 cm、覆土は自然堆積で 4 層に分層される。

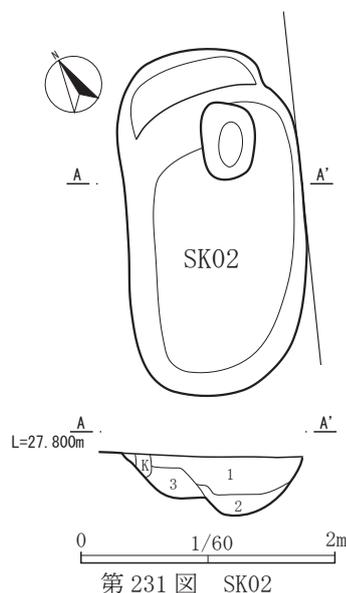
SK01-D は南東側に位置し、平面形状は南東側が調査区域外になるため明瞭ではないが、楕円形を呈するものであろう。調査区東壁での長さは 87 cm、SK01 底部からの掘り込みの深さは 1.1 m を計る。

本遺構は 5 基の土坑が切り合っていることが調査後に判明した。したがって、本土坑群より出土した遺物の帰属は明確ではない。

01 は外反して開く深鉢の口縁部破片である。口辺は無文で下端に小形の C 字爪形文が施文される。胎土中に繊維の混入は見られず、縄文前期末葉の資料と考えられる。02 は波状口縁の波頂部の破片である。外面は隆帯により縁取られ、楕円形の区画を構成する。区画内には沈線による鋸歯文が充填される。地文は単節 RL および LR の縄文が口縁部にまで施文される。内面波頂部には円形の貼り付け文が施される。阿玉台 IV 式。03 は二重隆線による文様帯が描かれる口縁部直下の破片。胴部との境には同様の隆線が巡る。地文は単節 RL。加曾利 E I 式。04 は大きく内湾する口縁部の破片。口縁直下はやや幅広の無文帯となり、以下、1 条の沈線が巡る。地文は単節 LR。加曾利 E III 式カ。05・06 は土器片錘である。いずれも無文部の破片を用いる。重量は 05 が 13.80g、06 が 8.5g を計る。



第 230 図 SK01 出土遺物



第 231 図 SK02

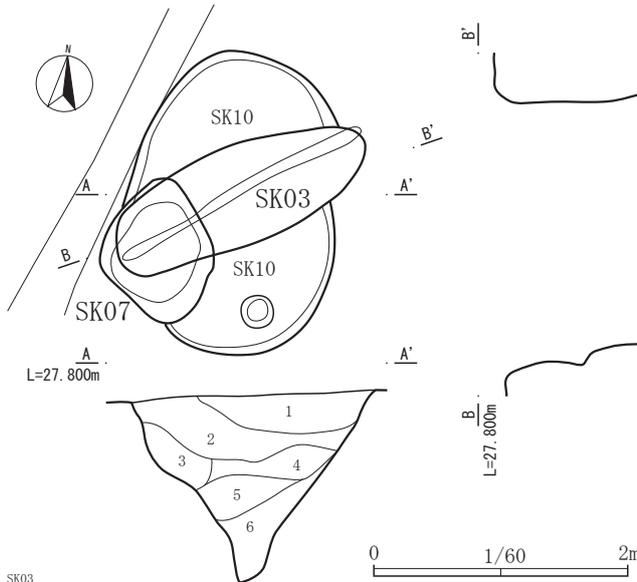
SK02 (第 231 図、図版 69)

本遺構は B-6・7 グリッドにおいて検出された。平面形状は長楕円形を呈する。長軸 2.78 m、短軸 1.37 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 47 cm、覆土は自然堆積で 3 層に分層される。北側に 1 段テラス状の高まりを有し、テラス直下にピット 1 基が掘り込まれている。断面形状は 2 段のテラスを有する U 字形を呈する。

本遺構からは縄文土器が僅かに出土しているが、掲載遺物はない。

SK02

- 1 層 10YR 2/1 黒色土 ロームブロック φ 2～10mm 少量。しまり強、粘性あり。
- 2 層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロック φ 2～10mm 微量。しまり強、粘性あり。
- 3 層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロック φ 2～10mm 微量。しまり強、粘性あり。

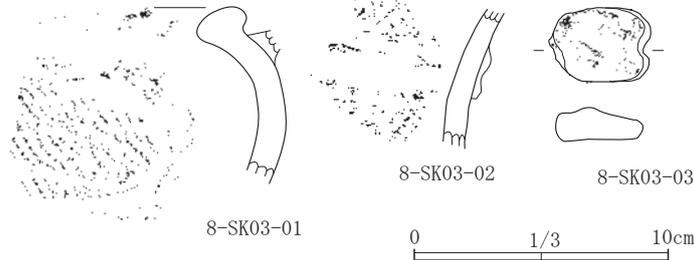


- SK03
- 1層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ2mm 多量、少礫少量。
 - 2層 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロックφ2mm 多量、少礫少量。
 - 3層 10YR 2/1 黒色土 ロームブロックφ2~10mm 少量。
 - 4層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ2~5mm 中量、少礫少量。
 - 5層 10YR 3/1 黒褐色土 ロームブロックφ2~10mm 多量。
 - 6層 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロックφ2~5mm 少量。

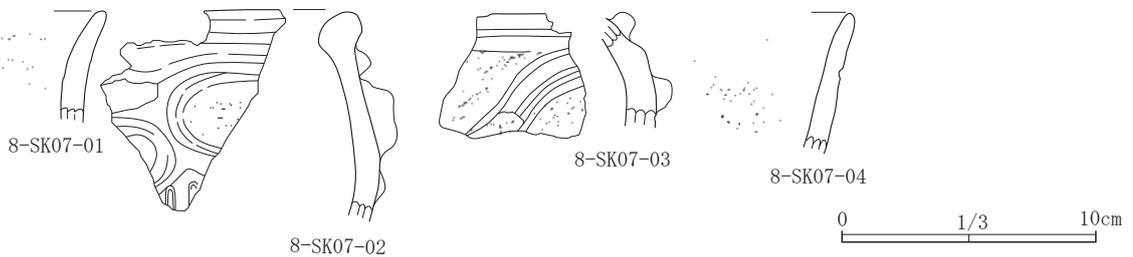
第 232 図 SK03・07

RL の縄文が充填される。02 は二重隆線による文様部の破片である。地文は単節 LR。03 は土器片錘である。無文。重量は 11.9g。SK03 出土遺物は加曾利 E I 式を主体にしている。

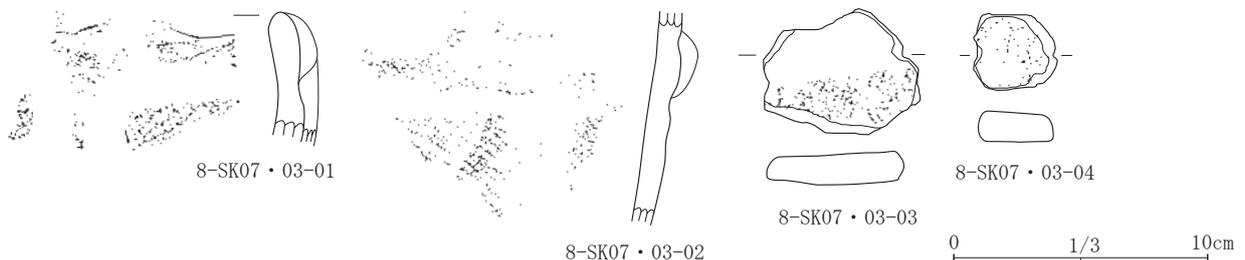
SK07-01 は外反して開く口縁部で、器面は無文である。02 はやや内傾する口縁で口唇部はくの字に屈曲して開く。胴上半部には太い隆線による窓枠状の区画が設けられ、RL の縄文が充填される。胴部は懸垂文が垂下する。03 は隆線により弧状の文様が描かれる。地文は単節 LR。04 は直線的に開く深鉢口縁部。口辺は無文帯となる。以下に



第 233 図 SK03 出土遺物



第 234 図 SK07 出土遺物



第 235 図 SK03・07 出土遺物

SK03・07 (第 232 ~ 235 図、図版 69・70・103・104)

本遺構は A・B-5 グリッドにおいて検出された。

SK03 は平面形状は長楕円形を呈するもので、断面形が漏斗状となる、いわゆる落とし穴である。長軸 2.12 m、短軸 1.49 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 1.49 m、覆土は自然堆積で 6 層に分層される。

SK07 は SK03 の南西側で重複するものであるが調査を同時に進めたため、新旧関係は不明。平面形状は楕円形を呈し、長軸 1.2 m、短軸 0.95 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 63 cm。

本遺構の遺物は SK03・SK07 単独のもの、および SK03 と 07 が混じったものと 3 種類に分けて取り上げを行った。

SK03-01 は内湾する口縁部の破片で把手が附されていたものと思われる。隆帯による区画内には

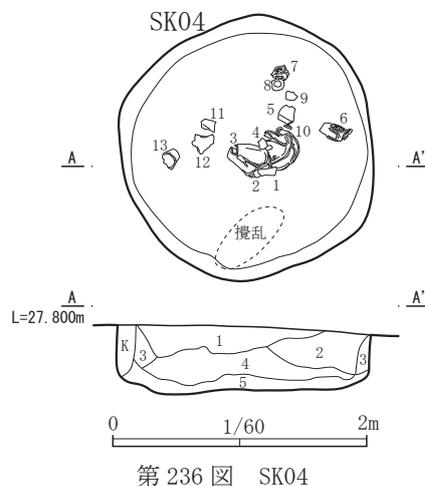
沈線が1条巡り胴部には単節LRの縄文が施文される。03は加曾利E式のやや古手と考えられるが、02・04は加曾利EⅢ式と判断される。

SK07・03-01は太い沈線により楕円形の区画が描かれ、内部にLRの縄文が施文される。02は深鉢胴部の破片である。隆帯により区画され、下位には磨消懸垂文が垂下する。区画内には単節RLの縄文が充填される。03・04は土器片錘である。03は磨消懸垂文の胴部破片を用いている。重量は03で39.4g、04で13.9gを計る。SK07・03の遺物は概ね加曾利EⅢ式と判断される。

SK04（第236～239図、図版69・103・104）

本遺構はB-4グリッドにおいて検出された。平面形状は円形を呈する。長軸2.13m、短軸2.08mを計る。確認面下の掘り込みの深さは53cm、覆土は自然堆積で5層に分層される。断面形状は浅い鍋底状を呈する。出土遺物より想定して袋状土坑であった可能性が高い。

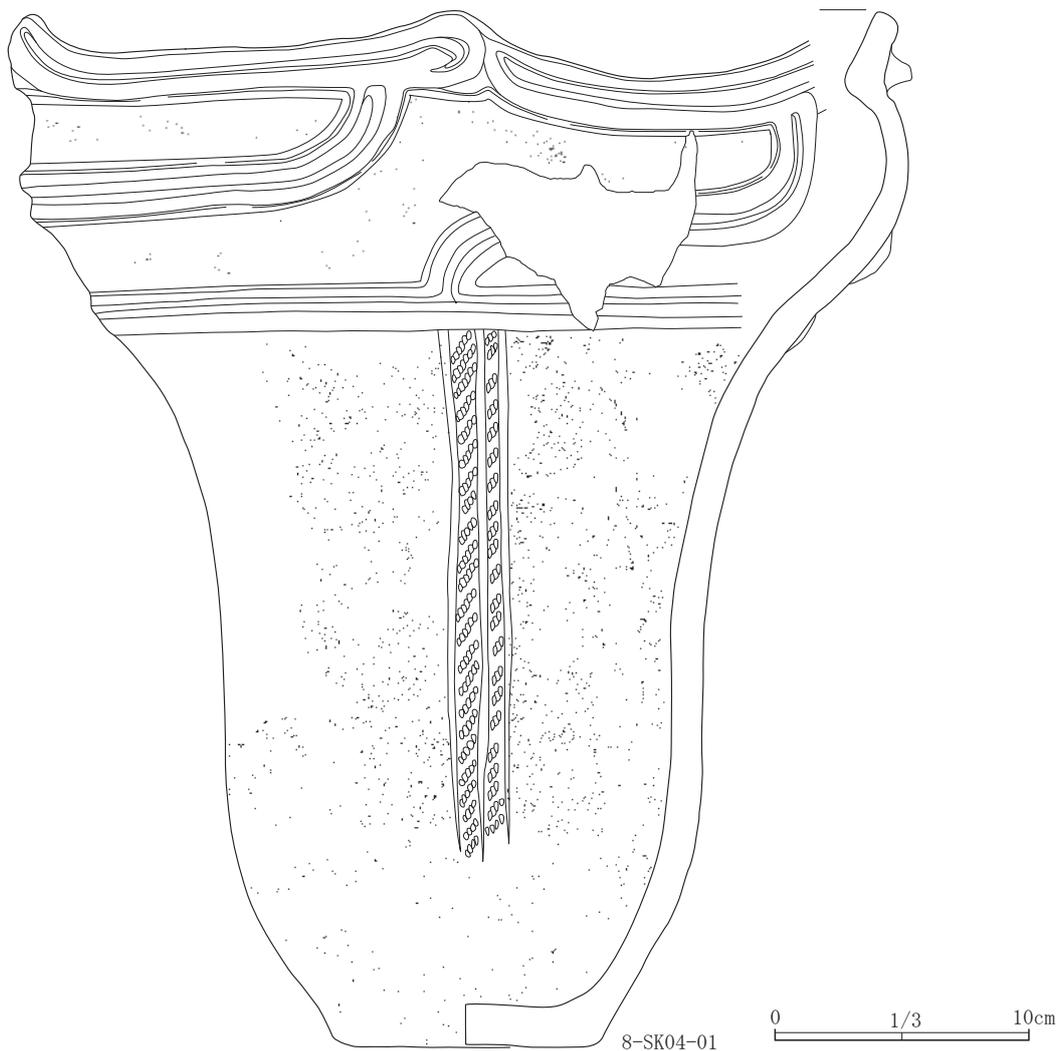
本遺構からは中央部分を中心に大量の遺物が出土している。01はキャリパー形土器の完形品である。口縁部は4単位の小波状となり、波頂部にはS字の沈線が巡る。波頂部よりクランク状の二重隆線が垂下し、頸部下端には同様の隆線が胴部との間を区画する。胴部には3本1単位の沈線による直線的な懸垂文および蛇行懸垂文が交互に垂下する。地文は単節RLの縦回転施文である。



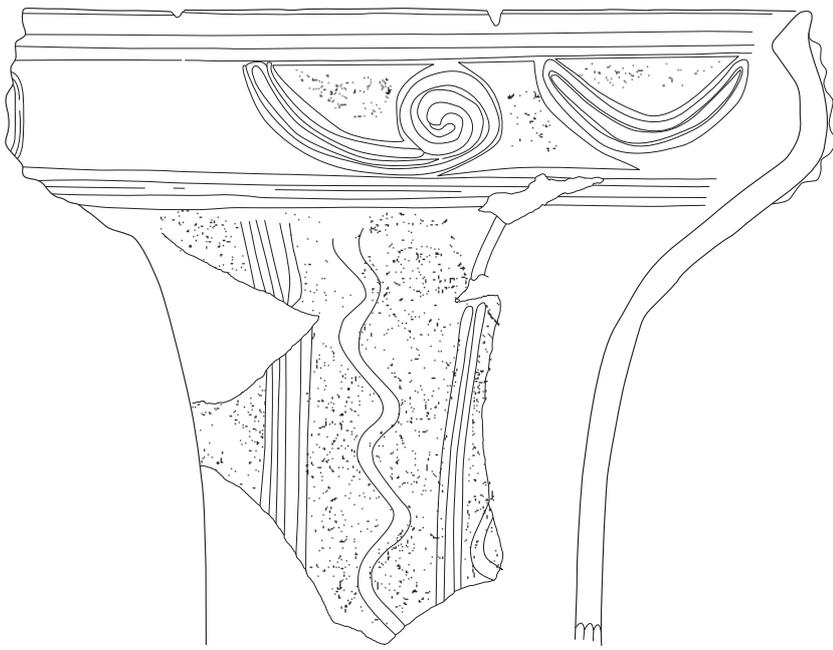
第236図 SK04

SK04

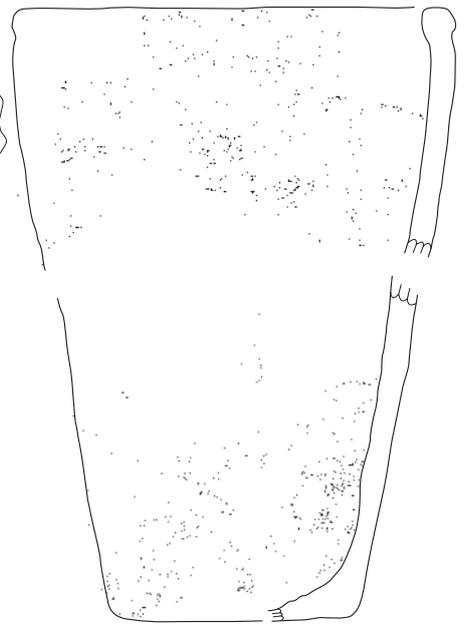
- | | |
|------------------|--|
| 1層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロックφ1～5mm 多量、焼土ブロックφ1～2mm 微量、炭化物ブロックφ1～3mm 中量。 |
| 2層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロックφ1～3mm 極多量、炭化ブロックφ1～2mm 微量。 |
| 3層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロックφ1～2mm 極多量。 |
| 4層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロックφ1～5mm 多量、焼土ブロックφ1～2mm 中量。 |
| 5層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロックφ1～40mm 多量、炭化ブロックφ1～5mm 極微量。 |



第237図 SK04 出土遺物 (1)



8-SK04-02



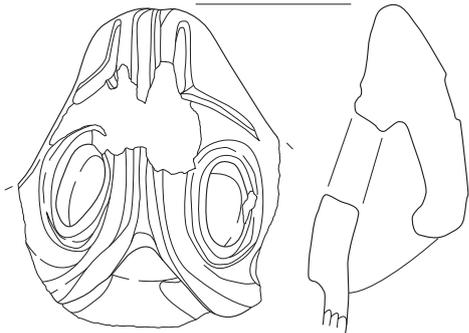
8-SK04-05



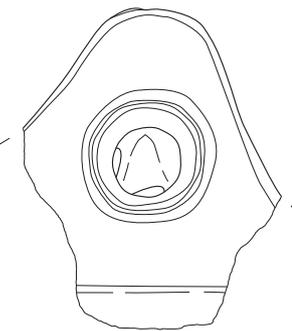
8-SK04-03



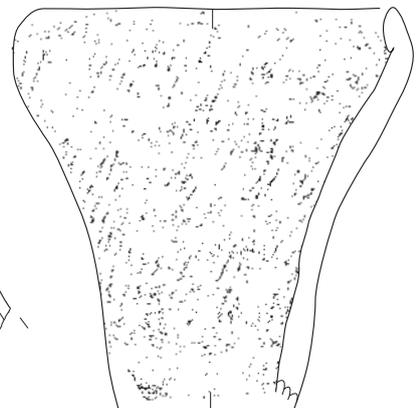
8-SK04-04



8-SK04-07

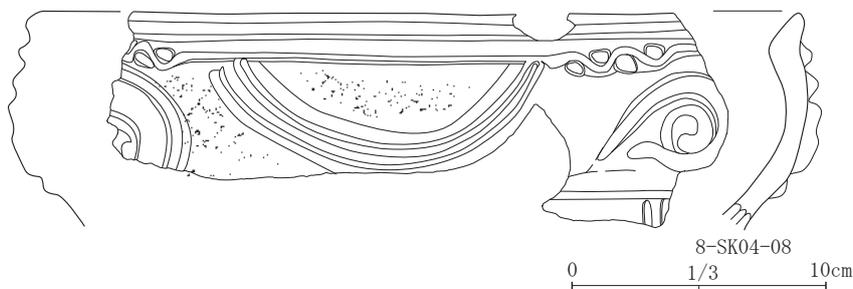


8-SK04-06



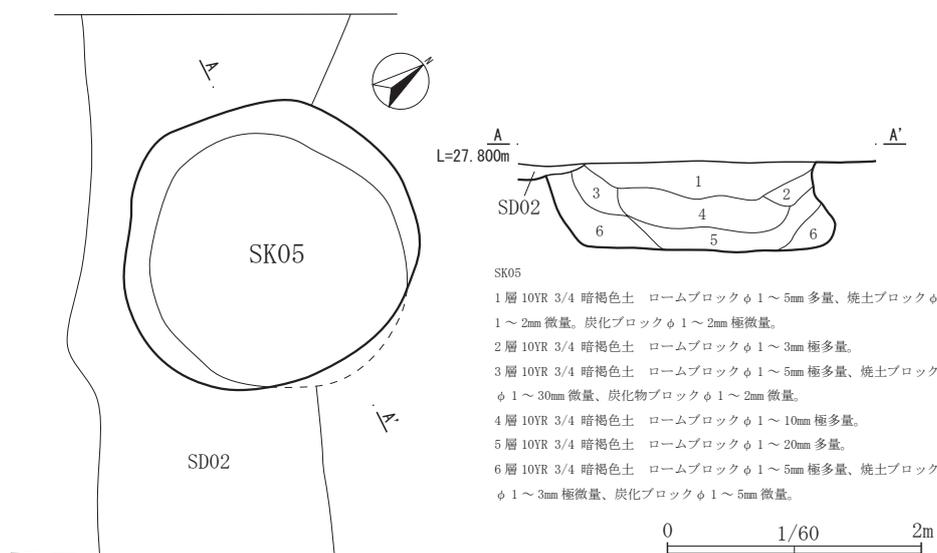
第238图 SK04 出土遺物 (2)

0 1/3 10cm



第 239 図 SK04 出土遺物 (3)

加曽利 E I 式新段階。02 はキャリパー形土器の上半部資料である。口唇部はくの字に屈曲して開く。口縁部文様帯には二重隆線により渦巻文と弧状文が交互に配される。胴部との境には同じ隆帯が巡り、上下を区画する。下半は 3 本 1 単位の沈線による直線的な懸垂文および蛇行懸垂文が交互に垂下する。地文は単節 LR。03 は円筒状の器形で、口縁部には楕円形の窓枠状の区画が設けられ、内部には縦方向の集合短沈線が充填される。胴部は単節 LR の縄文が縦方向に施文され 2 本の沈線による懸垂文が胴中位まで垂下する。胴下半から底部にかけては無文となる。加曽利 E I 式新段階であろう。04 は口縁がくの字に屈曲して開き、胴部はやや内湾気味になる器形である。口縁部から胴部にかけて、沈線により三角形の区画帯や渦巻文逆コの字文様などが絵画的に描かれている。地文は単節縄文 RL が施文されている。加曽利 E I 式古段階と判断される。05 は円筒状の器形で口縁部が棒状に太くなる器面は無文。共存遺物より加曽利 E I 式段階と判断される。06 は小形のキャリパー形土器である。文様は描かれず、前面に単節 RL の縄文が縦施文される。07 は把部の資料である。眼鏡状を呈し、頂部には三叉文が刻まれている。盲孔が内面に貫通している。加曽利 E I 式の資料であるが、三叉文を刻む点など勝坂式的な要素を併せ持つ。08 は 02 と同様の破片であるが、口縁直下の隆帯部分に交互刺突によるクランク状の文様を配置している。加曽利 E I 式土器であるが、勝坂式的な手法を取り入れている。



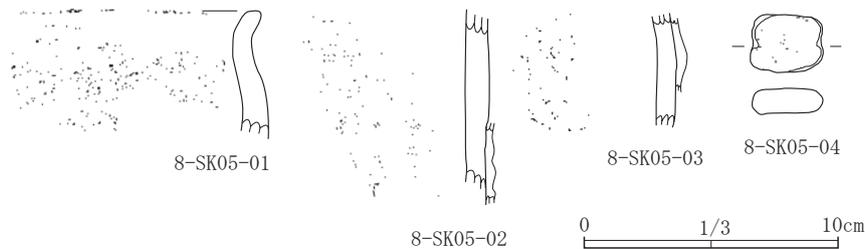
第 240 図 SK05

SK05 (第 240・241 図、図版 70・104)

本遺構は A・B-3 グリッドにおいて検出された。SD02 と重複関係にあり、これに切られている。平面形状はほぼ円形を呈する。上端の長軸は 2.43 m、短軸 2.28 m を計る。底部はいわゆる袋状を呈しており、最大径は 2.19 m。確認面下の掘り込みの深さは 78 cm、覆土は自然堆積で 6 層に分層される。

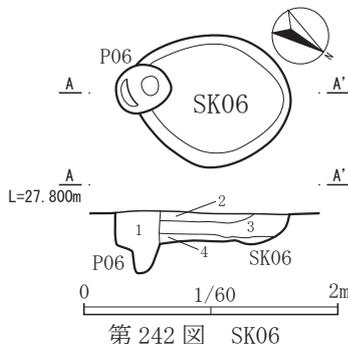
本遺構からの出土遺物の内 4 点を掲載した。

01 は内湾する口縁で口唇部は僅かに外反して開く。器面には僅かに縄文の施文が見られる。02 は胴部の破片である。上位に 3 本の沈線が描かれ、断面三角形の棒状隆帯が垂下する。襷状文が 1 段巡る。地文に楕円波状文が施文される。阿玉台 I b 式。03 は 02 同様の破片であるが、地文は見られない。阿玉台 I b 式であろう。04 は無文の土器片錘である。重量は 9.3g。



第 241 図 SK05 出土遺物

SK06 (第 242 図、図版 70)

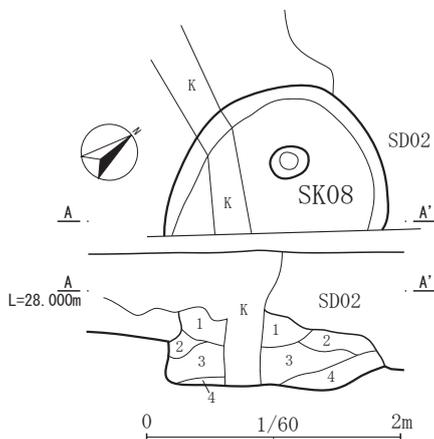


第 242 図 SK06

本遺構は B-1・2 グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸 1.29 m、短軸 1.03 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 24.8 cm、覆土は自然堆積で 3 層に分層される。遺構の南側を P06 に切られている。P06 は平面形状は楕円形を呈し、長軸 41 cm、短軸 36 cm、深さは最深部で 51 cm を計る。

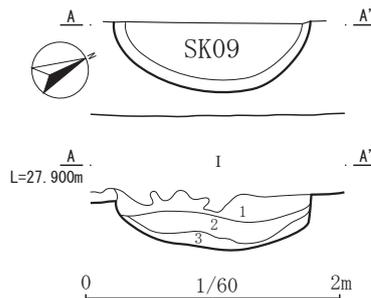
本遺構から出土した遺物で、掲載遺物はない。

- | | | | | |
|------|-------------------|---|-------------------|------------------------|
| SK06 | 1 層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロック φ 1 ~ 3mm 中量。 | 3 層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロック φ 1 ~ 3mm 極多量。 |
| | 2 層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロック φ 1 ~ 5mm 多量、炭化物ブロック φ 1 ~ 2mm 極微量。 | 4 層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロック φ 1 ~ 5mm 極多量。 |



第 243 図 SK08

- | | | |
|------|-------------------|--|
| SK08 | 1 層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロック φ 1 ~ 5mm 中量、炭化ブロック φ 1 ~ 2mm 極微量。 |
| | 2 層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロック φ 1 ~ 10mm 多量。 |
| | 3 層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロック φ 1 ~ 5mm 極少量。 |
| | 4 層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロック φ 1 ~ 10mm 極少量。しまりあり。 |



第 244 図 SK09

- | | | |
|------|-------------------|--|
| SK09 | 1 層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロック φ 1 ~ 50mm 多量。 |
| | 2 層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロック φ 1 ~ 5mm 多量、焼土ブロック φ 1 ~ 2mm 極微量。 |
| | 3 層 10YR 3/4 暗褐色土 | ロームブロック φ 1 ~ 10mm 極多量。 |

SK08 (第 243・245 図、図版 70・105)

本遺構は B-3 グリッドにおいて検出された。SD02 と重複関係にあり、本遺構の方が古い。また、西側を部分的に攪乱によって破壊されている。南東側が調査区外になっているが、平面形状は楕円形を呈するものと思われる。長軸不明、短軸 1.66 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 35 cm、覆土は自然堆積で 4 層に分層される。遺構の床面中央北寄りにピットが 1 基検出されている。ピットの長軸は 33 cm、短軸 27 cm、床面からの深さは 47 cm を計る。

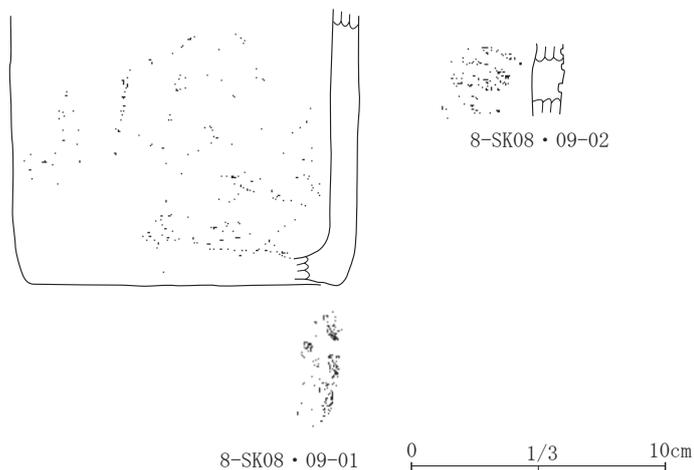
本遺構の出土遺物として取り上げられた遺物は、ラベルの表記に SK08・09 と記載されており、いずれに帰属するものか不明である。SK09 で詳細を述べる。

SK09 (第 244・245 図、図版 70・71・105)

本遺構は A-4 グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈するものと思われる。南北軸は 1.56 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 50 cm、覆土は自然堆積で 3 層に分層される。断面形状は緩やかな U 字状を呈する。

遺物はその帰属が SK08 と区別することができないために、本遺構でまとめて掲載した。

01 は深鉢胴下半部から底部の破片である。無文で底部には網代痕が残る。02 は隆帯による曲線文様が描かれる口縁部付近の破片であろう。隆帯上には縄文が施文されている。阿玉台 IV 式カ。



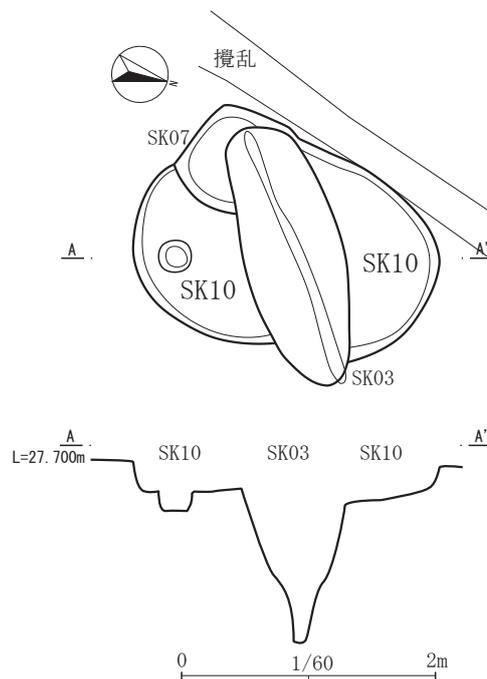
第 245 図 SK08・09 出土遺物

SK10 (第 246・247 図、図版 71・105)

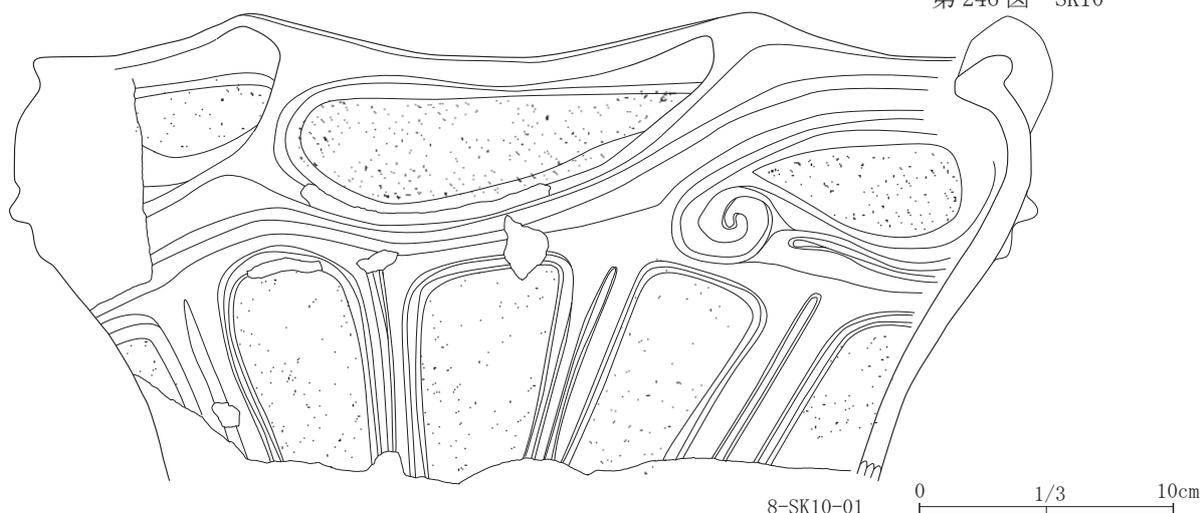
本遺構は A・B-5 グリッドにおいて検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸 2.41 m、短軸 1.66 m を計る。確認面下の掘り込みの深さは 29 cm、遺構の中央を横断するように SK03・SK07 が重複している。SK03・07 同様新旧関係は不明。床面南壁寄りにピット 1 基が検出されている。ピットは平面形状は円形を呈し、直径 26 cm、床面からの深さは 20 cm を計る。

本遺構からの出土した遺物の内 1 点を掲載した。

01 は深鉢形土器の上半部資料である。口縁は 6 単位の波状口縁となり、隆帯による窓枠状の区画が設けられる。区画内には単節 RL の縄文が横方向に施文される。胴部との境に渦巻文が配されている。胴部は沈線により縦方向のスリット状の区画を設け、内部に単節 RL の縄文を縦方向に回転施文している。加曽利 E III 式古段階。SK03・07 と形式の差は感じられない。



第 246 図 SK10



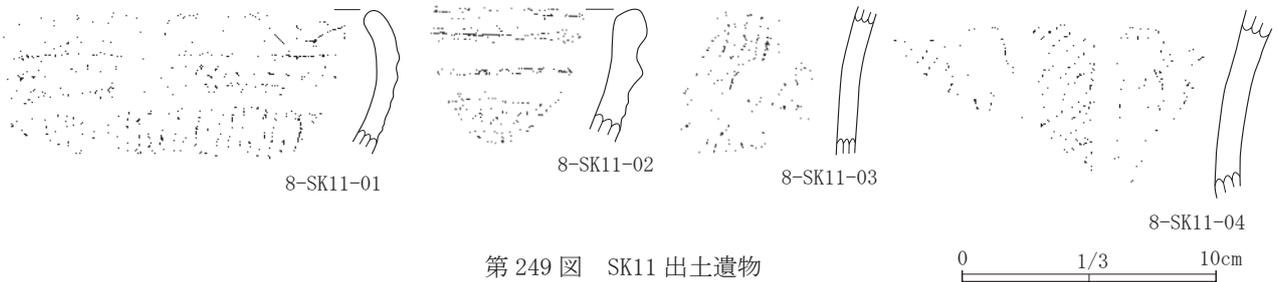
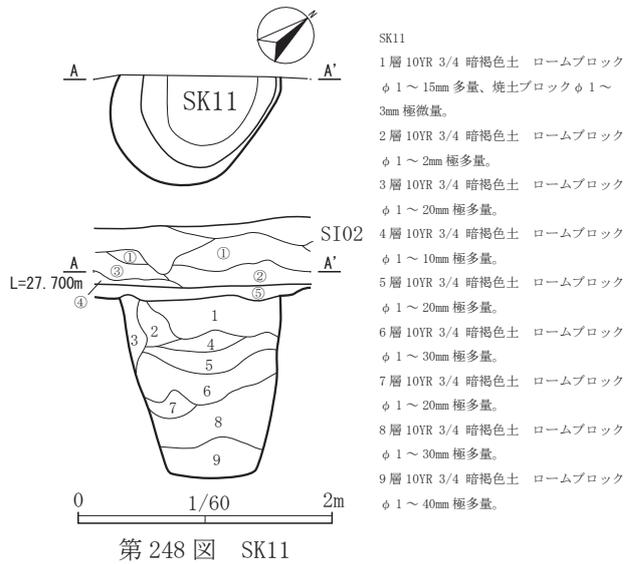
第 247 図 SK10 出土遺物

SK11 (第 248・249 図、図版 71・105)

本遺構は A-9 グリッドにおいて検出された。SI02 の床面下より検出されたものである。平面形状は楕円形を呈するもので、落とし穴状と想定される。長軸不明、短軸 1.15 m を計る。SI02 床面下の掘り込みより 1.42 m を計る。覆土は自然堆積で 9 層に分層される。上層の第①～⑤層までは SI02 の覆土である。したがって、本遺構の方が古い。

01 は内湾する口縁の破片である。口辺部は無文帯となり、以下に円管による交互刺突列が巡る。以下胴部には縦方向の撚糸文が施文される。いわゆる連弧文様式の土器である。02 は直線的に開く口縁部破片である。口唇直下に太い沈線が 2 条巡る。以下胴部は単節 LR 縄文が施文される。03 は胴部の破片である。蛇行沈線が垂下する。地文は単節 LR。04 はやや幅広の磨消懸垂文が垂下する。地文には単節 RL 縄文を縦方向に回転施文する。

02 ~ 04 は加曾利 E III 式期と想定され、01 の連弧文様式土器との共存関係には齟齬はない。



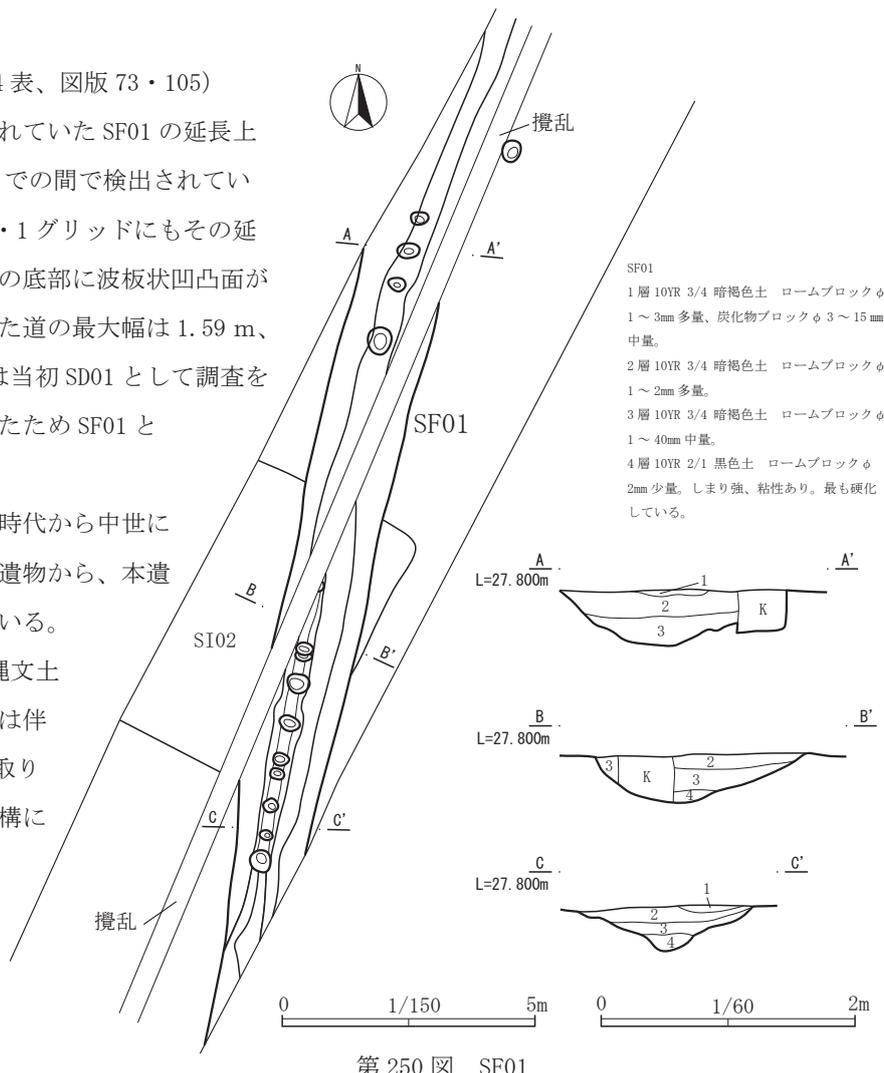
3 道路状遺構 (SF)

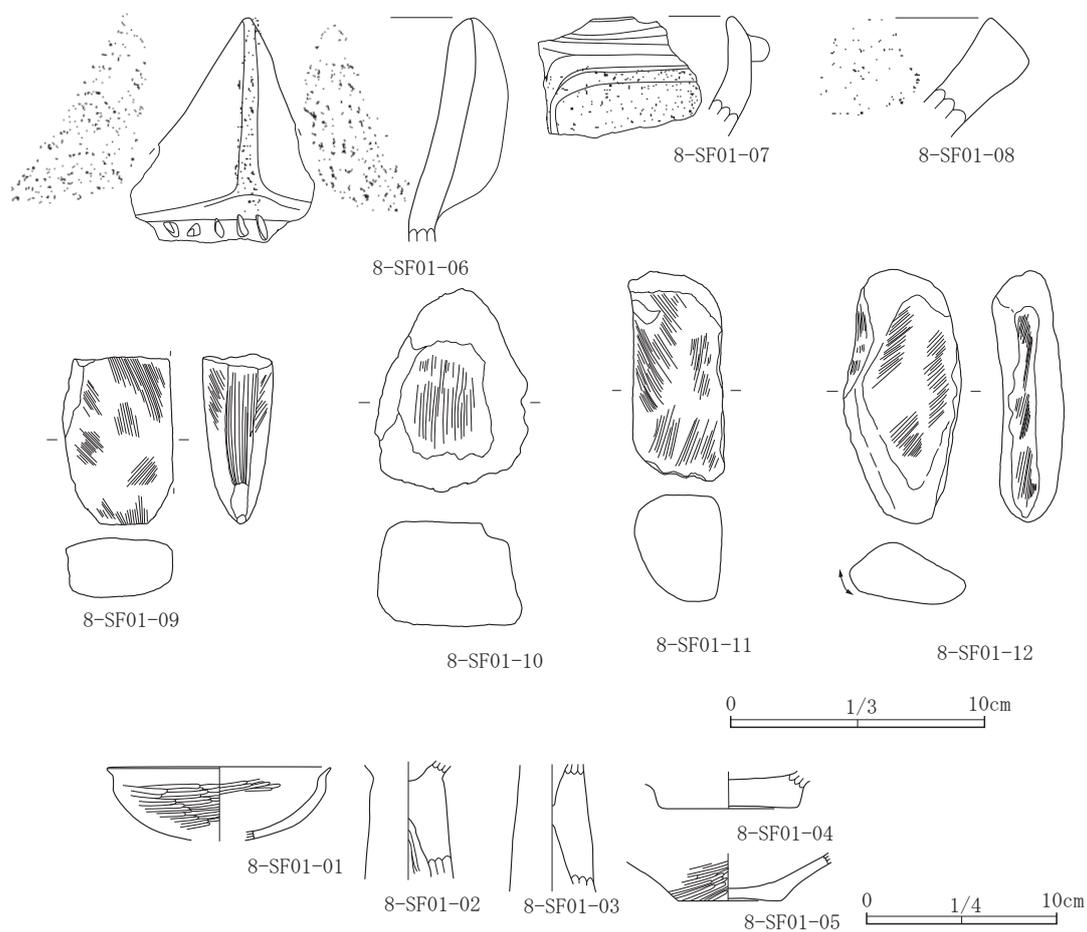
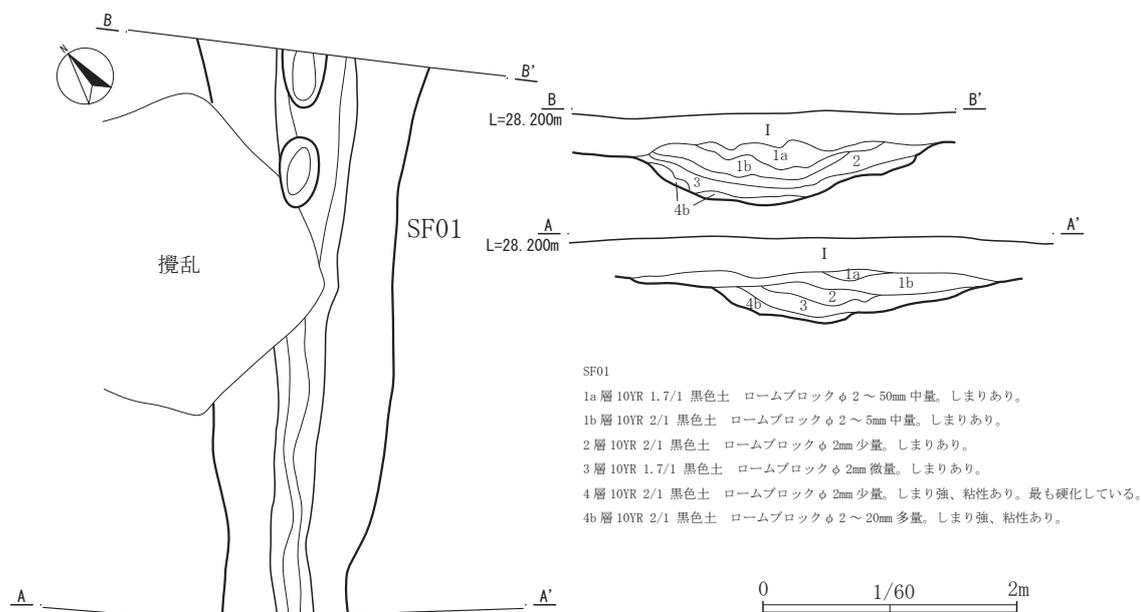
SF01 (第 250 ~ 253 図、第 23・24 表、図版 73・105)

本遺構は第 5 区において検出されていた SF01 の延長上に当たる。A-5 ~ B-12 グリッドまでの間で検出されている。さらに第 1 区東側東端部 A-0・1 グリッドにもその延長上が確認されている。形状は道の底部に波板状凹凸面が検出されている。本区で検出された道の最大幅は 1.59 m、深さは 44 cm を計る。尚、本遺構は当初 SD01 として調査を行ったが、道であることが判明したため SF01 とし、SD01 は欠番になっている。

本遺構から出土した遺物は縄文時代から中世に至る。第 5 区において検出された遺物から、本遺構の所属時期は中世と判断されている。したがって、本区の SF01 出土の縄文土器・古墳時代の土師器は本遺構には伴わない。一方で、8 区覆土として取り上げられた 2 点の遺物が本来本遺構に伴う資料と判断される。

06 ~ 12 は縄文時代の遺物である。06 は三角形に大きく尖り、中央部に隆帯が十字に施文される深鉢突起部である。隆帯





および全面に単節 RL 縄文が施文される。阿玉台IV式。07 は深鉢口縁部の破片である。隆帯による貼り付け文が施文される。地文は単節 LR が充填される。加曽利 E I 式。08 は端部がやや方形になる浅鉢口縁部の破片。阿玉台式。

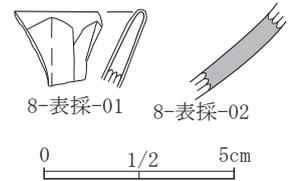
09 は磨製石斧である。基部は折損し刃部側も一部破損している。断面は長方形を呈するもので、定角式石斧であろう。材質は細粒斑糲岩。10 は砥石である。上面および側面に僅かな磨り面が認められる。材質は白雲母を多量に混入する花崗岩であろうか。11 は磨石・敲石である。側面に僅かながら擦痕が見られ、端部は敲打により潰れている。また、被熱により破損している。材質は砂岩。12 は側面のみ磨滅する磨石カ。材質は安山岩。

01は土師器坏である。口縁は短く外側につまみ出される。器面の整形から古墳時代中期末葉の遺物と考えられる。02・03は高坏脚柱部の資料である。いずれも孔は貫通しておらず上腕部に大きな窪みを有している。接合時にソケット状の蓋が施されたものであろう。04は円盤状に突出する底部で壺形の土器の可能性ある。05は平底で胴部は大きく外反気味に開く。胴下半部で上半との接合を行う甕であろう。

第23表 8区SF01 古代遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
1	ASSW-8区-SF-1-南	土師器	坏	(11.6)	—	<3.9>	43.4	体部は緩やかに内湾し、内側に明瞭な稜を有した後短く外傾する。	口縁は内外面共に横ナデ、体部内面は剥落しているものの僅かにミガキが確認出来る。外面はミガキ。	良好	内外面10YR6/4にぶい黄橙	長石・石英等小礫多い、雲母やや多い、スコリア少量。	1/5	
2	ASSW-8区-SF-1-南	土師器	高坏	—	—	<6.2>	98.9	ほぼ円柱状であるが、下方に向けやや太さを増す。接合部にはソケット状の窪みが確認される。	外面は剥落、内面はナデ整形。	良好 二次焼成 7リ	内外面7.5YR6/6橙	長石・石英等小礫・雲母多い。	脚部	
3	ASSW-8区-SF-1-エカ	土師器	高坏	—	—	<6.6>	120.4	ほぼ円柱状であるが、下方に向けやや太さを増す。ソケット部分は円錐状に鋭く穿たれている。	内外面共に剥落。	良好 二次焼成 7リ	内外面10YR6/4にぶい黄橙	スコリア目立つ。	脚部	
4	ASSW-8区-SF-1-南	土師器	甕	—	7.3	<1.95>	134.2	底部は円盤状に突出している。	外面は剥落、内面はナデ整形。内面はミガキ。	良好 二次焼成 7リ	内面10YR6/4にぶい黄橙 外面10YR7/4明黄褐	石英多い、黒色粒子・スコリア少量。	底部	
5	ASSW-8区-SF-1-南	土師器	甕	—	5.2	<2.4>	84.3	底部はやや上げ底気味の平底。胴部下端は僅かに外反気味に開く。	外面はヘラケズリ後粗いミガキ、内面はナデ整形。	良好	内面10YR4/2灰黄褐 外面10YR5/3にぶい黄褐	長石・石英等小礫多い。	底部	

表採-01は青磁碗の口縁部細片である。器面には削り出しにより鎬蓮弁が刻まれる。釉薬は青緑色を呈し、厚い。15世紀代中国龍泉窯で生産されたものであろう。02は古瀬戸後期の灰釉平碗カ。釉薬は薄い。生地はやや灰黄褐色を呈している。



第253図 SF01 出土遺物(2)

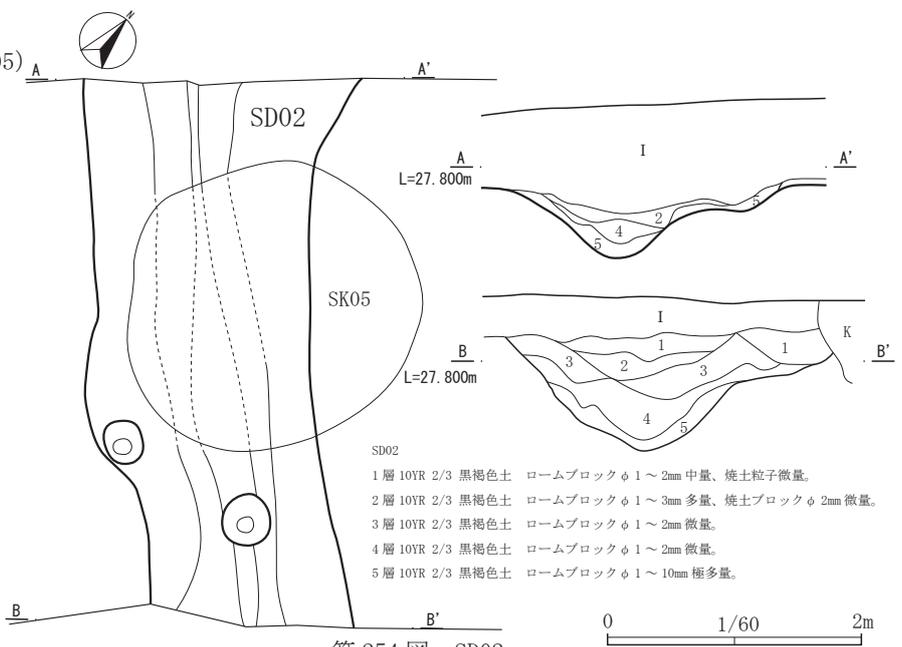
第24表 8区SF01 中世遺物観察表

遺物番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	焼成	色調	胎土	残存	備考
1	ASSW-8区フクド	磁器	青磁	—	—	<1.9>	2.2	ほぼ直線的に開く堦の口縁部片。	削りだしによる鎬蓮弁。釉薬はやや厚め。	良好	精良	内外面2.5GY5/1オリーブ灰	口縁部片	龍泉窯
2	ASSW-8区フクド	陶器	皿カ	—	—	<2.95>	4.7	僅かに内湾する。	ロクロ整形。灰釉の上に長石釉が被る。	良好	精良	内外面5Y7/3浅黄	体部片	古瀬戸

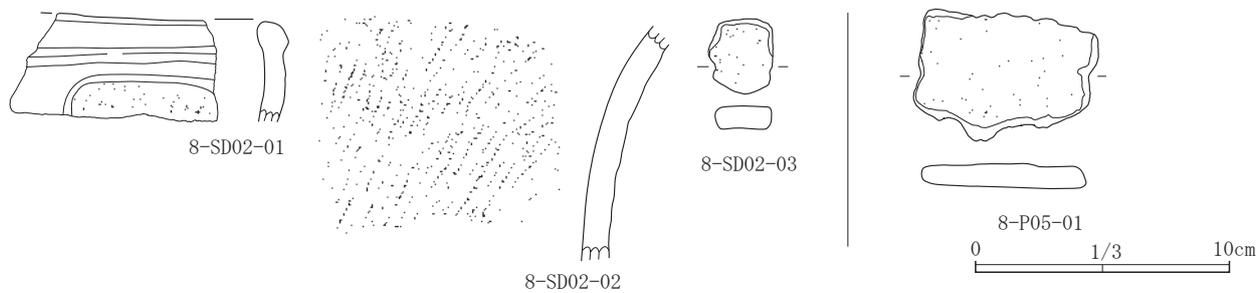
4 溝 (SD)

SD02 (第254・255図、図版72・105)

本遺構はA・B-3グリッドにおいて検出された。SK05・08を切っている。調査区を東西に横断するものでSF01と重複する可能性があるが形状は異なる。調査を行った長さは4.19m、幅は最大で2.16mを計る。断面は浅いV字形を呈し、確認面下の深さは52cmを計る。覆土は5層に分層され自然堆積である。



第254図 SD02



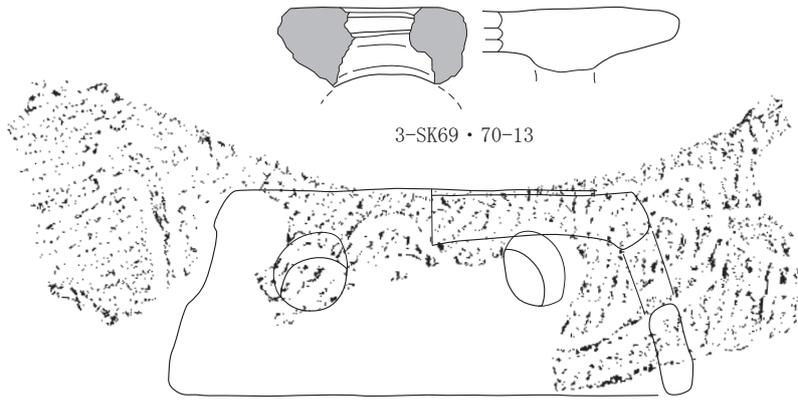
第 255 図 SD02 出土遺物

第 256 図 8 区ピット出土遺物

01 は隆帯による窓枠状区画を設け、内部に単節 LR の縄文を充填させている。02 は胴屈曲部の破片で、大きく外反する。単節 RL の縄文が縦方向に施文される。加曾利 E II 式以降。03 は土器片錘である。僅かに縄文が施文される。重量は 8.4g。

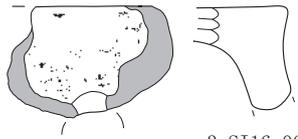
5 ピット (第 256 図、図版 71・72・105)

本地区からは北側寄りに少量のピットが検出されているものの図・表ともに割愛した。出土遺物としては P05 から土器片錘 1 点が検出されているのみである。重量は 40.6g を計る。

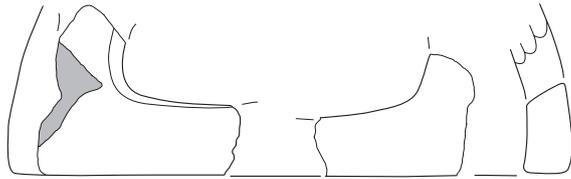


3-SK69 · 70-13

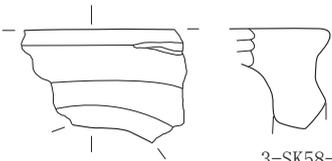
3-SI17-07



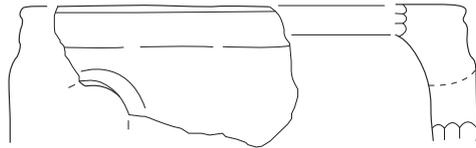
3-SI16-06



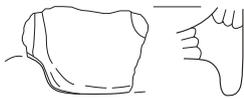
3-SK39-06



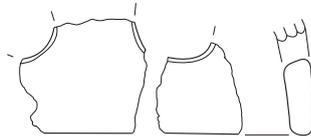
3-SK58-04



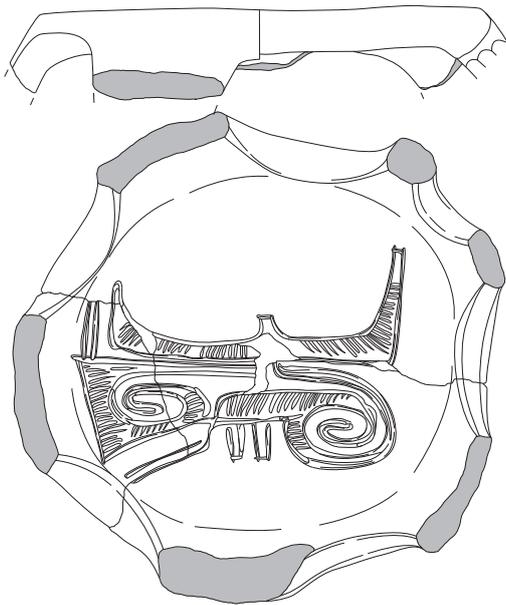
3-SK34 · 76-20



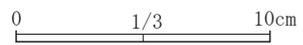
3-SK34 · 76-21



3-SK59-11



3-表土-04



第 257 图 台形土器集成图

第5章 まとめ

第1節 台形土器と内面に絵画が描かれた台形土器

台形土器は中部・南関東地域では勝坂式土器より加曾利EⅢ式にかけて伴出することが知られているが、本遺跡において検出された台形土器は9個体、11点に上る。東関東の遺跡でこれだけまとまって出土した遺跡は少なく、茨城県内の類例として管見に触れたものは竜ヶ崎市南三島遺跡6・7区（1985年）において出土がある。点数は少ないが、主体となる遺物は加曾利EⅢ・Ⅳ式段階で、報告を行った斎藤弘道も該期の資料と判断している（斎藤1985）。

本遺跡出土の資料は、完形品はないが、ほぼ形状が判別できる2個体を含めて、個体数で9個体ある。

形状は大半が無文で、台部と脚外面が磨かれるものが主体となっているが、3-SK34-76-20では受け面が内湾しており、硯の海部のように窪む。台付鉢の脚部の可能性もある。一方で3-SI17-07では外面に縄文が施文され、加曾利EⅡ～Ⅲ式古段階の連弧文が施文される。このことから、連弧文様式土器のモチーフを取り入れた台形土器と考えている。

脚部の開き方で数種類に分類が行える可能性があるが、ここでは言及を避ける。

台形土器の分類については、室伏徹が『総覧 縄文土器』の中で「台形土器」としてまとめている。この分類でみるならば、本遺跡で検出された台形土器は3-SK69・70-13が受け部が張り出すB類に含まれ、その他はすべてC類に分類されるものであろう（室伏2008）。

特筆されるものでは、表土出土遺物3-表土-04がある。同遺物は6本の脚が付され、脚の配置状況は、脚中央部に大4、小1の孔が穿たれており、すべてが同じ間隔で穿たれるものではない。1方向のみ孔が小さくなるもので、室伏の分類では1-5になるものであろうが、一致しない。動物や昆虫の脚を意識したものであるならば、前後の意識が働いている可能性もある。外面は無文でよく研磨されている。脚部はいずれも端部が折損しているが、残存する脚は端部が摩耗（人為的な研磨）し、ほぼ同じ長さで切揃えられていることから、二次的な偽脚部としてそのまま使用されていた可能性が高い。現状で伏せて置くと受け面はほぼ水平に安定する。同様に脚部を欠損しながら欠損部分を接地させるとはほぼ受け面が平坦になる資料として管見に触れたものでは、千葉県成田市久井崎Ⅱ遺跡から出土した遺物がある。同遺物は加曾利E式期の土坑から出土している。

本遺物の内面には、遺構外出土遺物の項でも説明したが、絵画が描かれている。信州系統の土器の中で蛇の文様を描く例があることを知られている。『古代史発掘3』に野口義麿により紹介されている（野口1974）台形土器の内面に描かれた蛇体文がある。同資料は三叉文状の文様を描くものであり、積極的に蛇体とは判断できない。渦巻を蛇体とみるならば、本資料では二匹の蛇が描かれているようにも見える。いずれにせよ戸田哲也・齋藤弘道・塚本師也氏にも同様に意見をうかがったが、類例を知らないとの意見であった。

文様はどちらを天として見るかでその様相は異なるが、複雑な幾何学文様で、船や波、台形土器に盛られた食材または装飾品のようにも見える。筆者の個人的な見解では、山形の冠をかぶり、目を渦巻状の右巻と左巻きの渦巻で表現し、2本の方形の区画帯は鼻梁を表しているようにも思える。ある意味仮面的な表現と考えるならば、鯨面の弥生人ではないが、顔面に入れ墨を施す形相にも見える。

台形土器は所謂土器づくりの為の粘土を、紐状に練る台として用いられたものとの説が有力であるが、本遺物には内面に絵画が描かれ、祭祀的な意味合いを強烈に感じさせるものである。そういった視点から、他の資料を観察すると、やはり各遺物ともに整形が極めて良好で、共伴する他の土器の整形とは明らかに異なっている。

粘土を練る為には、台にかなりの圧力が加わる。更に脚部に意識的に円孔を穿つ行為は、この圧力にたいする耐久性を減少させるものであり、粘土紐作りや木の実を押しつぶすための台としては、その使用目的に疑問を抱かざるを得ない。現在のところ、台形土器の使用目的については不明であるが、このような絵画が描かれる例が発見されることより、日常的ではない特殊な用途を想定しなければならないであろう。

第2節 赤弥堂遺跡出土の連弧文様式土器

連弧文様式土器は山内清男が『日本先史土器図譜』で紹介したのが最初とされている。時期は加曾利E式に伴うことが広く知られているものの、明確な時期編年については諸説ある。ここでその編年に触れるつもりはないが、従来言われてきた連弧文様式土器は、加曾利E式と曾利式の関係の中で論じられ、その分布も関東西部から南部に中心があるとされてきた(永瀬2008)。筆者も加曾利E式土器を出土する遺跡に幾分かかわってきたが、千葉県北部や茨城県南部においてこれらの資料に触れる機会があまりなかった。ところが、今回の調査において比較的好的な連弧文様式土器資料が検出されたことは、初出ではないにせよ類例に乏しい地域の資料としては意義がある。以下、概略的ではあるが、供伴した遺物と並列して北東関東地域の一遺跡の様相を提示するものである。

第25表 連弧文様式土器共伴関係一覧表(1)

	連弧文系土器	共伴土器
1-SI04		
1-SI08		
1-SK25		
1-P21		

本遺跡出土の連弧文様式土器については表 25～28 にその共伴関係をまとめた。最も良好な共伴資料を出土した遺構は 1-SI04、1-SI08、1-SK25、3-SK59、3-SK65、3-SK52、3-SX01 である。

1-SI04 は連弧文様式土器群では 3 段階に含められるもので、加曽利 E II 式新段階から加曽利 E III 式の古段階に伴っている。

1-SI08 では連弧文様式土器群は 3 段階に含められ、加曽利 E III 式新段階に共伴する。

1-SK25 では連弧文様式土器は 3 段階に含められ、加曽利 E III 式古段階から新段階に共伴する。

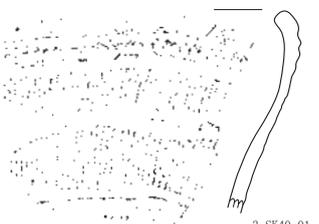
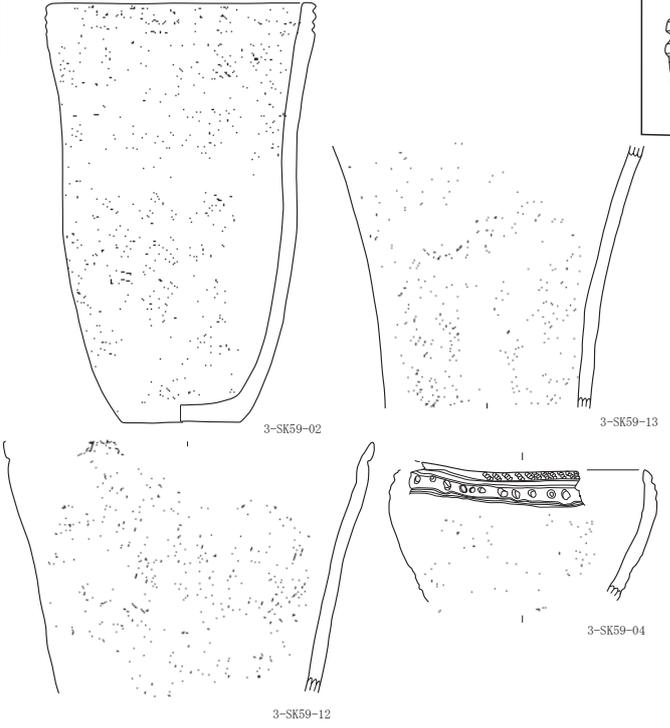
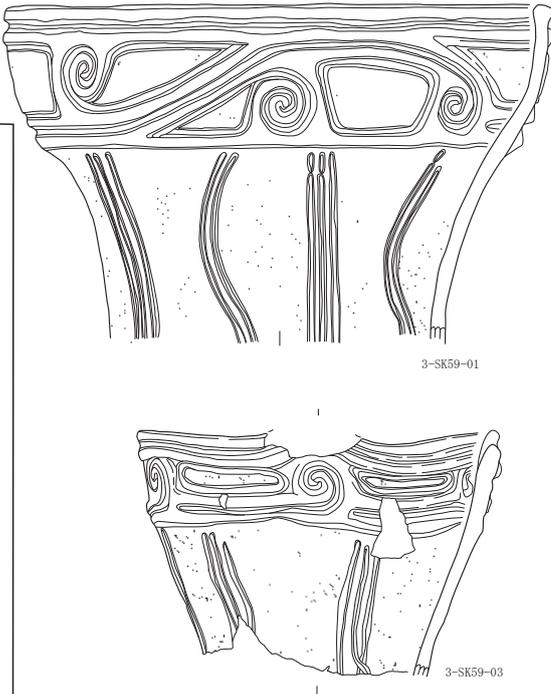
3-SK59 では連弧文様式土器群は 3 段階に含められ、加曽利 E II 式新段階が共伴する。

3-SK65 では連弧文様式土器群は 3 段階に含められ、加曽利 E III 式新段階に共伴する。

3-SX01 では連弧文様式土器のモチーフが加曽利 E II 式新段階の器形に用いられるものであり、加曽利 E II 式新段階から加曽利 E III 式古段階に共伴するものと判断した。

総合的に判断すると、北関東霞ヶ浦西岸域に位置する本遺跡における連弧文土器は、加曽利 E II 式新段階に出現し加曽利 E III 式新段階まで継続している事が確認できる。

第 26 表 連弧文様式土器共伴関係一覧表 (2)

	連弧文系土器	共伴土器	
3-SI12			
3-SK31			
3-SK40			
3-SK59			

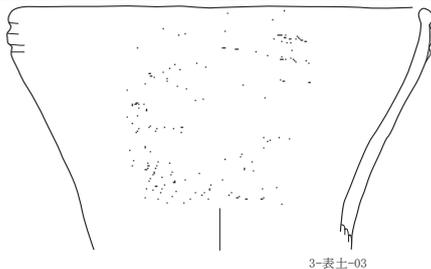
0 1/5 10cm

第27表 連弧文様式土器共伴関係一覧表(3)

	連弧文系土器	共伴土器
3-SK65	<p>3-SK65-17 3-SK65-16 3-SK65-12 3-SK65-11 3-SK65-18</p>	<p>3-SK65-01</p>
3-SK69・70	<p>3-SK69・70-01 3-SK69・70-02</p>	<p>3-SK69・70-11 3-SK69・70-12</p>
3-SX01	<p>3-SX01-01 3-SX01-02</p>	<p>3-SX01-03 3-SX01-04</p>

0 1/5 10cm

第28表 連弧文様式土器共伴関係一覧表(4)

	連弧文系土器	共伴土器
3-表土01		
5-P21		
8-P21		

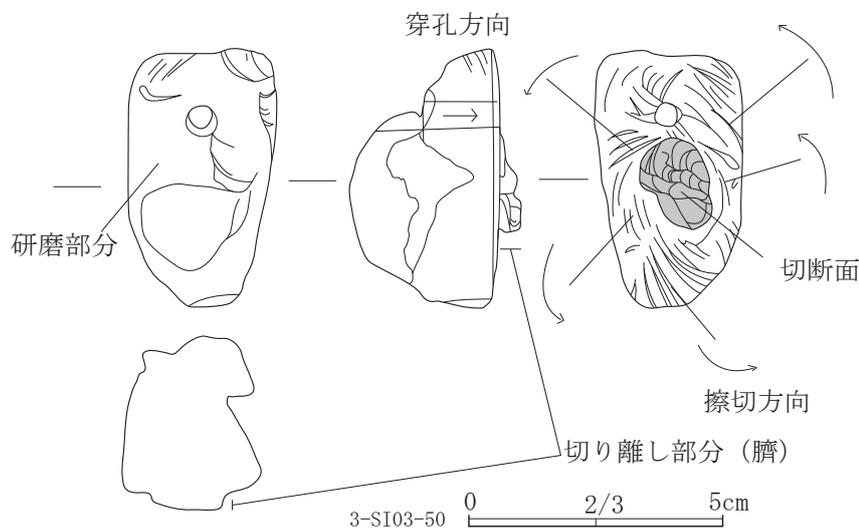
0 1/5 10cm

第3節 琥珀大珠

出土したのは3区のSI03-50である。搬出した遺物の時期は加曾利EⅠ式段階、勝坂式段階、中峠式段階と混在が激しいが、加曾利EⅢ式に共伴するものと判断している。尚、形状並びに穿孔の技法から大珠の用語を用いた。縦4.1cm、横2.3cm、厚さ2.6cm、孔径4mmを計るもので、円形の岩塊を擦り切り技法によって分割している。相京和茂の分類(相京2007)では本遺物は5cm未満であるので、玉類としての範疇になる。穿孔軸は単軸系、形態では明確にあてはまるものはない。筆者はかつて分割を行う資料として富山県開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡で出土した2点の琥珀玉について報告した。この中で同遺物の分割の可能性を指摘したが、相京氏は同遺物をもとは中軸系の遺物であったものを再加工したもので、短軸系丸玉としている。

威信財としての分割行為については、上野修一の論考がある(上野2007)。時期的にもヒスイが多くこの地域にもたらせられた時期にも合致するもので、同様の分割行為が行われた可能性が高い。

切断の技法については、軟質の琥珀であるために、様々な石器類が想定できるが、観察からすれば、中心部を残しながら回転するように薄刃の石鋸状の工具を用いた痕跡が残されている。早期末か前期に知られる玦状耳飾りの



第258図 琥珀製大珠切断技法図

切断技法として確認されている、糸切り技法の痕跡とは異なるように思える。穿孔は切断の後に行われている。

威信財としてヒスイが好まれるこの地域において、加曾利 E III 期に琥珀玉が出土する例は少ない。茨城県内の報告で相京氏が紹介している 2 点は東茨城郡茨城町出土の資料である。墓坑からの出土である。長さが 1.6 cm 程度の小形の楕円形で、相京氏は短軸系玉類としている。東京都日陰山遺跡出土の玉の形状によく似ている。

産地同定分析は行っていないが、周辺では久慈・銚子が比較的近距离にある。いずれかの地域からの移動が想定できる。奈良文化財研究所の室賀照子氏による科学的な分析が試みられ縄文時代の資料は銚子産で、古墳時代以降のものは久慈産分析結果が示されている(室賀 1979)。一方で藁科氏の教示によれば、黄褐色の琥珀は酸化によって赤褐色に変化することが指摘されている。久慈周辺では縄文時代にも盛んに琥珀玉の生産がおこなわれており、産地について明確な差異を示すことができないと伺っている。原産地の特定は困難な状況であるが、立地的にはより銚子市に近接しており、同市粟島台遺跡を中心に展開する、原産地の琥珀が運ばれた可能性が高いものと判断される。

第4節 土偶

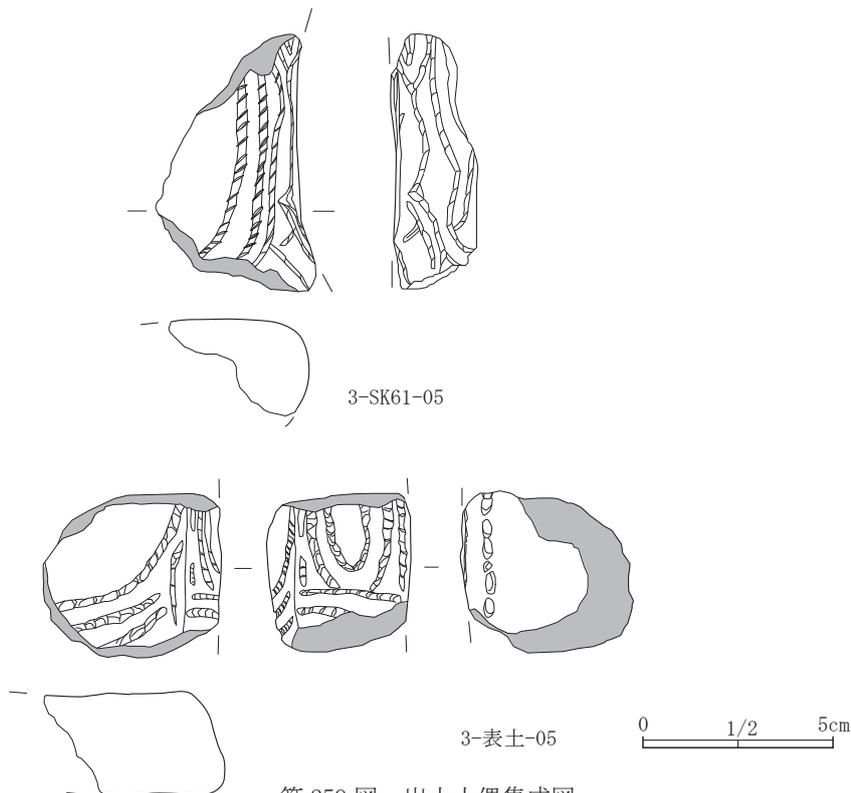
本遺跡で出土した土製品として特筆される資料としては、2 点の土偶がある。

出土遺物はいずれも 3 区からの出土で、3-SK61-05 と 3-表土-05 である。

3-SK61-05 は胴部の破片で側面から腰部にかけての部位であろう。背面(背中)部分のみで腹部側は欠損している。板状の中実土偶である。背面は胴部の側面に沿って 3 条の有節沈線が巡り、臀部に向かい腰の部分で緩やかに湾曲する。側面は同様の有節沈線による文様が描かれる。

本遺物にともなった遺物は SK61-01 ~ 04 までを掲載したが、いずれもその特徴から加曾利 E III 古段階である。有節沈線の有り方から、阿見町宮平貝塚出土の遺物に類似することからも阿玉台式の可能性を考えたが、共伴遺物から判断すれば該当時期になる。

加曾利 E 式段階の土偶については類例が少なく、文様施文法についても明瞭ではない。関東における中期の土偶は中期前半阿玉台段階で一旦終焉を迎えている。



第 259 図 出土土偶集成図

江坂輝弥によれば、関東地方における中期の土偶として紹介される、宮平貝塚板状の土偶は東北南部の十字土偶との類似が指摘される（江坂 1990）。平成 2 年に茨城県歴史館で開催された、特別展東国の土偶においても該当する時期の資料は、前述の 2 点のほかに、常陸太田市佐竹小学校遺跡、大宮町諏訪台遺跡、日立市諏訪遺跡、水戸市愛宕町出土の資料が増加しているが、いずれも本遺跡の資料同様の有節沈線で文様が描かれ、中実の板状土偶で、阿玉台式の資料と判断されている（茨城県立歴史館 1994）。

本遺跡出土の 2 点の土偶もこういった特徴から、加曽利 E Ⅲ 式の住居の覆土の中に混入した、阿玉台式期の土偶と理解したい。

第 5 節 発掘された赤弥堂遺跡の全体像

赤弥堂遺跡の調査は、東地区・中央地区・西地区と東西 2.1 km、南北 1.4 km に及ぶ台地の縁辺に沿って実施されている。農業用道路整備という目的のために遺跡の中に細長いトレンチを格子目状に入れたような調査であったが、その面積は総合計で凡そ 16,771 m² に及ぶ。想定されている赤弥堂遺跡の全体面積は約 94,900 ha であるので、調査を実施した面積はその僅か約 14% に過ぎない。しかし、今回の調査で得られたものには多くの貴重な資料が含まれるもので、各地域別に 3 冊に分冊して報告した内容でその問題点に若干ながら触れたつもりである。

本報告書はその赤弥堂遺跡の第 3 冊目で、平成 20・21 年度発掘調査の区切りになる。ここでは、これまでに検出された赤弥堂遺跡の全体について概要をまとめ、遺跡の全体像を僅かばかりかでも明確にしたい。

縄文時代草創期～早期

検出された遺物を見ると、西地区は旧石器時代と境の段階と判断される有樋尖頭器（男女 B タイプ）が出土している。また東地区では微隆起線文土器、井草式直前段貝の遺物、夏島式土器と草創期の資料が僅かながら出土している、早期では戸下層式、早期後半で子母口、野島式、鶴ヶ島台、等の条痕文系の土器群の出土もあった。撚糸文系土器、条痕文系土器を含め草創期から早期に及ぶ遺物は東地区にその中心域を見いだせそうである。遺構としては 3 基のファイアーピットが検出されている。草創期から早期条痕文系土器に伴うものと判断される遺構は、早期条痕文系土器に伴う東地区のこの 3 基のみであった。

縄文時代前期

明瞭な遺構として捉えられたのは縄文時代前期関山 I 式段階が最も古い。これらの遺構はほぼ住居跡のみで、土坑は確認できていない。全ての住居跡の覆土中に貝層を有するもので、東地区で 5 軒、中央地区で 2 軒が確認されており、全体的には東側台地縁辺部と中央地区の東側でも台地中央寄りにその中心域を有するように判断される。関山式土器は I 式段階と II 式段階に分けられ、いずれの住居からも貝の出土が確認され、出土した貝の組成は明らかに古い段階と新しい段階では差異が認められるもので、新しい段階になるほどヤマトシジミの増加が見られ、海退の現象が推察される。

黒浜式の遺物は少ない。続く浮島式では若干量の遺物が検出されている。浮島 1 式～3 式まで出土があるがやはり量的に少なく、遺構も検出されていない。十三菩提式土器も僅かながら見られる程度である。

前期の資料は全体に少量ずつ出土しているものの、台地の東側縁辺部に遺跡の中心があるものと想定できる。

縄文時代中期

縄文時代中期では霞ヶ浦西岸の特徴的な様相が見られ、特に阿玉台式終末から加曽利 E 式前半にかけての資料は充実したものがある。調査区域別では、東地区と中央地区に集中する傾向が見られる。一方で加曽利 E Ⅱ～Ⅲ式段階になると集落の中央は西に移動し、西地区で最も充実した状況が見られる。

中期における問題点として掲げられる問題では、以下の項目が特筆された。

1 阿玉台Ⅳ式土器と勝坂式および広義の中峠式土器の関連

- 2 台形土器の出土
- 3 連弧文様式土器と加曾利EⅡ～Ⅲ式土器との共伴関係
- 4 威信材としての琥珀大珠及び土偶の出土
- 5 袋状土坑の終焉

縄文時代後期～晩期

遺構は検出されていない。遺物として堀之内式と考えられる数点の出土が見られる。

弥生時代

該期の遺構・遺物は検出されていない。

古墳時代

本期の遺構は、1区ではSI05、2区ではSI01、3区ではSI01・SI02、4区SI01・04、5区SI02・03、8区SI02の9軒であった。各区に1軒から2軒程度が散逸して検出されている。いずれもカマドを敷設する住居跡は検出されておらず、出土遺物から判断して、カマド導入直前の古墳時代中期後半の遺構と判断される。滑石製模造品を出土した1区SI06は本遺跡が和泉期を主体に展開していたことを示すものであろう。

一方で、古墳は確認されなかった。出土遺物が皆無であり時期を特定できなかった6区のSD01は覆土の様相から古い遺構の可能性がある。

中世

本遺跡において検出された最大の遺構であるSF01は第5区から8区にかけて検出されたものである。床面は固く硬化しており、硬化面を剥がすとさざ波状の長楕円形の掘り込みが連続して施され、古瀬戸灰釉碗、貿易陶磁器青磁鎗蓮弁の碗、播鉢の出土から、該期の遺構と判断した。

以上が赤弥堂遺跡の2年間にわたる調査成果である。

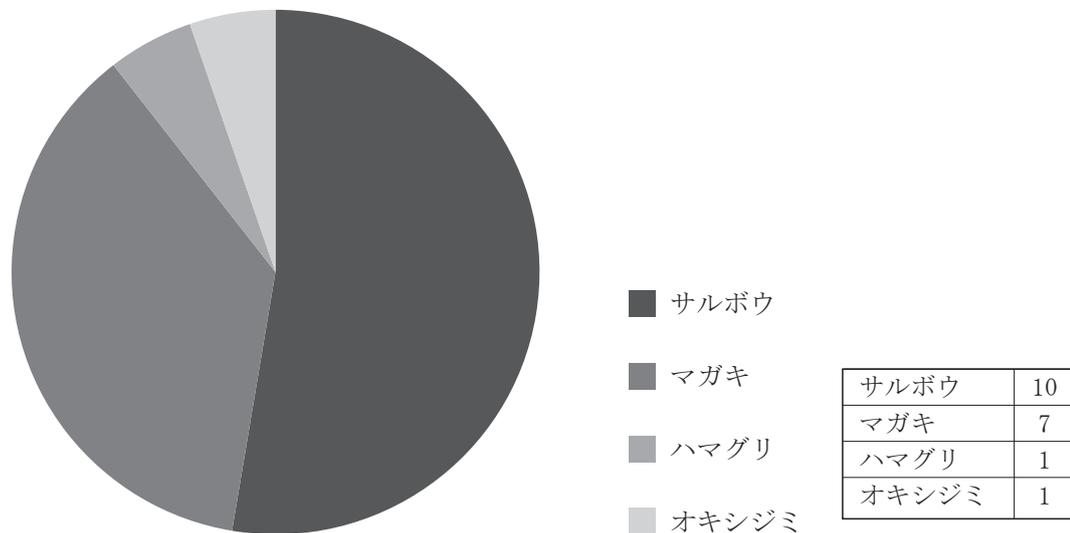
第6節 自然科学分析

赤弥堂遺跡（西地区）

SK01 出土貝は上層に僅かにその分布が見られたもので、出土資料は点上げを行った。出土遺物から所謂貝の個体数は、明瞭にすることはできなかったが、殻頂部が存在しない資料も含めて 20 点が出土している。種別ではサルボウ 19 点、マガキ 7 点、オキシジミ 1 点、ハマグリ 1 点である。これらの個体数の比率を赤弥堂中央地区並びに東地区の貝塚と比較すると、中央地区の 4 区 SK03 の組成に最も近く、本遺構の時期とほぼ同じであることが判明している。

和名	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>
	オキシジミ	<i>Cyglina orientalis</i>
	マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
	サルボウ	<i>Anadara subcrenata</i>

第29表 8区SK01出土貝組成表



第30表 8区SK01出土貝一覧表

No.1	サルボウ	殻頂部片	1		
No.2	サルボウ	不明	1		
No.3	サルボウ	破片	4		
No.4	サルボウ	破片	1		
No.5	サルボウ	左	1		
No.6	ハマグリ	破片	1		
No.7	サルボウ	不明	1		
No.8	カキ	身	1		
No.9	オキシジミ	不明	1		
No.10	カキ			蓋	1
No.11	カキ			蓋	2
No.12	サルボウ	不明	1		
No.13	カキ	身	1	蓋	1
No.14	ハマグリ	殻頂部片	1		
No.15	カキ	身	1		

【参考・引用文献】

- 西村正衛 1969 「千葉県小見川町木之内神明貝塚（第一次調査）『学術研究』第18号早稲田大学考古学会
- 西村正衛 1970 「千葉県小見川町阿玉台貝塚—東部関東における縄文中、後期文化の研究 その二」『学術研究』第19号早稲田大学考古学会
- 西村正衛 1971 「千葉県佐原市三郎作貝塚」『学術研究』第20号早稲田大学考古学会
- 野口義麿 1974 「蛇身装飾の分布と背景」『古代史発掘3 土偶芸術と信仰』講談社
- 室伏 徹 1976 「台形土器について—坂井遺跡出土例を中心にして—」『丘陵』第1巻 第2号
- 室賀照子 1979 「奈良県富雄丸山古墳・於・慈恩寺脇本古墳出土の琥珀の科学的研究」『橿原考古学研究所論集』第五
- 齋藤弘道 1985 『南三島遺跡6・7区』茨城県教育財団 第30集
- 江坂輝弥 1990 『日本の土偶』六興出版
- 茨城県立歴史館 1994 『特別展 東国の土偶』
- 塚本師也 1997 「第VI章 考察」『浄法寺遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第196集 栃木県文化振興事業団
- 塚本師也 2003 「茨城県北部域における縄文時代中期中葉の土器の様相」『領域の研究—阿久津久先生還暦記念論集』
- 塚本師也 2005 「木田谷遺跡出土の縄文中期中葉の土器について—霞ヶ浦北岸における中期中葉の土器様相—」『玉里村立史料館報』第10号
- 塚本師也 2006 「木田谷遺跡出土の縄文中期中葉の土器について（2）—霞ヶ浦北岸における中期中葉の土器様相—」『玉里村立史料館報』第11号
- 相京和茂 2007 「縄文時代におけるコハク流通（上）」『考古学雑誌』第91巻 第2号
- 2007 「縄文時代におけるコハク流通（下）」『考古学雑誌』第91巻 第3号
- 上野修一 2007 「焼かれた玉—硬玉大珠の二次的変形」『縄文時代の社会と玉』日本玉文化研究会第5回シンポジウム栃木大会実行委員会
- 塚本師也 2007 「乾燥形貯蔵穴」『縄文時代の考古学5 なりわい—食糧生産の技術—』同成社
- 塚本師也 2007 「茨城県における袋状土坑研究の視点」『考古学の深層—瓦吹堅先生還暦記念論文集—』
- 塚本師也 2007 「茨城県北部における出現期の袋状土坑について」『菟玖波—川井正一・齋藤弘道・佐藤正好先生還暦記念論集』
- 今福敏江 2008 「勝坂式土器」『総覧 縄文土器』
- 小林達夫編 2008 『総覧 縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会
- 塚本師也 2008 「阿玉台式土器」『総覧 縄文土器』
- 永瀬史人 2008 「連弧文土器」『総覧縄文土器』
- 細田 勝 2008 「加曾利E式土器」『総覧 縄文土器』
- 室伏 徹 2008 「台形土器」『総覧縄文土器』
- 大賀 健ほか 2009 『赤弥堂遺跡（東地区）』土浦市教育委員会・有限会社勾玉工房Mog i
- 塚本師也 2009 「栃木県における阿玉台式土器出土遺跡」『野州考古論攷—中村紀男先生追悼論集—』
- 塚本師也 2009 「茨城県北部における大木7b式期の土器—特に七郎内II群と所謂スワタイプについて—」『常総台地』16
- 大賀 健ほか 2010 『赤弥堂遺跡（中央地区）』土浦市教育委員会・有限会社勾玉工房Mog i
- 塚本師也 2010 「鬼怒川・小貝川流域の加曾利E I式期の土器—旧関城町西原遺跡第61号住居跡出土土器の位置づけ—」『茨城県考古学協会誌』第22号